

オーバーロード ～たっち・みーさんがインしたようです～

龍龍龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アインズ・ウール・ゴウン最強の存在・たち・みーさんがログインしてモモンガさんと一緒に異世界に飛んじやった場合を妄想した、オーバーロード二次創作となっています。

たち・みーさんの原作での情報は、(他のメンバーよりは多いとはいえ)ほとんどありませんので、捏造だらけになっています。雰囲気で押し通しているところも多々あります。あらかじめご了承ください。

作者はモモンガさん至上主義であり、モモンガさんの努力が報われたり、仲間に癒されたり、異世界を楽しんだりして欲しいという想いが先行しております。

また、たち・みーさんについては半ば夢を見ている状態で、必要以上に完璧超人かつ圧倒的強者として書いている部分があります。

基本の展開は書籍版に準拠しています。設定などに間違いがありましたら、遠慮なく突っ込んでくださると助かります。

※第二部開始しました。この第二部はオリジナル要素が多々入ってくると思いますので、閲覧の際はご了承くださいませ。

目次

第一部 不死者の王と純銀の聖騎士

帰還した”純銀の聖騎士” 1

階層守護者たちと執事 17

カルネ村とギルド最大の危機 37

王国最強の戦士長ガゼフ 52

陽光聖典隊長ニグン 61

死の超越者の激怒 69

至高の41人最強の騎士 78

地下大墳墓への帰還 93

ナザリツク地下大墳墓② 101

ナザリツク地下大墳墓③ 110

アインズ・ウール・ゴウン (第一部 完結章) 119

補足 たっち・みー 130

番外編

騎士と戦士の鍛錬 135

騎士と支配者の相談 146

第二部 純銀の騎士

現れた”純銀の騎士” 153

酒場の冒険者たち 161

ナザリツク留守番組 170

エ・ランテルの市場にて 178

”漆黒の剣” 186

初めての依頼 195

大英雄の灯火 208

野営地にて①	220
野営地にて②	226
カルネ村と森の賢王	231
森の賢王とンファイレア	239
エ・ランテルへの凱旋	248
最後の『漆黒の剣』	257
モモンガとニニヤ	265
カジット・デイル・バダンテール	271
死者の軍勢	279
死の宝珠	285
死の超越者	294
クレマンティーン	301
事件の終結	308
驚天動地 (第二部 完結章)	315

第一部 不死者の王と純銀の聖騎士 帰還した”純銀の聖騎士”

「次に会うのはユグドラシルⅡとかだといいですね！ それじゃあ」

ヘロヘロがログアウトして、広い円卓の間に静寂が訪れる。

アインズ・ウール・ゴウンのギルド長、モモンガはヘロヘロを呼びとめようと言えなかった言葉を呟き、感情が爆発したようにその手をテーブルに打ち付けた。

どうしてみんなで作り上げたものをそんなに簡単に捨てられるのかと絞り出すような声が響く。けれど、すぐにそうではないと考え直したようで、頭を振った。

誰も裏切ってなどいない。皆それぞれリアルがあるだけ。そんな風に思っていると傍から見ても確信できる仕草だった。いや、モモンガという男のことを多少なりとも知っている人物であれば、その心中の類推は簡単なことだ。

誰よりもユグドラシルを楽しみ、みんなで作り上げたギルド「アインズ・ウール・ゴウン」を愛し、ギルド長という立場にあるとはいえ、ギルメンの誰も来なくなってもずっとギルドを維持し続けた律儀で真面目な性格の彼のことを知っているならば。

モモンガは円卓の席から立ちあがると、ギルド武器の傍に歩み寄った。

スタッフ・オブ・アインズウールゴウン。かの強大なワールドアイテムに匹敵するほどのギルド武器であり、これを作るためにギルドメンバーは相当な無茶をしたものだ。

「これを作るために、無茶したっけ……有給取ったり」

「妻と喧嘩したり」

「そうそう。あの時ばかりはリアルを優先してくださいと思ったもので……え？」

モモンガがあり得ないはずの合いの手に驚いて、言葉を区切る。ゆっくりと振り返った。

ユグドラシルのアバターには表情を浮かべる機能がない。

だが、その時のモモンガの顔には驚きの表情が透けて見えていた。

「……………来て、くれたんですか？」

ようやく絞り出した、というような掠れた声。その声には混乱と驚きがあつて、そして何よりも言葉にしようがない、喜びの感情が込められていた。

それを感じたのか、円卓の場に現れたそのギルドメンバーは静かに頷いた。

「お久しぶりです、モモンガさん」

落ち着いた、低い声。

その声を改めて聴いて、自分の名を呼ぶその人の声を聴いて、モモンガは目の前に存在するその人が嘘でも幻覚でもないことを知る。

「……………本当に、本当に、お久しぶりです。来てくれてありがとうございます」

万感の想いのこもった声で、モモンガはその人の名前を呼んだ。

「たつち・みーさん」

”純銀の聖騎士” たつち・みー。

ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』に所属する全ギルドメンバー41人中、最強の存在であり、『ユグドラシル』というゲーム世界全体でも三指に入る実力者。

九人しか名乗ることを許されない「ワールドチャンピオン」という職業につき、名実ともに戦士職最強の存在。

アインズ・ウール・ゴウンの前身「最初の九人」の発起人であり、かつてはギルドマスターのような立ち位置にいた。

ちなみに、リアルでは美人の妻子持ちで、公務員であるという完璧超人である。

モモンガから見れば、もつとも関わりの深いプレイヤーであり、そして、何より最大の恩人でもあった。

最後は玉座の間で。

そのモモンガの願いに応じ、モモンガとたち・みーは歩いてきた。モモンガの手には最後の時を迎えるためにギルド武器「スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」が握られている。その杖にふさわしいように、彼自身が身にまとっている装備も相応しいものになっていた。

たち・みーの方はといえば引退したときにモモンガに預けた最高の武具はないが、予備の装備ストックの中から決してモモンガに見劣りしない物を揃えていた。もちろん最高の状態から性能は劣るものの、外見だけを比較すればいまのモモンガに釣り合うものになっている。

最期を迎えるにふさわしい装備を揃えて歩くふたりの姿は、傍目から見れば魔王とその騎士という風で、豪華なナザリック大墳墓の内装に実によく似合っていた。

そんなふたりの間で語られるのは、過去の思い出話であり、ここ数年、リアルの事情でほとんど来れなかったことに対するモモンガへの詫びでもあった。

「子育てって、やっぱり大変ですか？」

「ええ。いまはさすがにそんなことはありませんが、当時は夜泣きが一番しんどかったですね。妻に全部押し付けるわけにもいきませんし。交代である子の面倒を見ながら睡眠を取って……仕事に差し支えないようにするのが精一杯でしたよ」

「お疲れ様です……」

「いえいえ、あちらを優先してしまったとはいえ、このナザリックも自分たちの子供のようなものですからね。実は常に気にかけてはいたんです。ずっとモモンガさんが維持してくださっていたんですよね。ありがとうございます」

モモンガはたち・みーのその言葉に対し、何も言わなかった。

何かまずいことを言ってしまったかとたち・みーは少し焦るが、次のモモンガの言葉で、そうではないことを知る。

「たっちさんが、最初に俺を助けてくれたからですよ。それがなかったら、俺はここまでこのゲームを続けられなかったと思います」

そういうモモンガが言っているのが、出逢ったときの話であると たっち・みーは理解する。

「ああ……あの頃は異形種狩りが本当にひどかったですからね」

「たっちさんに助けられてなかったら、やめていましたよ」

たっち・みーとモモンガの出会い、PK（※1）からモモンガを救ったことだ。

ユグドラシルでは自由度の高さゆえに、PKに対してまったく制限がかけられていない。それどころかプレイヤーキャラクターを一定数倒すことでしか得られない称号や就けない職業のようなものもあり、PKもキャラクター育成の選択肢のうちに入るくらいだ。

本来PKとは褒められた行為ではない。それがそのゲームのウリであったり、双方が合意の上でならともかく、誰彼なしに襲い掛かるようなプレイヤーはマークされるし、すべてのプレイヤーを敵に回すことになりかねない。だから、いくらシステムにそれが組み込まれているとはいえ、PKにも一定のマナーが求められる。

それを正当化しようとして行われたのが、異形種狩りだ。

『モンスターに等しい外見を持つ異形種のプレイヤーならば好きに狩ってもいい』というような風潮が、誰が原因かはわからないがユグドラシル中に広まったのだ。その結果、異形種を選択してユグドラシルを楽しんでいたプレイヤーを苦しめる結果となった。時には高レベルのパーティが結託してレベルの低い異形種プレイヤーを狩ることまで行われていた。

当時、すでに最高峰の実力を有していたたっち・みーは、自分が異形種であるということもあつたが、何よりその卑劣な行為の正当化が許せなかつた。ゆえにPKK（※2）をして異形種を救うことを繰り返し、その中で出会ったのがモモンガだ。

たっち・みーはそんな頃のことを思い出しながら、モモンガが気になまないように、自分自身の理由を語る。

「モモンガさんを助けたのは、単純に私があ当時の風潮が嫌いだった

たというだけですし……あまり気にしないでください。そもそも……」

たち・みーはいつも口にしていたことを思い浮かべる。自分としては当たり前前の指針であり、行動理念なのだが、それを貫くのが稀な例であることもまたよくわかっている。

それでも彼は彼の信念に基づいて、恥ずかしさは欠片も見せずに断言した。

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前ですよ」

その言葉を久しぶりに聞いたモモンガはとても嬉しそうに声を震わせた。

「……そんなたちさんがいてくれたから、私はいままで続けることができました。本当に、感謝しています」

わざわざ立ち止まってまで頭を下げるモモンガの肩に、たち・みーは手を置く。

「やめてくださいモモンガさん。もうそのことは散々お礼を言ってもらいましたし、一緒にギルドを設立したり、冒険したり……それ以上ものを、私もあなたから受け取っていますから」

それはたち・みーの本心だった。確かに最初にモモンガを助けたのはたち・みーだが、一緒に行動するようになってからは、むしろたち・みーの方が受け取った恩の方が大きいとさえ思っている。

アインズ・ウール・ゴウンは基本的に和気藹々としたアットホームな雰囲気ギルドだったが、それでも揉め事というのは大なり小なり起きていた。

その中でも特に多かったのが、たち・みーとウルベルト・アレイン・オードルというメンバーの間での意見の衝突だった。様々な理由があったが、彼とたち・みーは意見が合わないことが多く、ことあるごとに対立していたのだ。その時、いつも仲裁に出てくれたのはモモンガだった。

それだけでも十分なほどに迷惑をかけていたし、モモンガがギルドマスターを務めることになったのも、たち・みーが関係するとある事件がきっかけだ。その時にもモモンガには多大なる迷惑をかけ、さ

らにはギルドマスターという責務を背負わせる結果にもなつてしまつた。

普通ならば、見限られてもおかしくない程の迷惑を被っているはず。しかし、モモンガはそんなたち・みーのために、ギルド長の役目を引き受けてくれた上、現実の忙しさのあまりIN率が低下するギルドメンバーが少しの時間でも遊びやすいようにと環境を整えてくれた。

実際、モモンガがギルド長になってからの方が、色々なことがスムーズに進むようになったし、少しの時間でしかなくても、ユグドラシルにINして遊ぼうと思うことができていた。

だから、ギルメンの誰もが彼に感謝していたし、どうしてもどうにもならないやむを得ない事情ができるまで誰も引退しなかったのだ。たち・みーがいる間に引退を決めたメンバーは少しだったが、その誰もが寂しそうで口惜しそうな気持ちを隠そうともしていなかった。

たち・みー自身、子供が生まれたことで引退せざるを得なくなつたとき、最後の最後まで悩んだ。そして一番寂しがつていたくせに、それでも背中をモモンガが押してくれたために、ゲームを引退して家族のために生きることを決められたのだ。

たち・みーがモモンガに対して感謝しなかったときはない。

そして、ギルドメンバーの大半がいなくなつて、最後の一人になつたいまでも、彼はずっと残り続けて待つていてくれた。辞めていった相手に対して不満がなかったわけではないだろう。どうして捨てて行つたのか、という想いがあつたのはさきほど円卓の間で口にしていた通りだ。

それでも、ギルドを、アインズ・ウール・ゴウンを愛し、最後までギルドメンバーが来るのを待つていてくれた。

どれほど感謝してもしきれない。その想いはギルメン全員が共通して持つ感情だろう。

だから、たち・みーはその感謝の気持ちを言葉で表すことにした。「モモンガさん。私が最後のギリギリの間際とはいえ、あなたのおかげでここに戻つてくることができたんです。最初にモモンガさんを

助けたのが私だというなら、最後に私を助けてくれたのはあなたです。私の方こそ、モモンガさんに感謝しています」

深々と頭を下げるたち・みー。

モモンガは感動のあまり、言葉に詰まった。

自分のやってきたことは無駄ではなかったと。他ならぬたち・みーから聞いたことが、何よりも彼にとっては嬉しかった。

「たちさん……俺……っ」

モモンガの声が震えている。

たち・みーはそれには触れず、話を変えるようにモモンガを促した。

「ああ、ほら。もうあまり時間がありません。玉座の間に行きましょう」

「……っ。ほ、ほんとうですね！ 行きましょう、たちさん！」

ふたりは急いで、ナザリック地下大墳墓の最深部、玉座の間に向かうのだった。

皆で作り上げたナザリック地下大墳墓。

その作り込みの細かさには、久しぶりに来たたち・みーのみならず、モモンガにも特別な感情を抱かせる。

それはNPCの作り込みに関しても同じだった。

第十階層へと至る階段を降り切った先の広間に、そのNPCのうちの数人が立っていた。

先頭に立っているのは、一部の隙もなく執事服を身にまとった、老齡の執事だ。

「……ええと、この執事の名前はなんといったかな」

モモンガが小首を傾げて思い出そうと努力する。

「セバス・チャンですよ、モモンガさん」

久しぶりにインしたたち・みーの方が覚えていることに、モモンガは軽く驚きつつ、しかしすぐにあることを思い出して得心する。

「ああ、そういえばセバスはたちさんが作ったNPCでしたね」

「名前についてはかなり揉めましたけどね」

その無骨な執事の隣に、ずらりと並んでいる六人のメイドたちの作り込みも素晴らしい。

そんな彼女たちを、たっち・みーは端から順番に指差していく。

「ユリ・アルファ、ルプスレギナ・ベータ、ナーベラル・ガンマ、シズ・デルタ、ソリユシャン・イプシロン、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。……意外に覚えているものですね」

すらすらと6人のメイド全員の名前を言っただけのたっち・みーに、モモンガは驚愕の声をあげる。

「たっちさん、NPC全員の名前を憶えていらっしやるんですか!？」

その言葉にたっち・みーは慌てて首を横に振る。

「い、いえ、さすがに全員というわけでは……印象深いNPCなら、なんとか、つてくらいです」

「いや、それでも十分すぎるというか……さすが、すごいですね……」

感激したようにモモンガが見つめるのを、気恥ずかしそうにたっち・みーは目を逸らす。

(……実は ウルベルトさんとの意地の張り合いの一環で、どっちがNPCの名前をよりたくさん憶えられるか勝負をした、なんてことは言えないなあ)

それ以外にも色々、くだらない意地の張り合いをウルベルトとは行ったものだった。

いまだからこそ、たっち・みーはそのことを恥ずかしいと思うし、大人げない行為でモモンガによく迷惑をかけたと感じていた。いまとなつては彼との喧嘩も懐かしい思い出のひとつだが、しかしかといって大人げなかった過去の行為が消えるわけではない。

ただの子供じみた喧嘩の名残なのに、モモンガから称賛の眼差しを向けられるのを気恥ずかしく思ったたっち・みーは、誤魔化すようにモモンガに提案する。

「……最後ですし、彼らも玉座の間に連れていきますか?」

その提案に、モモンガは少し悩んだように考えてから頭を振った。

「いえ、彼らはここを守ってもらうためにここにいてもらったのです。このまま、最後までここを守ってもらいましょう。それがギルドの皆で

決めたことですし」

アインズ・ウール・ゴウンは多数決を重んじるギルドだ。いくらギルド長でも、ギルドの前身の「最初の九人」のうちふたりが揃っていても、ギルドとして決めたことはそのまま、というモモンガの言い分はよくわかった。

たち・みーはそこに立ち続ける自分の作ったNPCを感慨深い目で眺める。

「……では、頼むぞ。セバス」

そう言つて、たち・みーとモモンガはその場を去った。

ふたりは玉座の間にたどり着く。

そこはもしもそこまで到達された時、正々堂々真正面から侵入者を迎え撃とうというコンセプトで作られた場所だけあって、輪をかけて豪華な作りになっていた。

それぞれのギルドメンバーを模した旗が下がっている。

そしてNPCの一人であり、守護者統括であるアルベドの姿もあった。

「ここには私も久しぶりに入ります」

「扉といい、中身といい、改めて見るとすごい作り込みですね」

たち・みーは懐かしそうに玉座の間を見渡す。こだわりを持って仲間たちが作り上げたその圧巻の光景に目を奪われてしまう。

だが、モモンガは少しだけ険を持った視線でアルベドを睨んでいた。NPCに対してそんな視線を向ける意味がわからず、たち・みーが彼に尋ねる。

「アルベドがどうかしたんですか？」

「……いえ、なんでアルベドがワールドアイテムを持っているのかと」
言われてたち・みーはアルベドがワールドアイテムを所有していることを改めて認識する。いままでも目には入っていたが、あまり気にしていなかった。

「私が引退した後、皆でそうしようと決めたんじゃないんですか？」
「違います。まったく……皆で集めた宝を勝手にNPCに持たせるな

んて」

ワールドアイテムはただのアイテムという括りにはとても収まらない性能と価値を持つものだ。ユグドラシル内に200個しかなく、それを手に入れるだけでその者の知名度は最高位まで上り詰めることさえ言われる。実際、その能力は運営に要請してシステムの一部変更を行うことができるものさえあり、壊れ性能という言葉が裸足で逃げ出すレベルであった。すべてがそうであるというわけではないが。

モモンガもそのワールドアイテムを個人的に持っているが、それはギルドメンバーから許可を得て持っているものだ。勝手に持たせるのとはわけが違う。

ギルドメンバーで決めたことを重んじるからこそ、モモンガはアルベドが勝手にワールドアイテムを持っていることを不快に思っているのだ。たっち・みーは少し考える。

「回収しますか？ 勝手に持たせていたなら、回収しても問題ないと思います」

「……いえ、まあ、最終日ですし。彼女にワールドアイテムを持たせた仲間の想いを尊重しましょう」

どこまでも仲間を尊重し、大事に思ってくれていることに、たっち・みーはモモンガらしいと感じた。

(モモンガさんはもっと我儘を言ってもいいと思うんだけどな)

それだけの資格がモモンガにはある。けれど、そんな律儀で誠実なところがモモンガらしいとも思うため、たっち・みーはそれ以上のことは口にしなかった。

「……確かアルベトを作ったのは設定魔のタブラさんでしたよね」

話題を変えるつもりで、そう口に出すと、モモンガはそれに乗らなかった。

「そうですね。せっかくですし、見てみます？」

コンソールを開いて、モモンガがアルベトのプロフィールを眺める。それを隣から覗き込みながら、たっち・みーはあつけにとられて笑ってしまった。モモンガも同様にあつけにとられている。

「ながつ」

プロフィール欄にびっしりと書き込まれた文字が、モモンガが軽く弾くようにしてスクロールしてもまだ続いている。洪水のようなプロフィールだった。

「守護者統括だけあって、さすがの設定量……というべきでしょうか」
「そうですね。あ、ようやく最後に……ん？」

最後の一文に、たっち・みーとモモンガは目を点にする。

「……『ちなみにビッチである。』？」

「罵倒の意味のビッチ、ですよ。これ」

「そうですね。タブラさんはギャップ萌えだったかな？ あの人のらしいといえばらしいですが……」

こんな設定にしていたのか。

その想いはモモンガとたっち・みー、双方に共通する思いだった。

「いや、しかしこれはさすがに……全NPCの頂点の立場にあるNPCがこれでは……」

モモンガはそう言って言葉を濁す。

いくらなんでもこれはひどくない？と、そういう想いを抱いていることがたっち・みーには伝わってきた。そしてそれはたっち・みーも同意する部分である。

「……変更しますか？」

本来であれば、クリエイティブツールを使わなければ操作できない。しかし、ギルド長の特権を使えば、それも可能になる。

「そうですね……しかし、タブラさんが作ったものを勝手に変えるというわけにも……」

「でも、この何とも言えないもやもやを抱えて最後を迎えるのも、なんだか微妙ではありませんか？」

「……ううん……そうですね」

最後、と言う言葉が重くのしかかる。

これが最後の機会でなければ、そのままにしていたら。あるいはもう少し時間があれば、結論は変わっていたかもしれない。しかし現実として終了時間は迫っている。

モモンガにはすっきりとした気分でゲームを終えて欲しいという

のが、たっち・みーの思いだった。

「ワールドアイテムをアルベドに勝手に持たせていた分のペナルティと考えればいいのでは？」

たっち・みーの言葉に決心したのか、モモンガがスタッフを軽く揺らす。

「……そうですね。では、最後の一文だけ変更させてもらいましょう」
モモンガがスタッフを用いて設定を変更する画面を起動する。「ちなみにピッチである」の一文は削除された。文字制限ギリギリまで埋まっていただけあって、消えた後の空白がどこか物悲しい。

「消した分、何か入れるべきでしょうか。……すでに限界文字数いっぱいだから、入れるとしたらー文字か」

文字が消えた分、空間が空いている。

たっち・みーもその空間を埋める言葉を少し考え、唐突に閃いた文言があった。

『モモンガを愛している。』、とか？」

そのたっち・みーの言葉にモモンガが盛大に動揺する。

「いやいやいや!? そんなことは書きませんよ!」

モモンガは全力で頭を振る。たっち・みーはあまりの激しさに驚きつつ、確かに冗談としてもあまりな提案だったかもしれないと反省する。

「すみません。ぱっと思いついただけだったんですが、ちょうど文字数が一緒だったので、つい」

言われたモモンガは、頭の中で文字数を数えているようだった。数秒して頷く。

「……ああ、なるほど。確かに、文字数が同じと言うのはおさまりがよくてすごくいいですね。一人だったら思わず設定しちゃってたか可能です。それに……」

最後だから。

その言葉は飲み込んだ。しかし、たっち・みーにも何を言わんとしていたかは伝わった。そして、それを責めるつもりはたっち・みーにはみじんもなかった。

そもそも、ギルメンのほとんどがログインしなくなってからも、ナザリック地下大墳墓をほとんど弄っていないモモンガに、だれが文句を言えるというのだろうか。普通なら、皆がインしなくなった時点で、モモンガは好き勝手やっても許される。ゲームを引退するというのはそういうことだ。

それなのに、モモンガはギルドメンバーの意思を尊重し、決して必要以上の改変を行うことをしていない。ここを維持するだけなら、もっと簡単に、各メンバーから預けられたアイテムの一部を売れば済む。けれど彼は「好きなように使ってください」と渡されたさほど重要でないアイテムでさえ、ほとんど手をつけていない。それはいつだれが帰ってきてもいいように、という彼の気持ちであり、それだけギルドメンバーたちのことを大事に思ってくれていたという証拠だ。

たっち・みーは、だからこそ最後の我儘として行われる設定の改変は、モモンガにとって嬉しいことにしたかった。『モモンガを愛している。』という案が出たのもその想いがあってのことだったが、さすがに直接的すぎて、あとあと気に病むかもしれないと思い直す。

「では、『ギルメンを愛している。』でいかがでしょう？」

他の誰でもない、モモンガのように。

そのことは口にしなかったが、モモンガはその設定がとても気に入ったようだった。

「ああ、それはいいかもしれませんね。ナザリックのNPCはギルドメンバーに対して絶対服従が基本ですが、ギルメンに対して愛情を持っているのはほとんどいかなかったような……」

その言葉に、たっち・みーは軽く肩を竦めた。

「まあ、自分で作るNPCに『自分を愛している』と設定するのはちよつと恥ずかしいですからね」

いましてがたのモモンガのように。

「ではそうしましょう。ギルメンを愛してくれているからこそその『守護者統括』、NPCの頂点に立っているというのも、特別っぽくていいですし」

納得したのか、モモンガはコンソールを操作してアルベドの設定を

終わる。

「これでよし……と」

玉座の前に、二人で並ぶ。

「……座つてもいいですか？」

遠慮がちにモモンガが言う。その遠慮を、たっち・みーは笑い飛ばした。

「もちろん。どうぞモモンガさんがおかけになってください。私はこちらに」

モモンガがどつかりと玉座に腰掛けると、魔王のような容姿も相成って非常に絵になった。そして、たっち・みーは王の横に控える騎士のように、玉座に座ったアインズの隣に立つ。それもまた非常に絵になる姿だった。

たっち・みーは意外と絵になっている自分たちの状況に合わせ、アルベドに「ひれ伏せ」と命令を行った。アルベドがすつ、と滑らかな動きでその場に、モモンガとたっち・みーに向かって跪く。

アルベドの完璧な臣下の礼に、たっち・みーは満足した。

「時間があれば、この玉座の間をシモベで埋め尽くしたんですけどね」
さぞ壮観なことだろう。もつと早くインすればよかったとたっち・みーは後悔する。

その言葉に対し、モモンガはかすかに笑みをこぼして、頭を振った。
「いいえ、たっちさん。ここにはもう十分なほど、たくさんいますよ」
モモンガが玉座の間にさがっている旗のサインが表す名前を読み上げていく。

「俺、たっち・みー、死獣天朱雀、餡ころもつちもち、へ口へ口……」
一つの名前を読み上げるたびに、脳裏にそのメンバーとの思い出が過る。

41人の名前をすべて読み上げ、そして、モモンガは大きく、深く、息を吐く。

「……ああ、楽しかった。そうだ、本当に、楽しかったんだ……」

深い感情が籠った言葉だった。

友人たちとの輝かしい時間の結晶。

アインズ・ウール・ゴウン。

それが今、失われようとしている。たち・みーはそのことを改めて強く自覚し、もつと時間を作って遊びに来ればよかったと、後悔していた。

この愚直で誠実なギルドマスターに、長い間寂しい思いをさせてしまった罪悪感は、とても大きなものだった。

それなのに、モモンガはどこまでも嬉しそうに、たち・みーに声をかける。

「本当に、来てくださってありがとうございます。最後の最後に、たち・みーさんとお話できて、本当に嬉しかったです」

たち・みーはこみあげてきた後悔の感情をぐつと堪え、精一杯明るい声を振り絞った。彼に湿っぽく終えさせたくない、その想いが形を成した。

「……モモンガさんが、メールを飛ばしてくれたおかげですよ。まだ通知が生きていたので、あれがなければサービス終了にも気づかないままだったかもしれません。アップデートデータをダウンロードする必要があつて、本当にギリギリになってしまいました。少しでも時間が作れてよかったです」

モモンガはたち・みーに対し、少し逡巡してから、その言葉を口にした。

「たちちさん、また、どこかでお会いしましょう。そして……また一緒に冒険しましょうね」

モモンガは本気でその言葉を口にしていった。

先ほど、ログアウトしていったへろへろに言われて一度は激昂していたはずの言葉を、今度は彼が口にした。へろへろが口にした言葉は、モモンガも心のどこかで望んでいたことだったのだ。

そして、それはきつと、ギルドメンバー全員に共通する想いなのだろう。

「……そうですね。いつか、またどこかで。必ず」

たち・みーはそう答えつつ、それが難しいことがわかっていった。リアルな事情もあるし、このユグドラシルがなくなってしまうえば、モ

モンガとたち・みーの繋がりもなくなってしまおう。

もし別のゲームを初めたとしても、そこで出会う確率はどれほどのものか。また一緒になって冒険できるのは天文学的な確率だろう。

だが、それでもまた一緒にゲームが出来たら。

それはとても素晴らしいことだと感じた。

(すっかりゲームから引退してたけど……また別のゲームを始めようかな。……ああ、せめてユグドラシルがもう数日続いてくれればいいのに)

最後の記念にどこかの高難度ダンジョンにモモンガと一緒に挑んだり、ユグドラシルの世界を見て回ったりしたのに。

いつも後悔はあとからくる。

モモンガはカウントを始めているのか、無言だった。みればもう時間は数秒とない。

たち・みーは、そんなモモンガに向かって、静かに礼をした。

(ありがとう、モモンガさん。我らの誇り、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター。最後までお疲れ様でした)

そして、終わりの時間が来る。

たち・みーは夢の終わりを感じて目を閉じた。

そして——新たな冒険が始まる。

階層守護者たちと執事

サービスが終了してサーバーがダウンすれば、ログインしていた者は当然強制ログアウトされる。

目を開ければそこは見慣れた自宅の部屋——ではなかった。

「え……？」

ほぼ同時に発された、二人分の声が重なる。

慌ててそちらを見ると、玉座に座ったままのモモンガと目が合った。

「たっちさん……？」

「モモンガさん……？」

サーバーダウンが延期になった？

何かのトラブルに巻き込まれた？

念の為に時刻を確認すれば、『00.00.38』と、終了時間は確かに過ぎている。

慌ててコンソールを開いて通信回線をオンにしようとして、いつもやる動作をしてもコンソールは開かなかった。

「コンソールが開かない……？」

「こ、こつちもです。たっちさん」

「一体なにが……」

混乱するモモンガとたっち・みーに、第三者の声が割り込んだ。

「ああ、たっち・みー様！ よくぞご帰還してくださいました！ ナザリックの全ての者を代表し、お祝い申し上げます！」

ぎよつとして見た先では、ひれ伏した体勢のまま、顔だけあげたアルベドがはらはらと涙を流しながら、たっち・みーを見つめていた。

歓喜に満ちた声音、その溢れんばかりの感情が滲む表情。

突然マネキンが人間になったかのような感覚だった。作りものでしかなかったものがはつきりと自分の意志を示し、言葉を発している。

いまだ頭の中では混乱していたが、たっち・みーはそんな彼女に対して、何かを言わなければならぬと感じた。半ば夢を見ているよう

な気分ではあった。

「あ、ああ……ありがとう。アルベド。長く留守にしている、すまなかった、な」

とつきにそう応じたたち・みーの対応は立派なものだった。

しかしそれに対するアルベドの反応は、たち・みーの想像を超えていた。

「いいえ……！ 申し訳ございません。至高の御方々がひとり、またひとりとナザリツクをお離れになっていくのは、わたくしたちにはとても理解できないような深慮あつてのものと理解はしておりましても、身を切られるような想いでございました……モモンガ様以外の誰も、もうナザリツクには戻って来てはくださらないのかと、何度絶望に染まった夜を過ごしたことでしよう……しかし！ たち・みー様はこうして戻ってきてくださいました！ これに勝る喜びはございません！」

相変わらず泣きながら、アルベドは胸の内を吐露していく。そのアルベドの言葉に、たち・みーはまるでハンマーで頭を殴られたかのような衝撃を覚えた。

(そうか……そうだな)

少し考えればわかることだ。

(NPCたちからすれば、私は彼らを捨てていったようなものだもんな……)

恨まれても仕方がない。だが、少なくとも彼女は恨みもせず、ただ戻ってきてくれたことが嬉しいと、涙まで流して喜んでくれている。

たち・みーは自然と体が動いていた。アルベドのすぐ近くまで歩み寄り、ゆっくりとその傍に膝をつく。

「アルベド。顔をあげろ」

「……たち・みー様」

潤んだ目。豊満な体つき。そして、香しい匂い。

(……匂い？ いや、それよりも)

たち・みーは顔を上げたアルベドの涙を指の腹で拭うと、その頬を軽く撫でた。

何をいうべきかを考え、たち・みーは感じていた通りのことを口にする。どういう口調で話すべきかは悩んだが、相手が従者のような態度を取っているのだから、それに合わせた口調にした。

「お前の忠義に感謝する。そして私の剣にかけて誓おう。二度とお前たちを悲しませはしないと。一度はナザリツクから離れたこの身だが、心は常にここにあった」

完全な嘘ではない。忙しい日々には忙殺されながらも、ナザリツク地下大墳墓のことは時々気になっていた。なにせワールドチャンピオンという立場に昇り詰めるほど入れ込んだゲームなのだ。リアルな事情で引退を決め、色々なことに対する未練を断ち切ったあとも、何かと気になってはその迷いを振り払うということを繰り返していた。

現状のようなことが起きているのかはわからないが、目の前で泣く女性を慰めることが、いまの自分のやるべきことだとたち・みーは決めたのだ。

アルベドに向かって手を伸ばすと、その体を引きよせて強く抱きしめる。

「私を待っていてくれてありがとう、アルベド。私はお前のような配下を持って幸せだ」

少し大仰にすぎる気もしたが、それでも本心である。

「なんと勿体ないお言葉……!」

余計に泣かせてしまった。

たち・みーがどうしたものかと思っていると、いままで黙って何かを考えていたモモンガが立ちあがった。それを感じたたち・みーは、少し慌ててアルベドから離れる。

「アルベド、もう大丈夫か?」

「も、申し訳ありません。たち・みー様。至高の御方の前で涙を見せるなど……ああ! 私如きの涙で御鎧を汚してしまいました……!」

伏してお詫び申しあげます!」

そのまま放っておけば切腹するとも言いかねない彼女に、たち・みーは言葉をかける。

「気にするな。女性に胸を貸すというのは、男にとって名誉なことだから……な」

思わずそんなことを口走りつつ、たち・みーはそそくさとアルベドから距離を取ってモモンガの脇に戻る。そして、心の中で自分の妻に謝った。

(……思わず彼女を抱きしめてしまった。すまん)

そう考えてから、ふと、おかしなことに気づいた。

(ん……う？　ちよつと待て。なんでいま私はモモンガさんが立ったことに気づいた?)

アルベドを抱きしめていたたち・みーは、完全にモモンガに背を向けていた。現実的には、衣擦れの音などで察知することはできるだろう。しかし、先ほどたち・みーはモモンガが立ちあがったことをまるで直接目で見たかのように確信していた。それはあまりにもおかしいことだ。

たち・みーが自分の感覚に戸惑っている間に、モモンガが妙に威厳のある声でアルベドに対して口を開いた。

「アルベド、少し落ち着くのだ。たちさんが戻ってきてくれたことは私も嬉しい。だが、それを盛大に祝うためにも、先にやらねばならぬことがある」

アルベドはそのモモンガの言葉に、目元を拭うと改めて臣下の礼を取った。

「はっ！　なんなりとお申し付けください。モモンガ様」

そのアルベドに対し、モモンガは的確に指示を下していく。セバスに周辺を探索させたり、プレアデスたちに八階層からの侵入者を警戒させたり、各階層の守護者たちに第六階層に集まるように指示を出す。

「——また、たち・みーさんが帰還したことについては、まだ誰にも伝えるな。守護者たちには良い知らせがあるだけで伝えろ。闘技場に集まったときに直接伝える」

「はっ！　第四と第八階層の守護者にはいかががいたしましょうか？」

「……む。そうだな。その両名は除いて構わん。また、集合時間より

前に我らは六階層に向かうゆえ、双子にも連絡は不要だ」

「承知しました」

命じられたアルベドが玉座の間を退出する。

残ったモモンガとたち・みーは顔を見合わせた。

「……いや、すごいですねモモンガさん。まるで本当の魔王様みたいでしたよ。実に支配者然としていました」

「……私も驚いています。けど、不思議とそこまで焦りや緊張がなくて……というよりは、何か一定以上の感情の揺れがあると、それが強制的に抑えられているような……」

「……もしかして、この姿になっっていることに関係があるのでしょうか？」

「アンデッドの常時発動型特殊技術……精神安定の効果ということですか？ ……なるほど、確かにそれはあるのかも……」

「私も妙に感覚が研ぎ澄まされているようで……さつきモモンガさんが背後で立ちあがったのが見ずに理解できたんです。それももしかすると……習得している特殊技術の影響……？」

「とにかく、まずは何が起きているのかを確認しないといけませんね。アルベドの様子を見てみると、とても仮想現実とは思えません……」

「先ほど、たち・みーさんがアルベドを抱きしめられたことから考えると、どうやらこの世界には18禁コードなるものも存在しないみたいですよね」

「え？」

「だって思いつきりに胸に触れてたじゃないですか」

「はい!? い、いや、あれは特にそういうつもりじゃなくって……!」

慌てるたち・みーが面白かったのか、骨をからからと鳴らしながらモモンガが笑う。

「ええ。わかっています。けど、そういうつもりじゃなくても、ああいう接触の仕方はユグドラシルではできなかつたはずですよ。そういうことをしたら、すぐさま運営から警告が来たはずですよ」

確かにそうだった。モモンガが的確に現状を把握していることを

知り、たち・みーは自分も落ち着かなければと努めて頭を冷やす。

「……確かに。それにあの感情の表れや命令の理解度、感触や匂い……どれをとっても、とても現在のDMMOでは再現不可能です」「ナザリックごと、異世界にでも転移したのでしょうか?」

「それにしても、ユグドラシルの……ゲームの要素がそのままなのは気になりますね」

「確かに」

そう言つてモモンガが手にしていたスタッフから手を放す。するとそのスタッフはふわりと空中に浮かんだ。その様子はゲームの仕様そのままだった。

手を広げて再びスタッフを手にしながら、モモンガはひとつ息を吐く。

「……とりあえず、何らかの異常な現象に巻き込まれたことは確かです。ひとまずは慎重に進めましょう。私とたち・みーさんが揃っていれば仮に全守護者を敵に回しても大丈夫だとは思いますが。アルベドの様子を見る限り、設定通り忠誠を誓ってはくれているみたいですけど。その設定がどこまで絶対的なものかわからない以上は、ひとまず上位者として彼女たちに接しましょう」

「アルベド……」

たち・みーはその名前を呟く。設定、と聞いて最後の最後でやってしまった設定の改変のことを思い出したのだ。たち・みーの呟きを聞いて、モモンガもそのことを思い出したのか、暗鬱なオーラをにじませた。骸骨の体だからほとんど表情の変化はわからないが、たち・みーはそのモモンガの纏うオーラのようなもので彼の感情を推し量ることができていた。それもまた、以前まではできなかったはずのことだ。

「しまった……こんなことになるんだったら、やらなきやよかつた……」

苦悶のうめき声をあげるモモンガに、たち・みーは慌てて声をかける。

「いえ、モモンガさんは躊躇っていたのに背中を押してしまったのは

私ですから！ どちらかといえば私に非があります！」

そうたっち・みーが言ったものの、モモンガの纏う陰鬱な空気は晴れなかった。

「いえ、それだけじゃなく……私がたっちさんをこの異常事態に巻き込んでしまったのかと思うと……」

「それこそ、モモンガさんが気にすることではありませんよ」

巻き込まれているのはモモンガも同じなのだから、それをモモンガが謝罪するのはおかしなことだろう。終了するはずだったゲームの世界が現実のようになる、なんていう異常事態を予想できるはずもない。

この律儀な友人にそれ以上何を言えればいいのか、たっち・みーは即座に答えを導き出せなかった。

だから、ひとまずこの場は話を变えることにする。

「モモンガさん、ひとまずその話はおいておきましょう。いまはやるべきことをやらないと」

そう言われたモモンガは、なおも苦悩していた様子だったが、気持ちを切り替えるように頭を振り、頷く。

「そうですね。いざという時に備えて、魔法や特殊技術がゲームの時にように使えるかどうか確認しないと。意識を向けてみたところ、負の接触などの特殊能力の使い方や切り方はわかりましたけど」

「……あ、だから第六階層に守護者たちを集めたんですね？」

ただ守護者を集めるだけならどこでもいいはずなのに、わざわざ第六階層を指定した意味がわかった。あそこには闘技場が存在し、戦闘行為を行うのなら一番適した場所だ。

よくあの短時間でそこまで頭を回したものだと感じてしまう。

「本当は、先にたっちさんの鎧を取りに行くべきかと思うんですが……あそこに行くには、まず自分たちに何ができるか把握してからじゃないと危険です」

現状、たっち・みーが身に着けている鎧は彼が装備できる最高の鎧ではない。ワールドチャンピオンになったとき、賞品として手に入れた鎧は、現在宝物殿に保管されていた。

それを取りに行くべきなのだろうが、宝物殿は仕舞い込んであるアイテムを守るために様々なトラップやギミックが仕込んである。特殊技術や能力がどこまで通用するのかわからない現状、そこに行くのは危険であるという判断だ。たち・みーはそのモモンガの判断を支持する。

「まあ、性能的にはこれでも十分な防御力は発揮します。戦闘だけではなく撤退も視野に入れるなら、この鎧の特性の方が優れた面もありますしね」

単純に防御力だけを見れば、ワールドチャンピオンの証でもある鎧の方が当然優れている。しかし、それ以外の要素も踏まえて考えると、今の鎧で役目を果たせないわけではない。

そのことを踏まえていても、心配しているのかモモンガはたち・みーを安心させるように自分の胸を叩いた。

「私はフル装備ですし、ギルド武器もあります。……いざとなればワールドアイテムを使用してでもたちさんを守りますからご安心ください」

力強い言葉でモモンガはいう。そのことをありがたく感じたたち・みーは、それに甘えることにした。

「ありがとうございます。よろしくお願いしますね、モモンガさん」
「任せてください。……それでは、ひとつずつ確認していきましょう」
そう言って、まずはこの場で出来ることから確かめてみよう、とモモンガはたち・みーに提案した。

指輪による転移に成功した二人は、第六階層にやってきた。

「ここは確か、ぶくぶく茶釜さんが設定した双子のダークエルフが管理しているはずですね」

闘技場の中に入りながらモモンガが言うのと、どこからともなく一人の少女が飛び降りてくるのは同時だった。くるくると回って見事に着地し、「ぶいー!」と誇らしげにピースをしてみせて……驚愕に目を見開いた。

「た、たたた、たち・みー様!?!」

ぎゅおん、という音がするほどの速度で、アウラはモモンガたちに走り寄り、ひざまずく。

「たっち・みー様！ おかえりなさいませ！」

アルベドの時は面食らったものだが、そういうものだと理解しつつあったいまは少し落ち着いて対応することができた。

「久しぶりだな、アウラ。長くナザリックを留守にしていますまなかつた」

「何をおっしゃいます！ 戻ってきてくださっただけで、あたしたちは十分です！」

「あ、ああ。ありがとう」

アルベドは最後に設定を弄ったこともあって忠誠心マックスでも不思議ではなかったが、それは他の守護者たちにも言えるようだった。少なくともすぐにどうこうされるということはなさそうだ。そのことを確信したモモンガとたっち・みーは視線を交わす。

モモンガはスタッフを握る手を緩め、たっち・みーはさりげなく剣の柄に添えていた手を離す。もしも守護者が敵意を持つて向かってきた時は全力で攻撃を仕掛け、即座に逃走する算段だったのだ。

「とこころで……」

モモンガが誰かを探すように周囲を見渡すと、アウラもそのことに気づいたようだった。

「あつ……マール！ 早く来なさい！ 急いで！」

声に切迫したものを感じたのか、それとも彼自身も急いだのか、マールはすぐに飛び降りてきた。そして駆けてきて、アウラの隣で同じようにひざまずく。

「お、おかえりなさいませ。たっち・みー様」

「ああ、マールも変わらないようだな。……格好的な意味でも」

「ふえ？」

「いや、なんでもない」

『ぶくぶく茶釜さんの設定へのこだわりは半端ないですからねえ』

モモンガがこっそりそう声をかけてくる。

意思を交わすための魔法である〈伝言〉が効果を発揮し、口に出す

必要がなく会話することができるのは確認済みだった。

『いや、それにしても完璧すぎる『男の娘』ですよね』

『まったくです』

そんなささやきを二人で交わしたあと、モモンガは骸骨でありながら、おほん、と一つ咳払いをして話を始めた。

「今日ここに来たのはほかでもない。少しの実験と……久しぶりにこちらに来たたち・みーさんの肩慣らしのためだ」

「了解しました！ あの、モモンガ様がお持ちになっているそれって、伝説のアレですよね！」

「ああ。これぞ我がギルドの誇る最高位のギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン！」

子供がおもちやを誇るように、モモンガが解説を始める。たち・みーは本当にモモンガがスタッフを自慢しているのを感じて、思わず口元を緩めてしまう。

長い説明を嬉々として続けるモモンガに悪いとは思いつつ、たち・みーはやんわりとそれを遮った。

「モモンガさん、楽しいのはわかりますが、いまは……」

「あつ、そうですね。すみません。つい自慢したくなってしまつて」慌ててモモンガは説明を打ち切り、真剣な表情で聞いていたアウラとマールに命じる。

「まあ、そういうわけだ。この杖の性能を試したい。人形を用意してくれるか？」

「わかりました！」

そうして用意された人形をモモンガはへ火球で焼き払つた。どうやら魔法の使用に問題はなさそうだ。それを見て、たち・みーもまた自分の内に意識を向けてみる。

（うん……問題ない。特殊技術の使い方もわかる）

無数にある特殊技術をどう扱えばいいのか、はつきりとわかる。

たち・みーがひとり満足していると、モモンガが手にした至高の杖を掲げる。

「サモン・ブライマルファイヤーエレメンタル
〈根源の火精霊召喚〉」

杖の力のうちの一つを使用し、炎の精霊を召喚する。その放たれる熱気は、これまで経験したことのないレベルで、たっち・みーは思わず腕で顔をかばった。

恐ろしく強そうなモンスターだが、たっち・みーはさほど怖いとは感じなかった。しかし、それも当然だ。ゲーム内の常識に照らし合わせてみれば、この程度のモンスターはひたすらマラソンで狩れる程度のレベルなのだから。

「たっちさん。これと戦ってみますか？ ……万が一の時はすぐ止められますから」

後半はこっそりと囁かれた。守護者たちに聞こえないように配慮したのでろう。

「ええ、やりましょう」

そう言つてたっち・みーは数歩前に出る。自分がこの世界でどの程度の動きができるのか確かめておく必要がある。手元に自分専用の武器はないが、代わりに手にしている武器はある。全開には程遠いが、80レベル程度の炎の精霊なら十分すぎる。ゲームの知識に則つてそう判断する。

「たっち・みー様の戦闘を再びこの目で見られるなんて……！」

アウラとマーレが、とても期待した表情で見つめている。

たっち・みーは少し考えて、双子の期待に応えるためにも、自分の持つ最高峰の技を放つてみることにした。

「根源の火精霊よ！ たっちさんを攻撃せよ！」

モモンガに命じられた炎の精霊が、たっち・みーを焼きつくさんと迫る。

だが、一閃。

纏う炎も何も関係なく、たっち・みーに迫っていた炎の精霊が真つ二つになった。とはいえタフネスが相当ある炎の精霊が、一度で斬り殺されるわけではない。すぐに断面同士がくっついて再生してしまう——はずだった。普通に切っただけならば。

しかし、たっち・みーが先ほど放った一閃が切り裂くのは、物体ではなく空間だ。

「へ次元断切」

ワールドチャンピオンという職業を最終レベルまで鍛え上げることと習得できる、超弩級最終特殊技術。その破壊力は当然、ユグドラシルの数ある特殊技術の中でも随一である。

空間ごと切られた炎の精霊は、再生することもできず、一太刀で消滅した。まるで裂けた空間に呑みこまれるように、その身から零れていた炎の端まですべて消えてしまったのはたち・みーにも予想外だったが。

空間が切断されるほどの力の前に、炎の精霊では一秒耐えることもできなかった。

「……よし、問題なさそうだ」

圧倒的な実力を見せつけたたち・みーは、特にこびりついているものもなかったが、血振るいをするように剣を一度振るうと、元のように剣を鞘に納める。

そしてあまりにもあっさり炎の精霊を切り捨ててしまったことに気づいて焦った。

(しまった……もつと色々試してみるべきだった)

そう思っても後の祭り。スタツフの力であるの精霊を召還できるのは一日に一度だけだ。

「すみません、モモンガさん。ついやりすぎてしまいました」

そう言っただたち・みーが見守っているモモンガたちの方をみると、アウラやマールはともかく、モモンガまで感激したような顔でたち・みーの方を見ていた。

「すばらしい……これぞ、たちさんだ……」

「モモンガさん？」

たち・みーが声をかけると、モモンガはハツとしたように正気に戻る。

「ああ、すみません。つい感動してしまって……」

アウラとマールに至っては言葉もない、という様子だった。少し照れながらたち・みーは元のようにモモンガの近くに歩いていく。

「つい一撃で倒してしまいました、どうしましょう？　まだ守護者

たちがくるには時間がありますよね?」

「そうですね。一応最低限の確認はできましたし、実験や肩慣らしはよしとして、あとはのんびり待ちましようか。……あ、ちよつと待つてください」

そういつてモモンガは中空に手を突っ込む。アイテムボックスを開いたのだとたち・みーにはわかった。

そこから取り出されたのは、無限の水差しだ。同時に人数分のコップも取り出される。

「たちさん、どうぞ。アウラとマーレも飲むといい」

「ええ!? そ、そんな至高のお方に注いでもらうなんて!」

「お、畏れ多いです! それに、何もしてないですし……」

あまりにも恐縮するので、見かねたたち・みーは二人に声をかけた。

「実験のための準備をしてくれただろう? せっかくモモンガさんが用意してくれたんだ。一緒にありがたくいただくとしよう。それに、誰かと一緒に飲んだ方が私も美味しく飲めるしな」

そういうたち・みーに、モモンガが口添える。

「アンデッドは飲食不要だからな。私の代わりに飲むと思えばよい」
「は、はい! では、ありがたくいただきます!」

ゴクゴクと水を飲むアウラと、ちびりちびりと水を飲むマーレ。水を飲む仕草にも二人それぞれの個性が表れていた。それを満足そうに見たたち・みーも、同じように水を飲む。キンキンに冷えた水は喉を通って胃に滑り落ちていく。

顔には出さないようにしながら、たち・みーは少し考え込む。

(モモンガさんはアンデッドだから飲食も、睡眠も必要なのか……元の人間からかけ離れているな。精神に対して大きな影響がなければいいが……気をつけておかないと)

そういう意味では、たち・みーの種族はまだ人間らしさを有しているといえる。睡眠も必要だし、飲食も同様だ。疲労については、前衛職だっただけあって様々なスキルを取っていてほとんど無視できるレベルになっている、睡眠や飲食もアイテムによって不要にできる

はずだが、それによって果たしてどのような影響が出るのか、想像もつかない。

(ひとつひとつ、確認していくしかないな……)

そう考えるたち・みーの前では、アウラがモモンガのことを「もつと怖いのかと思ってました」といって、モモンガがそれに応じていた。最終的にぼんぼん、とアウラの頭を撫でているのを、マーレがうらやましそうに見つめていた。

そんな微笑ましい様子に、自分の子供のことを思い出してしまい、少しだけ暗雲とした気持ちになる。

(今の段階ではどうしようもない以上、向こうのことを気にしてもしかたないとはいえ……向こうがどうなっているかが気になるな)

精神だけこの世界に転移してしまっているのだろうか。それともあるいは、自分たちはコピーされた存在で、本物の自分は何事もなくログアウトしたのと同じ状況になっているのだろうか。時間が止まっているということもありえなくはないかもしれない。少なくとも時間の流れが違う可能性は大いにありうる。

(……いずれにせよ、情報が必要だな)

たち・みーが改めてそう決意したとき、闘技場に〈転移門〉が開いてその中から小柄な少女が姿を現す。

「おや？ わたしが一番でありんす……かあ!？」

妙な言葉使いが特徴のシャルティアの語尾が素っ頓狂なものになった。もちろんその理由は一つだけだ。

シャルティアは不自然に盛り上がった胸が揺れるのもかまわず、大急ぎでモモンガとたち・みーの傍に近づくと、膝をつく。

「たち・みー様！ お戻りになられたのですか!？」

「シャルティア。息災そうでなによりだ」

「アルベドがいつていた「良い知らせ」とはこのことでありんすか……！ これは確かに良い知らせ！ このシャルティア、至高なる御方の帰還を心からお喜び申し上げます!！」

「……そうか。ありがとう」

そうたち・みーは答えながら、罪悪感に胸が締め付けられる思い

だった。こんなにも自分たちを慕ってくれる者たちを、どうして私たちは捨てるような選択をしてしまったのか。

忠義はとても嬉しいし、帰還を喜んでくれるのはありがたい。けど、たち・みーの心には自分の事情で彼らを見捨てたことによる罪悪感がひしひしと積み重なりつつあった。

『たちさん。あまり気に病まずに』

たち・みーの心を読んだかのようなタイミングで、モモンガからこっそりと〈伝言〉が入った。たち・みーもそれを用いて言葉を返す。

『……しかし、モモンガさん。私は……』

『ギルドの皆が引退していったのは、決して自分勝手な理由からではありませんでした。飽きてやめたという人は一人もいなくて。たちさんのように子供が生まれたから、ぶくぶく茶釜さんやペロロンチーノさんのように夢を叶えたから、ヘロヘロさんのように転職して寸暇を惜しんで働かざるを得なくなったから……そういう事情ばかりです』

41人もいれば、そういうわけではなく勝手な理由で辞めた者がいてもおかしくない。けど、皆そうではなく、ただやむを得ない事情がそれぞれにあったからだった。それはそのすべてのメンバーを見送ったモモンガだからこそ、断言できる言葉だった。

『だから、ギルドは、アインズ・ウール・ゴウンは、ギルドメンバーが再び戻ってきたことを歓迎します。ギルドマスターの私がそう決めているのですから、NPCたちに文句は言わせません』

『……ありがとうございます。モモンガさん』

たち・みーはそう言うことしかできなかった。これからこのナゼリックのために尽力していくことを胸に誓いながら。

その後現れたコキュートスともシャルティアと同じような会話を繰り広げたのち、アルベドと最後の階層守護者デミウルゴスが現れた。

彼を制作した人物とは、たち・みーは色々な思いがある。そのせいなのか、デミウルゴスも他の守護者たちと同じく、たち・みーの

帰還を喜んでくれてはいるようだったが、その立ち振る舞いはそれまでの守護者に比べるとどこか距離を取っているようなものだった。

(あー……これはちょっとまずいかもなあ)

彼の創造主であるウルベルトとはリアルの事情から折り合いがつかなかった。そもそもがロールプレイの方向性が百八十度違ったのだから無理らかぬことだが、こうしてナザリックが現実となった今、デミウルゴスとの関係も考えずにはいられない。

下手をすればたち・みーが原因でデミウルゴスがナザリックを裏切るという可能性も大いにあり得るのだ。ナザリックの中でも切れる者のデミウルゴスが裏切る事態になれば、それは大いなる損失を生み出す。

(あとでモモンガさんに相談しよう……)

そう考えるたち・みーの前で、モモンガが階層守護者と言葉を交わしている。

そして、しばらくしたところで周囲の偵察に出ていたセバスが現れた。一部の隙もない、執事の鏡のような存在。たち・みーはああでもないこうでもないと彼を設定したときのことを懐かしく思い返していた。完璧な執事として設定したのだから、その完璧な仕草も納得だ。

そのセバスは闘技場に入つてすぐ、口を開いた。

「モモンガ様、大変遅くなって申し……っ!？」

あろうことか。

完璧な執事として設定されているはずのセバスが、モモンガに対する挨拶の途中で言葉を切るといふ大失態を犯した。

その毅然とした表情は完全に崩れ、驚愕の表情をたち・みーという存在に向けている。モモンガに対する不敬とも取られかねない行為だ。実際、守護者たちから微かな殺気が立ち昇る。が、その殺気にはどうにも迷いがあった。

おそらくは自分に置き換えて考えているのだろう。もし自分たちの造物主が突然目の前に現れて、彼と同じ反応をしないでいる自信がないのだ。気持ちはよくわかる、という奴である。

たっち・みーは自分からセバスに何か言葉をかけてやるべきかと迷う。

だが、たっち・みーが迷っている間に、セバスは表情を改めると、常のように優雅な物腰で近づいてきて、静かに膝をついた。

「大変失礼いたしました。モモンガ様。たっち・みー様、無事なご帰還をお祝い申し上げます」

モモンガはあえて答えず、たっち・みーに発言を譲った。その方がいいだろうという判断だろう。その配慮に甘えて、たっち・みーはセバスに声をかけた。

「ああ、ご苦労。セバス」

色んなことに対する思いを込めて、たっち・みーは労いの言葉をかけた。

「勿体なきお言葉……っ」

ぐっ、と言葉に詰まったように、セバスの語尾は潰れた。ふと、たっち・みーは地面に着いたセバスの手の手袋にかすかに血が滲んだのを見て、冷や汗を浮かべる。

(あ、あれ？ もしかして……セバス、ものすごく怒ってる!?)

手袋をしているのに、拳の握りしめすぎで血がにじむなど、半端なことではない。捨てていってしまった自分を恨んでいるのかと本気で焦った。

セバスの様子に気づいているのかいないのか、モモンガがセバスに尋ねる。

「セバス、お前の見たことを報告してくれ」

「はっ。まず、ナザリックの周辺ですが——」

沼地から草原が変わってしまっていることや、知的生命体が確認できなかつたことなど、セバスは淡々と報告をしていく。有能な執事らしい報告を聞きながら、たっち・みーは本気でどうしたらセバスに許してもらえるか頭をフル回転させていた。

その間に確認や指示が終わり、モモンガは満足したように頷く。

「……さて、ひとまずはこのくらいか。各員、無理をしないように動くように。それから……最後に皆に聞いておきたいことがある。各員

にとつて、私とたちさんはどのような存在だ？」

その問いかけを耳にして、たち・みーは思わず「それを訊くの？」
と思つたが、しかしすぐにそれは確かに聞いておくべきことである、
と思ひ直した。守護者たちが自分たちをどんな風に認識しているか
をきちんと把握しておかなければ、彼らに幻滅されて裏切られる可
能性があるからだ。少々直接的に聞きすぎな気もするが、彼らがどうい
うことを自分たちに望んでいるのか、少しでも把握するきっかけにな
るだろう。

「まずはシャルティア」

「モモンガ様は美の結晶。たち・みー様は強さの結晶。いずれも輝
きの方向こそ違えど、まさにこの世界で最も美しく、お強いお方であ
ります」

「——コキュートス」

「守護者各員ヨリモ強者アアリ、マサニナザリック地下大墳墓ノ絶対
ナル支配者ニ相応シキ方々カト」

「——アウラ」

「モモンガ様は慈悲深く、深い配慮に優れたお方です。たち・みー様
は至高なる力を正しく振るえる熟慮に満ちたお方です」

「——マーレ」

「お、お二人ともすごく優しい方だと思ひます」

「——デミウルゴス」

「モモンガ様は賢明な判断力と、瞬時に実行される行動力も有された
方。たち・みー様は信念を貫き通す強固な意志力と、それを実行す
る胆力に満ちた方です」

「——セバス」

「モモンガ様は至高の方々の統括に就任されていた方。最後まで私た
ちを見放さず残っていただけ慈悲深き方です。たち・みー様は私
の敬愛する創造主であり、再びこの地に戻ってきてくださった恩情溢
れる方です」

「最後になつたが、アルベド」

「モモンガ様は至高の方々の最高責任者。たち・みー様は至高の

方々で随一の戦闘能力を有する方。お二方とも最高の主人と呼ぶのに相応しいお方……そして、お二人とも私の愛しい方です！」

守護者全員から向けられる、嘘のない、ただただ純粋な高評価。

モモンガは鷹揚に頷いた。内心は、ともあれ。

「……なるほど、各員の考えはよくわかった。これからも我らのために忠義に励め」

『たっちさん。円卓の間に転移しましょう』

『了解です』

そういつてモモンガとたっち・みーは同時に円卓の間に移動する。

そして、モモンガは壁に手をつけて深く息を吐いた。

「疲れた……え。なにあいつら、あの高評価」

「いや……これは正直、予想以上でしたね……みんな目が本気でした」
本気と書いて、マジ。

それだけの高評価を崩さないようにするにはどうしたらいいのか、モモンガもたっち・みーも思わず途方に暮れてしまう。

そして、たっち・みーにはそれだけではなく、頭を抱えなくなるようなことがひとつあった。

「……それにしてもセバスはどうしたものでしょうか」

ワールドチャンピオン、ユグドラシルの世界でも屈指の実力者であるたっち・みーが、あまりにも途方に暮れた声を出すのを、モモンガは不思議そうに見た。

「……？ どうしたもののか、とは？」

「確実に怒ってますよね……私だって親に見捨てられたら怒りますよ……皆の前では敬愛する造物主だと言ってくれましたけど……どうしたら許してもらえるのか……」

「……………」

モモンガは沈黙を保った。その反応にたっち・みーはやはり自分の想像はあっていると確信する。

(モモンガさんもおいていかれた側だもん……セバスの気持ちはよくわかるということか……)

ごほん、とモモンガは意味のない咳払いをする。

「と、とにかく……私たちは彼らが望むように、上位者として彼らに接する必要がありそうです。そうしている間は反乱などは起きないでしょう」

「そうですね……幻滅されないようにしないと……いや、もう私はされてるか……ふふふ……」

自虐に走るたち・みーなどめつたに見られるものではない。

モモンガは目に見えた仕草で慌てた様子だった。

「……えーと。たちさん。お疲れなのでは？ 一度お休みになった方がいいかと。休んだらいい考えも浮かんでくるかもしれないよ？」

「ええ……すみません。そうさせていただきます……色々と決めなければならぬこともあるのに……申し訳ない……」

「大丈夫ですよ。ひとまずナザリックの隠蔽作業が終わらないと動きようがないですし、色々整理して考える時間はいずれにしても必要ですからね」

「はい……ありがとうございます」

本当に頼りになるギルドマスターだと思いつつ、たち・みーは第九階層の自分の部屋へと向かった。

その背中を、笑っているような困っているような、何とも言えない微妙な気持ちでモモンガは見送るのだった。

カルネ村とギルド最大の危機

ミラー・オブ・リモート・ビューイング
遠隔視の鏡。

離れた場所の映像を映し出すだけのマジックアイテムだ。ゲーム上では対策の取られやすさから微妙アイテムのひとつとして数えられていたが、こうしてまったく地理が不明な地に来てしまったときは非常に役に立つアイテムとなっていた。モモンガはこれを用いた警戒網を作成しようと考えていた。無論、ナザリックの配下たちに命じて物理的な警戒網を敷いてはいるが、手段はひとつでも多い方が不足の事態にも対処しやすくなる。

しかし、問題はゲームの時と違って、操作方法が表示されないうえに説明書も存在しないため、身振り手振りの手探りでこの鏡の操作法を一から調べなければならぬということだった。

「ふむふむ……これが右移動……こつちで回転……」

骸骨が何かのパントマイムをしているような、奇妙な光景が展開されている。その背後にはアルベドがとても慈愛の溢れる目をして立っており、モモンガの作業を見つめていた。

そんな彼の部屋の扉を、誰かがノックした。モモンガが手を止める。

「誰だ？」

「モモンガさん。たつちです。入ってもいいですか？」

ガタツ、とモモンガは思わず立ち上がった。

「どうぞお入りください！」

そう声をかけた時には、アルベドが扉の前に移動していて、扉を内側から開いた。

「失礼します。……ああ、ありがとう。アルベド」

開いた部屋の扉を潜り抜け、たつち・みーが部屋の中に入ってくる。

現れたたつち・みーに向かって、モモンガは相手を崩した。骨の体であるゆえ、それはあくまでもたつち・みーがオーラで感じただけにすぎなかったが、モモンガがたつち・みーの訪問を喜んでるのは間違いない。

「おはようございます、たちさん。昨日はよく眠れましたか？」

「モモンガさん、おはようございます。……そうですね。十分休めましたよ」

そういうたち・みーの言葉は若干歯切れが悪い。その理由を考えたモモンガは、すぐにその理由を察した。睡眠のとれない状態になっている自分に配慮したのだ。

たち・みーは逆にモモンガに尋ねる。

「モモンガさんはあれからずっと作業していたんですか？ 休まなくて大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫です。アンデッドに疲労というバッドステータスは存在しませんから」

「……しかし、精神的にはどうでしょう。休めるときは眠れなくても横になった方がよいかもしれませんよ。休息というのは精神的にも必要なものですし」

睡眠はとれなくても、気持ちを落ち着かせるという時間は必要はなはずだから。

「……そうですね。不都合を感じなかったのでそうしていませんでした……気がつけます」

「あれからなにか進展はありましたか？」

言いつつ、たち・みーはモモンガの傍に移動する。モモンガは自分の隣に椅子を作り出して、それをたち・みーに薦めながら、あれから起きたことを説明した。

「あの後、私も気晴らしに夜の散歩にでかけました。……あ、最初は一人のつもりだったんですが、デミウルゴスに見つかってしまいました……彼が護衛についていたので心配しないでください」

一人で外に出るつもりだった、という言葉聞き、たち・みーは少し顔を顰める。

「気を付けてくださいね。外には100レベルを超える敵がゴロゴロしているのかもしれないですから……次に外に出るときは一緒に行きましょう」

「おつ、未開の地をいざ冒険！ですね。ぜひそうしましょう！」

モモンガはそのたち・みーの発想が気に入ったのか、嬉々としていた。

「昨日の散歩ではナザリック上空を飛んで夜空を眺めただけで、外の世界はほとんど見てないのでご安心ください。ああ、そうそう！ その時の夜空がものすごくきれいで！ あれは一見の価値ありですよ！ ブルー・プラネットさんが作った第六階層の夜空も素晴らしいんですけど、この世界の空はそれとはまた別の美しさがあって……」

興奮気味に話してくれるモモンガの言葉を、たち・みーは思わず自分も楽しくなりながら聞いていた。

十分な経緯の説明を受け、たち・みーは部屋に置かれている鏡を見る。

「なるほど……それで、その遠隔視の鏡の操作方法を調べていた、というわけですか」

モモンガは頷きつつ、その鏡に向き直った。

「ええ。でも、これがなかなかの難物でして……視点移動の方法はこれが右移動、こつちで左……こうすれば視点が合っている場所をぐるりと全方位から見れる……という感じでわかってきたんですが、肝心の視点を俯瞰にして引く方法がわからなくて……もう、お手上げですよ」

外国人がそうするように、オーバーリアクションでモモンガが両手をあげる。

すると、表示されていた画面が程よく引かれた。

思わず、モモンガとたち・みーは視線を交わす。

「……なんか、できちゃいました」

「……えーと、おめでとうございました？」

互いに間の抜けたやりとりが面白く、ふたりして噴き出してしまった。しばし穏やかに笑い合う。

モモンガが昔のように楽しそうにしているという事実感動したアルベドが、目の端に浮かんだ涙をこっそり拭いたのにも気づかないほどに、ふたりはしばし楽しく笑い合った。

ひとしきり笑った後、モモンガは改めて遠隔視の鏡に向き直る。

「さて、ともあれ、これで周辺の地理が探索しやすくなりましたね。どこかに人里は……と」

まずはこちらの世界にはどのような住民がいるのか、人はいるのか、いるとしたら強さはどれくらいで、文化レベルや魔法の技術はいかようなものなのか、ということ調べてなければならぬ。

「自給自足はできなくはないと思いますが……誰もいない世界だったらどうします?」

安全という意味ではそれ以上ない世界と言えるが、そんな生物が死に絶えたような世界に住みたいとは思えない。

「あんまり嬉しくありませんね……せめて、言葉を交わせる生物くらいはいて欲しいものです」

「NPCたちがいてくれるだけ、誰もいなかったとしても、マシですけどね……」

そう言ったたち・みーは、またセバスのことを思い出したのか若干雰囲気暗くなる。眠りにつく前に色々考えたが、結局いい案は思い浮かばなかった。

モモンガはそのことを察したのか、慰めるように言う。

「いま、セバスは率先して大墳墓周辺の調査に乗り出してくれています。数日したら帰ってくる予定です。戻ってきたら、一度一対一で話すといいと思いますよ」

そのことを聞いたたち・みーは、「ああ、自分からできる限り離れたかったのだな」と解釈した。そう考えると、一度休んで払ったはずの陰鬱な気分が再び襲ってくる。

モモンガはたち・みーの気配の変化を敏感に察して、重ねて何か言おうとした。

しかし。

「……おや?」

ふと、遠隔視の鏡の画面に揺らめくものが映って、その意識が持つて行かれる。

そこに焦点を合わせ、拡大した。

「これは……火?」

たっち・みーも横から画面を覗き込んだ。目を細めて、唸る。

「ここはどうやら村、のようですが……火事でしょうか？」

「なにか様子がおかしいですね」

ズームした画面に映し出された光景は、凄惨なものだった。

騎士のような格好をした男たちが、村人を追い立て、殺している。老若男女問わず、とにかく動くものを皆殺しにしようとしている。四肢の腱を切り裂かれ、芋虫のように這いずることしかできなくなった青年を、騎士が4人がかりで踏んで蹴っていた。青年はすでにこと切れているのに、執拗に何度も足を振り下ろしている。周りの光景から察するに、よりひどい殺され方をした者も多数いるようだ。

それは虐殺という言葉が相応しい地獄絵図だった。

「……ちっー！」

モモンガは嫌なものを見た、とばかりにさっさと視点を変更しそうになって、愕然とした様子で動きを止める。そして、恐る恐るという様子で隣の席に座る男を見た。

「……たっちさん」

「なんででしょうか、モモンガさん」

思った以上に、平静で冷たい声。

モモンガは若干の違和感を感じつつも、素直に口を開いた。

「たっちさん。正直に言います。私は人間が殺されている……一方的な虐殺を受けているところを見ても、何も感じません。ここに来る前であつたら、卒倒してもおかしくない光景なのに」

「……」

「異形種に……アンデッドになってしまったから、なんででしょうか……精神構造も変化してしまっている様子で、まるで、虫の戦いを見ているような気持ちで……たっち、さん？」

不安そうなモモンガの呼びかけに、たっち・みーは深く息を吐く。

それが精神を落ち着けるためのものだどモモンガは察する。

「私も正直に言います、モモンガさん。この光景を見て、私はいま非常に気分が悪いです」

一瞬、モモンガは体を固くした。たっち・みーはそれに気づきなが

らも、言葉が続ける。

「でもそれは人間が殺されているから……ではありません。私が不快に思っているのは、明らかに非戦闘員であり、剣も魔法も使っていない相手を、翩り殺すようにしている行為そのものに対してです」

それは彼にとつて、ある光景を思い起こさせた。

まだレベルも何も極まっていけない、やろうと思えば簡単にPKできる相手を、あえて攻撃力の低い技や魔法を使って、徐々に追い詰めるように、翩るようにして倒していた悪質なPKプレイヤーたちの行為。そんな存在のせいでユグドラシルをやめたという話を何度聞いたことか。

そしてなにより。

それはかつてのモモンガを攻撃したPKたちと同じ行為だった。

その時にも覚えた憤怒の感情が、胸中で渦巻いている。

たっち・みーは静かに立ち上がった。モモンガをして、その身にまとう怒りのオーラは圧力を感じさせるほどに強いものだった。

「……助けに、行くんですか?」

「彼らには彼らの事情があるのかもしれませんが。実は村人の方が悪人で、口に出すのも憚れるような悪影響を国にばらまいたのかもしれない。そんな悪逆の大罪人を騎士たちは誅殺しに来ているだけなのかもしれません」

殺戮を楽しんでいるようにしか見えない騎士たちがそんな存在であるとは思えなかったが。

「それに、相手の戦闘力は不明で、もしかすると私たちなんて一蹴できしてしまう実力かもしれません。この世界の基準がわからないのですから、そういう可能性があるのはわかっています」

だが、それでも。

「誰かが困っていたら、助けるのは当たり前」

強く、たっち・みーは断言した。

その言葉にモモンガはかすかに微笑む。

「……了解です。それでこそ、たっちさんです。いずれにせよ、いつかはこの世界における自分たちの戦闘力を測らなければならぬわけ

ですからね。……アルベド！」

「はっ！」

「至急、ナザリツクの警戒レベルを最高レベルに引き上げろ。ここの守護はセバスに任せる。至急呼び戻せ。お前はセバスに指示を伝達後、完全武装で村まで追いかけてこい。それから後詰の準備だ。この村に——」

モモンガが次々指示を出している中、遠隔視の鏡に、幼い二人の少女が騎士に追われている光景が映し出された。姉らしき年上の少女が、兵士を殴り飛ばして逃げようと試みている。しかし、当然ながら兵士には大して効いておらず、逆に激昂させてしまい、妹を連れて逃げようとした少女は背中を斬られてしまっていた。

(もう時間がない——)

たち・みーはアイテムボックスの中から〈転移門〉の魔法が封じられた魔封じの水晶を取り出した。たち・みーは行ったことのある場所や直接目にした場所に瞬時に移動できる〈転移門〉の魔法を習得できる職業を取っていないが、そのアイテムを使えばたち・みーにも〈転移門〉が使用できる。

「すみませんモモンガさん！ 先に行きます！」

「えっ。たちちさん!? ちよつと待っ——」

最後まで聞かず、たち・みーは魔封じの水晶を使用して、開いた〈転移門〉に飛び込んだ。

妹をかばうように抱きしめた村娘に向けて、騎士の剣が振り下ろされる。

〈転移門〉から飛び出したたち・みーは、娘たちと騎士の間に自分の剣を突き出し、騎士の剣を受け止めた。いや、正確には受け止めようとした。

だが騎士の剣は、たち・みーの剣と触れ合ったところから、まるでバターか何かのようにすっぱりと両断されてしまった。斬れてしまったことで、その斬れたところから先の刃が重力に従って村娘の上に落ちそうになる。

予想外の現象にたち・みーは本気で慌てる。相手の攻撃が重い、

あるいは強いという方面では警戒していたものの、刃と刃を合わせた結果、相手の剣があつさり切断されるなどということはさすがに想像していなかった。

(まづいつー！)

咄嗟の判断で、たっち・みーはもう片方の手に持った盾を使って、斬り飛ばされた騎士の切っ先を弾き飛ばす。これも正確には弾き飛ばそうとした、だった。

バギャンツ、と大きな音がして刃が粉々になってしまったのだ。粉々に飛び散った剣の欠片が、陽光を反射してキラキラと輝く。ただ弾き飛ばそうとして消し飛ばしてしまったが、なんとか村娘たちには傷をつけずに済んだようだ。

ほっ、とたっち・みーが安堵する。とつさのことで目の前にいる敵のことを忘れていたが、相手も何が起こったのかわからず混乱しているようだった。たっちは棒立ちの騎士に向かって剣を振るうべきか、武器を放棄して村娘たちを抱えて下がるべきか迷った。

一瞬、奇妙な間が生まれる。

「たっちさん！」

その時、たっちを追って〈転移門〉から飛び出してきたモモンガが、即座に自分の一番得意な魔法を発動させる。

「〈心臓掌握〉！」

対象を即死させる第九位階魔法だ。それは仮に抵抗されても意識を朦朧させるといふ副次効果がある。初手にそれを選んだのは、モモンガが一番得意な戦法だと、たっち・みーもよく知っているからだろう。もしもそれがこの騎士に利かなければ、本気で逃走する方針に切り替えなければならぬ。

しかし、騎士はその魔法に対して抵抗することができず、心臓を握りつぶされ、糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

『効いた……！ よかった！ たっちさん。これなら少し余裕を見て実験が出来そうです』

人が死んだ、いや、殺したにも関わらず、モモンガは何とも思っていないようだった。そしてそれは、たっち・みーも同じである。目の

前で殺人が起きたというのに、心に動揺が一切生まれえない。非道な行為をしていた彼らに怒りを抱いていると言つても、異常なことだった。

しかしあえていまはそのことを考えないようにする。

『では、次は私が力を確かめてみましょう。モモンガさん、見守っててください』

そういうたつち・みーの視線の先では、もう一人の騎士が突如現れた。たつち・みーとモモンガを見て、息を呑んでいた。同僚が突然死んだことに動揺しているらしい。

「ひいいいつ、な、なんだてめえらはあ!？」

たつち・みーは自分の持つ剣と盾を構え直し、一歩、その騎士に向かって歩みを進める。

「か弱い女子供を追い掛け回して、楽しかったか？」

言葉に込められた怒りの圧力に思わず後ずさる騎士。

それに対し、たつち・みーは淡々と宣告する。

「剣を構えろ。せめてのもの慈悲だ。騎士として殺してやる」

相手のことを舐めてはいなかった。モモンガの魔法には抵抗できなかったし、剣があっさり碎かれる程度の強度しか持っていないことも確認していた。それでも何かしら脅威となる能力を持っているかもしれない。

ゆえに、たつち・みーは全力を振るうことにした。レベルがわかっていた炎の精霊には出さなかった、本気を。

前衛として、アインズ・ウール・ゴウン最強の存在として、ワールドチャンピオンとして上り詰めた全力を。

ありとあらゆる特殊技術をあますことなくすべて使用し、臨戦態勢になる。

ジリツ、とたつち・みーの周りの空間が音を立てて歪んだ。数ある特殊技術のうちの一つへ威圧Vは本来ボス戦で登場する取り巻きの行動を牽制するための特殊技術だ。しかしワールドチャンピオンという職業にあるたつち・みーが使うそれは、並のダンジョンのボスならば容易く怯ませ、初手の行動を遅らせるという域に達している。

そんなたっち・みーの〈威圧V〉を真正面から受けた騎士は。

「ひ、ひいいいいいっつ!!」

無様な悲鳴を上げ、手にしていた剣を放り出して逃げ出した。

その騎士の行動に、たっち・みーは本気の不快感を覚える。

しかし、逃走を選んだ騎士を責めるのは可哀想というものだろう。

彼の状況をわかりやすく言うならば、目の前に突然巨大ロボが現れて、理知的な言葉で「剣を構えろ」と言ってきた。だがそのあとでそのロボが全身に満載された重火器やらブースターやら、全ての武装がいまにも発射されそうな状態になったようなものだ。

果たして、どれほどの人間がその場から逃げ出さずにいられるだろうか。

無論、真に騎士の心を持つ者が背後に守るべきものを背負っているのならば、それでもなお立ち向かったかもしれない。だが、その時 たっち・みーと相対していたのは、虐殺を喜んで行い、自分よりも弱い者を矜り殺すことに快感を得るような男だった。

自分が絶対に敵わないと確信できる存在に対して、立ち向かう勇氣は持ちようがなかった。

たっち・みーの爆発的な踏み込み。しかし、その一步目の予兆は特殊技術で消され、気が付けばたっち・みーの体は逃げた騎士のすぐ背後まで迫っていた。

騎士が振り返る暇もない。

容赦なく振るわれた剣が、空気を薙ぐように男の体を薙ぐ。あまりに綺麗に切断されたためか、男の首は何が起きたのかわからないという様子でしばらくの間ぴくぴくと眼球を動かしていた。

人を斬ったはずのたっち・みーの剣には、曇りひとつなかった。

「……愚か者が。騎士として死ねるチャンスだったのに」

やれやれ、とたっち・みーはため息を吐いて、モモンガの方へと歩み寄った。

「防御はわかりませんが、攻撃に関しては問題なさそうです。しかし、あれだけのスキルを使う必要はなかったですね。基礎戦闘能力だけでも十分なんとかかなりそうです」

「みたいですね。でも、もう少し確かめてみましょう。——中位アンデッド作成、死の騎士」

そういつてモモンガがアンデッド作成という特殊技術を持ちいると、黒い靄のようなものが溢れ、騎士の死体にとりついた。死体がゆらりと立ち上がり、その体の中からしみ出した黒いタール状の何かが巨大な体を形作っていく。

「げっ、アンデッド作成の特殊技術はこんな風になるんだ……」

「この世界では色々と効果が変わっているようですね」

数秒後、そこに現れたのは身長二メートルを超える巨大な死霊騎士だった。デスナイトというそのアンデッドに対し、モモンガは命令を下す。

「デスナイトよ。この村を襲っている、その鎧と同じものを着た者を殺せ」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

生者すべてを憎むというような雄叫びをあげ、デスナイトが駆け出していく。

モモンガとたち・みー
守るべき対象を置いて。

あまりに自然に駆けだされたため、止めるタイミングを逃した手をひらひらと揺らしながら、モモンガは啞然とした声をあげた。

「えー……盾になるモンスターが、守る対象を置いていつてどうするよ……命じたのは俺だけだよ……」

その言葉と仕草、半開きになった口が必要以上にコミカルに感じられて、たち・みーは思わず吹き出してしまった。モモンガの顔が自分の方を向くのを見て、たち・みーは慌てて咳払いをして誤魔化す。「こほん、失礼。……どうやら、使役するモンスターへの命令の自由度がかなり広がっているみたいですね。必ずHPが1残るというスキルや、100分で消えてしまう仕様はどうなっているのでしょうかね」「そうですね……実験しなければならぬことはたくさんありそうです」

そういつて二人で話し合っていると、開きっぱなしになっていた〈転移門〉から全身鎧に身を包んだアルベドが現れた。

「モモンガ様、たち・みー様。準備に時間がかかってしまい、申し訳ありません」

「いや、いいタイミングだ。アルベド」

「すべての伝達は済んでおります。ご指示を」

「うむ。いま生み出したデスナイトがどうなるかも踏まえ、実験を行う。と、その前に……怪我をしているようだな」

そう言っつてモモンガは言っつて、助けた姉妹にポーションを差し出そうとした。しかし、たち・みーが寸前でその肩を掴んで、それを止める。

「モモンガさん！ 彼女たちが怯えています。自分のアバターの外見を思い出してください」

「え……？ あ、そうか」

指摘されればすぐ気づく。リアルで骸骨が喋りかけてきたら、いくら命を助けてくれた相手ではあっても怖い。いまのところモモンガもたち・みーも騎士を一蹴しただけで、ろくに彼女たちに声をかけていないのだから、余計にだ。

モモンガは手に持ったポーションをたち・みーに差し出す。

「では、たちさんが渡してあげてください。あなたの方がまだ怖くないでしょうから」

「……そうですね。わかりました」

モモンガからポーションを受け取りつつ、たち・みーは姉妹に近づいた。びくり、と二人が体を震わせるが、たち・みーはあえて気にしない。

片膝について、視線の高さを可能な限り揃える。子供を相手にする際には当たり前前の配慮で、子育ての経験のあるたち・みーはそれを自然に行うことができていた。

「もう大丈夫だ。これは治癒のポーション。傷が治るから、飲みなさい」

たち・みーの種族は異形種ではあるが、全身に鎧を着こんでいることもあって、見様によってはちよつと変わった鎧という認識でいられるかもしれない。果たして姉妹がどう思ったかは不明だが、なんと

か安心させ、信じてもらうことはできたようだった。

ポーシオンを飲みほして傷が癒えた村娘は、信じられない奇跡を見たとばかりに驚いている。その元気そうな様子に満足し、たち・みーは離れる。

そこに、モモンガが防御用の魔法を張り、さらには小鬼將軍の角笛というゴブリンを召喚して戦わせることができるアイテムまで与えた。

「では、村を救いにいくとしようか。我が友よ」

姉妹の前だからか、やけに大仰な言葉でモモンガがたち・みーを促す。たち・みーは密かに苦笑しつつ、頷いてその背後に続いた。

「あ、あの！ 助けてくださってありがとうございます！」

そんな二人に、助けられた村娘が声をかけた。

「お二人のお名前は……なんとおっしゃるんですか？」

その言葉に、視線を交わしたモモンガとたち・みーは、誇りを持つて応える。

「我が名を知るがいい。我こそが、アインズ・ウール・ゴウンの支配者、モモンガ」

「同じくアインズ・ウール・ゴウンの騎士、たち・みーだ」

去っていく二人の背に、娘たちは羨望に満ちた眼差しを向けていた。

デスナイトが騎士たちの相手を適当にしている間に、モモンガとたち・みーは村の周囲に展開していた別働隊で実験を行っていた。

「さて……こんなところか」

自分の体に突き刺さっていた剣を抜き取り、傷一つないことを確認したモモンガが呟く。

たち・みーはその傷一つない純銀の鎧にこびりついた人の血肉をぱっと払った。

「この村に攻めてきている奴らが特別弱いのかどうかはわかりませんが、いまのところ脅威になりそうな敵は確認できませんね。防御力が低い代わりに攻撃力が高いのかと思えば、まったくそんなことはあり

「ませんでしたし」

「派手に暴れているデスナイト程度がいまだに破壊されていないということはそうなのでしょね。さて……」

モモンガはアイテムボックスの中から無骨なガントレットを取り出した。それを両手にはめて骨の体を隠す。

「やれやれ。スケルトンのようなアンデッドを選択するプレイヤーは、ユグドラシルじゃ珍しくなかったんだけどなあ」

見目はともかく、自然と付与される様々な状態異常を無効する能力はゲーム的に魅力で、選ぶプレイヤーは比較的多かった。だから今まで気にしていなかったのだが、こちらの世界に住む者が怯えるというのなら、対策をしなければならない。

「私も頭部は隠さないといけませんね。一時的に人の姿を取ることはできますが……ずっとへ人化」の特殊技術を使い続けるのはしんどそうですし、頭まで鎧にしておきます」

元々が鎧っぽい外見の頭部であるため、鎧の上に鎧を着ているような違和感はあるのだが、仕方ない。視界を確保するスリットは細く、中がうかがえないものを選んだ。普通なら視界が狭くなつて困るところだが、特殊技術を用れば視界に頼らなくとも済む。

「たっちさんが顔を隠すと、いよいよただの聖騎士にしか見えなくなりますね」

モモンガはそう言いつつ、アイテムボックスの中から一枚の仮面を取り出す。顔を隠すためのアイテムだろう。たっち・みーが見たことのない仮面だった。

「おや？ 見たことのない仮面ですね。モモンガさん、その仮面はどういう効果が……あつ」

聞きかけてから、たっち・みーは思い出す。ユグドラシルで、いつだったか強制的に配られた呪いのアイテムの噂を。クリスマスイブの夜に既定の時間以上ログインしていると強制的に入手してしまうという、呪われたアイテム。

嫉妬マスク。

モモンガは無言のまま、その怒つていても笑つていても判断の

つかない仮面を装着する。そして、じつとたち・みーを見つめる。その奥にはそもそも眼球すらないはずなのに、たち・みーはその仮面の奥からはつきりとした嫉妬の視線が自分に向けられているのを感じていた。

「……本当に、ごめんなさい」

深々とたち・みーが頭を下げる。

「……いえ……いいんですよ。たちさんがリア充なのは前から知ってますし。持ってるわけじゃないですよね」

モモンガはそつと目を逸らした。

ひよつとしたら。

この二人が唯一決別しかけたのは、この瞬間だったかもしれない。

王国最強の戦士長ガゼフ

デスナイトに蹂躪させた騎士たちの生き残りを脅しつけてから逃がした後、モモンガとたち・みーは村長から村を助けた対価として、この世界の情報を聞き出していた。

『助けた対価として自然に情報を引き出すことができよかったです』

『……別に、対価を求めて助けたわけではなかったんですけどね』

『まあまあ、たちちさん。私も別にそれで構わなかったんですが、無償では向こうが安心できなかったみたいなので仕方ないですよ。ただの建前です』

『ええ。そうですね。……すみません。いまのは私の我儘でした』

情報はどうしたって必要なもので、それを安全に、かつ友好的に手に入れられるというのなら、それはたちち・みーとてそうすることにやぶさかではない。仮に対価とせず、普通に聞いたとしても、結局は同じ意味合いになってしまっていただろう。

たちち・みーは交渉ごとはモモンガに任せた方がいいような気がしていた。

途中、騎士たちに殺された者たちの葬儀で、話し合いは一度中断された。

助けた村娘たちの両親も亡くなっていたらしく、二人は墓の前で泣き崩れている。その様子を見て、モモンガは何も感じていなかったようだが、たちち・みーは少しだけ胸の奥に痛みを感じていた。

二人は——正確にはアルベドもいるので三人だが——村人たちから離れたところに立っているため、会話を村人に聞かれる心配はない。しかし、モモンガはあえて〈伝言〉を使ってたちち・みーに話しかけた。

『たちちさん。あの子たちの両親を蘇生させようとは言わないんですか？』

『……どうしてそんなことを聞くんですか？』

『蘇生の短杖はたくさんありますから、やろうと思えば全員を蘇らせ

ることはできません。正直な話、私は村人を蘇らせることに関してデメリットの方が大きいと感じていますので、状況に変化があるまではすべきではないと思っております』

合理的な判断。

それはたっち・みーも認める内容だった。

『……そうですね。モモンガさんが正しいと思います』

『ですが、たっちさんが蘇らせたいというのなら、そうするのはやぶさかではありませんよ？ それならそれで、蘇生ができるかどうか、この世界ではどういう形で蘇生されるのか、どこで復活するのか、死体の傷はどうなるのか、記憶は残っているのか、記憶が消えるとしたらどこまで消えているのか、復活に伴う能力減退などが生じるのか……という実験にはなるわけですし、まったく利益のない行為というわけでもありません』

モモンガはたっち・みーに配慮してくれているのだと、言われている彼自身理解できた。

理解できたからこそ、たっち・みーは静かに自分の考えを口にする。『……確かに、村の者たちを全員救うことはできるでしょう。けれど、すべてを救うなんていう考えは傲慢です。それにそもそも、すべての殺された者たちを片っ端から助けていくのが正しいのかというと、それは違うと思います』

たっち・みーがすべてを助けようとしたところで、一人の存在である以上限界は生じる。そうなれば助けられたものと助けられなかったものの間には不公平な感覚が生じ、それがまた新たな争いの火種となるかもしれない。

目の前で困っている人がいたら助ける、というのはたっち・みーにとって当たり前のことだったが、それも過ぎれば、その人物を助けを求めてばかりの暗愚の輩に貶めてしまう危険があることもわかっていた。

ただ助けを求めるのではなく、その者なりに必死に足掻いて抗って、誰かに助けてもらわなければどうしようもないという状況でもなければ、助ける意味も価値はないと思っている。

その点、先ほどの姉妹はその条件をしつかりと満たしていた。生きようと死力を尽くしていた。だから多少危険を冒してまで助けようと思ったのだ。

しかしその先、両親を蘇らせるところまでいくと、そこまでは過剰に過ぎかねないという想いがある。

彼女たちの両親だけを蘇生するのは不公平だから村人も全員……この村だけ蘇生するのは不公平だからここまで蹂躪されたであろう近隣の村もすべて……きりのない話だ。

いくらたつち・みーでも、そこまではできないということを理解している。

対立していたウルベルトからは皮肉を込めて『聖人君子』と呼ばれたこともあるたつち・みーだが、彼自身はそこまで自分が立派なものではないと思っている。

自分の手で助けられるものは、ほんの一握りでしかないのだから。

『……先に、村長さんの家に戻っておきますね』

そう言つて墓地から背を向け、去つていくたつち・みーの後を、モモンガも追いかけた。

その後、エイトエツジ・アサシンが現れたことで、四〇〇近い配下がカルネ村を襲撃のために取り囲んでいることを知つて、呆れたモモンガとたつち・みーがその大部分を撤収させている間にも、村人たちが行う葬儀は粛々と進行していた。

葬儀に中断されつつも進んだ情報提供を終え、モモンガとたつち・みーとアルベドは村の中を歩いていた。たまたま目の前を通りかかった村人が頭を下げるのを、モモンガは鷹揚に、たつち・みーは誠実に受け取るのに対し、アルベドはまるで汚いものを見たかのような様子で目を背けた。

「……アルベド、人間は嫌いか？」

モモンガの問いに対し、アルベドは普段の声とは比べ物にならないくらい低く吐き捨てるような声で応える。

「脆弱な生き物。下等生物。虫のように踏みつぶしたらどれほど綺麗

になることでしょうか」

「……その考えを捨てろとは言わんが、この村では冷静に、優しく振る舞え。演技というのも重要だぞ」

実際にアルベド達に対して演技をしているモモンガがいうと、しみじみとしてしまう言葉だった。

たっち・みーはそれに付け加えて言う。

「アルベド、存在の価値は強さ弱さだけで決まるものではない。表面的な強弱で物事を判断すると、痛い目を見ることになるし、ナザリツクが不利益を被る結果になることもあるかもしれない。そこは気を付けて行動するんだよ」

思わず語尾が、子供に対して道理を説く親のようになってしまった。ナザリツクのNPCたちはすべてギルドメンバーの子供のようなものと考えれば、ある意味間違っではない態度かもしれないが。「はっ！ 承知いたしました」

アルベドのいい返事を聞いて、たっち・みーは満足げに頷く。しかし同時に、ナザリツクの者達の苛烈な倫理観に危機感を覚えていた。(元々が異形種の救済のために作られたギルドだからな。はつきりとギルドの加入条件に「異形種であること」があることもあるんだろうけど……その結果、彼女のような価値観になるのは無理からぬことか……)

彼女たちが悪いわけではない。そもその根源を辿るなら、異形種を迫害してPKをするような人間の一面に問題があるのだから。しかし今後のことを考えると、じっくりとでも意識改革を行う必要があるかもしれないとたっち・みーは考えていた。別に親人派になる必要はないが、無暗に人間を侮らず、必要以上に人間を嗜虐しない程度にはしなければならない。

モモンガはぐるりと村を見渡して、ここでやるべきことは終わったと判断したようだった。

「それではナザリツクに帰りますか？ たっちさん」

「そうですね……ん？ いや、ちよつと待つてください」

遠くで険しい顔をした村長たちが話をしているのをたっち・みーが

見つけ、そちらに歩いていく。モモンガはまた厄介ごとかと思いつつ、その後ろに続いた。

「村長殿、どうされた？」

「おお、 たっち様。 モモンガ様。 それが、 どうも村に騎士の格好をして、馬に乗った一団が近づいて来ているそうでした……」

その顔にはまた騎士が襲撃しに来たのではないかという恐れが浮かんでいた。逃げるべきかどうか悩んでいるのだろう。

たっち・みーとモモンガに向ける視線には若干の期待があったが、しかしそれを口にするのはためられるようで、口に出して求めている来ない。

その村人なりに律儀な態度を、たっち・みーは好ましく思った。ゆえに、自分の方から求められているであろうことを口にする。

「わかった。生き残った村人たちを至急村長殿の家に集めるんだ。村長殿は私たちと一緒に、そいつらを迎えよう。もし騎士たちが攻撃して来ても、我が盾にかけて村の者達には傷一つ負わせはしないので、安心して欲しい」

村人たちの間から、強く安堵を滲ませた声があがる。

たっち・みーはモモンガに〈伝言〉を飛ばした。

『すみません。もう少しだけ彼らに付き合うことになりそうです』
『大丈夫です。さすがにここで放り出すようなことはしませんよ』

この村は大事な情報源である。せっかく友好関係を築くことに成功したのにそれを潰されるのは不快である、という思いがモモンガにはあるようだ。

アルベドと死の騎士を背後に並べ、いつでも防御に入れるように指示を出しながら、モモンガとたっち・みーは村長と共に並んで騎士たちが近づいてくるのを待っていた。モモンガとたっち・みーに挟まれた位置に立つ村長は、不安の表情を浮かべ、緊張してはいるもの、ふたりを全面的に信頼してくれているらしい。

やがて、馬に乗った騎士らしき者たちがすぐ傍までやってくる。

その中から馬に乗ったまま、一人の男が前に出てきた。

一行のリーダーらしく、極めて屈強な体つきをした偉丈夫だ。

男の鋭い視線がまずたち・みーを射抜く。暴力を生業とする空気に特別慣れているわけでもなかったが、たち・みーはその一瞥を受けても特に何も感じなかった。むしろ、自分の意思とは違ふところで気分が高揚し、逆に思考は冷えるのを感じた。それは敵意を感知すると自動的に発動する戦士系の常時発動型特殊技術〈騎士の心得〉の影響かもしれない、と冷静な頭でたち・みーは考える。村を襲っていた騎士たちを相手にしていた時は感じなかったため、本物の敵意が無ければ発動しないのだろう。

その後、モモンガも同じように男に鋭い視線を向けられていたが、平然と立っていた。

ふたりの反応に満足したのか、男が重々しく言葉を放つ。

「私は、リ・エステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしまわっている帝国の騎士たちを討伐するために王のご命令を受け、村々を回っているものである」

「王国戦士長……もしま、あの……？」

村長の口から微かな眩きが漏れた。知っているならさつき話してくればよかったのに、という想いはモモンガにもたち・みーにもあったが、村長が持つすべての情報を一から十まですべて話せということも無理な話だ。不快感はすぐに霧散する。あとで周囲の国の有名な人物の情報くらいは聞いておこう、と思う。

ひとまずは目の前の男の話だ。

「村長殿、あの方はどういった方なのですか？」

モモンガが村長に顔を寄せて尋ねる。たち・みーも聞き逃さないように耳を寄せた。

「村を訪れる商人たちの話では、かつて王国の御前試合で優勝を果たした人物で、王直属の精鋭兵士たちを指揮する方だとか……すみません。本物かどうかは、私には判断が……」

モモンガとたち・みーという強大な二人に挟まれた村長はひたすら恐縮していた。

「いや、それは仕方ないだろう。気にしなくていい」
慰めるようにたち・みーは言う。

村長とはいえ、辺境の村人が王国戦士長のような人物をはつきり知ることが難しいだろう。

モモンガも同意見なのか、村長を慰めていた。

「……この村の村長だな？」

そこに、ガゼフの声がかげられる。

「そのお二方が一体誰なのか……教えてもらいたい」

相変わらずその視線は二人に対して警戒を露わにしていた。

村長が応えようとするのを、モモンガが遮る。

「それには及びません、王国戦士長殿。はじめまして。私はアインズ・ウール・ゴウンのモモンガ。そしてこちらが——」

「アインズ・ウール・ゴウンのたっち・みーだ。私たちは、この村が騎士たちに襲われていたので助けに来た者だ」

ふたりの名乗りを聞いて、ガゼフは即座に馬から飛び降りた。

そして、重々しく頭を下げる。

「この村を救っていただき、感謝の言葉もない」

彼の行動に、モモンガとたっち・みーは彼が相当な人格者であることを確信する。

王国戦士長という地位がこの国においてどれほどのものかはわからないが、特権階級にあることは間違いない。そんな彼が身分も明らかではない二人に敬意を示しているのだから。

そんな誠実な彼が戦士長を名乗ったのだから、おそらくそれも偽りではないのだろうと判断できた。少なくともたっち・みーはそう確信を持った。

「……いえいえ。実際は私たちも……報酬目当てですから。お気にされず」

モモンガは一瞬だけ言い淀んだ。たっち・みーはそのつもりではなかったからだ。しかし村人に報酬目当てだと言った以上、そちらに合わせる必要がある。

何かと気を使ってくれるモモンガに、たっち・みーはありがたいという想いと、気を使わせて申し訳ないという想い、両方を抱く。

「冒険者なのかな？」

報酬目当て、ということから、ガゼフがそう尋ねてくる。

『ひとまず、旅の冒険者ということにしましょう』

『了解です』

素早く意思を統一する。

「そのようなものです」

「ふむ、お二人は……かなり腕の立つ冒険者をお見受けするが、モモンガという名前も、たちち・みーという名前も存じ上げませんか」

「こちらには旅の途中、偶然訪れただけですので……さほど名が売れていないのでしよう」

「なるほど……アインズ・ウール・ゴウンとは？」

「私たちのチーム名のようなものですよ」

「ほう。ということはお二方以外にも同様に腕の立つ方がまだいらっしやると？」

「……………」

何かしら思うところがあつたのだろう。

モモンガが黙ってしまったため、代わりにたちち・みーが応じる。

「いや、今は私達だけだ。実はそのメンバーを探すのも旅の目的のひとつでね……戦士長殿はアインズ・ウール・ゴウンの名を聞いたことはないか？」

最初に反応がなかった時点で望み薄だったが、念のためちゃんと聞いてみた。ガゼフは少し記憶をたどるようにしたあと、申し訳なさそうに首を横に振る。

「……申し訳ない。残念だが、聞いた覚えはないな」

「そうか。残念だ」

その後は村を襲った騎士たちの話を聞かせて欲しいというガゼフの求めに応じ、村長の家で話すことになった。

なお、その話の最中。

「ではモモンガ殿、みー殿、よろしくお願いします」

ガゼフがそう呼びかけるのを聞いて、モモンガが嘖き出した。すぐに咳払いで誤魔化していたが。

たちち・みーはそんな骸骨をジト目で見つつも、そう呼ばれたこと

に関して納得する。この世界の名前の呼び方は、日本式ではなく西洋式だったのだ。

「あー、すまない。戦士長殿。私の名前はたち・みーで一括りなんだ。たち・みーと呼ぶか、あるいは略してたちちと呼んでくれ」
「おお、そうだったか。これは失礼した。ではたち殿と呼ばせてもらおう」

ガゼフが納得したのを受け、たち・みーは頷く。

『みー殿って、可愛い呼び方でしたね。本人は全くそんな気はなかったんでしょけど、だからこそ余計にギャップが……ふふっ』

モモンガがからかうようにへ伝言で言ってくるのを、たち・みーは苦笑で返した。

ガゼフのような筋骨隆々とした偉丈夫が「みー殿」と、ものすごく真面目な顔でいうものだから、確かに面白さは倍増だった。

そんな余談も挟みつつ、ガゼフと色々な話をしている最中に、ひとりの騎兵が村に駆け込んできた。そして、大声で緊急事態を告げる。

「戦士長！ 村の周囲に複数の人影を確認！ 村を包囲しながら接近中です！」

陽光聖典隊長ニグン

「確かにいるな……」

家の影から村の外を見据えて、ガゼフがいう。たち・みーは無言で頷いた

モモンガとガゼフがその存在に関する予想について話している間に、たち・みーは密かに特殊技術を使用する。

（殺意感知）

自分や味方に向けられている殺意を広範囲に渡って感知することができる特殊技術だ。

ユグドラシルにおいては一度交戦状態にならなければ使えず、姿を消して暗殺を仕掛けてくる相手か、超遠距離から何度も仕掛けてくる魔法使い相手にしか意味のない特殊技術であったが、この世界においては殺す気で近づいてくる者のことが交戦前からわかる。

常時発動型ではないのでそこは不便だったが、いまのような状況下では大きな効力を発揮した。

（近づいて来ているのは三十二人か。二重三重に包囲を固めているみたいだな）

もちろんこちらに対する敵意を持たない相手、後詰や補助専門の者がいればその限りではないが、少なくとも最初に仕掛けてこようという敵兵はその数ということだ。

（さっきの騎士か、それに少し勝る程度の強さなら、私たちにとっては敵じゃないが……）

話し合っているモモンガとガゼフに意識を戻す。

「モモンガ殿、たち殿。良ければ雇われないか？ 報酬は望まれる額を約束しよう」

「……少し相談させてください」

モモンガはそういつてたち・みーを連れてガゼフから離れる。

その上で〈伝言〉を用いて話しかけてきた。

『相手の力量が不明ですし、こちらの情報が漏れるのも具合が悪いです。ここは共闘は断って、彼が戦うのを観察して情報を収集しよう』

思うのですが……』

『……』

たっち・みーはなんと言うべきか迷った。

モモンガの提案はいつも合理的で、ナザリック地下大墳墓の主として相応しい判断をしていると思える。この村を襲っていた騎士たちは自分たちが一蹴できる程度の存在だったが、それは必ずしもいま襲いに来ている敵が自分たちより弱いことを意味しない。

本人たちの力はともかく、自分たちを脅かしかねない切り札を有しているかもしれないと考えれば、不用意に戦いを挑むのは愚策であると言わざるを得ない。

そしてたっち・みーにもモモンガにも、そういうアイテムに心当たりはあるのだ。

モモンガの言う通り、戦士長を囿に——はつきり言えば捨て駒にして——敵がどのような力を有しているか、切り札を持っているのかを測るのは慎重で正しい行いであるといえるだろう。

だが。

だがしかし、である。

たっち・みーはガゼフの様子を伺う。その強い意志を感じさせる表情からは、仮に自分たちに提案を断られても、自分たちだけで村人を守ろうという気持ちが伝わってくる。

その気概を感じた瞬間、たっち・みーの中で答えは出ていた。

『モモンガさん。私は、彼に、彼らに死なないで欲しい』

ガゼフの推測からすると、いま周りを取り囲んでいるのはスレイン法国の特殊工作部隊群の六色聖典であるという。その数も腕もガゼフが連れている騎士たちより上らしい。

そのことをガゼフは特に隠すことなく、告げていた。周りには彼の連れてきた騎士たちがいて、その話は聞こえていたはずだ。普通ならば怖気づいて逃げ出す者がいてもおかしくはない。

もちろん、この状況で逃げたところで包囲されている以上殺されるだけだが……彼らの中にはそもそもそういうことを考えるような意思はないようだった。

誰もがガゼフ・ストロノーフという自分たちのリーダーを信頼し、例え死ぬことが確実な戦場であっても、最後まで彼についていくという覚悟が見えた。

こういう存在は貴重なものだ。ガゼフの人柄は少し話しただけでも十分に感じられた。

何やらよくある派閥抗争に巻き込まれて苦労している様子もうかがえるが、それでもなお、国のため、国民のため、彼らの立場からすれば優先度は低いであろう村人を助けるために、罨にかかることを半ば覚悟してここまで来た彼らの意思を、少なくともたつち・みーは無下にできなかった。

それは信念ある人間としての共感というよりは、命を削ってでも主人に仕える忠犬に対する同情の念と言えたが、『できれば死なないで欲しい』という想いに変わりはしない。

モモンガはたつち・みーがそう答えると想定していたようだった。

『わかりました。ならば彼の提案を受け、この世界の硬貨を手に入れます。ユグドラシルの硬貨はなるべく使いたくありませんし、この世界での活動資金を十分に得られると考えればそれなりに益のあることですしね。戦士長とのコネクションもまあ……役に立たないこともないでしょうし』

あまりにあっさりを受け入れていた。

『……いいんですか？ モモンガさん。私のわがままであることは理解しています。あまり気を使ってくださらずに、大丈夫ですよ？ 間違っていると感じたときは遠慮なく却下していただいても……』

ギルド長はモモンガであり、そしてその冷静な判断力はたつち・みーも認めるところだ。そんな彼が自分の考えを優先せず、たつち・みーの言うことを尊重してくれるのは嬉しいが、しかしそれは危険ではないかという想いもある。

そんな気持ちがあったが、当のモモンガはたつち・みーの言葉に対し、苦笑で応じた。

『むしろ、ああいう人間を助けようと言わなかったら、そっちの方が心

配でしたよ。たちちさんらしくもない』

あまりに、さらりと言われた言葉に、たちはモモンガが自分のことを深く理解し、尊重してくれているのを感じた。長年不義理を働いたにも関わらず、そういつてくれる彼に、たちち・みーはつくづく頭が下がる思いだ。

『わかりました。ありがとうございます、モモンガさん』

迷いを断ち切り、たちち・みーは戦うことを決断する。

戦う意思を明確にしたからだろうか。思考が急速に冷静になり、どうすることが最も利益につながるか、それがはつきりとわかった。

『私たちの情報が漏れるのが、世界のことをほとんどわかっている現状でまずいのは理解しています。なので……モモンガさん。こうしましょう』

たちち・みーがした提案に対し、モモンガはひどく動揺して叫んだ。「なにをいつてるんですか!」

思わず〈伝言〉の魔法を使わずに口に出してしまう。それがガゼフたちには言い争いになったように見えたのだろう。慌てた様子で声をかけてくる。これまで何も言わず控えていたアルベドも同様だ。

「お二方、どうなされた——」

「モモンガ様? いったい——」

「やかましい! 黙っている!」

一喝。

それだけでアルベドは何も言えなくなり、ガゼフも口を閉じざるを得ない。

それだけ、モモンガは必死だった。アンデッドゆえに、一定以上の感情は抑制されるはずだったが、それがまるで意味をなしていない。

「たちちさん、バカなことを言わないでください。さすがにそんなこと、許可できません」

なんとか思い直すようにモモンガが説得するが、たちち・みーの決意は固かった。

「大丈夫です。それに、万が一のことを考えるのなら、それこそモモンガさんは後詰に回っていた方がいいでしょう?」

「それなら私が！」

「前衛の騎士と、後衛の魔法使い。どちらが敵の攻撃を耐え凌ぐのに向いているかは、明らかです。それに、不測の事態に陥った時、私では力任せに突破することしかできませんが、モモンガさんなら離れた場所からでも様々な手を打てるはずですよ」

「う……っ。それはそうかもしれませんが……しかし、向こうに切り札があるかもしれない現状で……もしかするとあれが……あつ」

そこでモモンガは目の前にいるのが誰かを思い出した。

たっち・みーは軽く頷いて見せる。

「私たちが想定しうる最悪が仮に向こうの手にあつたとしても……私なら問題ありません」

「でも……」

それでも洩るモモンガだったが、それを安心させるようにたっち・みーは笑った。

「大丈夫です。モモンガさん。あなたはアインズ・ウール・ゴウンをここまで守ってくれた。その恩に報いるためにも、ここは私に戦わせてください。私がアインズ・ウール・ゴウンの騎士として、申し分のない働きを見せましょう」

そして、たっち・みーは黙って推移を見守っていたガゼフに向かって発言する。

「ガゼフ殿。私があなたに雇われよう。ただし——条件がひとつだけある」

「……なんだろうか？」

たっち・みーは堂々とした立ち振る舞いで、その条件を口にした。「私一人で戦わせてもらう」

ニグンはいまだ村の中から動きがないことを不審に思っていた。

王国最強の戦士長ガゼフ・ストロノーフの抹殺。そのために用意した罠にガゼフはまんまとかかり、あとはただ刈り取るだけの作業だったはずだった。

ガゼフという男の性格を考えると、そろそろ自分たちが囷となつてニグンたちの包囲網を崩しにかかつてくるはずだった。包囲が綻びたところから村人を逃がそうと目論むはずだと睨んでいた。

しかし、まだ動きはない。

(逃げてはいないようだが……？ 計算が狂ってしまったな)

ニグンはそう考える。

信仰に生きる彼にとって、ガゼフの行動自体は理解できないものだったが、それはそれだ。相手が何を信じ、何を重要視しているかは、作戦を練る上で知っておかなければならない。理解できないことに命をかける愚者とはいえ、戦闘能力は極めて高いのだから。

たとえ心から理解はできなくても、相手がどういう信念に基づいて行動しているかは、ニグンの頭に入っていて、それに照らし合わせて行動を誘導してきた。

(ふむ。籠城戦を選んだか？ 村人に被害が出るような手を打つような男ではないはずだが……では、ただの村に隠された逃げ道があったと？ バカな。ありえない。村人の囷となることを選ぶはずだ)

もしそうやって村人を逃がそうとしても、その逃亡を防ぐ手立ては用意していて、無駄なあがきをする愚かな男を嘲笑ってやるつもりだった。

自分の想定した状況になっていないことを受け、ニグンは心の中で警戒度を一段階引き上げる。

「私が読み切れない、イレギュラーな事態が発生している可能性があるな」

彼は下種な人間だったが、指揮官としては非常に有能な男だった。

自分が絶対的に有利な状況だとしても、一部の隙さえ許さない。相手の生き残る可能性を、万に一つの可能性でも潰す。

「やれやれ、仕方ない。もう一つ、ダメ押しの手を打っておくか」

ニグンは自分の得意とする魔法を行使する。

翳した手が光り輝き、目の前の地面に魔方阵が広がる。

「天使召喚・監視の権天使」

魔方阵から溢れた光が徐々に人の形を作っていく。それは全身鎧

に身を包んだ天使だった。

片手にはメイスを持ち、もう片方の手には円形の盾を装備している。その堅牢なる外見にふさわしい、この天使が持つ特殊能力は、味方の防御能力を若干引き上げるものだ。それは召喚しているだけで味方を援護する能力であり、ニグンの部下が召喚した上位天使たちの能力も引き上げることに繋がる。

その天使を召喚することは、元々の予定にあったことだ。ゆえに、この天使を召喚したこと自体は、ダメ押しの手ではない。

ダメ押しの手は、ニグンの背後に現れていた。

二体目の監視の権天使。

まるで鏡に映したかのように、最初に召喚された天使とはメイスと盾を持つ手だけが逆転した状態で、二体の監視の権天使が現れていた。その天使は一体目の監視の権天使と並び、ニグンの左右を固める。上位天使よりもさらに上の監視の権天使を二体召喚したニグんに、部下が尊敬の眼差しを送っていた。

ニグンは単に監視の権天使を二体召喚したわけではない。彼が唱えた召喚魔法は一体分だった。しかし、現れたのは二体。

これは、彼の持つ生まれながらの異能がそれを可能にしていた。

『召喚モンスターは二倍加』。

ニグンが召喚魔法を唱えると、そのモンスターはどのような存在でも二倍の数が召喚される。上位天使を召喚しても同じだ。しかも、この生まれながらの異能による魔力消費は極小。つまりニグンは通常の倍近い戦力を一人で生み出せるということになる。

一体だけならともかく、監視の権天使を二体同時に相手にして勝てる相手は早々いない。ましてやいまは集団で行動しているのだ。二体の監視の権天使が生み出されたことで、その分だけ味方の防御能力も上昇している。

「少し過剰だったか？ まあいい。村から出てこないというのであれば、火をつけてあぶりだすのみ。では……作戦を開始する」

ニグンは絶対勝利を確信していた。勝利を疑うような要素など微塵もない。

もしも本当に不足の事態が起きたとして、億が一ガゼフ・ストロノーフが天使たちの包囲を突破したとしても——本当の切り札は、ニグンの胸元にある。

その確かな存在感を放つ『本当の切り札』に手を当てて、ニグンは笑みを浮かべる。その切り札は彼の生まれながらの異能と合わせれば、もはや向かうところ敵なしであることが明らかなものだった。

任務の完遂と勝利を確信したニグンは、部下を率いて、村へと侵攻を開始した。

死の超越者の激怒

ニグン・グリッド・ルーインは困惑していた。

先ほどまで、彼は任務の成功を強く確信し、あとは檻に追い込んだ獣にトドメを刺すだけのつもりだった。エリートで構成された陽光聖典の部下たちの包囲に穴はなかったし、何か問題があるようには感じなかった。ガゼフ・ストロノーフは要注意だが、万全な装備を持たない戦士のひとり如き、召喚した天使たちを用いた波状攻撃をかければ、楽に倒せるはずだった。いかに強力な戦士であろうと、所詮は魔法の射程には及ばない。一対一ならばともかく、たった一人の戦士が魔法使いの集団に勝てる道理などない。

しかし、ここに来て、ニグンは困惑していた。

「……何者だ？」

村からはまだ距離がある広い草原に差しかけた時、そこに現れた騎士。

どこか浮世離れた雰囲気を放つその騎士は、盾と剣を構えていた。少なくとも敵対者であることは明らかである。

ニグンの問いかけに対し、その騎士は不思議とよく通る低い声で応じる。

「はじめまして。スレイン法国の皆さん」

そして、ニグンたちにしてみればありえないことを言う。

「ここから先に通すわけにはいかない。そして、残念だが逃がすわけにもいかない。しかし、お前たちが非道な行いを悔い、犠牲となった者たちに心からの謝罪をするのであれば、せめても慈悲として痛みなく終わらせてやろう」

どうする、とばかりに告げる騎士。

ニグンはその騎士は気が触れているとしか思えなかった。

「……貴様は何者かは知らんが、ずいぶんと大きな口を叩くものだな。一体何が目的だ？」

この時、ニグンの心中では激しく警鐘が鳴り響いていた。目の前にいるただの騎士から、妙な圧力を感じる。

しかし、エリート集団陽光聖典の隊長として、そして自身の能力に絶対の自信を持つ者として、引くわけにはいかなかった。

騎士はニグンに言われ、名乗るのを忘れていたことに気づいたのだろう。少しだけ「しまった」という様子で、名乗りをあげる。

「私はアインズ・ウール・ゴウンの騎士。たち・みー。この村に縁があつてな。村を助けに来た」

ニグンはその騎士の——たち・みーの言葉を聞き、義侠心に踊らされた哀れな男であるという判断を下す。ガゼフと同じ、大局を見られず、愚かな行動をするものであると認識したのだ。

「ふん、村人の助命を懇願しにでも来たのか？」

「いや、頼む必要などない。村人のことは私の大切な友に任せてある。彼の守護の元にある村人を殺すことなどお前たちにはできないだろう」

「……本当に、大きな口を叩くものだな。騎士風情が。もういい。我々の任務を邪魔をするようなら、貴様ももろともに蹂躪するまでだ」

ニグンは片手を挙げ、部下たちに攻撃の合図を出そうとする。

明らかに濃密な殺気が満ちた空間。

「まあ、待て」

そんな中で、たち・みーは実に軽い調子でニグンに待ったをかけた。

ニグンがそれに従ったわけではなかったが、たち・みーは気にせず続けた。

「その前にひとつだけ聞かせてくれないか？ スレイン王国という国は、確か人類繁栄のために活動している宗教国家だな？ その認識に間違いはないか？ 人目を避けて暗躍し、敵国を侵略する蛮族の国というわけではないのだろうか？」

その問いかけを無視することは、ニグンにはできなかった。騎士ひとり何と言われようと関係はなかったが、しかしそれでも、蛮族呼ばわりをそのまましておくのは、自らの信仰を捧げる神のことを馬鹿にされたまま放置するのと同じ、という想いがあつた。たとえ相手

が理解できなくとも、自分たちは崇高なる理念の元に基づいて動く者達であるということを主張しなければならぬ。

「……ああ、そうだ。多種多様に存在する亜人種に対抗するため、人類はひとつにまとまらなければならぬ。そのために我らは活動している」

「なら、なぜ虐殺行為をする？ お前たちが殺した村人たちとて、守るべき人類だろうに」

純粹に疑問なのか、たっち・みーは素直な声音で問う。

ニグンはいよいよ目の前の騎士が愚かであろうしようもない者であると認識し始めた。

「大局も見れぬ愚か者に何を言っても無駄だろう。ここでガゼフ・ストロノーフという王国の切り札を抹殺することは、いずれ人類がひとつにまとまるために必要なことなのだ。それを確実に遂行するため、村人の犠牲は必要なものだ。それに、たかが辺境の人間がいくら死のうと、人類の繁栄には何の影響もない。我らは常に人類が歩みべき道の先を見ているのだ」

「……そうか」

明らかに低くなった声。ニグンは義侠心に駆られているとしか思えないたっち・みーの言動を、鼻で笑う。

「ふん。あの村にどんな縁があるのか知らんが、村人風情を助けようというのだ。どうせ大した理由ではないのだろうが、聞いてやろう。理由如何では……そうだな、せめての情けに貴様自身の手で村人の介錯をすることを許そうではないか。せめての慈悲に、痛みなく殺してやるがいい。……で？ 貴様が下らん人助けに走る理由とは何だ？」

先ほどたっち・みーが行った言葉を、皮肉のように投げ返し、村を助ける理由を問うニグン。

たっち・みーは迷いなく、端的に応じた。

「困っている者がいたら、助けるのは当たり前前だろう」

心の底からそう考えているとしか思えないたっち・みーの声。

それを聞いたニグンは、頭痛を堪えるかのようにこめかみを指で押さえ、深々と呆れと侮蔑のこもったため息を吐いた。

「はあ……驚いた。本当に驚いたぞ。まさかそこまでくだらない理由で誰かを助けようとする愚か者がいるとは思わなかった。糞の役にも立たない者をそんな理由で助けようとする奴がいたとは、まったく驚きだ。そんな理由で助けられる者も、その程度の理由で生き延びるつまらない存在なのだろうな。崇高なる理念に基づいて動いている我らに対し、貴様はなんと愚かで下らない存在か。——ああ、もう口も開いてくれるな。貴様のような者が存在することを認識したくもない。ここで何も成せないまま、惨めに死んでゆけ」

ニグンは挙げた手を下ろし、部下に攻撃の指示を出す。

それに応じて、二体の天使が、目にも留まらぬ速さで飛びだした。通常の間人であれば数十歩はかかる距離を、空を飛ぶ天使は羽ばたきひとつで零にする。

天使はその速度に乗って、手に握った剣をたち・みーへと突き出した。

そして——天使たちは光の粒子となって、消えた。

ガゼフ・ストロノーフは歩いていくたち・みーの背中を、何とも微妙な表情を浮かべて見送った。

確かに彼らの力を期待して提案したのは事実だが、まさか雇用の条件に「ひとりで戦う」と言われるとは思ってもみなかった。

本来であれば、ガゼフにも矜持というものがあるため、たち・みーをひとりで行かせることに納得はしなかっただろう。

しかし、真摯な態度で、決して自分たちを軽んじているわけではなく、純粹に案じてのことだと、たち・みーに滔々と諭されては、どうしようもない。

さらには、戦鬪的にもひとりで戦うことに意味があると言われてしまった。ガゼフとしては何も言えなくなってしまった。

それでもいつでも駆けつけることができるように、馬も部下も準備はさせている。

いま、ガゼフは村人を集めた倉庫の前に、モモンガとアルベドと共に

に立っていた。部下たちはその倉庫を取り囲むようにして配置し、いつでも襲撃に備えている。いくらたち・みーが打って出てくれているからといって、伏兵は存在するかもしれない。それに備えるのが自分たちの役割だ。

モモンガは不思議なマジックアイテムを目の前に展開しており、それでたち・みーの様子を見つめている。大仰に組んだ腕の上で、指がそわそわと落ち着きなく動いていた。

それは不気味な面を被った魔法使いとしては、妙に親しみを感じさせる仕事で、ガゼフはたち・みーの真摯な態度に触れたこともあり、突如として現れた不審な二人のことを自然と受け入れつつあった。

ちなみに、本来であるならばモモンガの隣でマジックアイテムを見ることがについては、モモンガには嫌がられたが、たち・みーが「私が無理を言っているのですし、彼にも見せてもらいましょう」と口添えをしてくれたからである。依頼主として、万が一たち・みーが危機に陥ったときは助けに向かうつもりだっただけに、状況の把握ができるのはありがたかった。

まだ戦闘開始するまでには時間があると考えたガゼフは、モモンガに対し、話しかけておくことにした。これは少しでも交流を深めておきたい狙いがあったのと、たち・みーのことを不安げに見守るモモンガの気を少しでも紛らわせればという想いがあったからだ。

「モモンガ殿。依頼を受けてくれて感謝する」

そのガゼフの呼びかけに対し、モモンガは自分が落ち着きのない動きをしていることに気づいたのか、腕を組むのをやめ、近くに浮いていたスタツフを握りしめてから応じた。

「別に……たちさんが決めたことです。私としては、何がなんでも断っておくべきだったかと思っ直しているところですので、お気になさらず。お礼をいうのであれば、これが済んだ後に、たちさんに言ってください」

その言葉は冷たく、ガゼフに対する気遣いなど一切のないものだったが、たち・みーに対する想い、不安に思う心、気遣いや配慮などは溢れんばかりに感じられた。

ゆえに、ないがしろにされたガゼフも、嫌な気分にはならなかった。むしろそこまで思いやれる友人がいるということに、微笑ましさというか、一種の羨ましささえ感じるほどだ。

「……本当に、モモンガ殿はたち殿のことが大事なのですな」
「当然です」

モモンガは強く断言する。そんな当たり前のくだらないことを聞いてくれるな、と言わんばかりの即答と断言っぷりだった。

「……たちさんは、私の最高の友人であり、恩人です。あの人に何かあつたら……私はスレイン法国の国民を一人残らず虐殺します」

前半部分を穏やかな気持ちで聞いていたガゼフだが、後半部分で全身から冷や汗が噴き出るのを感じた。それが冗談や過剰な表現などではなく、間違いなく本気であるということが、はつきりと理解できたからだ。

(まさか、本当に、国を一つ落とせるとでもいうのか……?)

世界の広さを知らない無知な者が戯言を言っているのだとしたら、ガゼフはそこまで焦らなかつただろう。しかし、モモンガの言葉には確かな力があり、どうやってでも国を一つ滅ぼすと決意しているようでもあつた。

いまはそれが法国の方に向いているからいいが、万が一王国の方に向いたら。

ガゼフは、自国民何万人が死に絶えるリアルな想像をしてみまい、慌ててその想像を打ち払う。

(むっ……たち殿が、敵と遭遇したようだ)

映し出されている映像の中で、たち・みーは敵のリーダーらしき人物と何かを話しているようだった。

(何を話しているのだろうか？ モモンガ殿は魔法を使って向こうの音声も聞けるという話だった……)

ガゼフはちらりとモモンガの方を伺う。しかしその表情は仮面に覆われており、そこから何らかの感情を読み取ることはできない——はずだった。

しかしなぜかガゼフはモモンガの機嫌が急によくなったことに気

づいた。先ほどまで纏っていた不安そうな空気が一蹴され、心が弾むような歓喜の感情が伝わってくる。

(……?) 説得で敵が引きそうな様子を見せたから……というわけではないようだが……?)

まさかたち・ミーがモモンガのことを「大切な友人」と呼んだことに対して、モモンガが大層喜んでいるとは、ガゼフに読み切れるわけもなかった。

比喩的に言って、花が飛びそうなほど上機嫌だったモモンガ。

だが、それが急に掻き消え、逆に周囲の明るさまでも呑み込むような暗い雰囲気になり替わったことをガゼフは感じる。

「なん……だと……?」

かすかに仮面の奥から聞こえてきた声を聴いたガゼフは、思わずその場から全力で逃走しそうになった体を、鋼の意志の力で抑えなければならなくなった。ゆらり、とモモンガの来ているローブがはためき、周囲の空気が変わる。

「も、モモンガ、どの……?」

我知らず、ガゼフの声が掠れた。呼びかけに意味などない。モモンガはガゼフの言葉に反応など見せず、ただその仮面の奥から射殺さんばかりの視線を、目の前にある映像に向けている。殺意は濃厚なオーラとなり、モモンガの全身からじわりじわりと立ち昇って行った。

そして、それが唐突に爆発した。

「糞がッー」

ズンツ、という凄まじい音が響いた。

それは地団太。ただ、怒りにまかせて地面を蹴った。それだけのこと。

なのに、ガゼフは確かに大地が揺れる感触を覚えた。

「許さんッー! 絶対に許さんぞ屑がッー! ああ、必ず殺してやる。この世に生まれ落ちたこと後悔するだけの苦痛と絶望を与えてからッ……いいや、それだけじゃ足りない。決して足りるものか。蘇らしても何度でも殺してやる! 何百何千、数えきれないほどに死の恐怖を魂に刻み込んでやる!」

死の暴風が目の前で吹き荒れているかのようだった。

濃密に淀んで爆発したモモンガの憤怒の感情は、周囲に展開していたはずのガゼフの部下たちをも恐怖させ、馬を暴れさせ、いたるところで部下が落馬して大騒ぎになっているのがわかった。

ガゼフは動けなかった。王国戦士長ともあろうものが、すぐ傍に立つ者の放つ憤怒に吞まれて、体を動かせなかったのだ。

激情を振りまくモモンガに対し、背後に控えていたアルベドがするのように声をかける。

「も、モモンガ様、お怒りを、御静めください……！」

アルベドの声に反応してか、モモンガが少し冷静さを取り戻す。

しかしその杖を握った手からは金属と持ち手が相当強い力でぶつかり合っていることがわかるような、金属が軋む音が響いていた。相当強い力で握りしめているのだろう。

「アルベド、すまない。我を忘れた」

「い、いえ。とんでもございません。私のお願いを聞き届けてくださり、ありがとうございます！」

平伏するアルベド。そんなアルベドに対し、モモンガは言う。

「アルベド、村の周囲に展開させているシモベに命じろ。他はどうでもいい。この指揮官を——」

そこまでモモンガは口にして、不意に言葉を切った。アルベドは指示が途中で切られ、不思議そうな顔をする。モモンガはこめかみに手を当て、無言だった。その全身から立ち昇っていた怒りのオーラが、徐々に収束していく。

ガゼフは何が起きているのか一瞬わからなかったが、ふと目に入った映像の先で、たちち・みーが同じような姿勢を取っていることを見て、二人の間で意思が交わされているのではないかと推測する。

（なるほど……たちち殿が何か言ってくれているというわけか……）

そもそも、アルベドという存在が言っても完全には抑え込めていなかった激情を抑えられる存在など、いまガゼフが得ている情報の中では、たちち・みー以外存在しない。簡単な推測だった。

現に話が終わったのか、手を下ろしたアインスは、ガゼフの方を見

て軽く頭を下げることでさえしてのけた。

「すみません。驚かせてしまったようですね。たちさんが侮辱されて、少々我を忘れてしまいました」

我を忘れたというレベルではなかったが、ガゼフはあえてそれについては何もいわない。

「それは、仕方ないことだと思う。私も仲間が侮辱されれば、平静ではいられないだろう」

モモンガはそうだろうとも、と言いたげな態度で、改めて観戦する姿勢になった。

ガゼフもまた、モモンガが落ち着いてくれたことに安堵しながら、映像に集中する。

その先で、たち・みーが一步前に踏み出した。

至高の41人最強の騎士

二体の天使が消滅して、その光の粒子が鎧に反射する。

(さて……さつき感じた微振動……いまも感じる少しの寒気……ひよっとしなくても……)

たっち・みーは、のんびりと自分のこめかみに指を添えた。そして〈伝言〉の魔法を用いて、モモンガに連絡を試みる。

その〈伝言〉にはすぐ応答があった。

『……たっちさん』

低く、不機嫌そうな声。たっち・みーはその声を聴いて懸念が的中したのを感じた。先ほど敵の司令官が口にした言葉は、仲間を大切に、たっち・みーを大事に思ってくれているモモンガを怒らせるには十分な侮蔑の言葉だったのだから。

おそらく今ごろ怒り狂っているのではないかと、たっち・みーは懸念していたのだ。

『モモンガさん。もしかしなくても、配下たちを動かしてあの男を殺そうとしていませんか？ ダメですよ』

『つ……！ しかしたっちさん！ その屑はたっちさんを侮辱して——』

アンデッドの精神安定はどこにやってしまったのか、モモンガは声だけで人を殺せそうなほどの憎悪の籠った低い声で言う。

たっち・みーはそれを遮った。

『ダメですよ、モモンガさん。すみませんが、あいつの相手は譲れません』

穏やかな声で、しかし確かな力を込めた声でモモンガを抑える。

『あいつは私が仕留めます。殺さないようにしつつ、恐怖を植え付けて確保しますから、情報の引き出しはお任せします』

侮辱してきた相手は自分自身で仕留める、と言われてしまっただけですがにモモンガも納得せざるを得なかった。

『……わかり、ました。でも、絶対すんなり殺しちやダメですからね。』

いいですね！ 苦しむのが可哀想とか、そういう、たっちさんの慈悲をかける価値はない相手ですからね！」

普通ならば、殺すことが慈悲にはなりえない。

しかし人間でなくなり、人間に対して虫けらに対する程度の共感しか持たなくなつたモモンガが、たっち・みーを侮辱した相手をどう扱うかなど、想像するのも恐ろしいことになるのは明白だ。だから、この場合に限っては一思いに殺すことの方が慈悲になりうる。

それはたっち・みーもよくわかつていて、頷いた。

『ええ。わかつていますよ』

普通の悪人であつたならそれを考えなくもなかつたかもしれない。ただ単に立場や状況が噛み合わなかつたために敵対しただけの相手であるならば、一思いに殺してやるのが慈悲だと考えただろう。

だが――。

たっち・みーはモモンガがひとまず落ち着いたのを確認してから、〈伝言〉を切つた。こめかみに添えていた手に握る剣を、改めて握り直す。ちなみに〈伝言〉の魔法は別に手をこめかみに添える必要があるわけではないのだが、携帯電話を用いるときと同じで、意識していないとついついそうしてしまうのだ。

〈伝言〉を使っている間のたっち・みーは周りからは隙だらけに見えていたが、敵対しているはずの存在は一人として動けなかつた。その表情はいずれも驚愕に彩られ、目の前で起きたことをどうにかして理解しようと必死になっているのが伝わってきた。

「なんだ……？ なにが、おきた……？」

そんな呆然とした部隊を率いているニグンは、呆然とした声をあげた。その周りの部下たちに応えられるものはいない。

たっち・みーはそんな彼らに対し、一歩踏み出す。特に駆け出したわけではない。散歩を始めるかのように、普通に歩きだした。その途端、敵対するニグンたちがびくりと体を震わせる。

「何を……した。どうして、天使たちが消滅したのだ?! 答えろ！」

どうして突撃を仕掛けたはずの天使が消滅するのか。一体何をすればそんなことができるのか。その事実には怯えているのか、ニグンの

声は震えていた。そんな彼に対し、たっち・みーは特に何でもないことのように——実際特別なことは何もしていないのだが——答えた。

「斬った」

「き、っ、た……？」

そのたっち・みーの言葉は、とてもシンプルだったが、ニグンたちの中で理解できたものは一人もいなかった。いや、それを理解するのを頭が拒否していたのかもしれない。

「馬鹿な！ 剣を振ってなどいなかった！」

「いや、普通に振ったぞ」

「何かのトリックに決まっている！ 次の天使を突撃させろ！」

ニグンの悲鳴のような声に従い、今度は三体の天使が突撃姿勢を取る。

それに対し、たっち・みーはふう、と息を吐いた。

「わかったわかった。次は半分くらいの速度で振ってやるからよく見てろ」

天使が突撃をかける。目にも留まらぬ速さで迫る天使たち。

だが、たっち・みーの目には止まっているのと変わらなかった。これは別に特殊技術を使用しているわけではない。たっち・みーの基礎身体能力は、その異形の体になったことで飛躍的に大きく向上していた。動体視力もそのうちのひとつだ。元々戦士職だったからか、高速で振るわれているはずの敵の武器の切っ先でさえ、はつきりと視認することが出来た。

そんな超身体能力だからこそ、たっち・みーは天使の突撃がいくら速くても恐れはなかった。自分の握る剣の間合いギリギリの位置まで来た天使の首を一撃で落とす。落とす、と言っても刃がそこを通過した瞬間、その天使は大ダメージを受け、首と胴が離れる前にその体を光の粒子へと溶かす。

コンマ数秒遅れて来た次の天使に向かって、切っ先を突き出す。頑丈そうな頭部をやすやすと破壊し、その天使もまた光に解けた。

最後の一体は、味方の影になるようにして攻撃をしかけてきていたが、たっち・みーの攻撃圏内に入ったときには、その味方は光の粒子

となつて消えていた。それでも天使は突撃するのをやめない。これは味方の光の粒子が目くらましになればよいとばかりの行動だったが、たっち・みーは素早く剣を返し、袈裟切りでその天使も消滅させる。そもそも気配で敵の位置を把握できるたっち・みーにとって目くらましなど何の意味もない。

かなり速度を落としたとはいえ、常人にはとても目に負える速度ではない。強敵と戦うことを想定し、日々己を鍛えているからこそ、その恐ろしく速い斬撃の軌跡だけがニグンには見えた。

「ば、バカな……天使が一撃……だと……？」

たっち・みーが、一步前に進む。

「別に不思議でもないだろう。どんなモンスターでも、HP以上のダメージを受ければ一撃でやられるのが道理というものだ」

「……！ 総員、集合しろ！ 全天使でかかれ！」

村を囲うように展開していた者たちが、ニグンの合図に従つて集まってくる。

その場所に集まつた天使の数は20を超えていた。

「全天使を突撃させろ！ 急げ！」

部下が集まるのを待つて、ニグンが攻勢を仕掛ける。駆けつけたばかりの者の中には事態がよく呑み込めていないものもいたが、命令に従つて天使を目の前に立つ騎士に向かって突撃させる。

無数の剣が、たっち・みーを襲う。

「やれやれ」

そんな中を、たっち・みーは軽く歩いて通過した。その背後で勢い余つた天使たちが互いにぶつかり地面を転がり、無様な醜態をさらす。

当然、刃の雨を潜り抜けたたっち・みーには、傷一つなかった。

「あり……えない……げ、幻術か……？」

「普通に避けられるだろう？」

起き上がった天使たちが、再びたっち・みーへと攻撃を仕掛ける。たっち・みーは四方八方から来る天使の攻撃を、まるで問題なく避けていた。真後ろから突き出された剣すら、軽く首を振つて避けてしま

うのだから、もはや背中に目があるといわれても納得したかもしれない。

決して天使たちの連携が拙かったわけではない。普通の人間なら、いや、たとえ王国最強のガゼフであったとしても、それだけの天使の連撃を防ぐのは不可能だ。とはいえ、それほど密集して突撃をしかけてくるのならば、ガゼフなら反撃して天使たちを仕留めていただろうが。

だがそれは相手を倒して数を減らす前提の話であって、反撃をしないまま延々と敵の攻撃を避け続けるなど、よほどの実力差がなければ成り立たない。

ましてや個人と集団であるならば——その力量の差は天と地よりも開いていることになる。

「なぜだ……！　なぜかわせる！　不可能だ！」

軽い足取りで天使たちの猛攻を交わし続けていたたち・みーが、その剣を振るう。

ただしその剣の軌跡は一切見えず、気づけば周囲に浮遊していた天使たちがほぼ同時に消滅した。

天使を構成していた粒子が舞い、一種幻想的で神々しい雰囲気さえ漂っていた。しかし、それを楽しむ余裕は、ニグンたちにはない。

「あ、ありえない！　ありえるわけがない！　ただの騎士が！　ただの剣技で！　天使たちを蹂躪するなんてことが、ありえるか！」

武技を使用しているのなら、まだわかる。実際、王国最強の戦士長であるガゼフならば、武技を使用して天使たちを倒すことができるはずだ。しかし、目の前で戦っているたち・みーは、その手の武技を一切使っているように見えない。魔法による肉体強化も、されているようには見えない。

ただの身体能力と技術で天使が圧倒されるなど、ニグンにとっては悪夢でしかなかった。

その場にいた天使をすべて消し去ったたち・みーが、さらに歩を進めていく。それはごく自然の歩みだったが、そこから感じる威圧感はいままで彼らが相手にしてきたどんな敵よりも恐ろしかった。下

手に素早く距離を詰めてこないのもその威圧に拍車をかける。

「ひ、ひい……化け物っ！　〈正義の——〉」

天使たちが意味を成さないと知り、部下のひとりが魔法を使って攻撃を仕掛けようとした。

その瞬間、たっち・みーはその前に踏み込んでいた。剣の柄側が突き出され、その部下が体をくの字型にしながら吹き飛ぶ。

一瞬、その場にいた全員が硬直した。最初にその硬直から回復した別の部下が、たっち・みーに手を向ける。

「っ、〈聖なる——〉」

同じ運命をたどった。瞬時に距離を詰めたたっち・みーが、柄でその男の腹部を突き、軽く数メートルは吹き飛ばして地面に転がした。まるで糸の切れた人形のように地面を転がって、四肢が変な方向に曲がって行った。死んだ、と誰もが思ったが、うめき声がかして、まだその男が生きていることをその場の全員が知る。

「安心しろ。どれほど強い攻撃を加えても、相手のHPを必ず1残す特殊技術〈峰打ち〉だ。ユグドラシルでは利用方法が限られていたが……こうなると便利だな。やりすぎる心配がない」

たっち・みーは軽く剣を振るいながら、ニグンに向き直る。

「魔法使いの弱点を知らなかったのか？　魔法には詠唱が必要だ。なら、それが終わる前に叩いてしまえばいい。だから戦士系を相手にするときには、十分な距離か、その詠唱時間を確保するための策が必要だ。ただ目の前で唱えるだけじゃ、こうやって当然防がれるわけだ」

当然のことのようにたっち・みーは言うが、実際はそこまで単純な話ではない。魔法の詠唱といっても、一つか二つの単語を唱えるだけのこと。それを数メートル距離が離れた状態から防げるたっち・みーが異常なのであって、決して陽光聖典の者たちが常識知らずというわけではなかった。

「ぜ、全員で同時に魔法をかけるー！」

ニグンがそう叫ぶが、前の二人の光景を見ていた者達は動けない。詠唱をしようとしたらその瞬間やられるのが目に見えていたからだ。そんな不甲斐ない部下の姿に、苛立ちと共にニグンが叫ぶ。

「魔法を阻止してくるということは、それを恐れているということだ！ 全員同時に詠唱に入れば、だれかの魔法は届く！」

そのニグンの言葉に勇気づけられたのか、部下たちが一斉に魔法の詠唱に入る。たちち・みーは動かなかった。その体に雨あられと魔法攻撃が降り注ぐ。

そして、一切ダメージは入らなかった。平然と立ち続けているたちち・みーに、全員の顔が絶望に染まる。まるで埃を払うかのように、たちち・みーは鎧を軽く叩いた。

「この鎧には、レジストした低位の魔法の効果を完全に打ち消す力がある。生憎お前たちの魔法攻撃力では、私の魔法防御力を打ち破ることはできない」

仮に通ったとしてもたちち・みーの体力からすれば、その程度の魔法で与えられるダメージなどほとんど意味もないようなものだっただろうが。

天使も無駄。魔法も無駄。

ニグンの部下たちはどうしようもない恐慌状態に陥ろうとしていた。いつ逃亡し始めてもおかしくはなかった。

それを察知してか、それとも彼自身が堪えられなくなったのか。

「か、監視の権天使！ かかれ！」

ニグンはそう言つて、いままで彼の背後に控えていた二体の監視の権天使を攻撃に使用した。

メイスと盾を構えた二体が、見事な連携でたちち・みーに攻撃を仕掛ける。互いの攻撃が邪魔にならないように、それぞれどこか互いの攻撃がよりよい結果を引き出すように計算された、絶妙な連携攻撃だった。

それを、たちち・みーは盾で弾く。

「〈攻勢防御〉」

盾によって攻撃を弾かれた監視の権天使らが、大きく体勢を崩す。敵の攻撃を無効化し、同時に大きく体勢を崩させて致命的な一撃を誘発しやすくなる特殊技術だった。

完璧に発動させるにはシビアなタイミングが要求される特殊技術

だが、たっち・みーは二体を同時に相手にして、その両方に完璧なへ攻勢防御を發動させていた。

たっち・みーが片方の監視の権天使に向かって剣を突き出す。たまたま軌道上にあった天使の盾にたっち・みーの剣が当たり、それを豆腐のように貫いた。当然、その剣はそのまま天使の体にも突き刺さる。剣に天使を刺したまま、たっち・みーは力で無理やり腕を振るう。その結果、もう片方の天使にその天使が勢いよくぶつけられ、そしてそのまま吹き飛ばされた。

絡み合いながら吹き飛んだ二体の天使は、そのまま地面に激突、胴体部を貫かれた天使が先に消滅し、もう一体の天使も遅れて光に還っていく。

一瞬の出来事だった。

「あ、ありえるかあああああ!!!」

自身の切り札のひとつだったはずの二体の天使が一蹴され、ニグンが叫ぶ。

ニグンの部下たちも完全に動揺していた。

「た、隊長どうすれば!」

いつそ撤退することが頭を過ったニグンだが、何とか踏みとどまる。ここまでガゼフを追い詰めたのだ。この機会を逃がすことはできない。

懐に手を入れ、そこから輝く水晶を取り出した。

「最高位天使を召喚する! 時間を稼げ!」

ニグンが取り出したその水晶を見て、たっち・みーは警戒心を抱いた。

(魔封じの水晶。超位魔法以外を封じるアイテムだから……)

自身が専門の魔法職でないこともあって、それがどこまでのことができるアイテムなのか、たっち・みーは把握していた。

そこに、モモンガからの〈伝言〉が入る。

『たっちさん』

『モモンガさん。ちょうど連絡しようと思っていたところですよ』

『さすがですね。流石に恒星天の熾天使以上は出ないと思いますが、

至高天の熾天使が出てきたら、いまのたちさん一人ではお辛いでしよう。その際はアルベドと共に加勢に向かいます』

『お願いします。しかし、出てくるのが未知なるモンスターである可能性もあります。その際は一時撤退する方向で行きましょう。粉塵を巻き上げるなどして目くらましをかけますので、その隙に〈転移門〉をお願いします』

『了解です』

素早く話し合った二人が方針を決めている間に、ニグンの持つ水晶の輝きが増していく。その中に封じられたものが外に出てこようとしているのだ。

(しかし……隙だらけだな)

召喚を防ごうと思えば、たち・みーには容易なことだった。仮にここにいるのがモモンガでも同様だっただろう。魔法を一発撃てばそれで済むのだから。

それをしないのは、彼らの力の『底』を見ておきたかったからだ。ここまで追い詰められた上で使う切り札なのだから、それが彼らの震える最大の力であるとみて間違いない。それがどの程度のもので、今後の動きの方針は大きく変わってしまう。

最悪、切り札は切られてはならないものである可能性がある。その際は見敵必殺。これまで以上に諜報行動や奇襲作戦が重要になってくる。

果たして、どの程度の切り札なのか。

たち・みーが見つめる前で、ニグンが掲げるクリスタルが破壊され、それまで以上の光が溢れる。

「見よー。最高位天使の尊き姿を！ 威光の主天使——倍加」

それは光り輝く翼の集合体だった。異様な姿をしているが、神聖な存在。

それが、二体現れる。

たち・みーが息を呑む。

「これ、が……切り札……?」

ニグンはそのたち・みーの様子に、一気に安堵が噴出するのを感じ

じた。さすがの化け物も、この天使の前には驚愕をあらわにするしかないと知って。

「そうだ！ 怯えるのも無理はない。最高位天使が二体など、相対するお前にとつては悪夢でしかなからう！ 本来であれば一体で十分なのだろうが、念には念を入れさせてもらった！」

得意げに語るニグンに対し、たちち・みーが驚いた声をあげる。

「ちよ、ちよつと待て。いまのはどういう意味だ？ この天使を召喚したのは、その魔封じの水晶の力じゃないのか？」

慌てたように尋ねてくるたちち・みーに対し、本来なら応えることはなかったが、心地よささえ感じたニグンは鷹揚に応えてやった。

「私の生まれながらの異能の力だよ。召喚するモンスターを倍加する能力だ。本来であれば、魔法の威力があがるような生まれながらの異能持ちでも、魔封じの水晶やスクロールで使う魔法には効果がないのだが……私のそれは神に愛された特別なものでね。どんな方法であろうと、私が召喚する限りその効力は発揮されるのだ」

「……なるほど。生まれながらの異能という奴は何でもありだな。勉強になったよ」

納得した様子でたちち・みーは頷く。

そして、聞いた。

「それで？ いいのか？」

ニグンは一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「なに？」

「それが最後の切り札で本当にいいんだな？ 実はもつと別の奥の手を隠し持っていたんです、なんてことは言わないな？」

「……なにをいつている？」

「そうか……ないのか。いや、すまない。わざわざ友人に備えてもらったのに、無駄になったと思ってな」

たちち・みーはそう言って、なぜかこめかみに手をやった。剣を持ったまま、何気ない様子で。それはきちんと剣を構える行為の放棄だった。

「は……う？」

ニグンは理解できない。目の前の騎士が何故そこまで余裕な態度でいられるのか、まったく理解できなかった。

「……威光の主天使だぞ？ かつて、魔神をも駆逐した、最強の存在だ！ 人の身では決して到達できない第七階位の魔法を操る、伝説の……！」

「ああ。もういい」

言い募るニグンをむしろ哀れむように、たち・みーが言葉を放つ。「そいつをけしかけてくるなら早くしろ。それを待っている理由なんて、本当はないんだぞ？」

「——ッ！」

威光の主天使をまるで問題にしないばかりか、いつでもそれを潰すことができると言わんばかりの態度に、ニグンの感情が弾けた。それ以上喋らせてはいけないと、彼の心が叫んでいる。

決して認められない。最高位天使よりも強い存在がいることなど。

「〈善なる極撃〉を放てええええええええ!!」

最大全力での力の攻撃を求めた召喚者の意図に従い、威光の主天使の持つていた笏が砕け散る。その破片が主天使の周囲を旋回して、さらに力を引き出す。召喚ごとに一度しか使えないが、魔法威力を増幅させることのできる特殊能力を使用したのだ。

それが、二連。

並んで立つ二体の主天使がその力を解放せんと、互いに自身の周りを旋回する破片が当たらないようにしつつ、力がさらに渦を巻く。

——〈善なる極撃〉・二連。

光の柱が、地上に向かって落ちてきた。

それは一瞬でたち・みーを呑み込み、周囲にも余波として衝撃派を生じさせた。完全に光に呑み込まれた形になるたち・みーに対し、ニグンが笑みを浮かべる。

「は、ははははは！ さすがのお前も、これにはひとたまりもなかったか！」

自らが召喚したモンスターの強さを改めて実感し、ニグンは満足げだった。召喚時間が過ぎる前にこのままガゼフ・ストロノーフをも仕

留めるつもりだった。想定外の邪魔が入ったが、所詮はそれだけのこと。

そう、ニグンは思っていた。しかしその余裕も、威光の大天使の内、片方が消えていくのを見て、一気に消滅する。

「え……う？」

ニグンは状況の変化に頭がついていかなかった。何がどうして威光の主天使が消滅する状況になっているのか、理解できない。

その原因は、いまだに続く〈善なる極撃〉の中から、現れた。

たっち・みーという存在は、普通ならば跡形もなく消えてなくなるような力の奔流の中、まるでそよ風でも吹いているかのような気楽さで、その影響下から脱した。

「〈善なる極撃〉……属性が悪に偏ったものにより大きなダメージを与える魔法か。これをモモンガさんが受けていたらさすがに……いや、別にこの程度は問題ないか」

光の柱が、威光の主天使の片割れと共に消えていく。

何の役目も果たさないままに。

「あ、あ……ああ……」

ありえない。ニグンにはその言葉を呟くことさえできなかった。たっち・みーはゆつくりと歩みを進めていく。

ニグンは思い込みたかった。最高位天使を倍加するのは生まれながらの異能があっても、無理があった行為だったのだと。それゆえに、無理やりに形作られていた片方が、勝手に自壊して消滅してしまったのだと思いついた。

だが、そんな逃避をたっち・みーは許さない。

「お前の切り札の天使が消えてしまったことが不思議か？」

悠々と歩みを進めながら、たっち・みーは問う。

「単純な話だよ。〈魔法攻勢防護〉で〈善なる極撃〉を跳ね返したただだ」

軽く盾を掲げつつ、たっち・みーは言う。ニグンはもはやたっち・みーが何を言っているのか理解できなかった。

「魔法に抵抗した上で、絶妙なタイミングが要求される技……本来な

ら、二発とも跳ね返したかったんだが、さすがに腕が鈍っているな」
鍛え直さなければ、とたっち・みーは呟く。それは錆びついた腕で
その実力であると言外に告げていた。

「さて、もう終わりか？ 威光の主天使が命令を待ってるぞ？」

悠々と告げられた言葉に、ニグンは無様に口を開閉することしかで
きない。たっち・みーに少しでもダメージを食らっている様子があれ
ば、即座に二発目を放てと命じただろう。少しでもダメージが入って
いるのなら、希望はそこにあると信じて。

しかし、たっち・みーに対してはそもそもダメージが通っているよ
うに見えない。さらには、〈善なる極撃〉を放ったところで、また跳ね
返されるのではという危惧もある。ゆえに、ニグンは動けない。動か
なければその絶望的な状況がどうにかなると思っていたわけではな
い。だがいまのニグンにはそれが精一杯の抗いだった。小さな力し
か持たない人間が、強大な力をもって荒れ狂う自然の猛威を前に、た
だ過ぎ去ってくれることを祈るように、ニグンには何もできなかった。

自然災害ならばニグンを見逃したかもしれないが、目の前にいるの
は自身に敵意を持って迫る化け物である。その化け物が、ニグンが動
かないのを見て、小さくため息を吐いた。

「虚無に消えろ——〈次元断切〉」

一刀両断。

威光の主天使は真つ二つに切り裂かれたかと思うと、その剣によつ
て切り裂かれ、開いた虚無の空間に吸い込まれて消えてしまった。
神々しく光を放っていた存在が二つとも消滅し、あたりに薄暗闇が
戻ってくる。気づけば日が沈みかけ、周囲は闇に閉ざされようとして
いた。

そんな中でも、存在感を持って輝いたたっち・みーが、ゆつくり、歩
を進める。万策尽きて何もできなくなったニグンの配下を横目に、
たっち・みーはニグンのすぐ傍に立った。

「さて、お遊びはここまでだ」

その言葉に、ニグンは己の運命を悟った。がたがたと体を震わせな

がら、その場に膝を突く。

泣き叫んで助けを請うべきか。たち・みーは部下の命も奪わなかった。たとえそれが情報を引き出すための手加減だったとしても、そこに生きる活路はある。

「ま、待て！ 待ってほしい！ たち・みー殿！ いや、様！ 待つてください！ 取引を、取引をさせてほしい！ お願いです！ 決して損はさせません！ 私たちは……いや！ 私だけでも構いません！ 私はこれでも国では価値のあるもの。破格の金額でも国は出してくれるはずです！ なにとぞ——ぶへっ！」

たち・みーに対して懇願していたニグンは、突如顔面に生じた激痛にもんどりうって倒れ、その場で無様に転がった。たち・みーがその顔を蹴り飛ばしたのだと、周りで見ていた者たちは理解できた。「……もう忘れたみたいだから思い出させてやろうか？ お前は最初、私に向かってなんといった？」

ニグンは顔を抑えながら、なんとか声を絞り出した。

「あ、あれは……！ あなた様のことを理解できていなかったのです！ ここまで素晴らしい……並び立つ者などいようはずもない騎士であると知っていたなら、貴方を侮辱するような言葉など決して吐かなかった！ 伏して、伏してお詫びする！ 放った言葉はすべて撤回する！ だから——」

「違う」

たち・みーの強い言葉が、ニグンのみならずその場のすべての者の動きを封じる。迸る青い怒りのオーラが、静かに燃えるたち・みーの激情を現しているようだった。

「私のことなら、別に構わないんだ。後ろ指を指される覚悟も、バカにされる覚悟もできている。私のことだけを悪く言うのなら、私はお前のような存在でも楽に殺してやるつもりだった」

だが——。

「お前は言ったな。私が助けた存在は『糞の役にも立たない者』だと。私のことだけではなく、私が助けた者達まで、悪し様に侮辱したな？」
それだけは、絶対許せない。

たっち・みーの全身から、威圧感が迸っている。ニグンの部下が次々と気絶する中、ニグンは気絶することも許されず、ただ目の前に存在する怒れる騎士の威圧感を真正面から浴びていた。

その時、空がパキン、と割れて何らかの探知魔法に対する防御が発動したが、誰もそれに注意を向けなかった。

たっち・みーはニグンを見下しながら、最後の言葉を告げる。

「私の大切な友人のことまでも侮辱したお前に、かける慈悲は一切ない。ただ、絶望に身を浸し、自分の行動を後悔しながら死ぬがいい」
たっち・みーはすつ、と指を伸ばし、ニグンの背後を指差した。
「ほら、わざわざ出迎えに来てくれたぞ？」

ニグンが振り返るよりも早く、その肩を骨だけの手が掴む。

「はじめまして。たっちさんを怒らせた愚か者」

いつそ清々しいほどに穏やかな声が、ニグンの耳元で囁かれる。凄まじい力で肩を握りしめられ、その骨や関節が砕ける。

悲鳴をあげようとしたその口を、背後から伸びてきたもう一つの手が塞ぐ。

「もう、喋ってくれるなよ。これ以上たっちさんの耳を穢すことは許さない。お前のような存在がいることを、たっちさんに認識させたくもない」

ニグンがたっち・みーに投げかけた侮辱の言葉を皮肉にも応用して、その存在は死を告げる。

凄まじい力が、ニグンを絶望へと引きずりこもうとしていた。ニグンの抗う力など、何の抵抗にもなりはしない。

黒い孔に呑み込まれながら、ニグンはやけにはつきりと声を聞いた。

「たっちさんを侮辱した罪、その命でしっかり購ってもらおうぞ」

最後に辛うじて振り返ったニグンの視界には、空虚な頭蓋を晒した骸骨の化け物と、その背後に控える無数の死者の軍勢が映った。

そして、ニグン・グリッド・ルーインは地獄に落ちて——二度と帰ってこなかった。

地下大墳墓への帰還

近づいてきたガゼフ・ストロノーフが、あからさまにこちらに警戒心を抱いているのを、たっち・みーは苦笑を持って受け入れた。

(警戒するのも無理もないか)

ガゼフを殺しに来ていたあのニグンという司令官がああ強さだったのだから、ガゼフの強さも大まかには察することができる。彼にしてみれば、いくらモモンガやたっち・みーがいまは味方とはいえ、敵に回ったときのことを考えざるを得ないのだ。いざ敵対したとすれば、ニグンと同じように絶対に勝てない、と。

だが、少なくとも今はたっち・みーにガゼフと敵対する気はない。「敵はすべて捕えたぞ。司令官と半分ほどはこちらで預かるが、もう半分は貴方たちが連れていくといい。必要だろうか?」

すでにニグンも含め、必要な分の敵はモモンガがナザリツクに連れ去った後であったが、たっち・みーは念の為確認する。

事件の首謀者である司令官は引き渡すように要求してくるかと思っただが、ガゼフはあっさりを受け入れる。

「感謝します。たっち殿」

万が一にもたっち・みーやモモンガを刺激しないようにだろう。ガゼフは硬い口調で応じていた。

そのことを、たっち・みーは少し寂しく思う。

(気にせず話してくれ……というのはさすがに傲慢か)

それがわかっていたため、たっち・みーはこの場で何かを言うのは控えた。代わりに別のことを口にする。

「改めて報酬の話をしてもいいか? まず金額の話だが、これはガゼフ殿に任せる。貴方が払ってもいいという金額を支払ってくれ」

それはガゼフの人柄を信用しての言葉だった。不足するような支払いをする男ではないと判断してのことだ。また、こちらが向こうを信用しているということが少しでも伝わればいいという意図での言葉でもある。

ガゼフも鈍い方ではなく、そのことは通じたのか、かすかに態度が

軟化する。

「……わかりました。必ずや今回の報酬額に見合う支払いをしましう」

しかし、一方的に任せるということは、不足していた場合に難癖をつけられる可能性があるということではある。たち・みーの人柄をガゼフも信用していればそうはならないだろうが、果たしてそこまで伝わっているかは甚だ疑問だった。ゆえに、たち・みーは先んじて予防線を張っておく。

「金額の多寡に文句をつけたりはしないから安心してくれ。それは我が剣をかけて誓う」

相手が戦士であることを踏まえての誓いの言葉だ。案の定、ガゼフはたち・みーの言葉をかなり重く受け止めたようだった。

「承知しました。私も王に賜りしこの剣に誓って、正当かつ妥当な報酬をお約束します」

問題なく交渉がまとまったことを受け、たち・みーは満足げに頷く。

「それと、これは報酬とは別の話だが、私た……いや、私個人としては貴方と親交を結びたい。貴方のような人間は好ましいからな。今後互いにとって不幸な行き違いが起こらないよう、連絡方法を確立したい」

そう提案すると、ガゼフはさすがに驚いたようだ。

「それは……光栄です。むしろ、こちらからお願いたいくらいです」「連絡方法は……そうだな。この村に仲介をしてもらおう。私たちの配下をここに常駐させる。もし私たちに連絡したいことがあったら、その配下を通せばいい。報酬もこの村に運び込んでくれ」

「わかりました。……たち殿。村を救っていただき、我々も救っていただき、さらには格別のご配慮をしていただき……感謝の言葉もありません」

ガゼフは深く頭を下げる。その言葉には決して強大な存在である彼らを怒らせないように、という畏怖だけではなく、確かに感謝の念が感じられた。それを感じて、たち・みーはやはりこのガゼフとい

う男は気に入るに値する人間だと確信した。

「いや、困っている者を助けるのは当たり前だ。気にするな」

ニグンには馬鹿にされた言葉。

「……素晴らしいですね。私もそうありたいものです」

ガゼフはその言葉に眩しいものを感じたような、少し苦い顔で同意した。たちち・みーは少し考え、手をガゼフに向けて差し出した。

「今後どういった付き合いになるかはわからないが、願わくば友好的な関係を築いていきたいな」

「……ええ、そうですね」

ガゼフはたちち・みーの手をしっかりと握り、力の籠った握手を交わした。

「王都に來られた際には、ぜひ私の館に寄っていただけますか。歓迎させていただきます」

「ああ。いつになるかはわからないが、必ず寄らせてもらおうよ」

どのような形になるかはわからないが、この世界のことを知るためにも、いずれは色んなところを訪れる必要がある。たちち・みーはそう考えていて、その時に拠点として使える場所があれば便利だと考えていた。そのため、ガゼフの提案は渡りに船だった。

しっかりと交わした握手を解く。

「私たちは一晩村に世話になって、明日報告に戻るつもりですが…… たっち殿たちはどうされるのですか?」

「……ん。そうだな。拠点に戻ろうと思う。拠点の詳しいことは言えないが、それでもそれなりに大きな拠点と多くの配下を抱えていてね。今回は急いで出てきたから、戻って配下たちを安心させてやらねば」

ちようどたちち・みーがそう言ったとき、その背後に黒い〈転移門〉が開く。

「たっちさん。捕虜の収容は終わりましたよ」

現れたモモンガはきちんと手甲を身に着け、仮面を被っており、怪しげな魔法使いの姿になっていた。

ガゼフはモモンガが現れた時、明らかに緊張を強くしていた。それ

を見て、たっち・みーはモモンガがどれほどガゼフを畏怖させたのか悟る。

「ああ、ありがとうございます。モモンガさん」

そもそも〈転移門〉の魔法自体、ガゼフにしてみればどれほど高度な魔法であるのか。それをあつさりと何度も使うモモンガに恐れをなすのは無理からぬことだ。だからあえて触れないことにした。

たっち・みーはモモンガの〈転移門〉に近づく。そしてモモンガを促す。

「では、我らが家に帰りましょう。……ガゼフ殿。次に会うときまで息災であることを祈るよ」

「ありがとうございます。たっち殿、モモンガ殿。お二人に助けられた恩、一生忘れません」

その言葉と共に頭を下げるガゼフの前から、たっち・みーとモモンガは〈転移門〉を潜って掻き消える。

そして、二人はナザリック地下大墳墓に帰還した。

すでに先にナザリックに戻っていたアルベドが、二人を出迎えた。

「おかえりなさいませ。モモンガ様、たっち・みー様」

いまだ完全武装の姿であり、その表情は見えなかったが、そこには至高の存在である二人が傷つくことなく無事だったことに対する安堵が感じられる。正確には〈善なる極撃〉によってたっち・みーの体力は減ったが、徐々に回復する特殊技術を有しているため、すでに傷はないも同然だった。

膝について忠誠を現すアルベドに、モモンガが鷹揚に指示を出す。

「ご苦勞だったな、アルベド。ナザリックの警戒態勢を最大から通常に戻し、守護者各員には昨日命じた通りの作業に戻るよう伝えよ」

「承知いたしました。あの村の管理体制についてはいかがいたしましたでしょうか？」

「そうだな……確か、後詰としてエイトエツジアサシンが出向いていたな？ ひとまずそのうちの数人にそのまま監視を続けるように伝えよ。あの村は友好的な関係を築くことに成功した村。不仲になる

ようなことは極力避ける。我々以外の何らかの脅威によって村人が害されそうになったときは、即座に我々に報告をし、エイトエツジアサシンたちに被害が及ばない範囲で助けてやれ。これは暫定的な処置とし、後日正式な管理体制を敷く」

モモンガはそう矢継ぎ早に指示を出し、それでいいかとたち・みーに視線で確認を取る。当然、たち・みーに不満があるはずもない。静かに頷く。

了承したアルベドが去った後、モモンガとたち・みーは示し合わせて円卓の間に転移した。

所定の位置に座ったたち・みーは、ようやくナザリックに帰ってきたことを実感し、息を吐く。

「ふう……なんとかかなりましたね」

「そうですね。色々欲しかった情報がわかりましたし、今後役に立ちそうな現地の拠点を得られましたし……かなり前進したと言えます」

懸念すべきは、とモモンガは言う。

「監視魔法を放っていた存在……推定スレイン王国は問題ないとして、あのガゼフという男から、王国には必ず私たちの情報がいく……ということでしょうか」

「国に知られる以上は、一気に広まると考えていいでしょうね」

「ええ。表に裏に、どこまで情報が浸透するのか……今後はより慎重に動くべきだと思います」

いつかは知られてしまうこととはいえ、本当にこれでよかったのかとたち・みーは考える。もつと潜んで行動した方がよかったのではないか。そう考え始めると、さすがに少し不安になってくる。村人を助けたことに後悔はないが、それでもナザリックを危険に晒すことになってしまうのなら、たち・みーは衝動を我慢するべきだったのかもしれない。

「それにしても、たち・みーさん、全然鈍ってないじゃないですか！ まさかへ善なる極撃をへ魔法攻勢防御で跳ね返すほどとは……数年間のブランクはどこやっちゃったんですか？」

モモンガが楽しげにそう問いかけてくるのを受け、たっち・みーは苦笑するしかない。

「あの手のは体に染みついてますから。……それに、ユグドラシルを引退したあとも、なんだかんだで思い出してはいましたからね」

一時期は夢にまで見たほどだ。日常生活でも、テレビのCMで何かのゲーム映像が流れた時、あの手の攻撃に対処するにはどの特殊技術が相応しいか、などということをおぼろげに考えてしまったこともある。引退したつもりで、まったく引退できていなかった頃のことを思い出して、たっち・みーは恥ずかしくなった。

しかし、モモンガはそんなたっち・みーの言葉を聞いて、感動していた。

「たっちさん……さすがです」

「いえ、そんなことは……」

そう応えつつ、たっち・みーは少しの危惧を覚える。どうも、モモンガは自分を敬いすぎだと感じたのだ。さっきのアルベドに対して命令をしたときもそうだ。確かにアインズ・ウール・ゴウンは多数決を重んじるギルドだったから、何かしらギルドとしての決定をするときは、ギルメンの意向を確認するのは自然な流れだろう。

しかし、先ほどのモモンガのそれは、たっち・みーの意向を優先しようという意思が透けて見えていた。それは、モモンガの中でたっち・みーが大きな存在すぎるからだ。

アインズ・ウール・ゴウンのギルド長はモモンガで、ここまでギルドを維持し続けてきたのはモモンガなのだから、たっち・みーの意向を優先しすぎるのはよくない。意見を戦わせる対抗馬としてウルベルトなどがいれば話は違ってくるのだろうが、いまはモモンガとたっち・みーの二人だけだ。

たっち・みーは自分が意識して、モモンガの意向を優先していくべき、という結論を出した。

(モモンガさんはよくても、守護者たちの中には不満に思う者がいるだろうし)

その脳裏には、デミウルゴスが浮かんでいた。

「さて……この世界における橋頭堡も得たところで……改めて、今後アインズ・ウール・ゴウンがどう動くべきか、コンセンサスを取っておきたいと思うのですが」

「ええ。私もちようどその話がしたかったところです」

モモンガとたち・みーは表情を引き締め、話し合いを始める。

「まず、この世界を知ること。これは必須ですね」

「そうですね。その上で、元の世界に戻る方法や、他のギルメンがこちらに来ているかを探りましょう。いや……ギルメンに限らず、ユグドラシルのプレイヤーがこちらに来ているかに注意しないといけませんね」

王国最強と呼ばれていたガゼフがあレベルだったため、この世界の原住民にはほとんど敵がいけないのではないかと二人は考えていた。無論例外的存在はありうるし、注意しなければならないが、いま知りうる中で、最大の警戒を抱かなければならないのは、自分たちと同じようにこちらの世界に転移した者がいるかどうかだ。

アインズ・ウール・ゴウンはユグドラシル内において、悪名高いギルドだった。構成員が全員異形種であったことや、PKKを率先して行ったということが、大きく噂に尾ひれがついて「極悪非道なDQNギルド」と称されることもあった。もし、その情報を鵜呑みにしたプレイヤーがいて、こちらに転移してきていたら、敵対は避けられなくなる。恨みを買っていた自覚はあるが、かといってそれで攻撃されはたまらない。

たち・みーはワールドチャンピオンであり、ユグドラシルの中でも最強に等しかったが、それでも数年のランクがある。最近導入された新要素には対応が遅れるだろうし、そもそもPVPに絶対はありえない。

だから、少なくともアインズ・ウール・ゴウンを名指しで敵対してくるような相手以外の、普通のプレイヤーとは友好的関係を築けるようにしておきたい。

「異形種になってしまった私達にとっては現地住民はさほど共感を抱かない存在ですが、恐らく人間種であればかなり元の人間に感性が近

いはず……今回のように非道を行っていた悪人相手ならともかく、普通の一般人に対して虐殺を行えば、その印象はかなり悪いものになるでしょうね」

「できれば大義名分が欲しいところですね。ギルドに攻め込まれたときはともかく……今後、こちらから打って出るときは何かしら後ろ盾があつた方がいい。可能ならばどこかの国に所属して、その後ろ盾を得たいところですが……」

「まだこの周辺国の情報が集まりきっていないので判断は難しいですが、下手な国家を後ろにつけると、後ろから刺されたり、内部から崩そうとしてくる可能性はありますね。そういう意味ではナザリツクの者たちは大丈夫でしょうけど」

「……そうですね。いえ、しかし絶対の忠誠を悪戯に信頼するのは問題です。私が主な原因なのであまり言えませんが、忠誠を覆されないように、振る舞いなどには十分気を付けておかないと」

「むう……そうかもしれません。彼らが不満を抱え込まないように、上位者として十分注意しつつ、接する必要があるですね」

モモンガは納得し、頷く。そんなモモンガに対し、たちち・みーは一つの提案をした。

「モモンガさん。実はそれに関してひとつ考えていることがあるのですが……」

たちち・みーの提案を受け、モモンガはものすごく微妙な感情のオーラを発する。

その後、たちち・みーの提案を双方が納得するものにするための話し合いは、5時間にも及んだのだった。

ナザリツク地下大墳墓②

たち・みーは何人ものメイドの手によって、可能な限り丁寧に、かつ大事そうに自室に運ばれてきたそれを見て、懐かしい気持ちになった。

「……過去の栄光の証……いや、これからの道を切り開く道具、だな」
そこにあつたのは、純白の鎧。胸の中心には拳大の巨大な青い宝石——サファイアが埋め込まれており、神々しい光を放つ。その鎧の傍にあるだけで清浄な空気が広がっているようで、神聖な雰囲気にも包まれる。

ワールドチャンピオンにのみ、与えられる特別な武装のひとつであり、その能力はかの神話級アイテムの枠を超え、スタッフ・オブ・アインズ・ワールド・ゴウンのようなギルド武器と同じ域に達している。かつてギルドを、ユグドラシルを引退するときにもモンガに預けていた鎧だが、それが宝物殿から出されたのだ。当然、たち・みーが身に着けるためである。

「モモンガさん、大丈夫だったかな……？」

先ほど、この鎧が運び込まれる前、モモンガから〈伝言〉の魔法で連絡が入っていた。宝物殿にはとある事情からモモンガだけが赴いていたのだ。そのとある事情ゆえにモモンガの声にはどこか覇気がなく、たち・みーはフォローを入れるべきだったかと迷う。

宝物殿はモモンガが作り出したNPCであるパンドラス・アクターが守護している。そのだけならば何の問題もないことのように感じるが、その存在がモモンガにとっての黒歴史そのものだということが問題だった。

パンドラス・アクターを作った当時のモモンガが「格好いい」を思った要素を過剰に取り入れているせいで、いわゆる「若気の至り」を掘り起こされてしまうのだとか。

それは人が気にしないように言っても解決できるようなことではない。たち・みーとしては時間をかけてモモンガが克服できればよ

いと考えていた。

「さて……早速着替えるか。頼む」

そのたっち・みーの言葉に従い、部屋に控えていた何人かのメイドが鎧の脱着を手伝ってくれた。ユグドラシル時代には鎧の変更はコンソールの操作一つで可能だったが、この現実世界ではそうはいかない。いくら装備し慣れたその鎧でも、細かな鎧の装着の仕方まで熟知しているほど、たっち・みーは鎧オタクではなかった。魔法やらアイテムで身に着けてしまえば話は早いのだが、モモンガと違ってそれ用の魔法を習得していないし、普段の着替えでアイテムを消費するのも馬鹿らしい。

それゆえ、たっち・みーはメイドたちに命じて着替えを手伝わせていた。それは上位者としての振る舞いとしては当たり前のことだったらしく、メイドたちから怪訝な視線を向けられることはなかった。むしろ至福の感情を浮かべるものだから、たっち・みーの方が軽く引いたものだ。

(ただ身支度を手伝ってもらってるだけなのに……ここまでくると、完全に崇拜の域だよなあ……)

彼らNPCたちにとって、製作者である41人は至高の存在であり、造物主、つまりは神に誓い存在なため、彼らにしてみればその認識で間違っているわけではないのだろうが。

「たっち・みー様。終わりました」

鎧の装着が終わったらしく、メイドたちが一歩離れて礼をする。

「……うむ。ありがとう」

「感謝など勿体ない！　メイドとして、当然のことをしたまでです！」
「……う、うむ」

何かをしてもらったからお礼をするのは当然、というたっち・みーにとつて、そこまで無私に徹して仕えられるとむず痒いものがあるのだが、上位者として接する必要があるたっち・みーは言葉を呑み込んだ。大きな姿見の前で、自身の姿を確認する。そこにいたのは、かつてユグドラシルというゲームの中で見飽きるほど見慣れた”純銀の聖騎士”たっち・みーだった。

(……この姿になると、自然と身が引き締まるな)

ワールドチャンピオンという立場にあった当時は、否が応でも周囲の注目を浴びた。だからこそ、振る舞いには気を付けていて、その頃の名残でこの姿をしている間は情けない姿は見せられないと思う。

気を引き締めていると、部屋の扉がノックされた。扉の前で控えていたメイドの声が響く。

「たっち・みー様。デミウルゴス様がお見えになりました」

ある話をするために呼び出した相手が来たことを知り、鎧を身に着けたことで引き締まった気持ち、さらにもう一段階引き締める。

(ある意味、村で敵を相手にしたときよりも緊張するな)

たっち・みーは入室の許可を出しながら、入口へと向き直った。

それと同時に、たっち・みーの自室の扉が開いていく。

デミウルゴスは目の前で開いていく扉の隙間から、まるで神秘的な輝きが溢れてくるような感覚を覚えていた。

それは部屋の中に満ちていた清浄な空気を感じ取ったからであり、それに対してカルマ値が極悪であるデミウルゴスは若干の居心地の悪さを感じてしまう。決して不快なわけではないが、真綿で優しく首を絞められるような、圧迫感を覚えるのはどうしようもないことだった。

意思の力でそれを心の奥に押し込め、デミウルゴスは部屋の主に向かって礼をする。

「デミウルゴス、お呼びにより参上いたしました」

部屋の主は、凜とした態度で立っていた。その身を覆うのは、至上の純白の鎧。部屋に満ちていた清浄な空気は、すべてその部屋の主から発されていたものだ。デミウルゴスは悟る。剣や盾は装備していないものの、その存在の強大さは肌で感じられるものであり、敵対するものは自然と頭を垂れることだろうとデミウルゴスは感じる。そうしない者はただの愚者だ。

(しかし……これほどとは)

これまでたっち・みーから感じていた威圧感というものが、意図的

に加減されたものだったのだとデミウルゴスは看破していたが、それでも、本来の威光を取り戻したたち・みーから感じるものは彼の想像を超えていた。たち・みーはまぎれもなく至高の41人の一人であり、神そのものであった。

「そんな神聖な存在が、彼に向けて声をかける。

「よく来たな。入れ」

入口のところで足を止めていたデミウルゴスは、許可を受けて部屋の中へと入る。

それと入れ替えるように、たち・みーはメイドたちに命じて部屋から退出させた。

部屋の豪華な椅子に腰かけながら、たち・みーはデミウルゴスに向かつて尋ねる。

「さて、お前に来てもらったのは、訊いておきたいことがあったからだ」

「私に答えられることでしたら、何でも答えさせていただきます」

「まあ、そう硬くなるな。世間話をするような気楽さで応えてくれればいい」

軽い口調でそうたち・みーは言う。

「単刀直入に訊こう。お前は私のことが気に入らないか？」

デミウルゴスにとっては、超級の爆弾を落とした。

即座に否定の言葉が出なかった。それはデミウルゴスが至高の存在からの質問に対し、安易な即答を避けたためだ。

口先だけで「そんなことはない」と否定するのは簡単だ。もしもこれが同等の存在であるセバスから「私のことが気に入らないか」と問われたのならば、デミウルゴスはその時の状況に合わせて何とでも答えただろう。なるべく波風の立たない返答を心がけ、ナザリツクのためになるようにしたはずだ。

しかし、現在デミウルゴスに問いかけて来ているのは、至高の存在であるたち・みーだ。それに対し、作為的な答えを返すことをデミウルゴスは許容できなかった。かといって、自分が感じていることをそのまま伝えるのも躊躇われる。

それは微妙な躊躇いであり、刹那の空白だったが、たちち・みーにその意図を悟らせるのには十分な時間だったようだ。

「そうか。そうだろうな。いや、すまない。意地の悪い質問だった」
たちち・みーはそう言つて頭を下げる。それにデミウルゴスは慌てた。たちち・みーが謝るべきことなど何も無い。謝罪すべきは作られた存在でありながら即座にその意思を肯定できない自分の方である。本来であるならばその場で命を絶たなければならぬほどのことだ。ゆえに、デミウルゴスはその場で膝を突き、心からの謝罪を口にする。

「大変申し訳ありません！ 仕えるべき存在でありながら……！ どううか、如何様な罰でもお与えください！」

「いいんだ。デミウルゴス。わかつている。むしろ、何の躊躇いもなく否定された方がお前の忠誠心を疑っていたぞ？」

苦笑と共に齎された言葉に、デミウルゴスは驚いて顔を挙げた。たちち・みーは慈悲深い目で、デミウルゴスを見つめていた。

「お前を作ったのはあのウルベルトだ。私と彼の関係性はお前もよく知るところだろう？ いままでこそ、あいつとの喧嘩も懐かしい思い出だが、当時は本気で嫌悪し合っていた自覚があるからな」

昔を懐かしむ様子で、たちち・みーは天井を見上げた。そして、再びデミウルゴスに視線を戻す。

「お前が私のことをどう感じているかなど、そのことを思えばわかりきったこと。そして、お前はこのナザリックの中でも指折りの知恵者。無難に応えようと思えば、なんとでも答えられたはずだな」

その問いかけは質問ではなく、確認だった。

「そうしなかったのは、お前の忠誠心の表れ。私という存在に対し、否定の言葉を吐くのは躊躇われる、しかし、実際に感じているのとは違うことを応えるのも躊躇われる。そんな葛藤があつたのだろうか？」

デミウルゴスはすべてを見透かされている思いで、ただ続く言葉を待つことしかできなかった。

「さっきの質問には答えなくていい。代わりの質問だが、お前は人間を助けることについてどう思う？」

「……無礼を承知で申し上げます。ただの人間と言う、脆弱で愚かな存在に対しては、慈悲をかける価値もないと考えております。しかし、もし仮にそれがナザリツク地下大墳墓のための利益に繋がりを助けるだけの価値が生じるのであれば、その限りではありません」

助ける、という言葉に含まれる意味が、たちち・みーのそれと同一ではないと自覚していた。だが、その程度のこととはたちち・みーには容易く看破されていることだろう。

たちち・みーはそんなデミウルゴスの答えを聞いて、満足げに頷いた。

「私からの答えづらい質問に対しても、真摯に応じるその姿勢。やはりお前は最高の忠臣だな。とても嬉しいよ、デミウルゴス。私の見立ては間違っていないかった」

たちち・みーから直々に下されたその望外の評価に、デミウルゴスは深く感じ入った。正直、デミウルゴスの方こそ、たちち・みーには良くない印象を持たれているのではないかという想いがあったのだ。デミウルゴスの趣味嗜好が、たちち・みーのそれと相容れないであろうことは明らかで、それゆえにたちち・みーに気に入られることは難しいと考えていたのだ。しかし、実際はデミウルゴスがたちち・みーに感じる微妙な感情さえも許容し、その上で「最高の忠臣」であるという評価を授けてくれた。

至上の喜びが齎された衝撃に、涙が溢れそうになる。

「勿体なきお言葉……」

顔を伏せてそれを隠しながら、デミウルゴスはたちち・みーに対する忠誠心を一層強く持った。

その指向を超え、より深い忠誠を誓うデミウルゴスに、たちち・みーが優しく声をかける。

「そんなお前だからこそ、私からお前に頼みたいことがある。これはすでにモモンガさんには了承を得ていることだ。全体への通達の前に、お前には先に伝えておく」

そしてたちち・みーが口にしたことは、デミウルゴスにとって想像もしていないことだった。

デミウルゴスに伝えるべきことを伝えて退室させたのち、たっち・みーは一人になった部屋で大きく息を吐き出した。

(やれやれ……なんとか、上位者としての威厳は保てたかな?)

デミウルゴスはナザリックの中でも有数の知恵者だ。その叡智は極普通の一般人であるたっち・みーには及びもつかないものだろう。幸い忠誠心も人一倍なため、モモンガのようにただ崇拜されているなら問題はないかもしれない。

だが、たっち・みーのように製作者とのいざこざがあつて、よい感情だけを抱かれていない場合は、所詮は一般人程度の理解力や判断力しか持たないことを看破され、侮られる恐れがあつた。

もしそれが原因でデミウルゴスがモモンガのことまで見限るようなことになったら、状況は最悪だ。最高峰の知恵者が悪意を持って張り巡らせる策謀に対応できるとは思えない。モモンガにまで危害が及ぶかもしれないと考えれば、たっち・みーは先んじて様々な手を打つておく必要があつた。

(ひとまず、デミウルゴスに対してはこれでいい。次は……)

そう考えているうちに、部屋の扉が再びノックされた。力の抜けた体勢になっていたたっち・みーは慌てて居住まいを正す。

「なんだ?」

メイドの声が響く。

「セバス様がお見えになりました」

先ほど、デミウルゴスが来たと聞いた時よりも遙かに強い緊張が、たっち・みーの全身を走る。

意図的に一拍返事を遅らせ、努めて冷静になることを意識しながら、たっち・みーは応じる。

「入れ」

声に応じて入口が開き、そこにたっち・みーが作成したNPC、セバス・チャンが立っていた。

「失礼いたします。たっち・みー様。お呼びにより、参上いたしました」

「……つむ」

思わず返答が硬くなってしまったのは、なんと声をかけていいものか悩んだからだ。

たち・みーはセバスが自分に対して怒っていると考えていた。いくらリアルの世界が忙しく、どうしようもならなかったとはいえ、彼らユグドラシルの存在を見捨てたに等しいのは事実。第六階層の闘技場で守護者たちに自分たちの印象を聞いた時、セバスが口にしたように「見放した」と言われてもたち・みーには否定することができない。

とはいえ、何の因果かこうして共に異世界に転移し、NPCたちにも命が宿った以上、本格的に動き出す前に、そのあたりの清算を済ませなければならなかった。

そのため、たち・みーは長くナザリックを開けてしまったことを謝るために、セバスを部屋に呼んだのだ。だが、いざ本人を目の前にする時、どう声をかけていいのかわからなくなってしまふ。

(いや……もう、とにかく謝るしかない。モモンガさんも、背中を押ししてくれたんだし)

セバスが部屋に入って来て、扉が閉まったことを確認する。たち・みーはまずは軽く労いの言葉からかけることにした。

「大墳墓周辺の探索ご苦労。急に呼び戻すことになってすまなかつたな」

最初に顔合わせをしたあと、セバスは自ら率先して大墳墓周辺の探索を行っていた。それを呼び戻すことになったのは、全員に重要な通達を行う必要があったからでもあるが、セバスに対してはたち・みーが個人的に話したかったこともあり、一足先に呼び戻していた。

たち・みーの労いに対し、セバスはいつもの深い落ち着きを持った声で応える。

「何をおっしゃられますか。至高の御方々のために働くことこそ、我らにとっては何よりの喜びでございます。むしろ、私の勝手な判断で周辺探索へと赴き、モモンガ様やたち・みー様の御傍に控えられずにいることを、伏してお詫び申し上げます」

完璧な礼でセバスは頭を下げる。しかし、負い目があるたち・みーからすると、そんな風に頭を下げられるのには、何とも言えない居心地の悪さがあった。

「う、うむ……いや、それは構わん。ところで……今回お前を呼んだのは、だな」

「たち・みー様。先に、私の方から申し上げさせていたただきたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

唐突にセバスからの主張が発されて、たち・みーは心臓が縮み上がるような感覚だった。曲がりなりにも主人の言葉を遮つてまで言いたいこととは何なのだろう。

（まさか……それほどまでにセバスは怒っていたのか!? もう主人としてみたくもないと!?)

最悪の事態にたち・みーは気が遠くなる思いだった。たまたま座っていた幸運に感謝する。もしも立っていたら、あまりのショックによるけることは避けられなかっただろう。

たち・みーは内心の動揺や体の震えを抑え、セバスに向けて許可を出す。

「……許す」

そう声に出すのが精一杯だった。

セバスが口を開くのを、死刑執行を待つ罪人の気分でたち・みーは受け入れた。

ナザリツク地下大墳墓③

たっち・みーの自室に呼ばれたセバスは、言うならばこのタイミングがつかないというところで、主人に発言の許可を求めた。

「……許す」

聞く者に重厚な威圧感を自然と与える声で、たっち・みーが許可を出す。

セバスが忠誠を誓う至高なる存在は、『主人の言葉を遮る』という不敬を行った自分に対しても、寛大に発言の許可を与えてくれた。

本来であるならば、主の言葉を遮るなど許されざることだったが、それでもセバスにはその原則を曲げてでも、絶対に最初に言っておくべきことが、言わなければならぬことがあったのだ。

許可を受けたセバスは、片膝を突き、そして、もう片方の膝も床につけた。

そして、両手をも床について、床に額がつくほど頭を下げ——土下座の姿勢で深く、深く謝罪した。

「たっち・みー様。闘技場にて無様な姿を晒してしまったこと、深くお詫び申し上げます」

その言葉に、たっち・みーの言葉はなかった。それはセバスにとって当然だった。

あの時、たっち・みーの存在を認識したとき、セバスはあまりの衝撃により、完全に自分の職務を忘れてしまっていた。モモンガというナザリツクの絶対的支配者に対する礼も忘れ、ただ感動に打ち震えていた。それはこの上ない不敬であり、失態だ。

さらには、たっち・みーから「ご苦労」と労いの言葉をかけられたときは、セバスは自分の造物主が帰ってきた確かな実感と、その絶対的存在に自身の働きを認められるという喜びのあまり、感動のあまり咽び泣きそうになってしまった。全精神力と、物理的に血が流れるほど拳を握りしめることでそれはなんとか堪えたが、たっち・みーに対する返答は語尾の潰れる無様なものとなってしまった。

たっち・みーには、自分の創造した存在がそんな醜態を連続で晒すところを見せてしまったのだ。

本来なら、あの場で首をはねられていてもおかしくはない。そうしなかったのはたっち・みーが恩情溢れる存在であるからにすぎない。「私のような職務を全うできずに無様な醜態を晒した執事を、たっち・みー様はその際限なき恩情にてお許しくださいました。しかし、それでは他の者に対して示しがつきません。どうか、厳罰に処していただきたく思います」

そういつてセバスはただ頭を下げ続けた。どのような罰でも受け入れる覚悟はできている。たとえこの場で命を絶てと命じられても、即座に実行に移すつもりだ。

セバスはたっち・みーの沙汰を待つ。

闘技場で忠誠の義と、現状確認、暫定的な命令伝達が済んだ後。

至高の存在二人が転移してその場からいなくなつた後、その場に平伏していた守護者たちはかなりの時間が経ってからようやく動き始め、立ち上がった。

「す、すぐこわかったね、おねえちゃん」

マールが震えて若干舌が回っていない様子で、アウラに声をかける。アウラも同感だつたらしく、頷いてみせた。

「ほんと。押しつぶされちゃうかと思った……モモンガ様って、あんなに怖かつたんだ」

「私達守護者にすら効果を発揮するなんて……」

「我々ヨリ強イノハ知ツテイタガ……マサカコレホドトハ」

「あれが支配者たるモモンガ様の姿なのね……」

口々にモモンガの印象を言いあう守護者たち。

ひとしきりモモンガに対する評価を言い終わつた後で、マールが少し言いにくそうに口を開いた。

「たっち・みー様もすぐかった、よね」

「……そう、ね」

「……少ナクトモ、モモンガ様ノオーラニハ全ク動ジテイナカタナ」
どこか歯切れの悪い言葉は、彼らの心情を如実に表していた。

彼らはモモンガから受けたほどの威圧感を、たっち・みーからは感じていなかったのだ。無論、至高の存在らしい重圧感があったが、それはモモンガが発したそれと比べるとあまりに印象に乏しい。モモンガの存在が大きかったゆえの印象の差と言ってしまうればそれまで、たっち・みーのみと向き合えば十分な重圧は感じていたのだろうが。

たっち・みーを軽んじる気持ちは誰にもなかったが、それでもやはりあのモモンガと比べると……という気持ちは拭えない。それを口に出すのは躊躇われるが、そう感じたのも事実。

そんな微妙な雰囲気、かすかな笑い声が破る。

「……？ アルベド？ デミウルゴス？ どうしたの？」

アウラがそう問いかける先で、アルベドとデミウルゴスが声を殺して笑っていた。

「いえ、貴方たちがあまりにも見当違いのことを考えているものだから……」

「少しおかしくなっちゃってしまっただね」

「ドウイウ意味ダ？」

コキユートスが尋ねると、デミウルゴスはやれやれ、と口で言いそうなほどあからさまな身振りで首を振る。

「単純に考えてみたまえ。たっち・みー様は至高の41人の中でも最強と呼ばれた御方。そんな御方が放つオーラが、あの程度であるはずがないだろう？」

顔を見合わせる一同。

「じゃあ、たっち・みー様は実力を隠していらっしやるってわけ？」

「な、なんで、でしょうか？」

「あら、その答えはさっきアウラが言っていたじゃない」

アルベトがそう言ってアウラを示す。

「あたしが……？ ……あっ!？」

水を向けられたアウラが、ようやく得心のいった声をあげる。遅れ

て他の者も理解した。アルベドとデミウルゴスは課題に悩んでいた生徒がようやく答えを見つけた時の教師のような笑みを浮かべて、頷く。

「そう。モモンガ様おひとりできえ、私達は相当な重圧を感じていた。そこにさらにたっち・みー様の重圧が加わったら？ たっち・みー様はおそらくそれを危惧されていたのだろう。わざわざ本来の鎧ではない鎧を身に着けてまで、そのご威光を少しでも抑えようとしてくださったのだよ」

「な、なるほどお……やっぱり、すつごくお優しい御方ですね」

「我ラノ身ヲ案ジテクダサツタトイウコトカ……絶対的強者デアリナガラ、弱者ノ我々ニ配慮シテクダサルトハ……感服イタシマシタ」

「全くその通り。私たちの気持ちを汲んで絶対的支配者たる振る舞いを取ってくださったモモンガ様。私たちの身を案じてあえてその絶対的強者のオーラを抑えてくださったたっち・みー様。……いずれも至高の存在と呼ぶに相応しい、輝ける存在。流星は我らの造物主」

陶然としたアルベドの言葉に、守護者全員が同意の表情を浮かべる。

ひとしきり余韻に浸ったあと、アルベドがふと怪訝な表情になった。

「セバス？ どうしたの？」

その言葉に合わせ、全員の視線がセバスに向く。セバスは跪いた姿勢のまま、微動だにしていなかった。デミウルゴスが眼鏡の位置を直しながら、口を開く。

「そうそう、セバス。先ほどの君の態度は、いささか問題ではないかね？ 気持ちにはわからなくもないが、モモンガ様への挨拶を中断するなど、許されることでは……」

そのまま嫌味兼小言を続けようとしたのであろうデミウルゴスだったが、立ち上がったセバスが身にまとう雰囲気を感じ、思わず口を閉ざした。

セバスと反りが合わず、嗜虐趣味を持つデミウルゴスをして、いまの彼が纏うオーラは悲痛かつ絶望に満ちていて、追撃が躊躇われるほ

どの物だったからだ。いまのセバスに対してさらに追撃を加えるのは、ナザリックで共に働く者として責められるべきことだと感じたのだ。

無論、ナザリックに属するもの以外がそんなオーラを纏っていないものなら、デミウルゴスは傷口に塩ではなく劇薬を塗り込むために嬉々として追撃をかけたであろうが。

「なんたる失態……払拭……払拭せねば……」

ブツブツと呟くセバスは、普段のセバスが決してそんな態度を見せないこともあって、一層異常に感じた。

辛うじて一部の理性が残っていたのか、セバスは守護者たちに向かって礼をし、その場を去る。

セバスが去った後には、居心地の悪い沈黙が残された。

「……大丈夫かな、セバス」

「あんまり、大丈夫じゃない、かも？」

「……まあ、本人がどうにかする問題ではあるし、いずれにせよ、セバスに対する処罰は至高の御方々に……直接の造物主たるたち・みー様にお任せしよう」

そうデミウルゴスは言ったが、恐らくそこまで問題にはならないであろうと感じていた。

セバスを作った存在だけあって、その性質はかなり善寄りであり、その至高なる戦闘力に似合わぬほど、たち・みーは穏やかな気質を有している。そんな御方がセバスの失態を気にしているとは思えないからだ。

ある意味セバスよりも客観的に事態を見れているデミウルゴスはその結論付け、いまだ跪いているシャルティアを見た。

「どうかしましたか？ シャルティア？」

その質問を皮切りに、シャルティアとアルベドとの間で正妻の座を巡っての口論が勃発したり、デミウルゴスとコキュートスが至高の存在の後継が生まれる可能性に夢を馳せたり、マールレの格好についての誤解が広まったりしたのだった。

その後、きちんと各階層守護者とその統括に相応しく、今後の計画

について話し合いを行い、彼らはモモンガたちに命じられたことを果たすためにナザリツクの各部へと散らばっていったのだった。

どんな沙汰がいつ下されてもいいように、土下座の姿勢を一切崩さず待つこと数十秒。

セバスはその鋭敏な聴力で、自らの主人が深く大きく息を吐き出すのを聞いた。そこに失望の感情が籠っているように感じてしまい、思わず体が震える。

至高の41人に想像された存在にとって、最大の恐怖は失望されることだ。至高の存在の役に立つために作り出されたことを認識する彼らは、役に立つことを喜びとしている。それなのに自分の力が及ばないことが理由で至高の41人に失望されてしまったら。

それは、彼らにとって死よりも辛いことだった。

「なるほど、な。お前が外の探索に率先して出たのは……それが理由か」

たち・みーの平坦な声が響く。セバスは血を吐く思いで、それに応えた。

「はっ。せめて最低限の務めを果たしてからでなければ、たち・みー様の御前に出る資格すらないと判断いたしました」

「……そうか」

セバスはただ頭を下げ続けることしかできない。かすかな物音でたち・みーが立ち上がり近づいてくるのを感じても、一ミリたりとも動かなかつた。たとえそのまま頭を踏みつぶされたとしても文句などあるはずもない。

果たして、足音はセバスのすぐ傍で止まった。セバスはそのあまりに強い重圧が全身に押し寄せるのを感じた。それだけで押しつぶされてしまいそうなほどだ。

「セバス。顔をあげろ」

「……はっ」

セバスは言われるまま、顔をあげた。その目が大きく見開かれる。

たっち・みーはセバスのすぐ傍に両膝を突き、そしてセバスに向けて頭を下げていたのだ。土下座ではないにせよ、深い謝罪の念が感じられる体勢。セバスはどうして自らの主人がそんな体勢を取っているのかわからなかった。

「すまない、セバス。私はお前の忠義を疑った。てつきり、お前はナザリックからいなくなった私のことを恨んでいるのだと思っていた……」

その声は、ワールドチャンピオンであり、至高の41人最強の存在であるたっち・みーのものとは思えないほど、弱々しい声だった。

深い後悔と謝意が感じられる声。

「そんな……そんなことは！ 顔をお上げくださいたっち・みー様！ 貴方様がお謝りになることなど、なにもごさいません！」

セバスは体裁を取り繕う余裕もなく、這うようにしてたっち・みーに近づくと、その体を起こすように促した。

しかしたっち・みーは頭を下げてままだ動かない。いくらセバスが近接戦闘に特化していると言っても、たっち・みーの本気を覆すほどの脅力は持たなかった。

「いいや、謝罪するべきことだ。もつと早く、お前とちゃんと話すべきだった。きちんと会話すればすぐにでも行き違いに気づけただろうに、私はあろうことかそれから目を逸らしたのだから」

「いまこうして話す機会を与えてくださったではありませんか！ 一晩や二晩程度の行き違いに何の問題がありませんか！」

「それでも、即座に解決しなかったのは私の落ち度だ。考えてみれば、私はお前が外の探索を買って出た理由をモモンガさんに確認していなかった。自分の中で勝手に完結していたんだ。モモンガさんは何か言おうとしてくれていたのにな……タイミングが悪かった……いや、これは言い訳か」

自嘲気味に笑ったたっち・みーは、ここでようやく顔を上げた。そのまっすぐな視線がセバスを射抜く。

「セバス。私はお前の働きに感謝している。私がいけない間、ナザリックを、モモンガさんを守ってくれたこと、ナザリックを長く空け続け

た私をいまだに主として扱ってくれること。数え上げればキリがないが、お前は私がそうであれと創造した通りに、立派に職務を全うしてくれている。私には勿体ない執事だな」

そんなお前に罰など与えられるわけがないだろうが、とたち・みーは苦笑気味に言った。

「たち・みー様……っ！」

身に余るほどの望外の高評価に、セバスは全身を喜びが満たしていくのを感じていた。それほどまでにたち・みーの言葉は真摯で裏がなく、ただ純粹に歓喜のみをセバスに与える。とめどもなく溢れる涙を、セバスは堪えることができなかった。

そんなセバスを優しく見つめたたち・みーは、ゆつくりと立ち上がる。凜とした立ち姿は、セバスが仕える至高の存在に相応しい、威風堂々としたものだった。

「主として、その忠義に応えなければな。セバス、私に力を貸してくれるか？」

たち・みーの言葉を受け、セバスは急いで涙を手の甲で拭った。この素晴らしい主人の前で、これ以上情けない顔を晒してはいられない。

そして、片膝をついた完璧な臣下の礼を取り、宣誓する。

「このセバス。至高なる御身のために尽くします。いかようにでも御使い下さい」

そのセバスの応えを聞き、たち・みーは微笑んだ。

「ありがとう、セバス」

たち・みーは再び椅子に移動すると、そこに腰掛けた。

「早速だがセバス。今後、お前にやってもらいたいことがある。まあ、正式にはモモンガさんと一緒に命じることになるんだが……先に私から伝えておこう」

「はっ！ いかなる命令も、必ずや不備不足なく完遂してお見せします」

心の底からのセバスの返事に、たち・みーは満足そうに頷き、今後のセバスの仕事について説明し始めるのだった。

アインズ・ウール・ゴウン（第一部 完結章）

その時、玉座の間には、ナザリック地下大墳墓に存在するほぼすべてのNPCが集まっていた。それだけではなく、各階層守護者が厳選した高位のシモベたちも集まっている。彼らは玉座から扉まで続く赤い絨毯の左右に分かれるように控えていた。

全員が呼吸音ひとつ立てず静まり返って待つ様子は、彼らの前に存在する玉座に座るモモンガをして、異様な迫力を感じさせ、その揺るぎなき忠誠を実感させた。

その壮観な光景に満足しながら、モモンガが口を開く。

「まずは、私たちが勝手に動いたことを詫びよう」

あくまで謝罪は建前だが、モモンガが謝罪したという事実は大事なものだ。部下を信用していないわけではないのだということ伝えるため。

「何があつたかはアルベドから聞くように。以上だ。……今回、こうして皆を集めたのはこれが主な目的ではない。この場の者、そしてナザリック地下大墳墓に存在するすべての者に伝えるべきことがある。この場にはいない者には、関わりの深い者があとで必ず伝えるように」
そう前置きをしてから、モモンガは非常に嬉しそうな、隠しきれない喜びを滲ませた声音で言った。

「たっち・みーさんがナザリックに帰還した」

その瞬間、ざわめきが部下たちの間に生じるよりも速く、硬く閉ざされていたはずの玉座の間の扉が開く。

扉が大きな音を立てて開き、その開いた扉を悠然と潜って、たっち・みーが玉座の間に入ってきた。

その身に纏うは、純白の鎧。それに合わせたような真っ白な盾と剣。深紅のマントが歩くたびに揺らめき、その超然たる威光をさらに広げる役目を果たしているかのようなだった。

たっち・みーの神々しい姿のあとを追うように、セバスとデミウルゴスが付き従って歩いていった。控えていたシモベたちの中には、そのある意味異様な光景に息を呑む。

セバスとデミウルゴスがその趣味嗜好や価値観の違いから度々衝突しており、お互いのことを反りの合わない同僚であると感じているということは、ナザリックに属する者であれば常識的に知っていることだ。

しかし、いまの二人は並んで歩いているにも関わらず、その表情には誇りと喜びが透けて見える。たちち・みーという存在がその奇跡ともいえる光景を実現させているのは誰の目にも明らかだった。

その場にいるすべての者が見つめる中、たちち・みーは玉座に続く階段に差し掛かった。

そして、守護者統括のアルベドであろうとも、許可なしには上がれないその階段に、実に自然と足をかけた。一段、二段とあがっていく。背後につき従っていたセバスとデミウルゴスは、階段下で左右に分かれ、部下たちの列に加わる。

玉座に座るモモンガの前に、たちち・みーは立ち、そして、軽く頭を下げた。そして、モモンガにしか聞こえない小さな声で、改めて挨拶をする。

「ただいま。モモンガさん」

その挨拶をモモンガもまた小声で、しかし嬉しそうに受け入れた。「おかえりなさい。たちちさん」

二人はかすかに頷き合い、そして、たちち・みーがマントを翻しながら振り返る。剣を腰から外し、体の正面で杖のようにして床を突く。鋭い金属音が空気を切り裂き、かすかにざわめきが生じていたすべての部下の気を引き締めさせる。両手を剣の柄の先に置いたそのたちち・みーの立ち姿は、まさに聖画に描かれる格式ある騎士のようであった。

そして、静まり返っているとはいえ、広い玉座の間の隅々まで響き渡る声をあげる。

「ナザリック地下大墳墓の者達よ！ 私は帰ってきた！」

その瞬間、玉座の間に熱狂的な空気だけが爆発的に広がる。すでにたちち・みーの帰還を知っていた者達でさえ、その心に熱い衝動が湧き上がってくるのを感じていた。改めて宣言されると感じる物が

あつたのだ。

それでも静寂を保っているところは、さすがは忠誠心に溢れる者たちばかりが集められているだけのことはあつた。

そんな様子を見て、たつち・みーは先ほどの凜とした声とは別人のような優しい声でその場にいる全員に声をかける。

「最初に、長くナザリックを空けてしまったことを詫びよう。皆には苦勞をかけた。ナザリックを、モモンガさんを守り続けてくれて感謝する。さすがは我らアインズ・ウール・ゴウンが、私の仲間たちが誇る配下たちだ」

至高の御方からの直々の謝罪と感謝と称賛の言葉。

それを受け、感極まった者の中には涙ぐむ者さえいた。

「さて、たつちさんがこれまで何をしていたか……気になる者もいるであろう」

そうモモンガが口にした時、声に出したものはいなかったが、かすかに身じろぎをする音が聞こえた。誰が動いた、というわけではない。隠しきれなかった者たちの音が重なって、本来はただの衣擦れ程度の音が、大きなざわめきのように生じたのだ。

ナザリックを創りし存在。至高の41人。自分たちの造物主。

現在、その大半がナザリックを離れてしまっている。そんな彼らの内の一人だったたつち・みーが、ナザリックを離れて何をしていたかという答えが与えられれば、それは他の至高の存在が何をしているのかという答えにも繋がりが得る。

たつち・みーが帰還していたことを知っていた各階層守護者たちもこの話は初めて耳にする。誰もが聞きたかったが、不用意に訊けば至高の御方の機嫌を損ねかねなかったから聞けなかった。彼らの方から教えてくれるまで、訊かずに待つことが暗黙の了解となっていた。

それが、ついに明らかにされる。

これから話されることを一言たりとも聞き漏らさないよう、一層の静寂が玉座の間に満ちた。

モモンガはそんな部下たちの心情を知ってか知らずか、実に気楽な様子でたつち・みーを促す。

「たっちさん、彼らに教えてあげて欲しい。いままで何をしていたのかを」

たっち・みーは肩越しに振り返って、モモンガに頷いて見せ、玉座の間に集まった者たちを見渡した。

「私が、いや、他の朋友たちも同じだ。我らがナザリツクを離れた理由。それは——」

静かな声が響く。

「——とある世界に戦いに赴いていたからだ」

はつきりとしたざわめきがその場に広がった。それを気にせず、たっち・みーは続ける。

「なんと表現するべきかな……そうだな。便宜的に”至高なる世界”とても称しようか。その世界で、我ら41人は、困難な戦いに挑まなければならなかった。我らをして、必勝が確信できぬ戦いだ」

そのたっち・みーの話に反応して、声をあげようとした者がいた。一人ではなく、数人の者が同時に声をあげようとしていた。

しかし、その前にたっち・みーは片手を挙げてそれを制する。

「言われずともわかっている。それほど困難な戦いに挑むのなら、なぜ自分たちを共に連れていかなかったのか、だろう？」

凶星だった。たとえ戦闘で役に立たなかったとしても、盾になることはできる。囹になることはできる。何が何でも至高の御方々のお役に立ってみせるのに、という想いは、声をあげようとしなかった者達にも共通する想いだ。

そんな彼らに向かって、たっち・みーは悲しそうに言う。

「残念だが、”至高なる世界”には我々しか行けないのだ。お前たちは向こうの世界で存在することができない。ゆえに、連れていけないかった。許せ」

それが本当だと理解した配下たちは、何も言えなくなった。たっち・みーはさらに続ける。

「それでも、どれほど困難な戦いが待ち受けているとしても、ナザリツクに戻って来れるかわからなくとも、我らはそこに戦いにいかなければならなかった。そうしなければ、我ら自身の存在が消えてしまつて

いたからだ」

玉座の間に集まったすべての者たちがざわめく。至高の御方々の存在を脅かすものに対する怒り、憎しみ、すべての者たちが同一にそれを抱き、”至高の世界”なる世界に存在するであろう「敵」を認識したからだ。自分たちの力が及ばない、遙か高位の次元でのことであることは理解していても、その「敵」を憎まずにはいられない。

そこでたっち・みーは背後をかすかに振り向き、玉座に座るモモンガを見る。

「モモンガさんは、そんな私たちのために、いつ戻ってきてもいいように、一人残ってこのナザリックを維持する役目を買って出てくれた。そのおかげで、私はこうしてここに戻ってくる事が出来たんだ」

モモンガがいたからこそ、たっち・みーが戻ってこれた。

それが至高の存在の口から語られたことによつて、モモンガに対する尊敬の念が一層強くなる。

「以上が私が……我々がナザリックを離れなければならなかった理由だ」

決して自分たちが見捨てられたわけではなかったのだと、すべての者たちが理解した。そう感じていた者達の中には恥じ入るあまり俯いてしまう者もいた。

そこに、モモンガからの声がかかる。

「たっちさんが、我が朋友たちがナザリックを離れざるを得なかった理由はよくわかったことであろう。その上で聞く。ナザリックに帰還したたっち・みーさんの復帰を、引いては、今後帰還するであろう朋友たちの復帰を、認められぬ者はいるか？ いるのであれば立つてその意思を示せ。理由を聞こう」

当然、そんな意思を示すものなどいるはずもない。

たっち・みーは深く頷いて、その場にいるすべての者に感謝を示す。「ありがとう。ナザリックの者たち。私はいま再びアインズ・ウール・ゴウンのために剣を振るう。今後の活動には、皆の力を借りることになるだろう。よろしく頼む」

「我らのために、さらなる忠義に励め！」

モモンガが発した言葉に、アルベドが呼応する。

「承知いたしました。モモンガ様、たち・みー様。いと尊き方々の御身のために、我ら、ナザリック地下大墳墓すべての者より、絶対の忠誠を誓います！ アインズ・ウール・ゴウン万歳！」

「アインズ・ウール・ゴウン万歳！」

階層守護者たちが、領域守護者たちが、NPCたちが、シモベたちが。

すべてが呼応し、万歳の連呼が玉座の間に広がる。

そんな完璧な配下の姿を、たち・みーは眩しいものを見るような目で眺めていた。玉座の間に広がる光景全てが、彼には輝いて見えていた。

（これが……アインズ・ウール・ゴウン。これが、私たちの作り上げた宝か）

その誇らしさに心が震える。仲間たちが作り上げた至宝の数々が、生命を持つて動いている。改めてそのことを実感し、絶対に守らなければならぬという決意が固まるのをたち・みーは感じた。モモンガがずっとそうしてくれていたように、何が何でもアインズ・ウール・ゴウンを守ることを心に決める。

いったいどれほど長い時間、万歳の連呼は続いたであろうか。

「さて——」

ようやく配下たちが落ち着いてきたのを見計らって、モモンガが話を切り替えた。

「——これより、お前たちの指針となる方針を厳命するが……その前に」

モモンガはたち・みーに視線を送る。それを受け、たち・みーが後を引き継いだ。

「方針に関わることなので、先に説明しておく。すでに各階層守護者から伝えられていることと思うが、現在ナザリック地下大墳墓は原因不明の異常事態に巻き込まれている。どうやらナザリックはユグドラシルとはまったく別の世界に転移してしまっているようだ」

この場にいる者にはきちんと通達が済んでいるのか、これに対して騒ぐものはいなかった。

「この世界独自の魔法や技術などの体系が存在することは確認が取れている。いまのところ私達を脅かすような強者の存在は認識できていないが……油断は禁物だ。この近辺にたまたま強者がいなかったというだけの可能性はある」

「この未曾有の事異常事態に対応するためには、指揮体系を整理し、不要な混乱を招かないようにしなければならぬ。よって……」

モモンガが普段通りの威厳のある声だが、注意深く聴けば明らかに気乗りしない様子であることが明らかかな声音で続ける。

「41人の総括を務めていた私とその責任の元、最高司令官として、最上位の命令権を持つこととする」

「今後、モモンガさんの命令はナザリック内で絶対のものとして扱うこと。つまり、私の命令よりも、モモンガさんの命令が優先されるということだ。このことを肝に銘じておくように」

「ただし、これはあくまでもお前たちに対する指揮系統を明確化しただけだ。私とたちさんとの間に上下関係や序列が生じたわけではない。あくまでも私とたちさんは対等な友人の関係だ。それをまかり間違っても主従のように認識することは絶対に許さん。それも合わせて肝に銘じておけ」

モモンガはへ絶望のオーラを放ってまで念を押す。そこまで念を押されて理解しない愚者はこの場に集まった者の中にはいなかった。

これがたち・みーがモモンガに提案し、双方が納得する形に落とし込むまでに5時間もの話し合いが必要だったことだった。

元々はたち・みーが騎士としてモモンガに忠誠を誓う、というシンプルかつわかりやすい形だったのだが、いくらたち・みーが配下に対する対外的な、形だけのものだと言っても、モモンガが絶対に嫌だと譲らなかったのだ。

たち・みーとしては形だけのことなのだから、そこまで気にすることではないと思っていたが、形式的とはいえ騎士として仕えるのであれば、配下の目があるときはそのように振る舞わなければならぬ

い。そしてその目がない時など、互いの自室を訪れている時のような、極々短時間のことになるだろう。

逆にたち・みーを頂点に据える案も出たが、上手く事情を説明したとしてもナザリックを長く空けていた自分がその地位につくことはできないと、たち・みー側が拒否した。

そんなこんなで二転三転して議論が紛糾した結果、「ナザリックの者たちに対する最上位の命令権はモモンガが持ち、二人の関係はあくまでも対等である」という結論に落ち着いたのである。

たち・みーはあくまでも自分を友人扱いしてくれるモモンガに感謝しつつも、配下が不審や不安を感じないように、次なる通達に移る。

「この事態に対応するために指揮系統を明確化したわけだが……ナザリックは強大かつ巨大な組織だ。我らだけでは隅々まで目が行き届くか、いささか不安があるのも事実。ゆえに、作戦参謀という地位を新設し、そこにアルベドとデミウルゴスの両名を据えることとする」その瞬間、羨望の眼差しが二人に向けられる。

「二人には今後、今後の作戦行動に関する私とモモンガさんの話し合いに参加してもらう。最終決定権はモモンガさんが持つが、その場において二人は私と同等の発言権を持つことになる。ナザリックの存続と繁栄のために、忌憚なき意見を交わして欲しい」

「はっ！ ご尊命、承りました！」

二人の揃った返事を聞き、たち・みーは満足げに頷いた。

たち・みーが危惧していた、デミウルゴスとの不和を避けるための手段が、作戦参謀という地位に彼をつけ、自分と同じ発言権を持たせることだった。

たとえばたち・みーが至高の存在であることを理由に命令するのは簡単だ。

今後、もしそういった場面、指向性の違いから衝突が生じる場面に直面した時、たち・みーが上位者として彼を押さえつけるのは簡単なことだ。デミウルゴスは特別忠義に厚いたため、文句のひとつも言わずに従うだろう。

だが、それが何度も何度も続けば、いくらデミウルゴスでもいつか

不満が爆発しかねない。そして得てしてそうなってしまったときにはすでに修復も利かず、手遅れな状況になってしまうものだ。なまじ彼がその不満を抱え込みそうなタイプであるため、そうなる前に気づけるかは微妙なラインだった。

そこでたっち・みーは、最初からデミウルゴスに我慢をさせないことにした。たっち・みーとウルベルトがそうしていたように、意見が違うならそれを戦わせればいいのだ。ウルベルトとはあれだけ諍いを起こして何度もPVP紛いの喧嘩もしたが、結局最後は一緒に活動できていたのだから。

あくまでも最終判断、最高位の決定権はモモンガが握ることで、至高の存在としての立場も守りつつ、同時にその場で意見を戦わせることで、モモンガがそれを参考に策を練れるようにする。

モモンガが絶対支配者であるという、彼らの印象を崩さないようにしながら、同時にデミウルゴスに翻意を抱かせないようにし、なおかつ、自身の正義感からの暴走でナザリツクが不利益を被らないようにする。

幾重にもメリツトが重なった、たっち・みー会心の策だった。

そして、最後の通達をするために、モモンガが立ち上がる。

たっち・みーはその邪魔をしないように、玉座の横へと移動した。「前置きが長くなったが——最後に、これからのナザリツクの行動の、大前提の指針となる方針を厳命する」

モモンガが数歩前に出て、その両手を広げる。それはまるで、すべてを受け入れる聖母のような、すべてを呑み込む邪神のような、世界を抱こうとしているかのような、絶対的超越者の仕草だった。

「アインズ・ウール・ゴウンを、不変の伝説とせよ」

モモンガの覇気に満ちた声が、玉座の間に広がる。

「地上に、天空に、海に、この世界のすべて、知性のある者すべてが知るように、知らない者が誰一人としていないほどの領域にまで。アインズ・ウール・ゴウンの名を伝説とするのだ！　そして——」

その背後にいたたっち・みーが、モモンガの隣に並ぶ。

そして、モモンガに負けず劣らずの覇気に満ちた声で宣言を引き継

いだ。

「我らアインズ・ウール・ゴウンは、この世界のすべてを手に入れる」
それは大きな声ではなかった。しかし、そこに籠った本気の熱は、
その場にいた全員が感じることができた。

「これは最重要課題であると知れ。私たちはかつて『至高なる世界』
に繋がり、自由に行き来することができた。しかし、この世界にナザ
リックが転移したことにより、それが機能しなくなっている」

それが何を意味するか、その言葉だけで理解できた者は悲痛なうめ
き声をあげた。理解できていない者のために、たち・みーは説明を
加える。

「現在ナザリックを離れ、『至高なる世界』に赴いている仲間たち
……彼らが向こうでの戦いに打ち勝ち、帰れる状態になっても、断絶
しているゆえにナザリックに帰還できなくなっているんだ」

たち・みーという帰還の前例が生じたことよって、他の至高の
存在の帰還も期待していた者たちの表情が絶望に染まる。

だが、その絶望を打ち払うかのように、強い言葉がその場にいた全
員の心を震わせた。

「この世界のすべてを手に入れば、『至高なる世界』と再び繋がる
方法がわかるかもしれない！ あるいは、この世界のどこかで迷って
いる仲間がいれば、それを見つけ出すことができるだろう！」

希望を感じさせるたち・みーの言葉。絶望に染まった表情が、再
び塗り替わる。

モモンガがスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを床に突き
立てる。

「この世界は貴重な情報源であり、至高の仲間たちをナザリックに呼
び戻すために必要な供物だ。我々の許可なしにそれを浪費すること
は絶対に許さぬ。我らにとつては脆弱で愚かな人間であつてもだ。
一見、それが何の価値もないように見えても、それが『至高なる世界
』への道を開くための鍵でないという保証はどこにもない」

この世界には生まれながらの異能という特殊技術がある。それは
生まれや環境に関係なく、だれもが持っている可能性があるものだ

情報を得ている。

ゆえに、そのあたりにいる何の変哲もない村人が『世界を繋げる』という生まれながらの異能を持っている可能性もある。発現していないから本人も自分がその才能を持っているとわかっていないだけかもしれないのだ。

だからこそ、モモンガは無為な消費を避けるように命じた。これはたっち・みーの性格などを考慮し、嗜虐性を持つ配下たちが自分から抑えるようにするための策でもある。

モモンガが言葉にした理由も嘘ではないため、配下の者たちは誰もそれを疑わない。至高の存在をナザリックに呼び戻すため、世界を丸ごと手に入れる決意を固めていた。

「ナザリック地下大墳墓の最終的な目的は——我が仲間、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーのすべてが欠けることなく、ナザリックに帰還することだと知れ」

たっち・みーは剣を鞘から引き抜き、天に向けてそれを突き出した。輝ける刃が光を反射し、神々しいまでの輝きを放つ。

「それを邪魔する障害は私がすべて斬り払おう！ アインズ・ウール・ゴウンと共に、お前たちと共に、私は必ずやこの世界を征服しよう！」
たっち・みーはそう宣言する。その剣の輝きは確かな力と、希望の光となって、その場を集ったすべての配下の心を照らす。

それに呼応し、爆発的な熱狂が玉座の間に吹き荒れた。

こうして、孤独だった死の支配者^{オーバーロード}は、純銀の聖騎士^{ワイルドチャンピオン}と共に、世界征服へと乗り出した。

第一部 完

補足 たっち・みー

玉座の間での配下に対する宣誓が終わった後、たっち・みーは自室で休んでいた。

ゆっくりと椅子に腰かけ、すっかり力を抜いた状態だ。現在、この部屋にはメイドの一人も控えていない。セバスは部屋の前で待機させている。傍に仕えたいという彼の意志は理解していたが、さすがのたっち・みーもあれだけの配下の前で長々と、『アインズ・ウール・ゴウン最強の騎士』としてのロールプレイをやり続けたのだ。少しは気を抜く時間を確保させて欲しい。

そんなわけであつち・みーはだらしなく力を抜いた姿勢で椅子に腰かけているのだ。

その手はこめかみに添えられ、今頃同じように自室で休んでいるであろうモモンガとへ伝言〉によって話していた。

『どうやら無事、士気の高揚は十分すぎるほど成し遂げられたみたいですね。少しほっとしましたよ』

たっち・みーはしみじみと呟いた。あれほど盛大に人を集め、大々的に宣誓を行ったのにはそういう意図があつたのだから、それが成功してほっとしないわけがない。

〈伝言〉で伝わってくるモモンガの声には、そんなたっち・みーの言葉に対する朗らかな笑いが込められていた。

『無理ありませんよ。だって隣に立ってた私でさえ、思わずたっちさんに見惚れてしまいましたからね。格好よかったですよ』

『……ありがとうございます。しかし……自分から言い出したこととはいえ、世界征服はちよつといい過ぎましたかね?』

『あれくらいの方がきつとハツタリが効いていいですよ。実際、異論をはさむような者は一人もいなかったじゃないですか? デミウルゴスなんて、世界をラツピングして差し出してきそうな凶悪な笑みを浮かべていたじゃありませんか』

『……やる気にさせてしまったのかなあ』

洒落にならない発破をかけてしまった気がする。モモンガはまあ、と軽かった。

『どのみち、それくらいはしないとダメかもってという結論は出ていたじゃないですか』

モモンガの言葉を受け、たち・みーは複雑な胸中をどう表現すればいいのか悩んだ。

そもそも、世界征服なんて口にしたのは、現状元の世界に戻る手ばかりがひとつもないからである。この世界のすべてを手に入れば、そういう方法や手段があるのではないかと考えているだけだ。もしそんな方法がなければ、という不安はもちろんあるが、すべてを調べ尽くすまでは諦めることはできない。

『……探し始めてすぐに見つかればいいんですけど。案外、その方法はその辺に落ちているかもしれないよ？』

たち・みーの沈黙をどう捉えたのか、モモンガが慰めるように言う。気を使われていることを察したたち・みーは、慌てて明るいうで応えた。

『そうですね！ 見つからない可能性もあれば、逆に簡単に見つかる可能性もある……想像してばかりでは始まりませんし』

『そうですね！ いざとなればへ星に願いを〜など、アインズ・ウール・ゴウンが取りうるすべての手段を用いても、たちさんだけでも元の世界にお返ししますよ』

『……できれば、それは本当に最後の手段にしたいですね。もう、あの子たちを置いていくことはしたくないですよ』

たち・みーは本心からの言葉を口にした。一度は背を向け、引退したゲームだが、いまこうしてギルドメンバーたちと共に作り上げた拠点やNPCたちを見て、一個の生命体として接してしまうと、それをまた見捨てていきたいとは思わない。

元の世界に帰りたい、という想いが消えてなくなることはないだろうが、それでもこのギルドを、アインズ・ウール・ゴウンを愛する気持ちはそれに劣らないほどに育ちつつある。

『たちさん……ありがとうございます。でも、我慢できなくなつた

らいつでも遠慮なく相談してくださいね！ 私はたっちさんとまた一緒に冒険が出来ただけでも、すごく満足しているんですから』

残してきた妻子を案ずる心を読まれたのだろう。

決してそれを喜んではいけないだろうに、たっち・みーが気に病まないうように明るく提案してくれるモモンガに、たっち・みーは頭が上がらない。

『こちらこそ、ありがとうございます。モモンガさん。あなたがギルドマスターで本当によかった』

『ゆつくり休んでくださいね。また忙しくなるでしょうから……』

『ええ。モモンガさんこそ、疲労を無視できるからって、働きすぎちゃだめですよ』

〈伝言〉の魔法が切れ、部屋の中に静寂が落ちる。

たっち・みーは椅子の背もたれに体重を預けながら、小さくため息を吐いた。

(……なるべくこの世界の人間を傷つけないように、ああいう策を取ったけど……さすがに、偽善だよなあ)

たっち・みーは自嘲する。元の世界とこちらの世界を繋げる方法がわからない以上、人間ひとりでさえ重要なのは事実その通りだ。生まれながらの異能などという何でもありなものを目にしまっては、『世界を繋げる』という能力があってもおかしくはない。

だからこそ、例えば無意味に人を殺すような、不用意な殺戮を行わないように厳命したのだ。その意味を『至高の存在が帰って来れるようにするため』というのも、配下たちにやる気をださせ、同時にやりすぎないようにするため。

そして、たっち・みーの本当の目的を教えなかったためだった。

たっち・みーにナザリックの者たちを見捨てるつもりはないとはいえ、『元の世界に帰る』のが自分の目的だと馬鹿正直に話しては、守護者たちの協力など取り付けられないだろう。逆に邪魔をされる恐れさえある。

だからこそ全員の前で最終目的を明言したのだ。実際、いまのナザリックには元の世界では得られないような高度なものがたくさんあ

るのだから、他のギルドメンバーたちも戻って来れるのならば、戻って来たいだろう。美味なる食事や際限なく広がる自然はその筆頭だ。

ブルー・プラネットのような自然を愛する男なら絶対にこっちの世界に来たがるだろうし、ヘロヘロのようにブラック企業に勤めているならば確実にこちらの方が暮らしやすい世界となるだろう。

元の世界と今の世界、自由に行き来できるようにするのが最善だ。それならたち・みーは向こうの世界の妻子も、アインズ・ウール・ゴウンも、どちらも見捨てずに済む。

たち・みーは大きく息を吐き出した。その息にどす黒い感情が淀んでいるように感じられて、自分で吐いた息ながら眉を潜める。

この世界になるべく被害がいかないように、というたち・みーの想いはどこまで行っても偽善だった。

なぜなら、もし帰る方法がわかったとして、それがこの世界の人間数万人の命を捧げてようやく成すことのできるような、そんな大規模な儀式が必要なものだった場合。

たち・みーは断言できる。

自分はそれを実行に移すだろう、と。

元の世界に残してきた妻子と、この世界に生きる人間数万人。たち・みーの中でその価値は比べ物にならないほど妻子の方が重く、この世界の人間が万人死のうが億人死のうが関係ない。

それほどまでに彼にとって『元の世界に帰る』ことは重要なことなのだ。

異形種となってしまうたからなのだろう。かつての人間だったころの自分なら、そんな天秤はそもそも成立しなかったはずだ。なのに、この世界の自分だとその天秤が成立してしまっている。極端な話、この世界そのものを生贄に捧げてでも、元の世界に、妻子の元に帰りたい、という気持ちなのだ。

いまのたち・みーにとって、この世界の人間は大きな犬の群れのようなものだった。興味深く観察するし、その中でも輝きを放つ犬がいれば特別に目をかけて、死にそうになっていれば自分に危険がない範囲で助けてやるだろう。向こうから懐いてすり寄ってくるのであ

れば、可愛がつて餌をあげることもあるかもしれない。

だが、家族が飢えて死にそうになつていたならば。

たとえ懐いて情が湧いている犬とて——相応に悩む時間はあるにしても——最終的にどうしようもなくなつたら殺して食べてしまふだろう。

それが異種族に対する感覚というものだ。同族と認識しているものに対するのと、異種族に対する扱いが違うのは当然なのだから。

(……それならば、どうして元の世界の妻子が異種族という認識にならないのが不思議だが……それは、考えても仕方ないか)

モモンガはアンデッドゆえにその意識の断裂がより強いらしく、自分の人間としての感情を『鈴木悟の残滓』と言い切るほどだった。それに比べればたっち・みーはこの世界の人間を可能な限り傷つけないようにするだけ、まだマシなのかもしれない。

たっち・みーはもう一度息を吐く。

(今日はもう寝てしまおうか)

そう考えたたっち・みーは椅子から立ち上がつて、セバスやメイドを呼ぶ。鎧を脱ぎ、ベッドに横になりたかった。

たっち・みーはあえて考えないようにしていることがあった。

もしも、元の世界の帰る方法が、アインズ・ウール・ゴウンを——ナザリツクの者たちを生贄に捧げなければ実現しない物だった時、自分はどうらを取るのか。

たっち・みーは、考えないようにしていた。

番外編

騎士と戦士の鍛錬

嵐のように打ち込まれる刃の連撃を、紙一重でかわしていく。

体勢や状況的にどうしてもかわせないものだけ、左手に持った盾で弾いた。特殊技術へ攻勢防衛によって弾かれたその腕は大きく跳ね上がり、隙が生じているように見えたが、しかし連撃は止まない。

上、真横、袈裟懸け。三方向からの同時攻撃を軽いステップで距離を置いてかわす。

攻撃者との間にわずかな距離が開く。その瞬間を狙い澄ましたかのように、横合いから魔法が飛んできた。それは通常のへ火球であり、はじき返すのに何の苦労もないレベルのものだ。だが、それを弾くことはせず、姿勢を低く取って射線からその体を外した。へ火球が一瞬前まで彼のいた場所を通りすぎる——ところを、別の方向から飛来した石礫が爆発させた。

直撃させるよりはダメージは少なくとも、その爆風に巻き込まれれば無事ではすまない。回避したと感じさせたところで、爆発を浴びせる。術者と投擲者、その連携があつてこそそのものだった。

しかし、防御者はそれを軽く上回る。

体勢を低くするために曲げていた足を伸ばして、前方に向かって一気に加速。へ火球による爆風すらも推進力に変え、四つの剣を操る攻撃者に対し、瞬時に肉薄した。驚く様子を見せる攻撃者たち。特に、魔法の爆発と同時に踏み込もうと考えていたのであろう四つの剣を操る攻撃者は対応が一步遅れた。

そこに、防御者から攻撃者に代わった者が、その手に握る不思議な形をした剣を縦横無尽に振るう。四つの剣を防御に回し、ありとあらゆる角度からの打ち込みからも対応せんとしたが、四つ剣の防御力をただの一刀の猛攻が撃ち破った。

ほとんど同時にしか思えないタイミングで四つの剣が同時に弾か

れ、隙だらけになった喉元に切っ先——形状からすると切っ先というよりは先端——が突きつけられる。

しばしの静寂。

四つの剣を持つ者、コキュートスは静かに腕を降ろし、その場に跪いた。

「才見事デス。マイリマシタ」

その口からは冷気がため息のように噴出する。それが彼なりの感服している表現だと知る勝者——たち・みーは剣をしまいながら慰めるように声をかける。

「いや、見事なのはお前の方だ。この軽くて丈夫なことが取り柄の剣でなければ、お前の剣をすべて弾くことなどできなかつた。実に重みのある一撃と手数、そしてそれだけではない技巧……さすがはナザリックでも最高の武器使いだな」

そう声をかけると、たち・みーが感じることできるコキュートスのオーラが、喜悦を表すものに変化したのを感じる。こうまではつきりと見えると逆にたち・みーの方がむず痒くなるくらいだ。

「勿体ナイ、才言葉デゴザイマス」

たち・みーは次に、少し離れたところで膝をついている二人にも顔を向けた。

「お前たちも見事だつたぞ。アウラ、いつの間に石礫を拾っていたんだ？」

その声をかけられたのは、アウラとマーレだ。

アウラは鞭を使っている、その他の武器は持っていないように見えていた。いつのまに拾ったのかと問われ、アウラは正確に答える。

「一度たち・みー様に転ばされた時です。あの時、とっさに拾っておりました」

鞭を使った中距離攻撃をアウラは仕掛けていたが、一度打ち込みが甘くなったとき、その鞭を逆に掴まれて引かれ、体勢を崩された時があった。その際、アウラは目の前にあった石礫を拾っていたのだ。転ばしたのはたち・みー自身だったため、アウラが地面に伏したことをそこまで意識に入れていなかった。三人の連携を一時的に崩した

程度の認識だった。

意識の空白を見事に突かれた形になるたち・みーは、感心して唸る。

「ほう、なるほど……窮地を逆に活かして反撃の手を増やしていたのか。やるじゃないか」

「ありがとうございますー！」

褒められたアウラが嬉しそうな笑みを浮かべる。

「だが、そもそも鞭の打ち込みが甘かったゆえに、転ばされたことは反省するように。牽制の一撃であろうと、常に神経を張りつめた一撃を心がけることだ」

「うっ。は、はい……」

最後に、頭を下げるアウラの隣にいるマーレに、たち・みーは視線を向ける。

「マーレ。魔法のタイミングといい、常に私の死角に入ろうとする立ち回りといい、見事だったぞ」

見なくても敵の位置が気配で把握できるたち・みーには、実はあまり意味のない行為ではあるのだが、それでも視界に入っている時と死角に入られた時では意識の割き方が変わってくる。

「あ、ありがとうございますー！」

短くとも純粋なたち・みーの賛辞。それで喜ばないような者はナザリックにいない。マーレはいつものおどおどした様子はなく、非常に朗らかに笑っていた。

鍛錬につきあってもらった三人にそれぞれ声をかけたたち・みーは、手に持っている武器を確認する。いつも身につけている白銀の剣ではなく、模擬戦にしか使えない剣だ。

通称は竹刀。純和風の香りがするその剣は、武人建御雷がギルドに預けていた武器の中のひとつだ。攻撃力がほぼない代わりに、取り回しのしやすさと頑丈さは群を抜いており、もっぱら鍛錬用の武器として活用されていた。攻撃力が非常に乏しいゆえに実戦では使えないが。

たち・みーとしては鍛錬に使えばいいのだから、その性能だけ

で十分だった。

「しかし、やはりブランクというものは大きいな。もう少し慣らさないとだめか……」

そういつてたつち・みーはため息を吐くが、とてもブランクというものがあるようには思えない。それは実際に鍛錬の相手をした三人全員に共通する想いだった。

いくら鍛錬であつて本気ではないとはいえ、守護者三人を相手にして平然とそれを捌いてみせるたつち・みーは、やはり最強の存在だった。

数年間、ユグドラシルのゲームから離れていたため、たつち・みーは若干のブランクを感じていた。カルネ村で戦ったニグンのような遙か格下ならまだしも、今後自分たちと同等以上の存在が出てこないとは限らない。

その時に備え、彼は全力で自分の腕を磨いているのである。その中でも特に意識しているのは対複数戦。基本的に敵に対して一人で挑むなどということは、配下が、ナザリツクの者たちがいる以上はほぼありえないと考えられるが、戦いの場では何が起きるかわからない。

万が一の時はたつち・みーが一人で複数の敵を食い止める必要もあるかもしれない。

ゆえに、たつち・みーは自分の技量をできる限り向上することに努めているのである。

今後の計画を踏まえ、ブランクを少しでも埋めるための鍛錬であつたが……たつち・みーは一つ失言をしていた。少し遅れてそのことに気づいたマールが、ふと小首をかしげる。

「あ、あの、たつち・みー様……気になることが、あるんですけど」

「ん？ なんだい……ごほん。なんだ？ 疑問に思ったことは遠慮せず、何でも聞くといい」

マールに対し、たつち・みーは思わず子供に対する口調になりかけ、咳払いをして上位者としての口調に戻す。この辺りは子育てをしてきて身についている習性なため、気を抜くという言葉づかいになつてしまうのだ。

マーレはいつもの気弱そうな態度ながらも、たっち・みーの包み込むような雰囲気にも安心したのか、気になったことを素直に聞いてくる。

「ブランク、とおっしゃってましたけど、たっち・みー様は『至高なる世界』で、至高の方々でさえ苦戦されるような、戦いをしてらしたんですよね？」

（―――）

たっち・みーは全身から冷や汗が噴出するのを感じた。その精神力を用いてなんとか無様な声や態度を取ることは堪えたが、大失態である。

確かに、『至高なる世界』でも戦いを続けていたとするなら、ブランクという言葉が出てくるのはおかしい。

（まずい。完全に無意識だった……ど、どうする？）

マーレの指摘でそのことに気づいたのか、アウラやコキュートスからも疑問に思っている気配が感じられた。ここで嘘をついたなどと思われては、忠誠心にも影響が出る。

そう感じたたっち・みーは、全力で頭を回転させて答えを絞り出そうとした。しかし黙っているばかりでもいられなかつたため、答えを待つマーレに対して当たり障りのないことをいった。

「そうか……言葉が足りていなかったな。すまない」

「い、いえ！ 少し気になったただけなんです！ ぐ、ごめんなさい！」

たっち・みーに頭を下げさせたというの方が大事なのか、マーレは大慌てで頭を下げる。たっち・みーはそんなマーレの頭に手を伸ばし、優しく撫でてやった。

「マーレ。お前が頭を下げる理由はなににもない。むしろ気になったことをきちんと口に出せたことはすばらしい。お前だけじゃなく、これは皆に伝えて欲しいのだが、何か疑問に思ったり、不思議に感じたり、悩みが生じたら、私でもモモンガさんでもいいから、必ず声に出して聞くん。事情があつて、答えられないことはちゃんとそう伝える。だが、疑問に感じながらも自分の中で抱え込んではいけない。それは逆にナザリックの利益を損ねることになりかねないのだから。納

得がいかない時は、納得がいくまで人に尋ねるといふ癖を身につけなさい。どうしてもそれがしにくいというのなら、仲間に相談するのもいいだろうね」

たっち・みーはそういつて守護者たちに言い聞かせながら、頭をフル回転させてマーレの問いに対する答えを導き出した。思わず口調が乱れはしたが、その甲斐あつて矛盾のない答えを導き出す。

守護者たちが自分の言葉に了解するのを、満足げに受け入れつつ、改めてマーレの質問に答える。

「さて、マーレ。お前が疑問に思ったことだが……私が正確なことを言っていないかったのが悪かった。『至高なる世界』という場所では、直接的な戦いをするのが困難なのだ」

「こ、困難……ですか？」

「そうだ。お前たちが向こうの世界で存在できない、という話はしたな？ 向こうの世界はそういった特殊かつ強力な法則で縛られている。ゆえに、私のようにこちらでは最強に近い力を持っていても、それは意味を成さない。向こうではむしろ『意思の強さ』というものが重要になる」

「意思の強さ……ですか？」

「そうだ。これと決めたことをやり遂げる意思力。信念を貫き通す強固さ。そういったものが向こうでは武器になる。だからこそ、こちらでは強固な存在である私たちも、それに関係なく存在が危うくなってしまうところだったんだ」

そういつてたっち・みーは締めくくる。答えを聞いた守護者たちは、得心のいつた表情になり、さらにその視線に宿す尊敬の念を強くした。

（の、乗り切った！ 危なかった！）

たっち・みーはなんとか無事にやり過ごせたことを確信し、ほっと一息を吐く。

あとでモモンガとも話を合わせておこうと、心に刻むのだった。

なお、この時の説明は瞬く間にナザリック中を駆け巡り、「至高の御方々は、単純な強さだけではなく、その意思力も至高なるものであ

る、「至高の御方々は配下の声に耳を傾けてくださる慈悲深き方々であり、相談せずに疑問を抱え込むことこそ不敬である」という話となり、より強い尊敬と信愛の念が全員から発せられることになるのだった。

数分の休憩を挟み、鍛錬を再開しようとしたとき、闘技場にアルベドを伴ったモモンガが現れた。

即座に跪いてそれを受け入れる守護者たち。たち・みーは気楽な様子でモモンガに向けて手をあげる。

「やあ、モモンガさん」

「たちさん、お疲れ様です。今日も精が出ますね」

モモンガのいつも配下に見せている支配者然とした鷹揚な態度は鳴りを潜め、実に気安い朗らかな調子の声を発する。

最初、たち・みーはいくら自分に対してとはいえ、そんな穏やかな態度や雰囲気を頻繁に見せてはモモンガの威厳が薄らいでしまうのではないかと危惧していたが、いまのところその様子は見られない。

むしろそういう友人に対する態度を見せるモモンガが、崇拜する存在でありながらも、共感を覚えられる存在であるとして、親しみを感じている様子も見られる。支配者として締めるところさえ締めれば、逆にいい傾向なのではないかとたち・みーは考えていた。

ただ、問題が生じていない一番の原因は、そんな態度を取っている相手がたち・みーであり、彼らのいう『至高の存在』であることが大きいのだろう。もしもモモンガがその態度をこの世界の一般人に對して取っていたら、ナザリックの者たちの感情も大きく違ってくるはずだ。

(ほんと、慕ってくれるのは嬉しいが、それはちよつと困るな)

実際、以前助けた王国戦士長のガゼフ・ストロノーフからその報酬が送られて来た際、それと一緒に手紙が送られてきていた。そこには丁寧な文面で助けてくれたことによる感謝と、今後無理のない範囲で手紙のやり取りをしたいという申し出があった。

王国戦士長とのコネクションはいつか役に立つと考えていた二人

は、その申し出を受け、王国戦士長と手紙のやりとりをすることにしました。書く内容には気をつけなければならぬため、二人で相談することになっていたが、基本的にはたっち・みーが表に立ってやり取りをすることになっている。

しかし、当たり障りのない文を書いてそれを運ぶようにメイドに頼んだ時、そのメイドは非常に複雑な表情でそれを承った。たっち・みーが見たオーラからは、不満や嫉妬の感情が感じられた。ただの手紙を渡すという行為でさえそうなのだ。直接会って親しい態度を取ろうものならどんな感情を抱かれるかわかったものではない。

(どうにもコネクションを作りづらいというのが問題だな……)

たっち・みーはそう感じて息を吐いて、頭を切り替える。

ここにモモンガが来てくれたことは、ちょうどよかった。

『モモンガさん、実はちょっと話を合わせておきたいことが……』

つい先ほどあったことを守護者たちに聞こえないよう、〈伝言〉を用いて説明しつつ、たっち・みーはモモンガと話を始めた。

モモンガとたっち・みーが親しげに話し始めたのを受け、その場にいた守護者たちは邪魔をしないようにそっと距離を置いて控えた。

アルベドは相変わらず慈愛に満ちた顔でそんな二人の様子を見守っている。コキュートスは鍛錬で使った剣を手入れし、アウラとマーレは興奮気味に先ほどの鍛錬の内容を話し合っていた。

「やっぱたっち・みー様はすごいよね！ あたしの鞭がかすりさえしないんだもん」

「ぼ、ボクが魔法を使おうとするとすぐ反応なさって……プレツシャーがすごく、まともに撃てなかった……〈魔法攻勢防御〉は使わないってわかったのに、撃つのがすごく怖かったよ」

「アレガ至高ノ方々ノ中デモ随一ノ力……感服イタシマシタ」

コキュートスは深々と息を吐く。途端に冷気が彼の座る場所の周囲を凍らせた。

「たっち・みー様は御怪我などなさっていないかしら？」

アルベドがそう確認してくるのに対し、コキユートスは軽く頷く。「無論ダ。私ガ使ツタノハ、普段私ガ使ツテイル物ト、攻撃力以外ハホボ同ジ物。シカシ、コノ程度ノ攻撃力デハ、御方ノ防御ハ貫ケヌ」

コキユートスはこの鍛錬のために、普段なら見向きもしないような武器を持ってきていた。その剣の性能は、普段の彼らからすればガラクタにも等しい程度の価値しかない。

当然、たっち・みーが着ているような、ワールドチャンピオンの鎧に傷をつけられるような代物ではなかった。アルベドはそのことを把握して、頷いた。

「それもそうだったわね」

「ソレニシテモ……改メテ感ジタノダガ、たっち・みー様ハ恐ロシイ」

そのコキユートスの言葉に、守護者たちが反応する。

「ちよつと、コキユートス。それってどういう意味？ 恐ろしいって……」

「お、お強いのは事実ですけど、恐ろしいって、わけじゃ……」

「場合によつては不敬な発言よ？」

責めるような響きのある三人の声に、コキユートスは落ち着いて応じる。

「アノ御方ガ使ツテイル『竹刀』トイウ剣ハ、攻撃力ガ皆無ノ剣ダ。ソレユエ、私ガ使ツテイルコノ剣ヨリモ相手ガ傷ツク恐レハナイ」

「それはそうでしょうね。いくらたっち・みー様でも、『竹刀』でコキユートスの体を傷つけることはできないでしょう」

「ダガ、最後二切ツ先ヲ突キ付ケラレタ時、私ハ思ワズ『恐怖』ヲ感ジテイタ」

コキユートスの素直な告白を受け、三人はざわめく。

「それは……つまり、『竹刀』を脅威に感じたということ？」

「アア、ソノ通りダ。たっち・みー様デアレバ……アルイハ本当ニ『竹刀』ヲ用イテ私ヲ倒スコトガ可能ヤモ知レン」

「そ、それはいくらなんでも……言い、過ぎ……じゃ……？」

マーレの声は自身なさげに尻すぼみに消えて行った。あるいはたっち・みーであれば。それも可能かもしれないと思つて。

至高の41人最強の存在。

その途方もない実力を感じ、その場にいる誰も感服し、尊敬の念を強めていた。

「クリエイト・グレートター・アイテム
へ上位道具創造」

モモンガがその魔法を唱えると、その体を重厚な全身鎧が包む。漆黒の戦士がその場に現れていた。

たっち・みーはその姿を見て、ほう、と声をあげる。

「魔法で生み出したものであれば、魔法詠唱者であつても装備できるわけですね」

その質問にモモンガはアイテムボックスの中から二つの剣を取り出しながら頷く。

「ええ。この世界においても、装備できるものは取得した職業に制限されてしまいますが……これならば問題ありません」

二本の大剣を取り出したモモンガは、それを軽々と振り回す。その様子からは暴風のような威圧感が滲み出ていた。少なくともこの世界のレベルであれば、相当な脅威を感じるだろう。

「なかなか壮観ですね」

「あはは。お世辞だとわかっていても、たっちさんにそう言ってもらえると嬉しいですね」

モモンガはそういつて笑う。たっち・みーは少し苦笑した。この世界の者からすれば、モモンガのただ力で振り回している大剣であつても脅威に感じるだろう。しかし、たっち・みーのレベルからすると、それはただ力任せに剣を振り回しているだけで全く脅威には感じなかった。

「今後、万が一魔法を封じられた時のために備えておこうかと。たっちさん、お相手をしていただいても構いませんか？」

二本の剣を構え、モモンガが尋ねる。たっち・みーは快く頷いた。

「もちろんです。お相手いたしましょう」

盾と剣を構えるいつものスタイルでたっち・みーは立つ。

二人は闘技場の広いスペースを活かして向かい合い、そして軽い模擬戦を開始した。

モモンガが思うままに二つの剣を振るい、たっち・みーはそれを受けつつ捌きつつ戦士としての立ち回りのアドバイスをし、ちゃんとした鍛錬の形式にはなっていた。

しかし、傍で見えていた守護者たちから見れば、二人はまるで楽しくじゃれ合っているようであったという。

なお、のちにこの時のことは居合わせた守護者から、仕事のために居合わせなかった守護者に語られた。

そして、その光景を直に見られなかった守護者たちが悔しがって、慟哭の叫び声をあげるといふ一幕もあったりしたのだが……それはまた別の話である。

騎士と支配者の相談

その日、とある相談のためにモモンガは執務室にたち・みーを呼んでいた。

約束していた時間通りにたち・みーは現れる。それは社会人として、遅くもなく早すぎもせず、絶妙な時間の訪問だった。

「わざわざ足を運ばせてしまつてすみません。たちさん」

「この程度気にしないでください。それで、相談したいこととは？」

朗らかに二人の相談が始まる。部屋に控えていたアルベドにも席を外してもらい、執務室にはモモンガとたち・みーの二人だけしかない。

「実は、数日前にアルベドやデミウルゴスと一緒に方針を決めた『例の件』なのですが……誰が相応しいか、たちさんにもご意見を伺いたいと思ひまして」

その言葉だけで、たち・みーは何のためにモモンガが自分を読んだのか把握したようだった。

軽く頷いて用意された椅子に座る。

「ああ、『例の件』ですか。すでに候補はあがつてるんですか？」

今後の活動のための話し合いが始まる。

「……と、その前にいいですか？」

たち・みーはそういつてアイテムボックスを探り、一本の蠟燭のようなものを取り出した。

モモンガが不思議そうな顔をする。

「たちさん、それは……？」

「ちよつと待つてくださいね」

たち・みーは次に皿のようなものと、火をつける道具を取り出した。そして、蠟燭を皿の上に立て、火をつける。

すると、柔らかで心を落ち着けるような、甘くて優しい匂いが広がった。モモンガは感嘆したような声をあげる。

「おお……いい匂いですね。アロマ、ですか？」

「ええ。仕舞い込まれていたものをメイドが発見してくれましてね。せつかくですから、一緒に匂いを楽しみたいと思ひまして」

「たっち・みーはそう言ったが、モモンガはそこに彼の気遣いを感じた。本来、こういう話し合いをするときにはお茶などを呑みながら行うが、モモンガはアンデッド。残念ながらそういったものを楽しむことができない。」

「それゆえに、たっち・みーはモモンガも楽しめるものを考え、メイドに命じて用意してくれたのだろう。細やかで優しい気遣いに感謝しながら、この細やかな気遣いこそが美人の奥さんを捕まえる秘訣なのではないかとモモンガは思った。さすが勝ち組リア充は違う。」

「しかし、ここであまりそれに言及してはせつかくのたっち・みーの気遣いを無為にしてしまうと感じたモモンガは、軽く礼を言うに留めて早速話を始めることにした。」

「候補なんですけど……そもそもナザリックの者たちの中だと、大前提の条件をクリアしている者が少ないんですよ。アルベドがそのいい例です。それがなければ彼女でもよかったですね」

「ああ、角や翼が隠せませんからね」

「アインズ・ウール・ゴウンに所属するのは、ほぼ全てが異形種だ。そのため、彼らが考えている今後の計画には適さない者が多かった。」

「そういうものを触感含めて誤魔化せるアイテムや魔法ってありましたっけ？」

「いえ、残念ながらほとんどないですね。やるにしてもコストが高すぎるものばかりです。一瞬ならともかく、恒常的に誤魔化すのはほぼ不可能かと」

「なら、最初から除外されるメンバーは除外したままにしておきましょう」

「モモンガは頷く。」

「アルベド、デミウルゴス、コキュートス、エントマ……は除外……と。アウラとマールも除外した方がいいでしょうか」

「エルフはこの世界にも存在するみたいですが、二人はダークエルフですからね。どういう印象を与えるかわかりませんし……それに、そ

もそのもの見た目が幼すぎますね」

「ですね」

机の上に置かれた紙には、ナザリックの主だったメンバーの名前が書かれていた。その上にモモンガは「×」の印をつけていく。その中でシャルティアとセバス、ソリュシヤンの名前にはすでに射線が引かれていた。

「他に仕事を頼んでいなければ、セバスという線もありだったんですけどね。騎士に仕える執事。絵になるじゃないですか」

「いや……さすがにそれは浮くんじゃないかと。それ、完全にお金持ちのボンボンが我儘言つて冒険に出てる図ですよ？」

「そのギャップがいい気がしたんですよね。最初は侮られるくらいが、後々の名声にも繋がると思いますし。最初に目立つのは大事な気がします」

モモンガはそう考えていたが、たち・みーはやはり渋い顔だった。モモンガとしてはそこまで渋い表情を浮かべる意味がわからず、首を傾げる。たち・みーはそれ以上そのことには言及しなかった。

「他に仕事を任せている以上、セバスにはそちらに集中してもらいましょう。さて……モモンガさん的には有力候補はいますか？」

「個人的には、ルプスレギナか、ナーベラルでしょうか。あの二人なら、姿形的には十分です」

「なるほど……ん？ シズは？」

「彼女は攻撃方法が特殊ですからね」

モモンガがそう指摘すると、たち・みーもそのことを思い出したのか、納得する。

「そうでしたそうでした。確かに彼女は選びづらいですね。そういう方面も含めて考えるのなら……ナーベラルが一番適任でしょうか？」
「ですね。魔法詠唱者ですし。ルプスレギナはカルネ村の担当にしましょう。この前、王国戦士長への手紙を持っていかせましたが、村人とも割と友好的に接しているようでしたし」

早々と結論が出たことで、モモンガは満足げに頷いた。やはり相談できる相手がいるというのはとても良いことだ。

「では、それで計画を進めましょう。必要なアイテムを用意しておきます。あと……たっちさんの鎧についてですけど」

「ええ。この価値や特製を誤認させる魔法の準備を願います。そのままだとさすがにまずいかもしれませんし」

たっち・みーの身に着けている鎧はこの世界基準で言えば、神話級の物品よりも遙かに強力なものだ。それを堂々と晒して歩けば、思わぬ厄介ごとを引き寄せるかもしれない。しかし、安全面を考えればそれ以上のものはありえないため、あえて魔法で隠蔽する方向で話はずでにまとまっていた。

「任せてください。私が全力で魔法をかけます。それを破れるような者は、相応の強者か、この世界特有の才能持ちということですから、それも参考にしましょう。……たっちさんを囮のように使うのは本当は嫌なんですが」

モモンガはそういつて少し暗い声を出す。たっち・みーはそんなモモンガを慰めた。

「大丈夫ですよ。私が提案したことなんですから。それに……囮は強くないと、万が一の時にかえって危険じゃないですか」

確かに、下手に弱い者を囮に使えば、不意の一撃でやられてしまうかもしれない。そのことを考えると、不意の一撃にも反応できる強者が囮になるとするのは納得のいく話ではある。

しかし、万が一その不意の一撃が強者の対応力をも上回るものであったなら。それは致命傷になるかもしれない。それをモモンガは気にしていたが、たっち・みーはそれを軽く笑い飛ばす。

「大体、モモンガさんも他人事じやないんですよ？　むしろ職業的には私よりもモモンガさんの方が危ないんですから。……やっぱり」

「たっちさん。それ以上は」
想像以上に固くなった声で、モモンガはたっち・みーの言葉を遮った。その声に込められた意志を改めて実感したらしいたっち・みーは、素直に口を噤む。

「……わかりました。そもそもそれが目的の一つなんですから、今更でしたね」

「そうですね。色んな意味でそれは嫌です」

モモンガがそう締めくくり、たち・みーはそれに納得する。

そして、話を次に移した。

「ところで、隠密護衛部隊の話はどうなっていますか？」

「ああ、エイトエッジ・アサシンたちについていたらおうかと。彼らなら人の多い中でも隠密行動できますし。私達なら彼らの行動を把握することができません」

不可視化の能力を持つ忍者服を着た蜘蛛型のモンスターだ。たち・みーは気配でその存在がわかるし、モモンガには不可視化の能力は通用しないが。一般人を相手にするのならば十分すぎるほどだろう。

もし気づかれたとしても、問題はない。逆に彼らの存在に気づいて騒いでくれれば、モモンガやたち・みーの立場からすればありがたいくらいだ。

とはいえ、たち・みーはもしもエイトエッジ・アサシンたちがやられそうになれば当然助けるつもりである。

「彼らはNPCではなく、仲間たちが作った存在ではありませんが……ナザリックに属するもの。それを使い潰すわけにはいきませんからね」

「……そうですね」

モモンガはそつと目を逸らした。たち・みーはその視線の動きや放たれる微妙なオーラから、モモンガがそこまでエイトエッジ・アサシンを重要視していないことを知る。当然、ナザリックに属する者としての愛着は多少あるのだろうが、仲間たちが設定したNPCとは比べるべくもないということなのだろう。

逆に言えば、ユグドラシル金貨を消費さえすればいくらでも補充できる傭兵モンスターを、たち・みーほど大事にする方が珍しいといえるので、その点についてたち・みーは追求しなかった。NPCを大事にすることに感じては共通の想いを持っているのだから、エイトエッジ・アサシンに対する想いまで無理に合わせる必要はないというわけだ。

だが、モモンガが言葉を濁したのには、たち・みーが考えたのは少しだけ違う意味があった。

エイトエッジ・アサシンのようなモンスターに対してはともかく、たち・みーと同じようにモモンガもNPCたちのことを大事に思っていること自体は間違いない。

それらを傷つけられたり、侮辱されたりすれば、容赦なくその敵を蹂躪し、二度と目の目が拝めないような仕打ちをすることになんら躊躇いはなかった。アンデッドの精神安定など意味を成さないくらいにブチ切れる自覚はある。

しかし、それとはまた別の意味で、彼らを完全に信頼しきれているわけではないのが、モモンガの悩みであった。

NPCたちが積極的に裏切ると思っているわけではない。わけではないが、そういう可能性もありうるとも考えていた。その警戒はある意味当然で、ゲームの道具として設定されているならともかく、生命を宿し、動き出した彼らはもはや一個の独立した意思を持つ存在だ。

何かのきっかけで自分たちを裏切る、という可能性も気にしておかないわけにはいかない。

たち・みーもそれを全く考えていないわけではないだろう。実際、デミウルゴスに対してはそういった懸念を持って、先んじて動いていた。

しかし、基本的にたち・みーはNPCたちに対する信頼から動いている。彼らしいことではあったが、それがいつか足をすくわれる結果になることだけは避けなければならない。

(気を付けなければならないことは俺が気をつければいいだけだ。うん。全く同じ方針でNPCに接する必要もないし、違うアプローチや注意の仕方をしていた方がいいこともあるかもしれないしな)

モモンガは心中でそう結論付けた。

その他、細かなことを煮詰めていると、不意にたち・みーが笑った。モモンガは首を傾げる。

「どうされました？」

「いえ、こういう話し合いが懐かしくて。よくやりましたよね。新しいフィールドに行くときとか、ダンジョンに挑むときとか……」

「ああ……」

モモンガは得心し、万感の思いが籠った息を吐く。

確かにそうだった。仲間たちとの騒がしくも楽しい話し合いの様子を思い起こす。

「懐かしいですね……たっちさんとウルベルトさんが正反対のことを言って、よく討論会になってましたね」

「ははは……お恥ずかしい話です」

「覚えてます？ 炎の巨人と氷の魔竜のどっちを倒すかって——」

昔の活動を懐かしく思い返す二人の話は、その後も延々と続いたのだった。

第二部 純銀の騎士 現れた “純銀の騎士”

エ・ランテルは三重の城壁に囲まれた、城壁都市だ。その城壁を二つ潜ったところのエリアは、市民のためのエリアであり、様々な立場の住民が日々の営みを行いつつ過ごしていた。その区画に点在する広場の中に、中央広場と呼ばれるもつとも大きな広場があった。エ・ランテルでもつとも活気が集まり、それが流れている場所である。

その広場に隣接する建物から出てきた、とある二人組が周囲の注目を集めていた。

二人組の一人は女性だ。お淑やかな雰囲気を感じさせる美貌は、黒いフード付きローブを身に着け、フードを目深にかぶつていても隠し切れるものではない。すれ違う男性たちはその女性の美貌に釘付けになり、魂を抜かれたような表情で見惚れている者も多く存在した。それほどまでにその女性の顔立ちは整っており、美女という形容はこの女性のためにあったのではないかと思うほどだ。

普段ならばそんな美女とお近づきになろうと、軟派な態度の若者が声をかけてもおおかしくはなかつたが、そうしようとする猛者は一人もいない。遠巻きに見つめるのがせいぜいだ。

それは、彼女の連れ合いに原因があった。

その存在を一言で言い表すのであれば、『純銀の鎧』だった。

恐ろしいまでに白く輝くその全身鎧は、清廉潔白を体で表すかのよう、曇り一つなく光っていた。胸の中央に輝く宝石のような石がどれほどの価値を持つ物なのか、普通なら気になるのだろうが、それはただ美しい輝きだけを周囲に振りまき、価値を考えるような下種な想像すらさせてくれないほどの神々しさを放っている。その目の前にたてば思わず居住まいを正さざるを得ないような、そんな不思議な威光を感じさせるものだった。

広場にいた誰かが「純銀の騎士」と呟く。

世間一般的にいう騎士を示す証は何一つ確認できなかつたにも関わらず、その誰かはその鎧を着た存在のことを「騎士」と呼んでいた。そしてそれはその場に居合わせた誰もが賛同することであった。その存在がただ武器を振り回す戦士ではなく、なんらかの固い誓いを胸に刻んだ騎士であろうということが見るだけでわかるのだ。それはその人物自体が放つオーラのようなものが、何の心得も持たない一般人にさえ、感じさせるほどのものであることの証左に他ならない。

鎧と一体化している深紅のマントが非常によく似合っていて、王者の如き威厳を醸し出している。左手に持った盾と、腰に提げた剣はいずれも相当な一品であることが明らかだ。

全身鎧も含めて、どれほどの重量があるのかわからないが、それを着こなしていることから、その人物が相当屈強な存在であることは想像に難くない。

誰もが飛びつきたくなくなるような美女がいて、誰も近づかないのはその存在が理由だった。粗暴な者は屈強な存在に恐れをなし、軽薄なものはそのあまりに神々しい輝きに萎縮してしまっている。

純銀の鎧を身に着けた神聖なる存在の連れ合いに話しかけようとする剛の者は、その場には存在しなかった。

建物から出てきた二人は周囲を見渡すと、なにやら小声でやりとりをした後、並んで歩きだす。その二人が向かおうとした先は自然と人波が割れ、まるで聖者の行進のようだ。

やがて二人の後姿が広場から見えなくなった頃、目撃者たちは口々に二人組について噂をし始めた。目立つ色をした鎧を着る者は珍しい。しかしその場にいた誰もその純銀の鎧を着た存在に覚えがなかった。

つまり新しくこの町にやってきた存在であることは間違いがなく、その力量については不明だ。二人が出てきた建物は「冒険者組合」と呼ばれる、モンスター退治を専門に行う者たちの斡旋所であり、鎧が飾り物ではない可能性を示唆している。英雄級の存在がこの町に来てくれたのなら、一般庶民の彼らの生活はとても楽になるはずだ。

それを期待する声もあれば、単なる金持ちの道楽なのではないかと

いう声もある。実際、どこから流れてきたにしては二人は軽装すぎた。旅に必要なものを何一つ持っていなかったようにも見えたのだ。だとすると逆に不快感が溢れてくるものだ。

目敏い者は、二人組が胴のプレートを首からさげていることに気づいて失望していたが、ほとんどの者は初めて見る冒険者の存在に興味を惹かれている様子だった。

二人組について広場で勝手な噂が拡大しつつある中。

噂の本人である二人組は、さほど広くない通りを楽しげに進んでいた。

全身鎧に身を包んだ方は当然頭部も鎧に隠れているため、どんな表情を浮かべているかは外目からはわからなかったが、美女の方はとても楽しそうな笑顔で歩いていた。二人が漂わせている雰囲気は旅を楽しむ観光客のようなものであり、実際、周囲を見回しながら歩く子は、それに非常に近い様子だった。

周囲に人がいないことを確認すると、女性は隣を歩く全身鎧を着た人物に話しかける。

「昨夜降った雨のせいで若干足下が悪いのが残念ですね。歩きづらくはありませんが……ゲームなら町中は全面石畳なのに。リアルにしようとする、すべての道に張るのは難しい……ということなんでしょうかね？ タツさん」

涼やかな女性の声でタツ、と呼ばれた全身鎧の人物は、軽く頷いて応じた。

「この手の物は、維持費用が馬鹿になりませんからね。煉瓦畳が有名な観光地では、上を歩く人が多すぎて、頻繁に修繕をしないと追いつかないという話を聞きますし……ここは観光地ではなさそうですし、ゲームの街みたいに全面綺麗な石畳……とはいかないでしょう。モモさん」

モモ、と呼ばれた女性は、なんとも複雑な顔をする。

「……うーん。全くの偽名にした方が良かったでしょうか。なんとなくそう呼ばれると変な気分です。たちちさん」

「わかる人には伝わる方がいい、というのは話し合いで決めたことで
すし、どつちに転んでもよしとなるようにがんばりましょう。モモン
ガさん」

そういうタツ——たっち・みーの言葉に、モモ——モモンガは渋々
頷いた。そんなモモンガを慰めるように、あるいはフォローするよう
にたっち・みーは続ける。

「それに、その姿になら『モモ』という偽名は似合っていると思います
よ」

「……覚悟はしてましたが、ネカマプレイをしている気分ですよ」
そういつてモモンガは苦笑を浮かべる。

戦闘メイド・プレアデスが一人、ナーベラル・ガンマ。

モモンガは都市で活動するに当たって、その声や外見を借りてい
た。魔法による幻術で外見を変えるのはもちろん、その腕には体のサ
イズを任意で変更できるのできるお洒落アイテムが嵌っており、それ
でナーベラルと同じくらいの身長に調整していた。ゲーム的な恩恵
はなにもなく、サイズを変更するとリーチなどの関係でアバターが動
かし辛くなってしまうという、純粋な意味でのお洒落アイテムだ。他
にも様々なマジックアイテムをナーベラルに扮するために用意して
いる。

これはカルネ村でモモンガを名乗った魔法使いの姿から著しく外
見を変えることで、少しでも人の眼を誤魔化すためという理由と、冒
険者として注目を集める象徴をたっち・みーの方に集中させるという
目的があった。

無論、コンビとして活動するのだから、モモンガの方も注目は集め
ることになるだろうが、わかりやすい象徴としては前衛職で戦う機会
も多いであろうたっち・みーの方が相応しい。ゆえにモモンガは目立
たないように努めている。もつとも、その容姿の段階で目立たないこ
とは不可能であることを失念していたのだが。

モモンガは先ほどの広場で注目を集めていたことを思い出す。

「転移してから2週間……ずっと彼らと顔を合わせてたから、どうに
も麻痺してましたけど、ナザリックの者たちはこんなに注目を集めや

すかつたんですね。まさかフードを被っていても注目されるとは思いませんでしたよ」

「元がゲームなのでですから当然かもしれませんが、美男美女揃いなんですよね……コキュートスのように明らかな異形種がどう認識されているのかわかりませんが、同種族にとってはものすごくイケメンなのかもしれません」

そんな話をしつつ、二人は道を歩く。

彼らは現在、エ・ランテルで「タツ」と「モモ」という二人組の冒険者として、名声を高めるべく活動を始めていた。

ナザリック地下大墳墓の長であるモモンガと至高の41人最強のたっち・みーが、二人で未知なる世界に向かうという提案は、当初はアルベドをはじめとした守護者たちから猛反対を受けた。いくら至高の41人最強のたっち・みーがついているとはいえ——否、ナザリックに属する者からすれば、たっち・みーに関しても同様である——至高の41人が二人して供もつけずに外に出ることに、反対意見が出ないはずもなかった。

しかし、『配下からもたらされる情報だけで正しい判断をすることは難しいため、自分たちで直接異世界の様子を見るべき』と、熟慮した結果出した結論であったことと、『二人で異世界を冒険をする』というのはたっち・みーとモモンガの大きな目的の内のひとつであったため、いかにNPCたちの意志を尊重していても、そこを譲るわけにはいかなかった。NPCたちのことを邪魔に感じているわけではないが、彼らがついていると上位者としての態度を崩すのは難しい。二人としてはもつと気楽に冒険を試してみたかったのだ。単なる自分たちの我儘といえたが、それでもそれを譲るつもりは少なくともモモンガにはなかった。

モモンガとアルベドの話し合いは、ナザリックでのたっち・みーとモモンガの立場を明確化する時の話し合いのように——五時間では収まらなかったが——長時間に及んだ。

最終的にはモモンガの説得が通じたのか、デミウルゴスが出した『不可視のエイトエッジ・アサシンを最低限の護衛としてつける』とい

う折衷案を採用することを条件に、アルベドも二人の提案を許してくれた。たち・みーとモモンガを見る目は、やんちゃな兄弟を見守る母親のようだったが。

かくして、二人はエ・ランテルにやってきて、冒険者の登録を済ませたのだった。

守護者たちの名前が出たことで、いまのナザリックのことを思い出したのか、モモンガが遠い目をする。

「私たちが不在で、ナザリックは大丈夫でしょうか。アルベドやデミウルゴスが上手くやってくれているとは思いますが……」

そんなモモンガの不安を、たち・みーは軽く流す。

「組織運営については大丈夫でしょう。そういう経験が実質皆無な私達よりは、あの二人の方がよくわかっていますし。任せられるところは任せるべきだと思います。モモンガさんが言ったことですよ?」

普通のサラリーマンであったモモンガと、ただの公務員だったたち・みー。どちらも組織運営に慣れているわけもなく、それゆえにそのあたりのことはアルベドやデミウルゴスに任せてしまった方が都合がよかった。

モモンガは自分で言ったことをたち・みーに指摘され、少し気恥ずかしそうに苦笑を浮かべる。

「……そうですね。すみません、つい気になってしまつて。無茶をしてまでこうしているんですし、それはおいておいて楽しまないと損ですわね!」

そういつてモモンガは楽しげにニコリと笑つた。普段の骸骨の姿であれば表情はないが、現在モモンガが幻術で取っているのは、外見的にはただの人間の顔だ。ゆえに、その心情を如実に表している。たち・みーは鎧の中でかすかに笑つた。元々人が身に纏うオーラを感じる事が出来、大体の感情を読み取ることできたたち・みーだが、現在のモモンガの感情表現はそれに頼るまでもなく明らかなのだった。

「ええ。楽しんでいきましょう。……さて、この辺りに組合で教えてもらった宿屋があるはずなんですわが」

たっち・みーは周囲を見回す。

いくつもの店が立ち並ぶ通りだ。開いている店がいくつかあり、そこに荷物を運びこんでいる姿も見える。冒険者組合の建物があった中央広場の活気とは比べ物にならないが、そこにも確かに人の営みが存在しているようだった。場所としては中央広場から大きく外れたところにあるため、決しているいい雰囲気とはいえなかったが、そんなどこか人の営みを素直に表しているような光景は、たっち・みーやモモンガにとって新鮮だった。

「なんというか、ゲームでいうところの『情報が齎される裏通り』って感じですよ。その辺に乞食に扮した情報屋とかいたりして？」

「あー。実際、本当にいたりするかもしれませんね。冒険者組合が存在するような世界です。暇があったらそういう存在を探してみてもいいかもしれませんね」

プレイヤー同士特有の気楽な会話をしつつ、目的の店を探す。ここにナザリツクの配下が傍にいたら、少なくともこんな気楽な会話はできなかつた。たっち・みーは目論見がちゃんと意味を成していることを実感していた。

モモンガがどこまで自覚してこの二人の冒険に踏み切ったのかはわからないが、たっち・みーとしてはこれは『モモンガの息抜き』という側面が強かつた。

思慮深いモモンガはナザリツクの者たちの前ではあらゆることを想定し、動いている優秀な絶対支配者であることを自身に義務付けている。そのために威厳のある言い回しや態度を取れるように練習していたりもする。寝る必要がないアンデッドとはいえ、寸暇を惜しんで絶対支配者として振る舞い続けるモモンガを、たっち・みーは心配していた。肉体的な疲労はなくても、精神的な疲労は溜まっているはずだ。

それゆえに、たっち・みーは暇を見つけてはモモンガの元を訪れ、アロマや大墳墓内の散歩に誘うなどして彼の心身のリフレッシュに気を配っていたが、ナザリツク内ではどこに行っても配下たちの目や耳がある。それがないところに連れ出す——それがたっち・みーのこの

行動に隠された目的だった。

目論見通りモモンガがのびのびと楽しんでいる実感を得つつ、たち・みーは目的の場所を発見する。

「あ。どうやらあそこみたいですね」

各店の入り口の近くに吊り下げられている絵の描かれた看板を指差した。それは組合で教えられた宿屋を表す絵だった。たち・みーもモモンガもこの国の文字が読めないため、それを目印に探していたのだ。

(暇を見つけて、この国の文字を学んだ方がいいかもしれないな)

たち・みーはそう思いつつ、モモンガを伴ってその宿屋の建物に入る。宿屋の1階は酒場になっているようで、かなり広い室内に何卓もおかれたテーブルにはちらほらと客の姿が見られる。いずれも荒事になれていそうな屈強な者たちであり、ほとんどは男だ。

その視線が、たち・みーたちに一斉に向けられた。

酒場の冒険者たち

向けられている視線は粘つくような、二人の価値を計ろうとするものだった。

新参者に対する警戒をするのは当然のことだとたち・みーは思っていたので、特に気にすることなく、まずはその宿屋の景色を観察する。

（ふむ……予想以上に汚いが……まあ、リアルならこんなものかな）

そうたち・みーが捉えたのは、宿屋の汚さだった。場末の酒場なら当たり前といえる清掃の行き届いてなさ。ひどく淀んだ臭い。そういうものが複合的に重なって、非常に大きな不快感を誘発している。

「……いまからでも、宿を変えますか？」

その汚さにたち・みー以上に辟易しているらしいモモンガがそう囁いてくる。

実際、変えようと思えばそれほど難しいことではない。活動資金はガゼフを助けたことで十分以上にある。ガゼフからの報酬がカルネ村に届けられた時、そのあまりの大金にカルネ村の者が腰を抜かしたほどだ。ガゼフはきちんとたち・みーとの約束を守り、十分な報酬を送って来ていたのだ。

そういうわけでやろうと思えばもう少しいい宿に乗り換えることはできる。しかし、たち・みーはその提案を却下した。こつそりと小声で、モモンガにしか聞こえないレベルで囁く。

「こういうところからのスタートもいいものじゃないですか。初心者に戻ったつもりでいきましよう」

「なるほど……それもそうですね」

賛同を得られたたち・みーは、店の奥へと進んでいった。その間にも視線はついて回っていたが、二人は気にしない。

宿屋の主人と思われる傷だらけの屈強な男性に近づいた。男性はぎよろりとした眼で二人を見据える。

「宿だな。何泊だ」

たちち・みーは少し考えて答えた。

「一泊でお願いしたい。ああ、できれば二人部屋で」

宿の主人はびっくり、と眉を動かし、その視線は二人が首から提げているプレートに向いていた。

「……銅のプレートか。悪いことは言わん。相部屋にしておけ」「なぜだ?」

たちち・みーは素直に聞いた。客が二人部屋を望んだのに、なぜ相部屋を薦めるのかと純粹に疑問だったからだ。

その瞬間、宿の店主はカツ、と眼を見開いた。

「少しは考えろ! そのご立派な兜の中はガランドウか!」

苛立ち混じりのその恫喝に、たちち・みーは特に強い何かを覚えなかった。子供が癩癩を起こして喚いた程度の感覚しか生じない。

「ふむ……そういうえば、世の中には空っぽの鎧が動いているように見えるモンスターもいるらしいですが、ここにもそういうモンスターがいたりするんでしょうかね?」

宿の店主を無視して、たちち・みーはモモンガの方を振り向いて言う。モモンガは話の水を向けられて、虚を突かれたような顔をした。そして、唸る。

「えーと、どうでしょう……? 天使がいたのだから、同じようにいてもおかしくはないと思いますけど……」

たちち・みーはうまく機先を制することができたことに安堵する。いま、たちち・みーが声をかける一瞬前まで、モモンガはひどく冷めた眼を宿の店主に向けていた。

もしたたちち・みーが機先を制さなければ、加減はするだろうがへ絶望のオーラあたりを放って店主を盛大にビビらせていたかもしれない。

さすがにこれから一泊お世話になろうとしている宿の主になんかあったことをするのは、たちち・みーの気持ち的に避けておきたかったのだ。

「おっと、失礼。話の途中だったな。相部屋を薦める理由、だったか

？」

「宿屋の主人は自分の恫喝にビビらなかつたことには感嘆しているが、あからさまに無視されたことに不快感を覚えている、という複雑な様子でたっち・みーの問いに頷く。

「たっち・みーは顎に手を当てて考えた。」

「……そうだな。銅のプレートであることを気にしていたところからすると……宿泊料の問題か？ 稼ぎが少ないのだから、安く済む大部屋にしておけ、ということかな？」

「冒険者組合で薦められた宿であることも踏まえて考えると、もしかしてコネクション作りが関わっているのでは？ タツさん。ほら、冒険者組合で登録するときには訊かれたじゃないですか。お二人なんですか、つて。一般的には4人から5人が適正パーティ人数みたいでしたし」

「ああ、なるほど。相部屋で泊まることで他の冒険者と接点ができ、フランスの良いパーティを組むことができるというわけですね。納得しました」

「たっち・みーがモモンガとの会話で答えにたどり着いたことに満足していると、店主がじつと二人のことを観察していた。」

「……まあ、だいたいその通りだ。顔を売らなければ仲間なんざできないからな。それで、相部屋と二人部屋、どっちがいい？」

「ああ、わざわざ薦めてくれてありがとう。だが、二人部屋で頼む。食事の必要はない」

「……その全身甲鎧はお飾りじゃねえってか？ まあいい。一日七銅貨だ。前払いだ」

「たっち・みーは懐を探って小袋を取り出し、中から銅貨を取り出して支払った。」

（カルネ村で金貨を銅貨に代えておいてよかった）

「金貨で支払いをしなくて済んだのは、カルネ村という便利な村があったからだ。なりゆきで救った村だったが、結果的に良かったとたっち・みーは満足する。」

「店主から部屋の鍵を受け取り、モモンガを連れて二階にある部屋に

あがろうとしたとき——進行を邪魔する形で、足が投げ出された。

たっち・みーは立ち止まり、足を出してきた男を何気なく観察する。薄笑いを浮かべたその男は、軽薄そうな目つきでたっち・みーを見ていた。同じテーブルについて酒を飲んでいる男たちも、だいたい似たような様子で、たっち・みーとモモンガを眺めている。

店の主人や他の客で止めようとする者はいない。新人に対するいわゆる通過儀礼なのだろうとたっち・みーはあたりを付けた。現に、周りから注がれる視線の中には、一挙一動を見逃さないとする鋭いものも含まれていた。

(ふむ)

たっち・みーは男の行為の意味をよく理解した上で、その男に向かって声をかける。

「すまないが、その長い足が邪魔で通れないんだが、どけてくれるか？」

丁寧な物腰で要求する。足を投げ出した男は、不快げに声をあらげる。

「ああん？ おい、そりや頼みごとをする態度じゃ——」

たっち・みーは最後まで言わせなかった。

「——どけてくれるな？」

周囲にいた者でも、感覚の鋭い者なら、そこに込められた若干の威圧を感じたはずだった。ましてやたっち・みーの威圧を真正面から向けられた男はひとたまりもない。

ぴりっ、とする緊張感が男の全身を駆けめぐり、新人を牽制しようとしていた意思が根こそぎ奪われていく。

「……お、おう。わりい」

おとなしく足を引つ込めた男に対し、たっち・みーは微笑む。

「ありがとう」

そのあまりにあっけない結果に、黙っていなかったのは男の仲間たちだ。このままでは新人になめられたという風評が流れるかもしれないのだから、黙っていられないのは当然だが。

そのうちの一人が酒の入ったジョッキを片手に持ったまま立ち上

がり、たっち・みーの前に立ちふさがる。

「おいおいおい！ なめてんのか？ 俺たちは先輩だぞおい。新人ならもうちよつと態度つーもんがあるだろうがよお？」

完全に酔っぱらっているのか、難癖というレベルではないことを言いながらたっち・みーに迫る。その足取りはいまにも倒れそうで、おぼつかない様子だった。

「……さすがに飲み過ぎなんじゃないか？ そんなに酔っぱらっていては仕事にも差し支えるだろうに」

純粹に心配になって、たっち・みーはそう忠告したが、酔っぱらいに道理が通用するわけもない。

「うるせー！ すかしたこと言っつてんじゃねえぞこらー！」

男は手を伸ばしてたっち・みーのマントを掴んだ。襟首を掴むような感覚だったので、薄汚れた手でマントを掴まれたということに、軽い不快感をたっち・みーは覚える。しかし酔っぱらいを真面目に相手にすることほどばからしいことはない。

（あー、窓口業務を思い出す……こういう人、頻繁に来るんだよなあ……公務員だからつてむやみやたらと絡んでくる人もいるし）

そう思ったたっち・みーは、適当にあしらおうとしたが——背後で急速に大きくなる殺意を感じ、慌てた。このままではこの酔っぱらいは死ぬ未来しかない。

しかも、あろうことか酔っぱらいはその強い殺意を何と勘違いしたのか、たっち・みーの背後……モモンガの方を見て、だらしなく相手を崩した。

「おお……いい女連れてんじゃねえか。そつちの姉ちゃんが一晚酌してくれるつーなら、許してやらなくも……」

何を許される必要があるというのだろうか。冒険者だというのなら、命の危険が目の前に迫っている危機に気づいてほしい。

たっち・みーは密かにため息をつき、前に出てこようとしたモモンガを片手をあげて制する。

「……私の顔も三度まで。私は何度も忠告したからな」

「ああ？」

たっち・みーは静かに特殊技術を發揮する。

（剣氣Ⅰ）

瞬間、男が手に持っていたジョッキが跡形もなく爆散した。幸いというべきか、持ち手部分は爆散しなかったし、怪我をするほどの爆発ではなかったが、その衝撃は酔っぱらいの頭をぶん殴るのと同じくらいの破壊力があつたようだ。

「……ほへ？」

男は持ち手だけになったそれを不思議そうな顔で見つめる。たっち・みーは静かに言った。

「次は、お前の頭がそうなるぞ？　とりあえず——手を離せ」

わざとらしく若干の殺意を込めていう。実際は〈剣氣〉という特殊技術は敵が手に持つ低位の武器や通常のアイテムを破壊することができるだけのもので、人の体自体に悪影響は与えられないのだが、効果は覲面だった。酔っぱらいの頭から一気に血の気が引いた。

酔っぱらいの頭でも目の前のたっち・みーが何かをしたことでジョッキが爆散したのはわかったのか、大慌てでマントから手を離す。たっち・みーは掴まれていた部分のマントを軽く叩いて皺を伸ばした。

「酒は美味しいものだが、冷静な判断力を失うまで飲んではいけない。酒は飲んでも飲まれるな、ということだ。わかったか？」

「は、はい……すみませんでした……」

男はすっかり萎縮した様子で、すぐごと引き下がる。それから、たっち・みーは三枚ほど銅貨を取り出し、店主に渡した。

「店の備品を壊してしまったから、その代金だ。悪かった」

「……おう。律儀だなあんた」

店主はそう言って銅貨を受け取る。

さて、今度こそ部屋に行こうとたっち・みーがしたとき——
「おつきやあああああああ!!!」

唐突にそんな奇妙な悲鳴が酒場に響き渡った。

たっち・みーがそちらを見ると、椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった女性の冒険者が、頭を抱えて叫んでいる。その女性の前におかれた

テーブルの上には、何かが割れて内容物が散乱しているのが見えた。「なんで!?! なんていきなりポーシヨンが割れたの!?! うそでしょ!?!」

(あ。しまった)

たち・みーは理解した。どうやら〈剣気〉が影響を及ぼす範囲が思ったよりも広がったようだ。ユグドラシル時代には相対した相手に影響を及ぼすだけの特殊技術だった。

放っておくこともできたが、きちんと特殊技術の影響範囲を確認しないままに使ったのは自らの失態だ。他に被害がでていないか酒場内を見渡したが、絡んできた酔っぱらいとその女性以外に、手に何かを持っていた者は幸運にもいなかったようだ。

たち・みーはその場にモモンガを待たせ、女性に近づいた。女性は短くぎつくばらんに切っている鳥の巣のような頭を抱えたまま、ぶつぶつと恨み言を呟いている。

その様子は少し不気味で、たち・みーが声をかけるのを思わずためらうほどだった。

「……あー。すまない。どうやらこちらの争いに巻き込んだようだ」「……っ!」

ぎろり、とその女の目がたち・みーの方を睨む。かすかに涙の浮かんたその眼には不思議な迫力があつた。もちろんそれでたじろぐようなたち・みーではないが、女性を泣かせた罪悪感は大きかった。

「ポーシヨンは普通の治癒のポーシヨンか?」

「……そうだけど」

「代わりのポーシヨンを出そう。それで許してくれ」

そういつてたち・みーはマントの影でこっそりアイテムボックスを開き、ポーシヨンを取り出す。取り出した治癒薬は下級のものだったが、駆け出し冒険者が薦められるような宿にいる冒険者のレベルを踏まえ、あまり上質なものを出すのは逆にまずいかと考えたのだ。

差し出されたポーシヨンを、女性はぶすつとした顔で受け取る。

「これで問題はないな?」

「……ええ、ひとまずは」

「悪かったな」

「たち・みーはもう一度そう短くわびると、モモンガを連れて宿屋の二階へとあがっていった。」

「たち・みーとモモンガの姿が二階に消えると、酒場の中は新参の二人組に関する話題でざわめきだした。」

「腰が低いというのは違って、なんつーか、まさに格が違う、って感じだったな……」

「なんでジョッキが爆散したんだ？ なにかの武技か？」

「お、女の方の様子を見てた奴いるか？ すげえ怖かったぞ……なんつーか、殺気が……」

「剣と盾くらいしか武装がなかったけど、ありや相当な腕前だな」

「でも盾にも鎧にも傷一つなかったぜ？ さすがにありえなくねーか。貴族のボンボンの道楽って考えた方が納得するんだが……」

「そんな二人組への興味の言葉が飛び交う応酬の中、宿の主人は先ほどたち・みーからポーシオンをもらった女性に近づいた。」

「おい、ブリタ。なんだそのポーシオンは？」

「女性——ブリタは手にしていたポーシオンを不思議そうに見ている。」

「……なんだろう？ おやつさんもこんな色のポーシオン見たことない？」

「ああ、ないな」

「そのポーシオンは赤色をしていた。ブリタが失ったポーシオンは青色をしていて、それがこの世界の中では一般的なポーシオンだった。」

「赤色のポーシオンなど、噂にも聞いたことがない。」

「明日にでも鑑定してもらいに行ってみる。もしかしたらなかなかの逸品かもしれないしね。そしたらポーシオンを割られた甲斐もあったってものだけど……」

「おう。それなら俺がその鑑定料持ってやるよ。一流どころも紹介してやる。代わりに俺にもそのポーシオンの効果なんかを教えてください」

宿の主人はあの新参者の二人のことが気になっていた。強者の雰囲気はあるがどこかつかみ所がなく、強者にありがちな傲慢さもなく、わざわざ破損させた備品の弁償までしていくような存在。甘いというべきか真摯というべきか。どう判断したらいいものかわからない。

そんな存在が渡したポジションに、宿屋の主人は何かを感じ取っていた。

「どうせだから、最高のポジション職人に持っていけ。かのレイジー・バレアレのところにな」

ブリタは素直な驚きを表す。

レイジー・バレアレといえば、この都市最高の薬師の名前だ。そんな薬師を紹介してもらおうとなれば、ブリタにそれを断る理由はない。

そんなブリタを、酒場の天井の隅から不可視のエイトエッジ・アサシンが見張っていたのだが——その場にいる誰も、その存在に気づくことはなかった。

ナザリツク留守番組

粗末な扉を閉め、念のため鍵をかける。

正直そんな鍵が何の意味があるのかというような薄い部屋の扉だったが、それでもかけていないよりはマシだろう。鍵をかけているのに入ってくるような奴には相応の扱いをするという意味表示にもなる。

部屋の中を見回していたモモンガが、その顔を軽く歪める。

「いかにも場末の宿場って感じですね。趣がないわけではありませんが……」

もしこの場に配下のものがいたら、「有名になるまでは身分相応にあった生活も悪くない」とでも言ったかもしれないが、ここにいるのはたっち・みーとモモンガだけだ。素直に思ったことを吐露するモモンガに、たっち・みーはかすかに笑みを浮かべながら慰めるように言う。

「このいかにもな簡素な感じがいいと思いますよ。それに、ナザリツクの自室はもちろん好きなんですが、たまに豪華すぎて落ち着かないこともありますしね。今日だけのことで、このぼろさを楽しむむとしましょう」

ベッドに腰を下ろすと、鎧の重さもあってミシミシと不穏な音を立てた。下手をすれば壊れるかと思っただが、幸い最低限の重さを支える役割は果たしてくれたようだ。そのたっち・みーに向かい合うような位置に、モモンガも腰を下ろす。ナーベラルに扮している分、重さも大したことがないのか、ベッドは小さく軋んだだけで収まる。

「しかし、冒険者というのは存外夢のない仕事でしたね。あれじゃあモンスター退治専門業者ですよ」

道を求め、世界を冒険する者。ユグドラシルでもそう言った楽しみ方を追求した上位ギルドが存在したが、現実になれば冒険者という職業もつまらない堅実なものになっていた。

冒険者という言葉に相応の夢を抱いていたのであろうモモンガは、

不満そうに唇を尖らせる。こここのところ骸骨の姿で意図しなくても表情が出なかつたために、表情の調節の仕方を忘れているのだろう。そんなモモンガにたっち・みーは指摘するべきか迷ったが、結局それをしていないことにした。その方がナザリック地下大墳墓の絶対なる支配者モモンガと冒険者モモを結びつけられることはなさそうだと判断したからだ。

「まあまあ。リアルに生活がかかるようになっては、多少夢がなくなるのも仕方ありません。漫画家や小説家が、目指しているときと、そうあろうとするときが違うようなものです。私達だと、声優の方がイメージしやすいでしょうかね?」

「……………ぶくぶく茶釜さんですね。懐かしいなあ」

売れっ子声優に成長したギルドメンバーのことを思い出す。生活のために割のいいエロゲの声当てをしていて、弟のペロロンチーノを嘆かせていた光景を思い出し、モモンガは笑った。

「確かに。それを思えば、モンスター退治というファンタジーらしいことをしている分、冒険者の方がまだ夢はあると言えるかもしれませんね」

「実際、私達がイメージするようなこともしないわけじゃないみたいですしね。二百年前に出現した魔神に滅ぼされた国の遺跡にお宝さがしとか。いずれ行ってみませんか?」

「いいですね! まあ、ナザリックの至宝の数々には勝てないとは思いますが……………この世界における価値のあるものがどんなものなのかは興味があります」

宿屋の件で下降気味だったモモンガの機嫌が上昇に向かっていくことを感じ、たっち・みーは自分も嬉しくなりながら、すかさず組合で購入したエ・ランテルの地図を広げる。

「さて、とりあえずこれからの行動ですが……………この町を見学し、知識を得ましょう。金銭に関してはガゼフからの報酬で困っていませんし、まずは色々物色したいものですね」

初めて訪れる町の地図というのはどうしてこうもワクワクさせてくれるのか。

たっち・ミーがウキウキしながら地図を見回していると、モモンガも興味津々な様子で地図を覗き込む。

「となると……まずは市場などでしょうか。一番その街のことがわかりやすいのはそこですよね」

「ええ。ついでに興味を惹かれるものがあれば購入しましょう。この世界特有のマジックアイテムなどがあればいいんですが」

一枚の地図を二人して覗き込み、どこに行こうかを相談する。

冒険者というよりは観光客みたいな行為だったが、それでも楽しいことには違いない。

「巨大な墓地なんかもあるんですよ。……アンデッドとしては行っておかなければならない気がしますね？」

「ははは。そこまで自分の種族に引つ張られなくても」

無論、互いに冗談とわかった上でのやり取りだ。そんなやり取りが気軽にできるといふ事実にか、モモンガは非常に楽しそうに笑う。

地図を畳んで懐に入れながら、たっち・ミーが立ちあがった。

「それでは早速街に繰り出しますか。……と、その前に。〈伝言〉」

そういつてたっち・ミーがいずこかへ連絡を取る。数秒後、部屋の中にエイトエッジ・アサシンの一匹が入ってきた。床に伏し、頭を下げる。

「エイトエッジ・アサシン、参りました」

「私たちはこれから街を散策……いや、見学しに出る。部屋に侵入する者があれば即座に私たちに連絡せよ。いまのところボロは出してはいないはずだが、万が一ということもあり得るからな」

「承知しました」

「あと……さつき、下の酒場で私たちに絡んできた冒険者と、ポーシヨンを渡した冒険者のことは把握しているか？」

「はっ。すでに監視対象として同行を把握しております」

その言葉に、たっち・ミーは満足そうに頷く。

「そうか。絡んできた方は逆恨みをされていないかどうか探るだけがいい。ポーシヨンを渡した方の冒険者は今後の動向に十分注意しておいてくれ」

「畏まりました。不敬にも御身に絡んだ泥酔者は、すっかり意気消沈した様子で水を飲んでおりましたので問題ないかと思えます」

エイトエツジ・アサシンのいい返事を聞き、たち・みーは心配いらないことを確信した。自分が命じる前に、きちんと動いてくれている。

「そうか、ありがとう。……では行きましようか、モモさん」

そう言っただち・みーはモモンガを伴い、部屋の外に出る。モモンガが不思議そうに聞いてきた。

「なぜポーションを渡した冒険者の動向について調べるように言っただんですか？」

「ああ、モモさんの位置だと聞こえなかったんですね。いえ、大したことじゃないんですが、私がポーションを渡した時、あの冒険者『ひとまずはこれでいい』みたいなことを言っていたんですよ。それが気になって」

それを聞いたモモンガはたち・みーがなぜそれを気にしているのか理解したようだった。

「ああ、ひよつとすると渡したポーションが価値として不足していたかもしれない、と？」

「ええ。ポーションの相場がわからなかったので物々交換を持ちかけましたが、考えてみればそれも相場がわからない以上、ちゃんと同価値の物を渡せていたのか、後から不安になりました」

あの場では大人しく引き下がってくれたものの、実はポーションの価値が釣り合っていないくて、不満を持たれていたとしたら、たち・みー的には大事である。

「場合によっては追加で何か配慮するべきかとも思います。こんなことで冒険者タツとモモの評判に傷がついてはつまらないですから」

「……相手も納得して受け取ったんですし、たかだか一冒険者にそこまで気を回さなくても、と思いますよ？」

でも貴方らしいです、とモモンガは苦笑気味に呟くのだった。

結果として、その行動が想わぬ事態を察知することに繋がるのだが、それはまだ先の話だ。

宿から出て、道を歩きながら二人は会話を続ける。

「貴方らしいといえば、あの足を突き出して来た男や、酔っ払いに対する対応もタツさんらしかったですね。私だったら、わざと蹴り払っていたでしょうし、絡んでくるようならぶん投げるくらいに思っています。手取り早く実力を見せつけられるでしょうし」

「新人に対する通過儀礼みたいなものでしょうから、それでもよかったですよ……実は上手く加減する自身がなかったんですよ。私の身体能力で『軽く投げる』と宿屋の壁ぐらい貫通させそうで。殺しちやうとさすがにまずいですからね。……あと、酔っ払いへの対処は職業柄慣れてますから」

そんな風に笑いながら、二人は街中を歩くのだった。

主人が不在のナザリック地下大墳墓。

その管理を任されたアルベドは、モモンガの執務室で、座るものがない椅子の傍に立っていた。すでに今日の分の伝達事項や仕事は終わっている。何か不測の事態があれば即座に連絡が入ることになっているため、アルベドはその場所にやってきていた。

「モモンガ様……」

百年離れた恋人を思うように、椅子の手すりを指先で撫でる。次にその視線は、その椅子の隣に配置されたそこそこ豪華な椅子に向かった。

「たっち・みー様……」

モモンガと作戦を考えると、たっち・みーが座るための椅子だ。自分とデミウルゴスの椅子も用意されているが、必要ないときは片づけているのでその場にはない。すでに何度か行ったことではあるが、作戦会議の光景を思い出すと、勝手に頬が緩んでしまう。

至高の二人と共にナザリックの未来のことを考えるあの時間は、アルベドにとって最高に至福の時間だった。その時間がすでに恋しい。「……やっぱり、無理を言っても付いていくべきだったかしら……せめて誰かつけるべきだったかしらね」

至高の二人が決めて提案してきたこととはいえ、作戦立案に関してはアルベドとデミウルゴスはたっち・みーと同等の権限を与えられている。だから、本当の本気でアルベドやデミウルゴスが供をつけるように進言すれば、二人もそれを受け入れてくれていたはずだ。

それをしなかったのは、デミウルゴスが早々と折衷案を出してきたということもあるが、二人の意志が固かったからである。下手な配下をつけるよりはよほど二人だけの方が安全と言われると、それはそれで納得のいく話だ。

なぜなら、いくら盾となるために配下がついていこうと、たっち・みーの性格を考えれば、それをよしとするわけもないからだ。ついてきた配下がかえって足手まといになってたっち・みーを危険に晒すということも十二分にありうる。

「たっち・みー様……貴方はお優しすぎますわ……」

自分たちを大事に思っ、そう扱ってくれるのは、この上ない喜びではある。しかし、もしそれでたっち・みーが傷つくようなことになれば、自分たちはどれほど苦しむだろうか。想像することも出来ない。

ぶるり、と体を震わせたアルベドは両手で自分の体を抱きしめる。

「……どうか御無事で。お二人が無傷でナザリツクに帰還する時を、私どもは心待ちにしております」

神に祈りをささげる純粹無垢な信仰者のように、アルベドはそう願う。

そこに（伝言）が届いた。

アルベドは即座に陰鬱なものになっていた空気を払って、（伝言）に応じる。

「はいっ！ モモンガ様でございますか？」

『ああ、アルベド。定時連絡だ』

威厳の籠った絶対支配者の声に、アルベドの気持ちは天にも昇り、蕩けそうなほどの多幸福感に包まれる。声を聴くだけで意識を失ってしまいそうになるほど、アルベドは感じ入っていた。

かといって気をやっってしまうわけにはいかない。彼女の主人は情

報の共有のために連絡をしてきているのだから、一字一句聞き逃すわけにはいかなかった。無論、モモンガの言葉であればどんな状態にあっても脳内再生できる程度には記憶するのだが。

『——以上だ。いまのところ、特筆するような強者にも重要な物品も目にしていない』

「畏まりました。ご連絡ありがとうございます。ナザリックのことは私どもにお任せください。お二人がお戻りになられるまで、一切の侵入も許すことはありません」

『うむ、そうか。信頼しているぞ』

さりと付け加えられた言葉に、アルベドは思わず興奮の叫びが漏れるのを止められなかった。

「く、くふー！……失礼しました。勿体ないお言葉です！」

『そうそう。都市の見学中、露天でよい髪飾りを見つけたから、お前への土産として持ち帰るつもりだ。まあ、ただの安物なのだが……』

それはまるで隕石が直撃したレベルの、唐突な幸福の飛来だった。

「ふえあ!? そ、そんな、土産など！」

畏れ多さのあまり、変な奇声をあげてしまった。

『不要か？ 私たちの不在中、ナザリックを守ってくれているお前に何かしら労いを与えたかったのだが……要らないのなら——』

「不要だなんてとんでもない！ ぜび、ぜびいただきたいです！」

アルベドは主人に対する遠慮などかなくなり捨て、そう懇願する。これで「じゃあ他の者に」とか言われた日には、何日泣き暮らせばいいのかわからなくなる。

『そ、そうか。では、戻ったときに渡すから楽しみに……いや、ほんとに安物だからな。ナザリックにあるどんな安物よりもおそらくは価値がないぞ？ あまり期待してくるなよ？』

「モモンガ様からいただけたということに価値があるのです！」

思わずそう叫んでしまったアルベドだが、ナザリックに属する者であれば全員がそう思うはずだ。いわば、常識の類である。

しかし、モモンガはなぜか若干引いているようにも感じる声をしていった。

『そ、そうか……わかった。ああ、ちなみにコキュートスにはたつちさんの方から土産を渡す。留守中ナザリックを守っている者に対する労いゆえ、コキュートスには遠慮せず受け取るように伝えておけ。固辞する方が失礼に当たる、とな』

「はっ！ 承知しました！」

『ではまだ見学して回るところがあるため、これで〈伝言〉を切る。何かあればそちらから〈伝言〉を使え』

「畏まりました！」

アルベドは〈伝言〉が切れたことを確認すると、あふれ出る喜びのあまり両拳を突き上げ、翼を広げて全身で喜びを表す。

留守番していてよかった。そんな気持ちに駄々漏れなアルベドの様子を見た者は幸いにしていなかった。

「くふ、くふふっ！ モモンガ様だったら……髪飾りだなんて……！
なんて罪作りな方！」

たっち・みーからのお土産をもらえないのは残念だが、そこまで望んでは同じようにナザリックを守っている仲間に対して申し訳ないし、モモンガのお土産だけで満足していないようで不敬だろうと雑念を払う。

ほとんどスキップするほど、ご機嫌な様子でアルベドは早速コキュートスに天から降って来た朗報を伝えるべく、移動し始める。

アルベドから事の次第を聞いたコキュートスが、四つの拳を天に向かって突き上げるのは、それからしばらく経ってからのことだった。

エ・ランテルの市場にて

エ・ランテルの市場には様々な道具が集まっていた。露天が所せましと並んでいて、この世界では日常的な光景なのだろうが、元の世界の街並みが当然であるたち・みーにとっては過去の記録で知る祭りの光景だ。

現在この市場に並んでいる物品の大半はたち・みーやモモンガにとつてガラクタにも等しい効果や価値しかないものだったが、それでも様々な物品が所せましと並んでいる光景は、買い物や物色が少しでも好きならば心躍る光景だ。

「タツさん、タツさん。これとかどうですか？」

そういつてモモンガが手にしたのは、無骨な首飾りのようなものだった。ジャングルの奥地にいる原住民が身に着けていると言われ、でも納得してしまいそうな、そんな荒々しい作りである。

たち・みーはそれを見て難しい顔をした。

「うーん……さすがにお土産にするにはちよつと作りが荒すぎますね……コキュートスなら似合いそうではありませんし、喜んで受け取ってくれるとは思いますが」

ナザリックの者たちは至高の存在からの贈り物なら、たとえ道端に落ちている石ころであろうとも全力で喜ぶであろうが、二人ともそこまで彼らの価値観を把握できてはいなかった。

「相手はコキュートスですし……武器に関わる物の方がいいでしょうか」

「そうですね。剣の柄につける飾り紐とかないでしょうか。……邪魔になるだけかなあ」

「鞘に巻き付ける紐ならいいんじゃないですか？」

二人はコキュートスにあげるためのお土産を真剣に選んでいた。

というのも、モモンガがアルベドに定時連絡を行った際、モモンガが用意したお土産をアルベドがひどく喜んでいたので。実はあの段階でコキュートスへのお土産はたち・みーが用意するということだけが決まっっていて、何を渡すかは決めていなかった。

たっち・みーとしては軽いお土産感覚だったのだが、アルベドの反応からすると相当喜んでくれるようだったので、下手なものを用意することはできなかつた。かといって、アルベドのお土産と極端に価値が違うものを渡すのも都合が悪い。平等に扱わなければ、無意味な争いや不満を誘発してしまうからだ。

(子沢山の家主というのはこんな気持ちなのかもな……)

ナザリックの守護者たちを子供と同列に語るのはいかがかとも思うのだが、ついそういう認識になってしまう。

(子供……か)

リアルのことを思い出し、思わずナイーブな気持ちになってしまうたっち・みーだった。

(……つと。いけないいけない)

いまはどうしようもないことで雰囲気は暗くしても仕方ない。たっち・みーは気持ちを切り替え、改めてお土産の物色に戻ることにした。

「……あれ？ モモンさん？」

さつきまで隣にいたはずのモモンガがいないことに気づいた。

他の露店でも覗いているのかと思い、周囲を見渡したたっち・みーは——

「惚れました！ 一目ぼれです！ 付き合ってください！」

隣の露店で金髪の男にナンパ——というには声が妙に真剣な響きを有していたが——されているモモンガの姿を見た。

モモンガは真剣に商品を物色していた。

コキユートスに対するお土産は、たっち・みーが用意することになつてるとはいえ、モモンガがアルベドに用意した髪飾りのお土産は元はたっち・みーが薦めてくれたものだ。最終的に決めるのはそれぞれでも、それまでに提案するのは自由。ならば、お土産が少しでもいいものになるように、品物を物色するのは当然と言えた。

(たっちさんのお土産になるのだから……完璧なものを選ばなければ

ならんだろう)

下手なものを選んで、『たっち・みーにはセンスがない』なんてことになれば一大事だ。しかしモモンガは自分のセンスに自信があるわけではない。ゆえに、せめて真剣に、全力で選ぶことに意識を注いでいた。

そうしているうちに、たっち・みーから離れて隣の露店にまで到達してしまっただが、真剣に物色を続けるモモンガは気づかない。さらに、品物の方に集中していたから、進行方向に別の客が立っていることに気づくのが遅れた。

「あ、っ」

ぶつかる寸前で気付いたモモンガは、慌てて体を引いた。魔法職とはいえ、レベル100にもなればそれだけで相当な身体能力を発揮することができる。無意識とはいえ——無意識だからこそ、下手にぶつかれば相手が吹っ飛んでしまいかねない。

だからぶつかる前に強引に体を引いたのだが、そのせいで体勢が大きく崩れ、尻餅をついて転んでしまった。モモンガは物理的なものでダメージを受けない身であるため、打ち付けた衝撃はあっても痛くはないが、衝撃につい目を閉じてしまう。

「おっと、すみません！ 大丈夫です……か……」

ぶつかりそうになった相手は、自分がモモンガを突き飛ばしたのだと思っただろう。慌てて声をかけてきていたのが、急に尻萎みになって消えた。

モモンガはそれを不思議に思いつつ、瞼をあける。本来のモモンガの体には瞼はないはずだったが、不思議と同じような感覚で視界を閉じたり、開けたりすることはできるのだ。

その開いた視界には、金髪の男が映った。皮鎧を身に纏っているところをみると、冒険者のようだ。戦士のような重装備ではなく、体つきも決して屈強とは言えなかったが、無駄なものをそぎ落とした専門職の雰囲気を感じる。どこか剽軽な雰囲気を持った男で、さぞパーティ内ではムードメーカーになっているのだろうと察することができる。アインズ・ウール・ゴウンにも似たような雰囲気を持ったメン

バーがいた。

男はモモンガの方を見て、ものすごく驚いた表情をしていた。なぜそんな顔をしているのか、モモンガは一瞬わからなかったが、やけに視界が広いことに気づき、その理由を悟る。

(あ、フードが……！)

目深に被っていたフードが、転んだ時の衝撃で外れてしまっていた。そのせいで顔が曝け出されてしまい、男はそれを見て固まっているのだ。

(まずい。ナーベラルの容姿は明らかに異国のものだ。もしやそれがなにか問題なのか……?)

他に硬直するほど衝撃を与える理由が思い浮かばず、モモンガはそう思う。

組合でもここまでの道のりでも、珍しそうな顔をされることはあつたし、相応に注目されてはいたが、特に問題のある視線や態度は向けられなかった。いま目の前にいる男のように、硬直する反応は初めてで、モモンガはそれが異国の者に対する警戒心や敵対心から来る者ではないかと予想した。とっさに考え付いた理由がそのくらいだったのだ。

慌ててフードを元のように被りつつ、モモンガは立ち上がる。軽く服の裾を叩いて汚れを払った。

「し、失礼します」

短く詫びて、早く離れようとしたのだが。

「待った！」

その男が止める。いきなり手首を掴まれて、モモンガは焦った。

(ちよっ！ あぶなっ！)

モモンガは分厚めの手袋をしており、それによって触れられた時の触覚を多少誤魔化している。ばれはしないはずだったが、それでも気づかれるのではないか、という一抹の不安はあるのだ。

大きな動揺は一気に沈静化されるため、大きな声をあげることは避けられた。冷静になったモモンガはとりあえず穏便に手を離すように言おうとして。

「惚れました！ 一目ぼれです！ 付き合ってください！」

動揺が一気に最高点に達し、今度はモモンガが硬直する。

超真剣な眼差しと態度の男。そして周りの注目。白昼堂々、喧噪のなかで突然生じた告白劇に、何とも言えない空気が周囲を漂っている。困惑が強かった気配は、事態を理解した者から興味や関心というものに代わっていく。

モモンガは流れもしない汗が、全身から流れているような気分だった。

（な、なにを言っているんだこいつは!? は？ 付き合ってたてなんだ？ 買い物にでも付き合えばいいのか？ いや、そんなわけないだろ落ち着け俺）

精神の鎮静化は変わらず作用している。しかし、たちち・みーと一緒にいたために最近のモモンガの精神は、常に精神の鎮静化ギリギリの位置まで高揚し、安定していた。

それゆえか、いまのモモンガは精神の振れ幅が大きくなっていった。一定を超えた動揺が沈静化されても、またすぐに感情が湧き上がってしまう。意図して落ち着こうとしなければならぬほどに、モモンガは焦っていた。

そもそも元の世界も含めて告白された経験など皆無なモモンガには、突然の告白に対する反応の引き出しがなかった。どう応えるのが正解なのかわからないため、何か言うことが躊躇われるのだ。

その間にも、その男の攻勢は続く。

「俺はルクルット・ボルブ。『漆黒の剣』という冒険者のパーティーで野伏を務めています。それなりの技術は持っているし、食うに困らせないくらいの甲斐性はあるつもりです！」

聞いてねえよ。

モモンガはそういつてしまいたかったが、それを口に出すのは憚られる。営業スマイルで乗り切ってしまうのか、それとも今後のことも考えて冷たくあしらう方がいいのか、迷うモモンガは困っていることだけが明らかかな、曖昧な表情を浮かべる。

「えー、と。その、私はそういうのは……」

とりあえず断ろうと口を開きかけたが、それを制するようにルクルトがずい、と前に出て来て、思わずモモンガは口を閉ざす。ルクルトはモモンガの手を両手で握りしめた。

（いや、近すぎだつて！ 目が怖い！ つていか手を握るな！ ばれる！）

血走っていてもおかしくないほど真剣な眼差しでルクルトは続ける。

「必ず！ 必ず幸せにしますから！」

人間の女なら思わずときめいていたかもしれない。

しかし、ルクルトが求婚しているのは、外見は美女でも、中身は男だし、その上アンデッドだ。厄介な相手につかまったという認識しか、モモンガにはなかった。

鎮静化と湧き上がる困惑に翻弄され続ける。

そこに、救いの手が差し伸べられた。

「きみ、ちよつと落ち着こうか？」

その静かながら凄まじい威圧感を放つ声の主は、両腕を組んでモモンガとルクルトの真横に立っていた。その声の主——たち・みーとは、ルクルトでさえ、見上げなければならぬ身長差がある。しかも彼が着ている全身鎧は、価値を誤認させる魔法を経てもなお、この上ない至宝に等しいもの。そんな鎧を着こなすたち・みーから発せられるオーラは、オーラを認識できる特殊技術など不要なほどに、強大で偉大なものだった。

ルクルトがその威光に呑み込まれて硬直している間に、モモンガはその手を逃れ、素早くたち・みーの背後に隠れる。人の影に隠れるなど、男として情けないが、男だからこそ、告白してくる男から逃げたいという気持ちで勝った。

「あ、ありがとうございます。タツさん」

助けに来てくれたたち・みーに短くお礼を言う。

たち・みーは何の問題もない、と言わんばかりに頷き、改めてルクルトに向き直った。

たっち・みーはひとまずモモンガを男から引き離れたことで安心する。

(あの様子だとモモンガさんがアンデッドであることに気づいてはいないようだが……まさかこういうパターンがあるとは)

この世界の常識を知らなかったから仕方ないとはいえ、まさかいきなり求婚されるようなことがあるとは思わなかった。そういう世界だと知っていたなら、相応の対策を取っていたというのに。

(やはり情報は必要だな……常識知らずでは今後の活動に支障をきたす)

街で暮らすことを決めたのは、単純にこの世界の者として名声を高めることと、こういった一般常識を学ぶ、という目的があったからだ。

そういう意味では、突然告白するような者がいるという情報を得たことは成果の一つだ。今後、ナザリックのNPCたちを街中で活動させる際には、いらぬ騒動を巻き起こさないような工夫が必要ということなのだから。

(別行動させてるセバスたちは大丈夫かな？ まあ、セバスなら上手く捌けるか……)

あとで連絡しておくべきかもしれない。

そうたっち・みーは思いつつ、ルクルットに意識を戻す。

「彼女は私の連れなんだ。申し訳ないが、手を出さないでもらいたい」
たっち・みーの存在感に硬直していたルクルットは、その言葉を聞くと生氣を取り戻したように復活し、訪ねてくる。

「恋人、なのか？」

「いや、違う。仲間だ」

いつそ恋人と偽った方が面倒がないかもしれないが、嘘をつくのはたっち・みーの得意分野ではないし、いまの姿だから違和感がないとはいえ、本性はふたりとも異形種で男同士だ。下手な嘘をついて変な演技をしなければならなくなることを考えれば、虚偽のことを言うのにはリスクが高すぎる。相手は冒険者で、今後ひよつとしたら何度も関わるかもしれない相手だからなおさらだ。

恋人ではない、という言葉聞いたルクルットは、気丈にも不満げな様子を隠そうともせず、たっち・みーに食って掛かる。

「それなら——」

「人の恋路に口を出すのは私としても極力したくはないんだがな」

ルクルットの言葉に先んじて、たっち・みーは続ける。

「大事な仲間のことだ。その仲間が困っている以上、守るのが当たり前だろう？」

どうしてもというならちゃんと段階を踏め、とたっち・みーは告げる。

「ここから先は実力で排除するぞ」

拳を打ち合わせ、たっち・みーは宣告する。

本気のたっち・みーに対し、ルクルットはごくりと喉を鳴らす。だが諦めている様子はない。たっち・みーに立ち向かえるくらいの気概は持っているようだ、と、たっち・みーは内心こっそり感心する。

（ただのナンパ男ではないようだ。なかなかいい目をしている）

そう判断するたっち・みーに、ルクルットは何かを言おうとして——その後頭部を何者かにどつかれた。相当痛かったのか、悶絶してその場にうずくまるルクルットの背後に、肘を打ち込んだ精悍な男と、その仲間と思われる二人の冒険者が立っていた。

肘を打ち込んだリーダーらしき男が、たっち・みーとモモンガに深々と頭を下げる。

「仲間がぐ迷惑をおかけして、申し訳ありません」

そういつて深々と頭を下げる男のおかげで、ようやく騒動が収まりそうだった。たっち・みーは密かに緊張させていた部分の力を抜き、ほっと息を吐く。

これが、彼ら『漆黒の剣』との出会いだった。

『漆黒の剣』

「私が『漆黒の剣』のリーダーのペテル・モークです」

金髪碧眼の男は、その特徴はないが十分に整った顔に柔らかな笑顔を浮かべ、丁寧に頭を下げる。

「先ほどはうちのチームの仲間であるルクルトが失礼をいたしました。チームの目や耳としてとても優秀な野伏なんです……その、ちよつと軽いところがありました」

「ひでえな。俺はいつでも真剣だぜ？ 特に彼女に対しては、人生かけていると言っても過言ではないくらいに真剣だぜ！」

先ほど市場でモモンガに声をかけてきた男——ルクルトはリーダーに向けてそう抗議する。ペテルはそれに対し、苦笑気味に応じた。

「だからこそ、性質が悪い時もあるんでしょうに……まあ、悪い奴ではないですし、それなりに分別はわかまえている男なのでご安心ください」

「わかった。信じよう」

二人に向かい合う席に座っているたち・みーは、そう答えつつも、ルクルトの動きをつぶさに観察していた。ペテルという男は誠実そうではあるが、出逢ったばかりの人物の言うことを鵜呑みにして全く警戒しないことはさすがのたち・みーにも出来ない。

若干の緊張感を維持しつつ、たち・みーは市場で知り合った冒険者のチームと交流を行っていた。

モモンガが突然冒険者のルクルトに告白されるという珍事は、たち・みーとペテルが介入したことにより、ひとまず無事収まっていた。

その後、ペテルからお詫び代わりにお茶に誘われ、少しでも情報を得たいと考えていたたち・みーは、あえてその誘いに乗ることにしたのだ。もちろん、ルクルトがモモンガにちよつかいを出さないように目を光らせてはいる。

（何気なく取った姿がまさかこんな事態を引き起こすとはな……少し

うかつだったか)

とはいえ、ルクルットもたっち・みーが傍にいるときにあんな騒動は起こさなかっただろう。たまたまたっち・みーと離れていたがゆえのことだとたっち・みーは考えていた。

もつとも、実際仮にたっち・みーとモモンガが一緒にいたところで、ルクルットは二人の関係を聞いた後で同じような告白をしていたのだが、残念ながらそこまで想像することはルクルットという人物のことをよく知らないたっち・みーにはできなかった。

(街中を行動するときは別行動を避けた方が無難だな。余計な騒動に発展しかねない)

そう密かにたっち・みーは決めつつ、ペテルが自分たちの自己紹介を続けるのを促す。

ペテルはそれを了承し、自分の隣に座っている男——というには少々若々しすぎるが——を示す。

「魔法詠唱者であり、チームの頭脳である『スベルキヤスター術者』ニニヤ」

「よろしく」

下手をすれば幼いとも取れる笑顔を浮かべて、軽くお辞儀をする。小柄な人間だった。青年を通り越して少年という表現が似合う。

「……しかし、ペテル」

ニニヤは自分のチームのリーダーを、困ったような、恥ずかしがっているような、微妙な表情で見上げていた。

「その恥ずかしい二つ名を告げるの、やめませんか？」

当たり前前のようにいうものだから、当然の二つ名だとたっち・みーたちは思っていたが、どうやらそういうわけでもないらしかった。

「え？ 良いじゃないですか。ニニヤが天才的な魔法詠唱者であることは事実なんですから」

ペテルの方は仲間を誇っている様子で、悪びれた様子がない。

「その二つ名が通り名、というわけではないのか？」

気になってたっち・みーが尋ねると、ルクルットが補足するように口を出す。

「生まれながらの異能を持っているんだよ、こいつ。それが魔法系統

で、珍しく素質に合ってたんだよな。それを受けてうちのリーダーはニニヤのことを『術者』って呼んでるんだ。組合に登録されている情報には記録されていないから、非公式な呼び名ってわけ。けど、冒険者仲間には浸透して来てるんだぜ？」

「ほう。生まれながらの異能持ちか」

たち・みーは理解して頷く。カルネ村で捕えた陽光聖典のニグンから詳しく得た情報の中にあつた。

生まれたその瞬間に得る能力であり、選択したり変えたりできる能力ではない。そのために、その人物が目指そうとしているものとは噛みあわないことも多いとか。

「魔法適性とかいう生まれながらの異能で、習熟に八年かかるところをわずか二年で済むんだっけ？　魔法詠唱者じゃない俺にはどれぐらいすごいのかいまいちピンと来ないんだけど」

「……へえ」

モモンガが同じ魔法詠唱者としての好奇心からだろうか、それに興味を持っているような声をあげた。

「おつ、興味ありな感じ？　なら色々教えちやおつか——なぶつ！」

興味を引けたことに対してか、ルクルツトが嬉しそうにしたが、即座にペテルの肘が脇腹に入った。「少しは反省しなさい」とルクルツトに小声で説教するペテル。よほどいい角度で入ったのか、脇腹を抑えて涙目になっているルクルツト。

仲間として気心の知れたやり取りをしている二人を、苦笑交じりに見つつ、たち・みーは先ほどのモモンガの反応とニニヤを見るモモンガの目に若干の危機感を覚える。

『モモンガさん、ちょっと好奇心を抑えて。獲物を見つめる目になってます』

『……っ。すみません』

慌てて目を伏せるモモンガにこっそり苦笑しつつも、無理もない反応かとも思う。

生まれながらの異能は武技と同じくユグドラシルにはなかった技術だ。ナザリツク地下大墳墓にない力を得ることは、組織の強大化に

繋がるため、できればそれを得たいと考えるのは、組織の長として自然なことだろう。

とはいえ、それをこつそりコピーするならまだしも、奪うようなことをすれば敵を作るのは必至。まだこの世界の勢力の底が見えていない現状では、極力しない方がいいことは間違いない。

ゆえに、たち・みーはモモンガを抑えた。どんな形になるとしても警戒されていいことは何もない。

空気を変えるためか、話の中心であったニニヤ自身が口を開いた。「この能力を持つて生まれたことは幸運でした。これがなければ、夢をかなえる第一歩も踏み出せないまま……最低な村人で終わっていたところですよ」

しかし言おうとした内容がよくなかったのか、ニニヤの声は暗く重い。

それを払拭するように、ペテルが明るい声をあげた。

「なんだかんだ言っつて、この都市では有名なんですよ。ニニヤは」

「まあ、わたしよりもっと有名なバレアレという方がいらつしやいますけどね」

そのニニヤの言葉に興味を引かれたたち・みーは問いかける。

「その人はどのような生まれながらの異能を持っているんだ？」

すると、四人が驚いた表情を浮かべる。常識的な情報だったことに気づいたが、たち・みーは動揺しない。元から自分たちが情報に疎いのはわかっているのだから、その対処も考えていた。

「私たちはずっと旅をしていて、ここに来たのはつい先ほどでね」

そのたち・みーの言葉に、四人は納得したようだった。

「なるほど、それだけの立派な鎧を見逃すことはないはずなのに、お見かけたことがないなと思っつていましたが……このあたりの人ではなかったからですね」

「確かに。貴女みたいな絶世の美人を俺が見逃すわけがないもんなん！」

全力でアピールするルクルットだが、当然それでモモンガがよく感じるわけもない。むしろ気色悪いとばかりにルクルットから顔を逸

らす。

がつくりと肩を落とすルクルットを無視して、二ニヤが話を続ける。

「名前はインファイレーア・バレアレ。名の知れた薬師の孫にあたる人物です。彼の生まれながらの異能は、ありとあらゆるマジックアイテムを使用可能な上、誰にも知られていない能力すらも余すことなく引き出すというものです」

「!?」

その破格の能力に、たっち・みーとモモンガは顔を見合わせた。

ギルド武器や世界級アイテムすら使用できるのか。それに、副次効果というにはあまりにも破格な、アイテムの隠された能力すらも引き出すという力。

二人の中でその人物に対する警戒度は、即座に一番上に置かれた。しかし、同時にその利用価値も計り知れないものだ。なぜならこの世界において変化しているユグドラシルのアイテムの効果などもすべて把握できるかもしれないからだ。

『……たっちさん。その人物、危険を冒してでも接触する必要があるんじゃないかと思います』

『ええ。もしかしたら……いずれ必要な能力となるかもしれませんが』
限界はあるのかもしれないが、それがないとしたらそれは是が非でも欲しい能力だ。

「お二方、どうかされましたか？」

顔を見合わせて沈黙していたのを妙に思われたのか、二ニヤがそう声をかけてくる。少し慌てて、たっち・みーは意識を目の前の四人に戻した。

「ああ、いや、気にしないでくれ。それより、まだ最後の一人の紹介をされていないが……」

ペテルに視線を向けると、彼は頷いて「漆黒の剣」最後の一人を示した。

「彼は森司祭のダイン・ウッドワンダー。治癒魔法や自然を操る魔法を扱い、薬草などの知識にも長けています。チームの体調管理も彼が

行ってくれていて、日常的にも非常に助かっています」

「よろしくお願いするのである！」

重々しい口調で、ぼさぼさとした髭を生やした野に生きる人物らしい風貌の男が口を開いた。

「ああ、よろしく。では、こちらにも名乗っておこう」

たっち・みーは自分と隣に座るモモンガを紹介する。

「私がタツで、こちらがモモ。見た通り、私が戦士で彼女が魔法詠唱者だ。この町には先ほど到着したばかりで、冒険者組合で登録は済ませている。しばらくはここに腰を落ち着けようと思っただけ。ひとまず都市を見学している最中に、そのボルブに声をかけられた……というわけだ」

丁寧なたっち・みーの自己紹介に、ペテルは頷いて了承の意を示す。「タツさん、私たちを呼ぶときは名の方で読んでいただいて結構ですよ」

「そうか？ ではそれに甘えさせてもらおう。まだわからないことも多いので、色々教えてくれると助かる」

たっち・みーはペテルに対してそう言いつつ、どうにも冒険者タツのロールプレイに慣れないものを感じていた。傲慢にならない程度に不遜な物言い、というのは中々難しい。モモンガからたっち・みーが冒険者を装うとするならそれくらいじゃないと、と言われていたのだが、やはりいつもの通りの態度や言葉遣いにすればよかったかと考えていた。

(まあ、いまさら言っても仕方ない。やりきることにしよう)

そうたっち・みーが心の中で改めて決意を固めていると、懲りないルクルットがモモンガに話しかける。

「モモちゃんっていうのか！ 可愛い名前だな！ ところで、モモちゃんは二ニヤと同じ魔法詠唱者なんだよな。第何位階までの魔法が使えるんだ？」

あからさまなルクルットの様子に、少し引き気味になりつつも、モモンガはあらかじめ「ここまで使えることにしよう」と決めていた位階を口にした。

「え。えーと……第三位階まで、です」

この世界では第三位階まで極めていれば、魔法詠唱者としては大成していると判断される。

そのモモンガの言葉を聞いた瞬間、四人がざわめいた。

「マジで!? すげえじゃん! ますます惚れたぜ!」

「その若きでそれは驚きである!」

「すごい……!」

「ええ、本当にすごいですね! ニニヤは先ほど言った通りの生まれながらの異能持ちですから、第三位階の魔法をひとつだけ使えますが……モモさんはそうではないのですよね?」

あまりに大きな反応だったため、本当にそういつてよかったのか迷いつつ、モモンガは頷いた。

「え、ええまあ。色々と使えます」

実はそれ以上の魔法も使えるのだとは言わないが、それでも使える魔法が多数あるということは彼らに伝わったのか、感嘆するのが伝わってきた。

「いやあ……それはすごい。ということは……そんなモモさんと一緒に旅をしているタツさんも……」

「ああ。モモさんに恥じない程度の腕前はあると自負している」

そうたつち・みーは言ったが、それにモモンガ自身が異を唱えた。

「いえ、タツさんの強さは私など遙かに超越したところにありますよ」
なぜか自慢げに断言する。

「漆黒の剣」の四人がぎよつとした顔でたつち・みーを見た。それはそうだろう。第三位階の魔法の使い手の時点で、一般的な視点から考えれば相当な強さだ。それを遙かに超える戦士など、彼らからすれば想像することすら難しい。

たつち・みーは慌てて手を振った。

「い、いやいや、そんなことはないぞ。モモさんはちよつと私のことを過大評価しているんだ」

「妥当な評価だと思えますけど……」

無然とした様子で呟くモモンガ。モモンガは本当に本気で言つて

いるので一切の嘘がなく、たっち・みーの實力が本当にそれくらいあるのだと四人に実感させる。たっち・みーが否定するところも、強者の謙遜だと理解されたようだ。

これ以上この話を続けるのはまずいと判断したたっち・みーは、話題を変えることにした。

「ま、まあ、強さの話はさておき……この街で冒険者登録をした以上は、お前たちとは先輩後輩という関係になるわけだな。せっかくだから、この都市ではどういった仕事が一般的なのか、教えてもらえるか？」

そのたっち・みーの質問に、ペテルたちは気まずそうに顔を見合わせた。

「そう、ですね……残念ですが、お二人が満足できるような依頼はすぐには受けられないんじゃないかと思います。銅のプレートに任せられるような仕事は、基本的には荷運びとか薬草採集とか、そんなものばかりですし……報酬も銅貨で何枚というものばかりです」

「……ふむ。まあ、それは仕方ないな」

信用とは時間をかけて築き上げていくものだ。信用できるかどうかもわからない人間に重要な仕事が回ってこないのは当然すぎる。それに、ゲーム的な話としても、最初のうち受けられるクエストはそういう簡単な仕事だと相場が決まっていた。

(初心者に戻ったつもりで……とは言ったが、さすがにそれは退屈だし、面倒すぎるな)

どうしたものかとたっち・みーが考えていると、ルクルットが身を乗り出してきた。

「じゃあさじゃあさ！俺たちの仕事を手伝わないか？俺たちはこれでも銀のプレートの冒険者だから、銅のプレートの仕事よりはずつとやりがいがあると思うぜ！うまくすれば銀のプレート並の仕事任せられるって思われて、いい仕事を受けられるようになるかもしれないねえし！」

「ちよ、ルクルット！さすがにそれは組合の規則的に無理な話でしょう！」

「わかんねえぜ？　もしすげえモンスターを討伐できたら、それくらい
の配慮はあるかもしれねえじゃん」

ルクルットとペテルが言い合うのを見ていたたち・みーは、その
話に興味を持ち、詳しく話を聞いてみたいと感じた。

「ふむ。どういうことなのか、もう少し順を追って説明をしてもらっ
てもいいか？」

「おう！　任せてくれ！」

たち・みーが食いついたことに対し、ルクルットは喜色満面の笑
顔を浮かべながら胸を叩き、他の「漆黒の剣」のメンバーは深々とた
め息を吐いたのだった。

初めての依頼

ルクルットの語った仕事の内容は、端的に言えばモンスター討伐だった。

ただし、それは特定の誰かから依頼される性質のものではなく、街道の安全を確保するという意味合いが強いものだった。しかし、もしそこで強大なモンスターを倒すことができれば、それは一気に評価が高まることに繋がるということだ。

「と言っても、普通はそんな強力なモンスターを狙ったりしないんだけどな。森から街道にあふれ出てくるモンスターを狩るだけだから、そんなに強いモンスターは出て来ないんだ」
「うむ。糊口を凌ぐのに必要な仕事である」

漆黒の剣の面々が世間話のようにその仕事の形式を作り出した黄金の王女なる人物の噂をしたり、貴族に対してニニヤが不自然な敵意をむき出しにしていたり、様々な話をしている間に、たちち・みーとモモンガは〈伝言〉でこっそり会話を交わす。

『どうやら、彼らがいう仕事というのは、ユグドラシルでいうところのPOPするモンスターを狩って、ドロップアイテムを手に入れる、みたいなことですね。たちちさん』

『そのようですね。ルクルットがいう通り、この仕事を受けて偶然にでも強大なモンスターを討伐できれば、一気に評価をあげられるかもしれないですね』

『彼らと一緒に行動するんですか？』

少し嫌そうな様子でモモンガがそう尋ねてくる。たちち・みーはモモンガの気持ちももつともだと感じた。

『……そうですね。この仕事の内容であるのなら、特別彼らと一緒に行動する理由は……ないこともないですが……しかしモモンガさんの気持ちを優先してもいいと思います』

強さの証明は多い方がいい。彼らと一緒に行動すれば彼らがたちち・みーたちの強さを喧伝してくれるだろう。

『……………』

モモンガが沈黙する。彼らと共に行動することによるメリットとデメリットを計算しているのだろう。二人だけで行動するならば、彼らの目を気にする必要がないというのが最大のメリットだ。それこそナザリツクの者たちも使った人海戦術を行い、強力そうなモンスターを狩りだすということもできるだろう。

だが、彼らと共に行動することで生じるメリットというのも馬鹿に出来ない。

まずコネクションの構築に繋がる。さらには知っておきたい一般常識に近いことを尋ねることも出来る。普通の冒険者がどういう風に活動していて、どの程度の影響力があるかを知れるのも大きい。さらに、万が一の時は口封じをしやすいというのも、あまり積極的に取りたいことではないにせよ、捨てがたいメリットだ。あまり有名な存在だと騒ぎになったり、怪しまれたりすることがあるが、一般的な冒険者なら強力なモンスターと遭遇したことによる不幸な事故を装うことが出来る。

たち・みーはかつての自分なら想像してもすぐに却下する発想をされていて、しかもそれを普通に用いるうとしてに気づいて顔を顰めた。

(……異形種の精神構造というのは厄介だな、本当に)

モモンガにも気づかれないうにひっそり息を吐いたたち・みーに、モモンガが固い声で言う。

『……彼らに協力して行動しましょう。色々なメリット・デメリットを考えると、その方がいいと思います。ルクルットは……不本意ですが、この姿に好感を持っている様子。なら、普通なら聞けないような重要な情報を聞き出すことも出来る可能性があります』

『……いいんですか?』

『いいんです。ただ、私が直接話しかけて変に調子に乗られても困りますので、ルクルットの対応は基本的にはたち・みーに任せます』

そういうモモンガに、たち・みーはやはり二人で行動するべきかと思っただが、その前にペテルが羊皮紙を取り出して広げて見せてきた。この近郊の地図のようだ。

「実は私たちは明日からその仕事に出るつもりです……南方の森の近辺を中心にモンスターを狩るつもりです。行って討伐して帰って来て、大体三日というところでしょうか。タツさんたちには少しばかり物足りないかもしれませんが」

自然と受ける方向で話が進んでいた。たっち・みーは少し悩んだが、その流れに乗ることにする。

「ちなみに、この近辺にはどのようなモンスターが出るんだ？」

「基本はゴブリンやそれが従えているウルフ、ちよつと強いのはオーガですね。森に入ればもう少し危険なモンスターも出てきますが、そこまではいかないつもりです」

たっち・みーは頷き、確認すべきことを確認する。ユグドラシルの知識でいえば、非常に強いゴブリンもいるが、そういったものはこの辺りにはいないという答えだった。

ペテルが羊皮紙を丸めながら、二人に尋ねてくる。

「そんなわけなんですけど……どうでしょう。タツさん。私たちに協力してもらえますか？」

「ああ。わかった。色々と教えてくれてありがとう。ぜひ協力させてもらおう」

たっち・みーがそういつてペテルに向けて手を差し出す。ペテルは破顔してその手を受けた。

「ありがとうございます！ 心強いですよ！」

「それは、本来私たちがいべきじゃないか？」

たっち・みーは苦笑してそう言った。銀のプレートを持つ彼らが、銅のプレートを持つ自分たちを心強いというのは、おかしい話だ。しかし、その屈託のない言葉に、ペテルがプレートが示すクラスなどで人を見下したり侮ったりしない誠実な男であるということが知れる。

ペテルと握手を交わしたたっち・みーは、そこで本来先に話しておくべきことがあったのを忘れていたことを思い出す。

「……つと。すまない。どうするか決める前に、報酬の話しておくべきだったな」

すでに大量の資金があるために、その部分への意識が疎かになって

しまっているようだ。ペテルは素で忘れていたのか、もつともだというように何度も頷いている。

「とりあえず、タツさんのチームと私たちのチーム、二チームでの協力ということになりますから……チームで分割するのはどうでしょう？」

「チームの人数を考えると、ずいぶん気前がいいな？」

「ですがモンスターが現れたらタツさんたちには半分を受け持つてもらいます。使える魔法は位階だけでいえば同じ第三位階とはいえ、こちらとこちらでは習熟度に差がありますし。そういったことを考慮に入れると、それでちょうど釣り合うくらいかな、と思うんです。あ、もちろん私達で倒せないようなモンスターをお二人が倒した場合、その分の報酬まで分割して欲しいとは言いませんから、ご安心ください」

どこまでの誠実な申し出に、たちちとしてはありがたく感じた。どうせ一緒に行動するなら、こういった人物の方が好ましいからだ。

「それならこちらは問題ない。……共に仕事を行うのだし、信用の証として顔を見せておこうか」

たちち・みーはそういうとヘルムを外す。

中から現れた顔をみた漆黒の剣の面々は、それぞれ思い思いの表情を浮かべた。

ペテルとダインは純粹な驚きの表情を、ルクルットはなぜか悔しげな表情を、そしてニニヤは——なぜかその頬を赤くした。

「……黒髪黒目、ということはモモさんと同じで、この辺りの方ではないですね。旅をしてきたとおっしゃっておられましたか……同郷の仲間ということでしょうか？」

ペテルがそういうのを受け、ダインが続ける。

「南方にタツ氏やモモ女史のような顔立ちが一般的な国があると聞いたことがあるのである」

「ああ。かなり遠方から来たんだよ」

たちち・みーがそう受け答えしている脇で、ルクルットが負け惜しみのように「意外と歳行ってるな、おっさんだな」という風に呟く。そ

れを受け、ニニヤが「で、でもすごく素敵ですよ。というか第三位階の使い手と直角の戦士ならどうしたってそれぐらいの年齢になってしまいますし……それに、それにしたって十分お若く見えます」などという会話をぼそぼそ交わしているのを、たち・みーの鋭い聴覚が捉えていた。

同じくその会話を聞いていたであろうモモンガが、なぜか自分のことのように得意げに頷いているのが視界の端に映る。

(……人化している時の顔は元の世界での顔がベースになっているんだが……ちよつと格好よく盛りすぎたか?)

ユグドラシル時代にはそもそも全身鎧を脱ぐということがほとんどなかったし、システムの人化を使う意味がほとんどないように設定されていたため、めつたに使わない人化時の外装はほとんど弄っていないかった。

ただし、たち・みー自身は気づいていないことだったが、彼の顔面偏差値のレベルは何も弄らない状態でも普通に高く、美男美女が多いこの世界においても遜色ないレベルだったりする。

かつて、たち・みーと反目していたウルベルトがある拍子に「何が天は二物を与えないだ、ふぎけんな！ 二物も三物も四物も与えやがって！」と魂の叫びをあげてしまう程度には、たち・みーという人物は色々と規格外なのである。

たち・みーはそんなことには気づかないまま、再びヘルムを被る。「二人とも異邦人だと知られると厄介ごとに巻き込まれる恐れもあるからな。隠しているんだよ」

実際は人化に伴う消費が半端なく、長時間維持することができないからである。同じような存在であるセバスはそうでもないどころかずっと人化していても問題ないというのに、だ。不公平だとは思わが、ユグドラシルの名残だと思って仕方ないと割り切るしかない。

「さて。協力して狩りを行うのであれば、互いの疑問をいまのうちに解消しておいた方がいいだろう。私たちに何か聞きたいことはあるか？」

特に手はあがらなかった。

「ならばお互い質問はないということ……出発は明日の早朝とするか?」

「そうしたいところですが……依頼というわけではないにせよ、討伐に行くことは組合に連絡する必要がありますので、明日の朝一に組合で落ち合いますよう」

「了解した。よろしく頼む」

そういって、ひとまず漆黒の剣の面々と別れたたち・みーたちだった。

時間も遅くなってきていたため、宿に向かって歩き出した二人は、軽い調子で言葉を交わす。

「いや、いきなり告白が聞こえてきたときは何事かと思いましたが……なんとかいい形に落ち着いてよかったですね」

「……まあ、明日から仕事の間、あれのアタックを受け流さないといけないのかと思うと、色々複雑というか、超面倒な気持ちですが……タツさんがいればあれもそう思い切った行動はとらないでしょう」

淡々とした様子のもモンガの言葉に、たち・みーは苦笑するしかない。落ち着いて考える時間が確保できたことで、男に告白されたという事実の不快感が生じたのか、もモンガはすっかりルクルツトのことを「あれ」呼ばわりである。同じ男として、気持ちは十分にわかるため、たち・みーはそれを訂正しようとは思わなかった。実際に相手と接するときは最低限の配慮くらいはできるだろうというもモンガへの信頼もある。

なので、そこには言及せず、たち・みーは話を切り替える方向に水を向けた。

「ともあれ、初めての仕事ですし、漆黒の剣から一般的な冒険者としての情報を得ることも含めてがんばりましょう」

「ええ、そうですね」

二人は頷きあって、宿へと戻って行った。

宿の部屋に入ったところで、たち・みーに〈伝言〉が入る。

「ん? エイトエツジアサシンか? どうした?」

『はっ。たち・みー様。例の女戦士の動向を監視しておりましたが、

お耳に入れておきたい情報がございます』

そのエイトエツジアサシンから齎されたのは、意外な情報であり、たっち・ミーが予測もしていなかった情報だった。

「なんだと……？ あのポーションが？」

『はい。どうやらこちらの世界では極めて希少性が高いもののようにです』

たっち・ミーは愕然としてベッドに腰を落とす。ユグドラシルでは簡単にストック上限に達してしまうようなポーションが、まさかこちらの世界では存在すらも疑問視されていた希少なものだとは想像もしていなかった。たっち・ミーが懸念していたのはあくまでも女戦士の持っていたポーションが本当はもっと効果のあるもので、効果の低いポーションを渡してしまった可能性だったのだが。

とんでもないミスだ。場合によっては、無意味に敵を呼び寄せてしまった可能性すらある。のんきに町の散策などしていたが、あまりにも無防備だった。直接的な被害が出なくても、そのポーションが情報として、まずいとところに流れるという危険もあった。

「……それで、その後、その冒険者はどうした？」

たっち・ミーが尋ねると、エイトエツジアサシンは即座に応じる。

『リイジー・バレアレにポーションを売るように求められましたが、それは拒否し、代案として湿らされたポーションの持ち主——たっち・ミー様のことを伝えておりました』

「……ん？ ポーションは冒険者がそのまま持って行ったのか？」

『はい。どうやらリイジー・バレアレに提示された大金よりも、この機を逃せば二度と手に入らないであろうポーションの確保を優先したようです。大事そうに荷物の中にしまいこんでおりました』

厄介なことになった。

たっち・ミーはそんな気分で顔を顰める。取り戻したいが、価値を知ってしまった以上、あの冒険者の女性がそれを手放すことはしないだろう。エイトエツジアサシンたちに命じれば即座に女性を殺して取り戻すだろうが、元はといえば自分のミスが招いて、自分からポ-

シヨンを渡した結果だ。

力任せに取り戻す行為が果たして正しいのだろうか。

これが自分のことだけであればこんなに悩みはしなかった。失敗は失敗として、それに連鎖しておこるどんな結果とて受け入れる。

だが現状、たっち・みーはナザリック地下大墳墓を背負っている。それを守るためであれば、自分の主義や主張は抑えるべきだ。

すでに一度、我儘を言つてカルネ村を救うということもしている。つまりあの女性の冒険者については、自分の主義主張とはちがっても、殺してポーションを取り返し、後顧の憂いを絶つべき――

頭を軽く叩かれて、小さな衝撃が走った。

加減されているのか、痛くはない。しかしそれは確かな衝撃となつてたっち・みーの意識を現実を引き戻した。

驚いて顔を上げると、目の前に手をチョップの形にしたモモンガが立っていた。それで頭をヘルム越しに叩かれたのだと、理解する。

その目は少しだけ怒っているように見えた。

「たっちさん。一人で悩まないでください。アインズ・ウール・ゴウンにいるのはあなた一人じゃないんですから」

言われて、チョップを受けたよりも遙かに強い衝撃をたっち・みーは感じる。そして、自分が思い上がっていたことに気づかされて、深く恥じ入った。

アインズ・ウール・ゴウンはたっち・みーのものではない。ギルドの未来に関わるようなことを、一人で判断し、決めようとするなんてあつてはならない。ギルドマスターであるモモンガが常に自分に配慮してくれているというのに、自分がそれをしないなど、不義理などという言葉では言い表せない最低な行為だった。

「……すみません。モモンガさん」

たっち・みーは深い反省を込めて頭を下げる。モモンガはたっち・みーの視線の高さに合わせるように、向かい合う位置にあるベッドの縁に腰掛けた。

「いいんですよ。それより、何があつたのか説明していただけますか？」

たつち・みーは頷き、〈伝言〉によつてもたらされた情報についてすべてを話した。

それを受け、さすがにモモンガも難しい顔をするが、しかしそれはたつち・みーを責めるものではない。

「……ひとまず、早い段階でこのことを知れたことを良かったと思ひましょう。下手したら漆黒の剣の連中と一緒に行動している時にポーシオンを取り出していたかもしれないんですし」

「……確かに」

モモンガはしないだろうが、自分なら漆黒の剣が傷ついた時にポーシオンを渡していたかもしれない。ポーシオンの価値に気づいていない状態なら、それくらいのこととはしただろうという自覚があった。

「それで、あの冒険者への対処ですが……彼女自身がポーシオンの確保を優先したというのは非常に良い傾向だと思います。もし誰かに渡していたら違う対処を考えなければならなかったかもしれません」

「と、いうと？」

「大金を詰まれても渡さなかつたのですから、その冒険者はポーシオンを自分で確保しておくつもりなのでしょう。冒険者がポーシオンを確保する理由は一つ、自分が傷ついた時に使用するためです。そして、そのポーシオンが非常に高い価値を持っていることに気づいた以上、トラブルを回避するためにそのポーシオンのことを人に話すことはしないと思います」

「……なるほど。つまり、彼女からこれ以上情報が広がる可能性は低い、ということですか？」

「そうです。そしてその冒険者が唯一情報を漏らした先……それがリイジー・バレアレという人物だったことは、私たちにとってむしろプラスです」

「え？ ……どういうことですか？」

「なぜなら、必ずリイジー・バレアレはポーシオンの情報を得るために、私たちに接触を図ってくると思われるからです。冒険者に対し、ポーシオンを売ることの代案として求めたのが、元の持ち主の情報であつたことから、それは明らかでしょう」

「ああ、なるほど！ 確かにそうですね。それがプラスになるというのは……それがリイジー・バレアレだから、ですね？」

「はい。先ほど漆黒の剣から聞いた、私たちにとっての要注意人物でもある、生まれながらの異能持ちのンファイーレア・バレアレ。それとの繋がりができるチャンスです。それも、向こうはこちらに興味を持って接近してくる。いくらでも転がしようなある状態です」

「むむむ……確かに」

たち・みーは即座にそこまで至ったモモンガの思考力に感心する。

モモンガは自分のことをただの平凡な社会人であると思っているようだが、そんなことはない。昔、ギルドの活動をしていたときだって、いつも直観と優れた思考力で最良の選択肢を選び取っていた。

アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーという、一癖も二癖もある連中を取りまとめ、一つに束ねていたのは、伊達ではないのだ。

元々たち・みーがっていたギルド長のような立場を譲って、モモンガがアインズ・ウール・ゴウンのギルド長となることが決まった時、誰からも文句は出なかった。常に正反対の意見を言っていたたち・みーとウルベルトでさえ、その時だけは意見が一致したし、生粋の自由人でトラブルメーカーだったるし★ふぁーという男でさえ、それをあつさりと認めたのだから。

たち・みーが改めてモモンガという人物のことを高く評価していると、モモンガは話をまとめた。

「あの冒険者に対しては、引き続きエイトエッジアサシンをつけ、万が一情報を流そうとした時に殺すとして……リイジー・バレアレがどう動くか、ですね。個人で動いてくれるならともかく、公的機関に報告してこちらの身柄を確保して来ようとする可能性もありますし」

「……エイトエッジアサシンからの報告を待ちましょう。もしもの時は早めに動かないといけませんからね」

そういつてエイトエッジアサシンからの情報を待つて、その日の夜は暮れて行った。

翌日。

漆黒の剣との待ち合わせに組合にやってきたタツたちを待っていたのは、報告としてあがっていた通りのことだった。

「タツさん、ご指名の依頼が入っています」

漆黒の剣の面々が驚いてたっち・みーたちを見る。たっち・みーとモモンガはすでに知ってはいたが、不自然にならないように軽く驚きの表情を浮かべながら、話しかけてきた受付嬢に尋ねた。

「一体、誰が？」

もつとも、あえてそう聞いたものの、誰が依頼してきたかなどということは、エイトエツジアサシンからの事前情報がなくてもわかりきっている。

受付嬢のすぐ近くに立っていた、目が長い前髪に隠れた少年を、受付嬢は示した。

「ンファイレア・バレアレさんです」

紹介された少年が近づいて来て、たっち・みーとモモンガに対して軽く頭を下げる。

「初めまして。僕が依頼させていただきました」

「ほう」

「それで実は依頼を——」

「待った」

本当は食いつきたいところだが、ここはあえてンファイレアの言葉を止める。

「すまないが、私たちはすでに別の仕事の契約を交わしている。君の仕事を即座に受けることはできない」

「えっ!? タツさん、名指しの依頼ですよ!」

仕事を交わした当の相手である漆黒の剣のペテル自身が、慌てた様子でそういつてくる。名指しの依頼というのは、リアルでもそうだがやはり重要かつステータスに繋がるものであるらしい。

とはいえ、ここであつさりンファイレアの依頼を受けることはしなかった。

「そうかもしれないが、先に依頼を受けた方を優先するのは当然だろう?。」

これはエイトエツジアサシンから「ンフィーレアが冒険者タツに向けて名指しの依頼をし、コネクションを作ること」を画策している。あわよくばポーシヨンの秘密を探るつもりである」という報告を受けた時に、モモンガと二人で話しあって出した流れだった。

ビジネス的な意味でも、先に契約した方を優先するのは当然だし、相手が有名人で即座に名声に繋がりそうであったとしても、先に受けていた依頼を勝手に放棄していいわけがない。

その二人の判断は間違っていないなかつたようで、周囲の冒険者たちの中には感心して頷く者がいた。好意的な表情を浮かべている。

一方、複雑な表情を浮かべているのは漆黒の剣の面々だ。

「しかし……こちらは依頼というほどのものではないですし……」

ペテルはもごもごと言葉を濁す。彼らが提案している仕事と、有名人の依頼とでは確かに仕事の価値に相当な差がある。だからこそペテルは強く言えないのだ。自分たちを優先してくれるのは嬉しいが、しかし仕事としての価値を考えればそちらを優先すべきであると思っっている。しかし、実力者である二人がついてきてくれる頼もしさを考えれば、簡単に「どうぞこちらは気にせずそちらを受けてください」とも言い難い。

そんな誠実ゆえの複雑な思いが、ペテルの態度からは透けて見えていた。それは他の漆黒の剣のメンバーも同じだ。

たっち・みーはやはりこのチームはとてもしもいいチームだ、と思いながら、優しい声で最初からするつもりだった提案を口にする。

「……ならば、そうだな。彼からはまだ契約内容も報酬も期日も聞いていない。それを聞いてから改めて考えるということはどうだろうか?。」

そのたっち・みーの提案に、ンフィーレアが乗って、話はすべてを聞いてからということになった。折り合いがつかなかったときは先に受けているペテルたちとの仕事を優先するという前提で、話し合うために組合に用意されている部屋へと移動する。

しかし、たっち・みーとモモンガはすでにその仕事が折り合いのつくものであることを知っていた。

ンファイレアの依頼というのは、森に薬草採取に行くための護衛だった。

護衛任務である以上は、表面上は二人しかいないたっち・みーとモモンガが、ペテルたちをその依頼に誘うのは不自然ではない。たっち・みーは防御用の特殊技術も納めているため、ンファイレアに傷一つつけない自信があるが、護衛のために数を揃えるのは自然なことだ。

これによつてたっち・みーたちはンファイレアの依頼を受けると同時にペテルたちとも一緒に行動することが出来、いくつもの目的を同時に果たすことができる。

それとなく「なぜ街に来たばかりの自分たちに依頼したのか？」と尋ねることで、ンファイレアが表と裏の事情を使い分けられる優秀な人物であることも確認しつつ、話は全て綺麗にまとまった。

大半がモモンガ発の案であり、たっち・みーはさすがはモモンガさんだと感心する。

「では、準備を整えて出発しましょう！」

情報が筒抜けになつているとはいえ、すべての行動をたっち・みーとモモンガの掌の上で転がされていることも知らないまま、ンファイレアは元気よく声をあげるのだった。

大英雄の灯火

たっち・みーたちはのんびりと森の周囲に沿って道を歩いていた。馬車を中心に据え、それぞれ適した位置で御者でもあるンフィーレアを囲んで守っている。

時折、馬車の前で周囲の警戒に当たっているルクルットが、馬車の後ろにいるモモンガに声をかけてくる以外は特に問題なく移動していった。もつとも、モモンガも一晩かけてルクルットへの対応の仕方を決めたらしく、そつなくつれない形で対処していた。

(特に大きな問題もないし……彼らとの会話で色々な情報も得られた。彼らと行動したのは間違っていないかったな)

魔法や武技、冒険者や周辺国家のことなど、知りたい情報はかなり多く得られた。知ることが出来た分、さらにたくさんの知識が必要になったが、それでも確実に順調に進んでいることは実感できた。

一番情報源になると考えていたルクルットは周囲の警戒に気を割いていたため、あまり聞くことはできなかったが、代わりにニヤとダインからは多くのことが聞けた。特になぜかニヤの方は進んでたっち・みーの質問に答えてくれて、非常に助かった。

(妙に話が早かったのはなぜなんだろう？ やはり、町の外で実力の一部を見せたからか？)

たっち・みーとモモンガは、町の外に出てすぐ、自分たちの実力が口だけではないことを示すために軽いデモンストレーションを行っていた。モモンガが<電撃>を放って見せたのだ。モモンガの魔力で放たれる魔法は非常に凄まじい威力で、漆黒の剣の面々を感嘆させるのに十分すぎるものだった。

口だけではない確かな実力を確認できたからこそ、協力的になったのかとたっち・みーは考えていた。実力が高い相手に敬意を示すのは納得のいく理由だ。

「この辺りからカルネ村までが『森の賢王』のテリトリーなんですか？」

そうモモンガが確認すると、ンフィーレアが頷いて見せた。

「はい。強大な力を持つ魔物です。ですから、めったなことでもモンスターは姿を見せません。森の賢王そのものにあつたら最悪ですけど、他のモンスターがでて来ないという意味では安全ですね」

「まだ結構な距離があるというのに……ずいぶんと強大な存在のようだな」

たちち・みーは呟く。果たしてどんな魔物なのか。少し興味があった。

（会ってみたいものだな。長寿で賢いということは、驚くべき知恵を持っているかもしれない……もしかすると、元の世界に繋がるヒントも……）

たちち・みーはその魔獣に夢を馳せた。

その意識の空白に差し込むように、ルクルットが調子のいい声でまたモモンガに話しかけている。

「モモちゃん、仕事を完璧にこなす俺の姿を見てくれよな！ 頼りになるってところを見せてやるから！」

「そうですね。頑張ってください」

モモンガは一見柔らかそうだが、その実全く感情の籠っていない声で返した。ただ無視したり、強烈に反発したりするよりも、はつきりと拒絶の空気を感じさせる。

もつとも、ルクルットは「その冷たい対応……それはそれでいい！」などと言って、ますます周囲を呆れさせるのだが、ルクルットに懲りる様子はない。

モモンガも平然と受け流せるようになってきているし、ひとまず言葉でどうにかしようとしているうちは放っておいていいだろう。触れないで欲しい領域に触れようとした時に改めて警告を発すればよい。

（やれやれ……なんで味方を一番警戒しないといけないんだか）

たちち・みーはルクルットの気性自体は嫌いではなかったが、大事な仲間が関わってくることなので若干面倒に思っていた。

黙々と歩を進めているうちに疲れて口数が少なくなればよいと思っていたのだが、ルクルットはどこまでも元気に軽口を続ける。

「みんな、そんなに警戒しなくても大丈夫だぜ。俺がすっかり気配を探っているからな！ モモちゃんなんか俺を信じてるから超余裕の態度だぜ」

「タツさんがいて不安になる理由がありませんよ」

さらっと放たれる言葉は、モモンガの本心なのだろうが、たっち・みーは若干困ってしまう。別にたっち・みー自身は気にしないのだが、いまのモモンガの姿が姿なだけに、余計な誤解を加速させているような気がした。

「……なあー。モモちゃんとタツさんって、やっぱり恋人関係なの？」
案の定、ルクルトトはそんなことを聞いてきた。モモンガはその問いにかすかに眉をしかめる。

「ありえませんが。大事な仲間です」

外見はともかく、実際は男同士だ。ありえない。そういう意味でもはつきりとした答えに、ルクルトトは納得している様子はなかった。

「うーん。どう見ても仲良しなだけだなあ……」

「ルクルトト。詮索はそれくらいにしてくれないか？」

たっち・みーは少しだけ真剣みを増して声をかける。

「あー……失敬。警戒に戻りまーす……」

その声に込められた意志に気づかないほど鈍くはないのか、ルクルトトは素直に引く。それでもあきらめようという気はなさそうなたちあたり、本当に懲りない男だった。実際、女性と付き合うにはそれくらいの意気込みは欲しいところではあるが、相手が悪い。

「タツさん、仲間が申し訳ない。他人の詮索をしないのが冒険者の不文律だというのに」

ペテルが謝ってくるのを、たっち・みーは鷹揚に受け取る。

「いや、今後気を付けてくれればいい。というか、仕事に集中してくれればな」

「へーい……っと。どうやらお客さんみたいだぜ」

突如、緩み切っていたルクルトトの声が引きしまる。モモンガに言いよる時のおちやらかなった様子はなく、彼から感じるのはプロとしての矜持と誇りだった。

(いつもそうしていればいいのに……)

たち・みーはそう思いつつ、ルクルットの指し示す方向を見る。当然全員が武器を構えてそちらを見ていた。

「ルクルット、どのあたりだ？」

「あのあたりだ。どんどん近づいてくるな。これは戦闘を避けられそうにないぜ」

たち・みーはペテルとルクルットがそう声を交わすのを聞きながら、特殊技術を発揮する。

〈殺意感知〉に引つかかったのは全部で21体。6体ほど大きな存在を感じた。と、言っても感じる力が強いのではなく、単に質量的に大きそうというだけだったが。

「……ふむ。確かに近づいてくるな」

そう呟くたち・みーの言葉に、かすかにニヤが反応したが、森からモンスターが続々と現れたことで、声をかける機会は失われた。

小鬼が15体、人食い大鬼が6体。

ゲームと違ってそれぞれに特徴があり、リアルに生きている分の差異が感じられた。

(とはいえ……)

たち・みーがその気になれば片手間どころか、ついでもいえないレベルの気軽さで殲滅できる程度のものしかいなかった。

一気に殲滅してしまうのもありかと思っただが、それでは漆黒の剣という一般的な冒険者がどの程度できるのかわからない。後学のためにも、当初の予定通り半分ずつくらい受け持つことにした。

「タツさん、半分受け持つてもらえるということでしたが……どのように分けましようか」

「……そうだな。私が適当にオーガを屠る。相手の突撃を真正面から蹴散らすから、溢れたゴブリンの処理を頼む」

あまりに豪快な、戦法ともいえない戦法。漆黒の剣の面々はそれに驚いたが、その言葉に込められた自信を感じたのか、何も言わなかった。

「了解しました。では、私たちはできる限りの戦闘支援をさせてもら

います」

「支援魔法は……」

漆黒の剣は、ペテルが指示を行い、それに対して他の者が一度頷くことで了承する、というそれだけで作戦会議を終了していた。それは互いにできることをよく熟知し、何度も連携を繰り返してきたゆえのスムーズな決定だ。まさに、阿吽の呼吸という言葉が相応しい。

たち・みーとモモンガはほぼ同時にほう、と感嘆の息を吐き、そして、二人で顔を見合わせてひそやかに笑った。お互い、何を感じて感嘆の息を吐いたのかわかってしまったからだ。

たち・みーの脳裏には、ユグドラシル時代のことが蘇っていた。アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーたちと行った狩りの数々。互いに互いを支援して、時に囷になり、敵を釣り、ブロックに回って攻撃対象を上手く切り替える。互いの能力を熟知しているからこそできるチームプレイを發揮していた。

身内びいきではあるだろうが、あれほどのコンビネーションはそうできるものではなかった。漆黒の剣の連携はそれには劣るが、片鱗のようなものは感じられた。

このチームは成長すればきつともつといいチームになる。

感慨深い目でつたち・みーが漆黒の剣を見ていると、リーダーのペテルが最後の確認に来た。

「タツさんたちの準備は大丈夫ですか？」

「ああ。いつでも大丈夫だ。……もしどうにもならない危機に陥ったら私の名前を呼べ。助けてやる」

そうたち・みーは言って、漆黒の剣を優しい目で見つめるのだった。

ルクルットの矢が戦闘の開始を告げる。

遠距離にあるうちに少しでも数を減らすため、ルクルットの矢はゴブリンたちを次々射抜いていた。壁役のペテルにニヤが魔法による強化を飛ばし、ダインの魔法は植物を操ってオーガの一体をその場に足止めする。

たっち・みーとモモンガはそんな中、のんびりと前に歩き出した。ごく自然な足取りで、二人は魔物の突進に立ち向かう。

オーガとの距離が縮まる中、たっち・みーは腰にさげた剣を鞘から抜き、その白刃を晒す。まるで宝石のように白く輝くその剣は、シンブルな形ではあったが、業物であることが一目でわかる。オーガが持つ棍棒に比べればサイズはずいぶん小さいのに、その存在感はその戦場にあるどんな武器よりも大きかった。

極々普通の剣と盾。そのはずなのに、同じ種類のものを構えているはずのペテルのそれが玩具にしか感じない。

威風堂々とした足取りで、たっち・みーは突進してくるオーガを正面から迎え撃った。

オーガが走る勢いそのまま、棍棒を大きく振り上げ——そのまま後ろに倒れていった。

「!?」

まるで糸が切れた操り人形のごとく、オーガの体から力が抜けて、崩れ落ちたのだ。気づけば、オーガの喉がぱっくり割れていて、そこから血が噴出していた。

「い、いつのまに……!?」

たっち・みーがオーガが棍棒を振り下ろす前に斬ったのだと、その状況から類推してようやく把握することが出来た。当然、たっち・みーの歩みは自然な速度のまま、止まらない。

知性の低いはずのゴ布林たちが、慌ててその進行方向を避けるように、広がりつつペテルたちに向かう。もう一体のオーガがたっち・みーに向かって突撃をしようという構えを取った。勢いの乗ったオーガの巨躯は仮に斬られたとしても、もはや止まらない。その勢いそのまま、目の前の敵を押しつぶすことだろう。そこまで考えてはいなかったが、結果的にオーガの行動は正しかった。

もったも、たっち・みーにそんなことは何の意味もないのだが。

肩を突き出し、ラグビーのタックルのようなオーガの突進を、たっち・みーは無造作に蹴り飛ばしたのだ。凄まじい音がして、オーガの全身がへしやげながら押し戻され、爆散する。

避けるわけでもなく、ただ真正面から力任せに蹴り飛ばすという暴挙に、もはや驚きの声すら大きくは上がらない。

「嘘だろ……う？」

微かに誰かが漏らした小さな呟きが響き渡るほど、戦場は静まり返っていた。

あまりにありえない光景に、決して知能が高いわけではない残りのオーガですら、突進をためらって動けなかった。

「さて、来ないのか？ こちらから行くぞ？」

ゆつくりとたっち・みーが歩みを進める。オーガはたじろぐだけで、その場から動けなかった。そのオーガの脇を、無造作としか思えない自然な動きで、たっち・みーがすり抜ける。その間にオーガの体は斬り裂かれており、上半身と下半身が永遠の別れを告げながら、その体の中に詰まっていた臓物が地面に散らばった。

一刀両断。ごく普通にしか見えない剣でそれを成し遂げたのだから、たっち・みーの技量は底知れない何かを感じさせた。

「タツ氏は……化け物か……？」

思わずと言った様子で声を漏らしたダインの言葉を、否定するものは一人もいなかった。

「さて、こんなものか？」

そう言いながら戦いを続けるたっち・みーを避けていったモンスタ―が、漆黒の剣の方になだれ込む。完全に傍観者と化していた漆黒の剣も、即座に気を引き締めて戦いに入った。

チームワークの取れた連携でゴブリンたちを迎え撃った漆黒の剣たちは、順調にゴブリンの数を減らしていく。ゴブリンの数は11体ほどだったが、数に圧倒されているような気配はない。それはたっち・みーが猛威を振るっているために、ゴブリンたちの足並みが大きく乱れているからに他ならなかった。

そして、ついに残る3匹のオーガの内、1体が地面に倒れ伏した。すでに残るオーガはダインの魔法で足止めを受けている1体と、たっち・みーの前で怯える1体だけだ。

鮮やかすぎるたっち・みーの技に、確実な死を見たのか、目の前の

オーガが武器を放り捨てて遁走する。追いつこうと思えばいくらでも追いつけたが、自分だけで倒してしまうのも問題だ。

「モモさん。あとは任せます」

「了解ですー」

たっち・みーの鮮やかで派手な戦闘を見ていたからだろうか、少し高揚した様子で、モモンガがたっち・みーの前に出る。

(オーガを倒した程度のこと、そんなに機嫌よくならなくても……ん?)

モモンガが右手を空高く構える。その手に雷がまとわりついた。それは、明らかに<電撃>の構えではない。

「モモさん、ちよつ、まつ——?!」

<ドラゴン・ライトニング
龍 電 >!!」

振り下ろしたモモンガの腕から迸った雷光が、逃げようとしていたオーガの全身を背後から焼き、そしてうねりながら進んだその雷の龍は、ダインの魔法で足止めされていたオーガをも骨の髄まで焼く。当然二匹とも即死であり、肉の焼き焦げる臭いが戦場に広がった。

唾然、とはこのことをいうのだろう。あまりにすさまじい魔法の放出に、漆黒の剣もゴブリンたちも思わず戦いを中断している。

たっち・みーは思わず天を仰ぎたくなったが、即座に切り替える。

「……さつ、さすがはモモさん！ 少し本気を出すと、ただの<電撃>が<電撃>とは思えない破壊力になりますね！」

苦しいのは理解していたが、あれはただの<電撃>だったのだと押し通すことにした。モモンガも思わず使わないと決めていた第五位階の魔法である<龍電>を使ってしまったことに気づいて、顔を青ざめさせていたが、なんとかそのたっち・みーの言葉に乗る。

「あ、あはは。すみません。つい必要以上の魔力が入っちゃって……つ」

それで疑問もなく納得してくれるほど、さすがに漆黒の剣も馬鹿ではなかったが、ひとまずは、目の前のゴブリンのことだ。完全に硬直して、戦意を失っているゴブリンたちは瞬く間に斬り伏せられていく。

「ニゲル！ ニゲルゾ！」

そんな風にゴブリンは叫んだが、もはや遅い。

すべてのモンスターは討伐され、あとにはただの死体の山が残された。

死体が生臭い臭いを放つ中——焼け焦げた臭いも混じっている——ダインがペテルやルクルトの傷を癒している間に、ニヤがゴブリンたちの耳をはぎ取って回っていた。それがそのモンスターを討伐した証となるらしい。

その様子を傍で見ながら、たち・みーとモモンガはこっそり会話を交わしていた。

『すみません……たちさん……柄にもなく、テンションがあがっちゃって……』

第五位階の〈龍電〉を使ってしまったことに対する謝罪に対し、たち・みーはさすがに苦笑しながらではあったが、気楽に応じた。『モモンガさん、謝らなくてもいいですよ。大きな問題はないでしょう。彼らもあれは〈電撃〉を強化した魔法だと思ってくれたみたいですし』

ニヤ辺りはさすがに妙に感じているようだが、それを追及してくる様子はない。

落ち込むモモンガを慰めるたち・みーだったが、モモンガの暗い雰囲気は晴れない。

『最近ちよつと感情の動きが激しすぎますね……精神安定しても、一瞬だけで全然追いつかなくて』

それはそれだけモモンガがギルメンと、たち・みーと一緒に冒険ができる現状を楽しんでいるという証拠でもある。

モモンガはずっと一人だったのだ。ユグドラシルのサービス終了までの数年間、一人でずっとアインズ・ウール・ゴウンを維持するために、ソロでひたすら狩り続けていた。

誰かと話そうにもギルメンは一人もおらず、ギルドの悪名のせいで他のプレイヤーとも交流しにくい。いまでこそ命を持って動くNP

Cたちも、その頃はただのNPCでしかなく、話す相手にはなりえない。

誰もいない寂しさや空しさに涙したこともあったはずだ。

そんな彼が再びギルドメンバーと、それも自身の恩人としてもっとも大事に思っているたち・みーと、また一緒に冒険できているという現実に、ついはいやいでしまうことを誰が責められるだろうか。

当然、モモンガの気持ちを理解するたち・みーも、モモンガを責める気は微塵もなかった。

『気にしないでいきましょう。どうせいつかは第三位階の魔法以上も使えることを明らかにする予定ではあるんですし、仮に彼らからそれが伝わったとしても、ちよつと予定が早まる程度のことです』

単純に第三位階までと決めているのは、あまり名が知られていないうちから極端な位階の魔法を使っているのは、人となりがわかっていない周囲の人間が、自分たちを恐れてしまいかねないという懸念からだった。

冒険者のタツとモモが人々のために活動する存在であり、危険がないことを理解してもらってから、徐々に強力な魔法を使えるということとを喧伝していく予定なのだ。そうすれば余計な争いごとに巻き込まれなくて済むし、問題なく英雄の名誉を得られると判断してのことだ。

だから、もし最悪ここで第五位階の魔法を使えることがばれたとしても、究極的には問題ない。漆黒の剣の面々はたち・みーやモモンガに対して好意的なため、悪い形で噂が広がることはないだろう、とたち・みーは考えていた。

なんとかモモンガの抱えている暗い雰囲気の一部だけでも払拭することができたと感じた頃、回復魔法をかけ終わったのか、ペテルら三人が口々にたち・みーやモモンガに言葉をなげかけてくる。

「しかし、タツさんの剣技、すごかったですね！ 腕に自信のある戦士なんだとは思っていましたが、まさかあれほどまでの実力とはー！」

「モモちゃんの魔法もすごかったよな。雷がすっげえ音立ててさ。オーガが一瞬で丸焼きだもんなあ」

「あの剣はどこぞの逸品であるか？ あれほど価値のありそうな剣は見たことがないのである」

「噂に名高い王国最強の戦士すら凌駕しているんじゃないかというレベルの腕前でしたね……モモさんが自分を遙かに凌駕する戦士だといった言葉が、しみじみと実感できましたよ……」

モモンガはたち・みーが褒められていることに気分を良くしたようだった。

たち・みーは口々に投げかけられる称賛の言葉に対し、大きく手を横に振った。

「別に大したことはしていない。それに……きつとお前たちなら、この程度軽くこなせるようになるさ。私が保障しよう」

それはお世辞ではなかった。漆黒の剣の面々はもつと強くなるという確信があった。

ニヤはその中でも成長株だが、他の三人だって全く成長の見込みがないわけではない。軽い物腰のルクルットも、その野伏の技術はプロとして十分なものだし、ダインの落ち着いた判断力や動じない精神力は得難いものだ。

リーダーのペテルも、メンバーのことを理解し、チームの力としてそれを上手く引き出していた。

彼らが今後も慢心することなく修練を重ねていけば、いつかは非常に強力な冒険者チームになるだろうという確信がたち・みーの頭にはあった。

「がんばってくれ。私たちはお前たちのような冒険者のチームに出会えて本当によかった」

ペテルたちからすれば、それは最高の褒め言葉だった。

たち・みーもモモンガも、漆黒の剣からすれば極限の高みにいる人物だ。そんな彼らと共に旅をし、そんな言葉をもらえたという事實は、ペテルたちの心に暖かな光を灯した。たとえこの先、どんな辛く苦しいことが待っていたとしても、その灯された光があればそこまで進んでいけるような、そんな気さえする。

人の心にそんな光を灯すことのできるたち・みーは、間違いなく

自らも光り輝く英雄であり、その光を人に分け与える救いの存在だった。

自分たちが共に旅している人物は、いずれこの世界のどこにいても必ずその名を聞くほどの、大英雄に必ずなる。

そんな確信を漆黒の剣は胸に抱いたのだった。

野営地にて①

日が完全に暮れる前に、一行は野営の準備を始めていた。

野営地の周囲に鳴子の罫を張る作業を終え、たちち・みーは少し息を吐く。

「こんなものかな……」

きちんとロープが張られているのを指先で確認し、十分なことを確信し、満足して一人頷く。

アウトドア、などという言葉は元の世界では死語になって久しい。たちち・みー自身、外で寝泊まりするという概念が存在していたのは知っていたが、実際にそれをしたことは全くない。元の世界でそんなことをするのは、自殺志願者くらいだろう。

不意の事故のように異世界にやってきてしまったが、こういう経験ができるのなら、得るものは十分にあったと断言できる。

空を見上げれば、暗くなりかけている空には、早くも星の灯りが覗いている。よほど空が澄んでいるのか、地上がそれほど明るくないからか、あるいはその両方か。いずれにせよ、自然を愛したブルー！ プラネットが見れば涙を流して喜びそうな大自然の光景がその空には広がっていた。

現実世界ではもちろん、架空世界のユグドラシルでさえできなかったアウトドアという経験、果てもなく広がる自然の光景。ありとあらゆることが新鮮な響きを持ってたちち・みーの心を打った。

ユグドラシルでも、未知を求めて冒険をしたが、その時の期待感や昂揚感を思い出す。

そんな風に、なんととはなしに感慨に浸っていると、別の作業をしていたモモンガがやってきた。

「タツさん、こちらの作業は終わりましたか？」

「ええ。終わってます」

座り込んでいたたちち・みーは立ち上がりながら応じる。そのたちち・みーの様子に何かを感じたのか、モモンガは不思議そうな顔をしていた。

「どうかしたんですか？ タツさん」

その問いに、たっち・みーは特に大したことではない、と手を振った。

「いえ……ちよつと、自然に浸っちゃってただけです。元の世界じゃ、もうこんな経験はできませんからね」

たっち・みーの言葉に、モモンガは同意を示すように頷く。

「ああ、そうですね。わかります。実は私もさつき、ちよつと浸っちゃってました」

モモンガは遠い目をして、世界に思いを馳せる。

「……もし、ナザリック地下大墳墓ごと転移したわけじゃなくて、タツさんとだけ……あるいは自分一人だけで転移していたら……私はあてもなく旅をしていたかもしれない」

アンデッドであるモモンガは飲食も睡眠も呼吸すらも必要としない。どんな高い山であろうと装備など何も必要なく昇れるだろうし、深海の底を歩いても平気だろう。そんな風に生きるのも悪くはなかったと感じる。

とはいえ、ナザリック地下大墳墓を——仲間たちが残した愛しい宝を置いていくような真似はできない。部下として彼らが付き従ってくれる以上は、支配者としてその忠義に応えるべき。そんな風にモモンガは考えていることだろう。それを理解しているからこそ、たっち・みーは何も言わなかった。

「さて、皆のところに戻りましょうか」

そういつてモモンガと一緒にマーキーテントまで戻るとたっち・みー。

そこではルクルットがせつせつと竈を作っていた。ニニヤは〈警報〉という魔法を唱えて周囲の警戒をしている。

モモンガは魔法詠唱者だけあって、ニニヤの使っている魔法に興味を持ったのか、そちらに歩いて行ってニニヤと話し始める。一方、たっち・みーはルクルットの竈制作の方に興味を引かれた。

「なるほど……そうやって穴を掘ることで火力を安定させると同時に、溝を作って空気の流れを生み出しているのか」

「まあなー。野伏としての技術の一環として、野営に関してはお手のもんだぜ。この技術に関してはそんじよそこらの奴には負けないって自信がある」

ルクルットは自分の仕事に誇りを持つ者特有の自負を覗かせる。たっち・みーはそんなルクルットをやはり好ましいと思うのだった。「そういうところを嫌味なくアピールしていけば、女性にもモテるだろうに」

モモンガにやっているように強引なアピールは必要ないのではないかとたっち・みーは思うのだ。もっとも、モモンガに対してやっていることに関してはそもそも前提としてモモンガが男性である時点での外れではあるのだが。

たっち・みーの心の底からの指摘に対し、ルクルットは苦笑して首を横に振る。

「いや、そういうわけにもいかないって！　だって俺の技術って野外活動用だぜ？」

「む……それもそうだな」

同じ冒険者仲間でもない限り、女性と共に野外活動をする機会はないだろう。

「だからそこじゃないところでもアピールしていかないとき」

「理解はしたが、それでも押し過ぎるのは問題だと思うぞ」

苦笑気味にもう一度だけ釘を刺しておいて、たっち・みーは会話を切り上げた。

ちようどそこにニニヤとの会話を続けているモモンガの声が聞こえてきた。

「たとえば、ニニヤさんに弟子入りとかできるんですか？」

「私よりもっと腕の立つ人の方がいいと思いますよ。王国だと……」

そう言つてニニヤから魔法関係の事情について聞きだしているようだ。

「私に弟子入りに関しては、申し訳ないですが私にはやりたいことがあって……割ける時間がないんです。ごめんなさい」

やりたいことがある、そういつた時のニニヤの顔にはどす黒い意志

が覗いていた。

そこに踏み込むことにメリットを感じなかったのだろう、モモンガは何も言わなかった。

たち・みーはモモンガがそう判断したならば何も言わない方がいいのかと思っただが――

(場合によつては彼らと長い付き合いになる可能性もある。その時のためにも、彼がどういう事情を抱えているのか、把握しておいた方がいいかもな)

恐らくはなにかしら過去にあつて、敵視している存在がいるのだろう。例えばそれがアンデッドだったとしたら、モモンガの正体は絶対ばらしてはならない。

そういつた諸々のことを踏まえ、たち・みーは口を開いた。

「二ニヤ。お前のやりたいこと、ということについて聞いてもいいか？」

その発言に驚いたのは二ニヤだけではなく、ルクルットやモモンガもだった。たち・みーは予想された反応だと感じつつ、さらに続ける。

「もしかしたら、私やモモさんが力になれるかもしれないぞ？　もし話してもいいと判断できることなのであれば教えてくれ」

「……それは……いえ、しかしひどく個人的なことですし」

遠慮しようとする二ニヤ。モモンガも何か言いたそうにしていたが、たち・みーはそれを遮って言葉を放つ。

「誰かが困っていたら、助けるのは当たり前――だ。あー。私が影響を受けたとある人物の言葉でな」

普段通りに口にしようとして、いまは純銀の聖騎士たち・みーではなく、冒険者タツということを思い出した。この世界においてはまだガゼフくらいにしか言っていないが、結び付けて考えることもできるかもしれない。たち・みーはもしそうなっても別人であることを言い訳できるように予防線を咄嗟に張った。

そのたち・みーの言葉にどう思ったのか定かではないが、二ニヤは素直に「やりたいこと」について教えてくれた。

「私がやりたいのは……姉を助ける、ということなんです」

その内容にたっち・みーは不思議に思つて首を傾げた。その姉とやらがどうなっているのかはわからないが、少なくとも『助ける』という目的に先ほどニニヤが覗かせた暗い敵意がそぐわない。

「……姉を助ける、というには少々不穏なオー……雰囲気だったが」

「……タツさんには敵いませんね。ええ、そうですね。私は姉を助けるだけが目的じゃないんです。姉を浚った貴族……ひいては、その暴走を冗長しているこの国のありよう……すべてを壊してやりたいんです」

「……なるほど、な」

「でも、姉を助けることが第一です」

たっち・みーはそこまで聞いてようやくニニヤの纏う気配や覗かせる敵意について理解した。

理解した上で——なんだ人間らしい普通の事情じゃないかと拍子抜けする。共感もできるし、支持もできる。そうたっち・みーは思った。

「よくわかった。その姉の居場所はわかっているのか？」

「王都にいることは間違いないはずなんです。けど、浚った貴族の家のことを調べても、私の姉の情報は一切でて来なくて……もちろん私程度に身分やクラスじゃ調べられることにも限界はありますが……それにしても一切の情報が無いことが不安で」

「ふむ。なるほどわかった。実は私たちには王都にちよつとしたコネクションがあつてな。見つけ出すという確約はできないが、軽く探る程度はしておこう」

そういうたっち・みーの脳裏に浮かんでいたのは、王国戦士長のガゼフ・ストロノーフと、情報収集に出したセバスとソリュシヤンだ。ガゼフの方に聞くのは難しいかもしれないが、セバスやソリュシヤンになれば、情報収集のついでにでも探っておくように命令を出すことができる。情報を収集するのは元からの目的だったのだから、自分たちの行動が妨げられることもない。

万が一見つけることができれば、生まれながらの異能持ちのニニヤ

に対する大きな貸しとなる。

どう転んだところで、損はしないだろう。たっち・みーはそう判断した。

「本当ですか!？」

ニニヤは驚愕の表情でたっち・みーに詰め寄る。その目は急に降つて湧いた救いの手を信じられないながらも、そこに期待を覗かせている。

「ああ。ただ、あくまでも情報を集めるだけだ。お前の姉を確実に助けるといふ保証はできない。それでもいいなら……」

「いいです!。ぜひお願いします!」

ニニヤは、最高ランクの冒険者に相当するたっち・みーの協力を得られることによる心強さを感じているようだった。いまはまだ大したことがない繋がりでも、いずれ大英雄になるであろうたっち・みーの協力だ。それに食いつかない手はない。

「では調べるためにもその姉の名前を教えてくださいませんか?」

「はい。姉の名前は——」

ニニヤは素直に口にする。

たっち・みーがここで名前を知ること、その後の運命が革命的に変わる人物の名前を。

「ツアレニーニヤ・ベイロンです」

野営地にて②

パチパチ、と薪が燃える音がしていた。

たき火を囲んで各々が好きな場所に腰掛けている。漆黒の剣は漆黒の剣で並んでいるし、たっち・みーとモモンガも隣にいるが、それは親しさを考えれば自然の席取りだろう。たっち・みーのもう片方の隣にはインフイーレアが座り、モモンガの隣にはちやつかりルクルツトが座っている。相変わらずアピールを忘れないルクルツトに、たっち・みーは苦笑せざるを得なかったが。

(さて……どうするべきか)

そう考えながら見下ろした手の中には、暖かなシチューがあった。ニニヤがとりわけてくれたものだ。決して豪勢なものではないにせよ、その素朴ながらも美味しそうなものを口にすることに躊躇うことはない。たっち・みーの種族は飲食不要ではないし、その気になればいくらでも食べられる。元々心配していないが、アイテムによって無効化しているため、毒などを警戒する必要もない。

問題は、モモンガが飲食不要の体であることだった。幻術をかけてナーベラルの姿を取ってしようと、食べられないことには変わりはない。どうやって誤魔化すべきか考えていた。

「あー……モモちゃん、何か苦手なものが入ってた？」
ルクルツトがそうモモンガに問いかける。モモンガは少し考えたのち、こう答えた。

「いえ、そういうわけではないです。ただ、宗教的な事情です。命を奪った日の食事は4人以上で食べてはいけないというものがあるんです」

「ほう……変わった教えを信じておられるのだな。モモ女史は。もしや、タツ氏でもあるか？」

宗教がらみということにしてしまうのは、確かに上手い手だ。辺境の地で信じられているものとしてしまえば、調べられようがない。

「ああ。実はそうなんだ。お前たちからすれば変な教えだろう？」

「いやあ、世界は広い。そう言った教えもあって不思議ではないので

ある」

宗教がらみだからとわかったからか、漆黒の剣やンファイレアの不思議そうな様子が納得した者のそれに代わる。現実の世界でもそうだったが、この世界でも宗教がらみの問題は微妙なものであるようだ。たっち・みーとモモンガにとっては都合がいい。

「そういうえば、皆さんは漆黒の剣というチーム名ですけど、漆黒の剣を使っただけではないようですが……」

モモンガが話を交えるためにそんな話を振って、漆黒の剣たちも応じる。

漆黒の剣の由来から通じる様々な話を通して情報を集めながら、たっち・みーとモモンガは上手く会話に乗っかっていった。

もしこれがモモンガかたっち・みーの一人だけがこの中に混ざったなら、こうは上手くはいかなかっただろう。世界知識は不足しているが、そこはたっち・みーが上手く誤魔化しつつ、時に堂々と「なんだそれは？」と聞くことでむしろ世界知識を増やしている。

たっち・みーがいずれ大英雄となる浮世離れた存在であると認識している漆黒の剣やンファイレアは、多少常識的なことを知らないのも英雄らしいとでも解釈したのか、快く教えてくれる。

たっち・みーは強者であることを実に上手く活用していた。

『……さすがはたっちさん。人間関係の構築はお手のものですね。私だところはなかなかたっちさんでしよう』

『え？ そんなことはないと思いますが……それにしても、仲の良いチームですね』

漆黒の剣は命を預けあった者特有の馴染んだ空気を纏っている。それはたっち・みーやモモンガにとっては過去のギルドを思い返させるもので、ンファイレアにとっても羨みを感じるものらしい。

楽しいに歓談する漆黒の剣にンファイレアが問いかける。

「皆さん、本当に仲が良いですね。冒険者のチームって、皆こんなに仲がいいんですか？」

「ある程度はそうでしょうね。命を預け合う関係なわけですし。お互いに拘るところとか、譲れないところをわかっていないと、いつも喧

嘩になってしまいます」

「相互理解が大事なのである。まあ、冒険者のチームにも様々なものがあるゆえ、仲が良くないチームがいることも事実ではあるが」

「あと、うちのチームには異性がいないからなあ。いと色々なところで揉めたりするって聞くぜ」

「……そう、ですね。いたらまずルクルットが問題を起こしそうですしね」

微妙な調子でニヤヤが笑う。それに対し、もつともだとルクルット以外の全員が思った。特に現在進行形で言い寄られているモモンガに至っては、絶対零度の視線をルクルットに送っているほどである。もつとも、当のルクルットは「モモちゃんの冷たい視線いただきました！」と言いながら悶え、全く懲りている様子はなかったが。

「それに……チームとしての目標がしっかりしているからではないでしょうか」

漆黒の剣の目的は、その名前の由来となった、伝説の剣を手に入れるということだ。

この辺りの目標についても、ただ「有名になる」とか「お金を得たい」というような俗物的な目標ではない点が、たち・みーに彼らを好ましく思わせる要因にもなっている。

「……そうですね。皆の目標が一つに絞られているということは、とても大事ですね」

モモンガが思わず呟いたのを、ンファイレアは聞き逃さなかった。

「モモさんも昔はチームを組んでいたんですか？ あ、いえ。いまはチームというよりはコンビだと思っただけ……」

それとなくンファイレアが自分たちの素性について探りを入れてきていることにたち・みーは気付いたが、モモンガは気づいていないようだった。

どうやら、仲間という言葉にギルドメンバーの記憶を刺激されてしまったようだ。モモンガは俯いて視線を落とし、そしてぼつりと話し始める。

「冒険者、ではなかったですけどね。私が弱かった頃、最初に救ってく

れたのが……タツさんです。タツさんに案内されて、私は四人の仲間に出会ったんです」

思い出す。最初の記憶を。

「素晴らしい仲間たちでした。最高の、友人たちでした。幾多もの冒険を繰り返し、共に未知を踏破し……あの日々は忘れられません」

友人という存在を知ったのは、貴方の、そして彼らのおかげだ。

いつだったか、モモンガが真剣な声で話してくれたときのことを、たっち・みーは思い出す。

だからモモンガにとって友人たちというものは特別で、彼らが遺した「アインズ・ウール・ゴウン」のすべては命を懸けてでも守り抜きたい存在なのだ。

いまはそのメンバーのほとんどがいなくなってしまっている。

モモンガは寂しそうに背中を丸めていた。小さくなって寂しさに耐えているようなその様子に、漆黒の剣も、ンファイレアもなにも言えない。

たっち・みーはモモンガを慰めるように、その背中に手を置いた。自分はここにいる、という意思を込めて。

モモンガは、はっとした様子でたっち・みーの方を見て、そして、安心したように微笑んだ。

「すみません……湿っぽい話になってしまいましたね」

そう言って頭を下げるモモンガの言葉を補足するように、たっち・みーが少し軽めの声でいう。

「ちなみに、いまのモモさんの話だとまるでその時の彼らが死んでしまったようだが、ちゃんと生きている。私達の目的は世界のどこかにいるはずの彼らとまた再会することでもあるんだ」

たっち・みーの言葉に、漆黒の剣とンファイレアも少し安堵したような様子を見せた。

「なんだー。モモチちゃんがすげえ暗い顔をしてるから、俺はてっきり……」

「こら、ルクルットー！」

ルクルットがいつもの様子で騒ごうとするのを、ペテルが素早くた

しなめる。ダイスが低い笑い声をあげ、ンファイーレアがつけられて笑う。

ニニヤがモモンガの方を向いて言葉をかけた。

「モモさん。いつの日か、きつとその素晴らしい方々と再会できますよ。私も姉と再会することを諦めています。一緒に……:というとモモさんレベルの人に対して失礼かも知れませんが、お互いにかんばりましょう!」

そのニニヤの言葉に、モモンガは笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます。ニニヤさん」

朗らかな空気が戻ってきたのを感じたたち・みーは、シチューの皿を持ったまま立ち上がる。

「さて。それではすまないが私たちはあちらで食べようと思う。冷めてしまったてはもつたいないからな」

「すみません。皆さん」

「いえいえ。宗教に関することでは仕方ありません。ごゆっくりどうぞ」

ペテルがそう言って二人を送り出し、たち・みーとモモンガは少し離れた位置に移動する。

「……必ず皆を見つけてみましょうね。たちさん」

清々しい決意を胸に宣言するモモンガに、たち・みーは当然だと頷く。

「ええ、必ず。仮に来ていなかったとしても、またみんなが遊びに来れるようにしましょう」

いつかナザリックにすべてのギルドメンバーが揃うときを夢みて、たち・みーとモモンガは昔話に花を咲かせるのだった。

カルネ村と森の賢王

翌日、カルネ村に到着した一行は村に入る際、エンリが小鬼将軍の角笛で召喚したゴブリンに警戒されるというハプニングがあった以外は、順調に村に入れていた。

「まさか、エンリとンフィーレアが友人だったとは思いませんでしたね。モモさん」

ンフィーレアが彼女に抱いている感情は友達に対するそれとは違ふようだったが、いまの関係性は紛れもなく単なる友人同士だ。ならば友人という言い表し方があつていようだろう。

モモンガはたち・みーの言葉に同意して頷く。

「二人を見張っているエイトエツジ・アサシンからの情報によると、どうやらンフィーレアは我々がこの村を助けた『たち・みーとモモンガ』であることに気づいたようですね」

たち・みーとモモンガは村を見下ろせる丘に立つて村の様子を眺めていた。漆黒の剣たちは別の場所で休んでいる。

「まあ、元々無理に隠すつもりはないですからね。モモさんの方が大きく姿を変えているとはいえ、魔法という存在がある世界ですし、結び付けて考える方が自然でしょう」

たち・みーはそう呟いた。名前を変えて冒険者として活動しているのは偽造身分を作り出すという目的もないわけではないが、いずれはタツとモモがアインズ・ウール・ゴウンのたち・みーとモモンガと同一の存在であるということを喧伝するつもりだった。

その時のためになるべく人々に受け入れられる存在として振る舞うことにしているのだ。

もつとも、たち・みーは何も言わなくてもそういう行動をするだろうとモモンガには思われているのだが。

「お、どうやらンフィーレアがこちらに向かっているようですよ」

「さて、彼は私たちに対し、どういう立ち位置を取るのでしょうかね」

まだ関わって日が浅い相手ではあるが、ンフィーレアがまっすぐな性根を持つ少年であることはたち・みーにも伝わっている。これか

ら彼がどういう立ち位置を取ろうとするかで評価は変わるが、きつと悪い方向にはならないだろうという確信がたち・みーにはあった。「こういうとタツさんはいい気分じゃないかもしれませんが……この村を、エンリを助けたことはンファイレアに大きな貸しを作れたという意味で、ファインプレーでしたね」

「……まあ、そうですね。いまの状況なら、よっぽどのことがない限り、ンファイレアが私達に対して不利益になるような行動を取ることはないと確信できるのはいいことです」

そうたち・みーが言うのと、ンファイレアが急ぎ足で駆けてくるのが見えたのはほぼ同時だった。

その後のンファイレアとのやり取りは、ほぼたち・みーとモモンガの思惑通りに進んだ。

ンファイレアはエンリを救ってくれたお礼を二人に言ったのち、ポーシヨンの秘密を求めて接触してきたことを正直に告げた。それに対し、たち・みーとモモンガは寛大な対応で受け入れ、いまの段階ではまだタツとモモがアインズ・ウール・ゴウンの二人であるということは周りに伏せておくようお願いした。

その途中、二人の寛大な対応にンファイレアが感動し、憧憬の視線を向けて来た。

モモンガは自分もかつて弱かった頃はたち・みーや仲間と同じような感情を向けた覚えがあったため、感情抑制が生じる程度に照れくさく感じ、たち・みーは昔のモモンガのことを思い出して微笑ましく思った。

ンファイレアとのコネクションの構築は、おおむね二人の考えた通りの、良好な形に落ち着いたと言えた。

ンファイレアの依頼は、裏にたち・みーとモモンガとの繋がりを持ち、ポーシヨンの入手経路や製造の秘密を探ることがあったが、薬草の採取という表の目的もしなければならないことだ。

森に入つての薬草採取は、モンスターと遭遇する可能性が高まり、

かなり危険な行為である。そのための護衛として雇われたたち・みーたちは、念入りに準備をしていた。

「ではこれから森に入りますので、僕の警護をお願いします」

「まあ、タツさんたちがいれば大丈夫でしょう」

漆黒の剣のリーダーであるペテルが言うのと他力本願にすぎる言葉に聞こえるが、たち・みーとモモンガの実力は十分以上に示している。その反応も当然といえた。

「森の中は森の賢王というモンスターの縄張りです。他のモンスターには出くわさないと思いますが……もし出くわすとしたらその伝説の魔獣ですから……」

「安心しろ。そいつは私達がなんとかする」

たち・みーは断言する。

「もし遭遇したら、念のためペテルたちはンフィーレアを連れて離れてくれ。私とやり合えるような魔獣だった場合、さすがに皆を巻き込まずに戦える自信はないからな」

それほど強力な魔獣だった時の戦いの激しさを想像したのだろう。ンフィーレアやペテルたちはごくりと喉を鳴らした

「わ、わかりました。その際はンフィーレアさんを守って逃げさせていただきます」

「そうしてくれ」

「まあ、タツさんが本気を出す必要があるような魔獣だったら、どこまで逃げてでも安全な場所なんてないでしょうけどね」

さらりとモモンガが呟き、五人が戦慄する。

たち・みーは苦笑しながらモモンガの言葉を否定した。

「さすがにそこまで広範囲を薙ぎ払いはしませんよ、モモさん」

やろうと思えば本気で森ひとつくらいは吹き飛ばせるのだが、それは言わないでおいた。

「あの……タツさん……」

ンフィーレアが何かを言おうとして一瞬言い淀んだが、決心して口を開いた。

「森の賢王は殺さないでくれませんか？」

「ん？ 縄張りの問題か？」

たち・みーはそう応じた。そのモンスターがいることによつて他のモンスターが出ないという話はカルネ村までの道中にも聞いた。

カルネ村にはエンリがいる。いくらゴブリンたちの協力で村の防備などが整いつつあるとはいえ、モンスターが流れ込めばひとたまりもないだろう。それを森の賢王というモンスターが抑制しているとすれば、そのモンスターを倒してしまうのは具合が悪いという理屈だ。

「はい。伝説の魔獣に対し、困難なことをお願いしているのはわかっているつもりなのですけど……」

「わかった。森の賢王は追い払う程度にしておく」

あつさりとしたたち・みーはンフィーレアの提案を受け入れた。漆黒の剣の面々がどよめく。

「相手は何百年も生きている伝説にも関わらず……この自信……」

「絶対的強者に許された態度であるな……」

「これが油断や慢心じゃなく、確かな実力に裏付けされた自信というのですから……」

漆黒の剣の面々から向けられる称賛や賛美の視線を、たち・みーは自然体で受け取る。

隣にいるモモンガの方がなぜか得意げだった。

たち・みーは話を進めることにする。

「さて。森の賢王に対しては私達が何とかするから……出発するか？」

「そうですね。そうしましょう。早速ですが……」

ンフィーレアが薬草を取り出してそれを皆に示す。それが今回採集する対象の薬草のようだ。

たち・みーは門外漢なため、とりあえず耳に入れる程度に聞いていたが、そこにモモンガから〈伝言〉による声がかかった。

『たちさん。アウラから了承の返事がきました。彼女が森の賢王を追い立ててきてくれます』

『ありがとうございます。モモンガさん』

ここでたつち・みーとモモンガには森の賢王と支配下に置くという目的があった。

森の賢王がどれほどの叡智と強さを持っているか不明の段階ではあるが、大森林を調査するように命じていたアウラから報告があがっていないことから、自分たちを超える力を持っているとは考えにくい。そのため、必要なのはそれが持つ知識の方だ。

下手な敵対行動は臍を曲げてこちらの質問に対して答えなくなる恐れもあったが、賢王と言われていようが魔獣は魔獣。最初に強さを見せつければ、自分たちにとって都合のいい状態に落ち着けることもできるだろう。

(もしかすると、現実の世界と繋がる方法のヒントが得られるかもしれないのだしな……)

相手があまりにも聞き分けがなかった時は、非道な聞き出し方も考慮に入れていた。

そうならないことを祈りつつ、そうなった際は自分が容赦しないことを自覚して、たつち・みーは顔を顰めるのだった。

森の中で薬草を採取している最中。

最初に異変に気づいたのはルクルットだった。

「やべえな……なんか近づいてくるぜ」

森がざわめいている。

明らかに空気が変わっていた。

「でかいものがこつちに向かってやがる。蛇行しているっぽいのは気になるが……ほどなく遭遇するぞ、これ」

「森の賢王か？」

「それはわからないが……なんにしてもこれはまずいなあ」

「撤収だ。……ではタツさん。打ち合わせ通り、しんがりをお願いします」

「任せろ。お前たちは早く行け」

たつち・みーは剣を抜き、盾を構えながら漆黒の剣とンファイーレアを促す。

「タツさん。モモさん。無理はしないでくださいね」

そういうンフィーレアの声には、二人に対する絶大の信頼があり、髪に隠された眼からは憧憬の感情が籠る視線が二人に向けられていた。

たっち・みーはそれを鷹揚に受け取ったが、そういつた視線を向けられ慣れていないモモンガは、即時の撤退を勧める。

去って行った一行を見送り、たっち・みーとモモンガは改めて森の奥に向かって構える。

(殺意感知)

たっち・みーが特殊技術を用いると、すごい速度で近づいてくるものの存在を確かに感じた。それがもう少しでこちらに接触する——というところで急に止まる。

(おっと)

たっち・みーはモモンガの前に立って盾になる。その瞬間、森の奥から鋭い何かが飛来した。

それをたっち・みーは左手に構えた盾で軽く弾く。＜攻勢防^パ御^{リイ}＞を用いたわけではなく、ただ弾いただけだが、それは驚いたように素早く戻っていった。

(いまのは……尻尾か。金属に匹敵する固さだったな。二十メートル以上は離れているというのにあの正確さ……ゴブリンやオーガじや近づくことも出来ずにやられるな)

強力な魔獣が遠隔攻撃に類する射程の攻撃方法を持っているというのは、それだけで脅威だ。無論、前衛職であり、それを極めたたっち・みーにとつては二十メートル程度は瞬き一つで詰められる距離ではないが。

たとえばこれが漆黒の剣のペテルやルクルトなら、成す術もない相手であるということは明らかだった。尻尾の一撃はたっち・みーだからこそ見極めて軽く弾くことも出来たが、普通なら盾を用いて真正面から受け止めるのが精一杯だろう。そして尻尾の威力と盾の耐久度、持ち手の膂力などを比べると、生半可な冒険者では耐え切ることはいらないはずだ。

(伝説の魔獣というのはそれなりに妥当な評価かもな)

そうたっち・みーが考えていると、木々の後ろから深みのある声が響いた。森の賢王という呼び名に相応しい声だ。

「それがしの初撃を完璧に防ぐとは……天晴でござる」

しかしその内容……というか口調には首を捻らざるを得なかった。

「それがし……天晴……ござる……」

ふざけているようにも聞こえてしまう。

たっち・みーはそのことをどう判断したらよいのかわからなかったが、モモンガが後ろから声をかけてきた。

「タツさん。これは私たちの脳が翻訳したものですから」

「ああ、そうでしたね」

たっち・みーやモモンガが、森の賢王の喋り方はそれが一番近いと判断したわけだ。

決して相手がふざけているわけではないとわかり、たっち・みーは少し安心する。

「さて、それがしの縄張りに土足で侵入してきた者よ。いま退くのであれば、見事な防御に免じて追わずにおくでござるが……どうするでござる?」

その言葉を聞いたたっち・みーは、森の賢王が賢王らしい矜持と、敵に対してもその力を素直に称賛する度量を持っていることを理解し、その存在に期待を膨らませる。

「心遣いはありがたいが、悪いな。私たちはお前に用があつて来たんだ。いくつか聞きたいことがあるからな。……とりあえず、姿を見せてくれないか?」

たっち・みーがそう言うと、森の賢王の笑い声が森に反響した。

「ふふふ……侵入者が、ずいぶんと偉そうな口を利くでござるな。……ならばそれがしの偉容に瞠目し、畏怖するがよいでござるよ!」

森の木々をかき分け、森の賢王が姿を現す。

その姿を見たたっち・みーとモモンガは目を見開く。それは予想外すぎる姿だった。

「ふふふ。驚いたでござろう。恐れることは恥ではないのでござる。

それがしを見て恐れぬ者はこれまで一人もいなかったでござるよ」

「……いや、なんとというか……ねえ、モモさん」

「あー、うん、そうですね。タツさん。これは……」

二人は形容しがたい表情を浮かべ、何とも言えない空気を醸し出す。さすがの森の賢王も、二人の間に生じている空気が恐れの種類ではないことに気づいたようだった。

「どうしたのでござるか？」

その森の賢王が首を傾げる仕草を見て、二人の間である確信が強まる。

「ひとつ聞きたいんだが、お前の種族名は……」

「たっち・みーは問いかける。」

「ジャンガリアンハムスターとか言うんじゃないか？」

森の賢王——巨大なハムスターのつぶらな瞳が不思議そうに細められた。

長い尻尾と異様に大きな体軀を除けば、それは明らかにジャンガリアンハムスターの姿をしていた。

森の賢王とンファイレーア

森の賢王——たちち・みーやモモンガからすればどう見ても巨大なジャンガリアンハムスターでしかないそれは、唯一それがただのハムスターではないことを示す、長く強力な破壊力を持つ尻尾を鋭く振る。

「それがしは同族に会ったことがござらん。ゆえに、種族名がそのジャンガリアンハムスターであるかという質問にも答えかねるが……もしや、そなたはそれがしの種族のことを知っているのござるか？」

「知っている、と言っているのかどうかは疑問だが」

たちち・みーはちらりとモモンガを窺い、モモンガは頷く。

「かつての仲間にお前によく似た種族を飼っている人がいた」

そのハムスターの話は、ことあるごとにされていて、専用のケージや高級な餌などを買い込んで、かなり入れ込んでいた様子だった。寿命でそのハムスターが死んだときは、この世の終わりのような泣き声を残してログアウトし、その後しばらくインしなかつたせいで、ギルドメンバーの中で一時「後追い自殺したのではないか」と騒ぎになつたことさえあつたほどだ。

同じ仲間のことを思い出していたのか、モモンガが懐かしそうに眼を細めている。

ビシッ、と森の賢王の尻尾が地面を叩く音が響いた。

「なんと！　それがしに似たものとは！　その話は詳しく聞かせて欲しいのでござる。それがし、同族に会いたいでござるよ。同族がいるのであれば、種族を維持するという責任があるのでござる。子孫を作らねば生物として失格でござるゆえ」

（野生動物としては正しい責任感とはいえるが……しかしこれは……）

たちち・みーは少しがっかりした気持ちだった。確かにその責任感には立派なものだとは思ふが、想像していた『賢王』の方向性とは少し

違うように感じたのだ。しかし元々がたち・みーの勝手な願望であつたがゆえに、その気持ちは押し殺す。

「……私はもうアンデッドだし……生物じゃないし……」

ついでに、後ろで何かブツブツ言っているモモンガのことも黙殺した。

「詳しく教えられることは教えるが、残念だがお前が喜ぶような内容じゃないな。そもそも、私たちの知るそのハムスターは大きくても掌の上に乗る程度でしかないし、お前のように喋ったりもしない。あくまで全体の姿形が似ているだけなんだ。期待させたようですまない」

たち・みー自身、森の賢王に期待して裏切られた口であるため、期待してしまつたが故の落胆は想像に難くない。自分たちに関しては人が勝手に森の賢王などこのハムスターのことを呼んでいたがために生じたいわば賢王自身も迷惑な形の裏切られ方だが、相手が裏切られたのはこちらが口にした「似た種族」という言葉に対してだ。

単純に「似た種族」といえば、それは自分の同族だと勘違いするのもし方ない。「似た姿をしたもの」だと言えばまだ期待値も低かつたかもしれないのに。

案の定、森の賢王はしよんぼりと髭を力なく垂らした。

「それはちよつと、さすがに無理でござるなあ……。では、やはりそれがしは一人なのでござるかなあ……」

「……そうか。お前は孤独なんだな。下手な慰めは余計なお世話だろうからしないが、同族以外に仲間を求めてみるのはどうだ？ 案外、悪くないし、下手な同族より強固な絆が築けるぞ？」

たち・みーの優しい声を、森の賢王は困惑しながらも素直に受け止めた。

「……むう……それは……同族がいないとわかつたら考えるでござるよ。お気遣い感謝するでござる」

「いや、感謝の言葉は必要ないさ。ところで、残念ながら実にはならなかつたが、そちらの要望に応えたんだ。こちらからも質問をしていいか？」

その真摯な言葉に森の賢王はますます戸惑いつつも、鷹揚な態度で

頷く。

「構わないでござるよ」

「ありがとう。聞きたいことなんだが、お前は森の賢王という名前だが、この世界に対する造詣どれほど深い？ たとえば、この世界の他に、まったく別の法則で動く異世界がある……というような知識はあるか？」

森の賢王はその可愛らしい顔を大きく傾げた。

「……何を言っているでござる？ 異世界とはどういう意味でござる？」

(……ハズレか……まあ、わかつてはいたが)

たち・みーは大きいため息を吐く。そもそも質問の意図が伝わっていない時点で、見込みはなさそうだった。

(いや！ まだ諦めるのは早すぎる！)

しかし、すぐに切り替えた。

「異世界云々は一端忘れてくれ。じゃあ、そこにいたはずの者が急に遠い場所に行ってしまうとか、そういう話ならどうだ？」

異世界転移という概念を言い表す言葉を持っていないのではないか、という一縷の希望にかけてみた。しかし、やはり森の賢王は首をひねるばかりだ。

今度こそ、たち・みーは落胆の思いを隠しきれなかった。

(ダメか……せめて何かのヒントくらい……と思っただけだな……)

そう言っただけで俯くたち・みーに対し、森の賢王が戦闘態勢を整える。「さて、そろそろ無駄な話は止して、命の奪い合いをするのでござる！ それがしの支配する領地に侵入せし者よ！ それがしの糧と——ひいひいひいひいひいひい！」

低い声で朗々と声をあげていた森の賢王から、高い悲鳴があがった。

「え？」

たち・みーが思わず顔をあげた先で、森の賢王はひっくり返って無防備な腹を見せていた。

「こ、降参でござる……！　それがしの負けでござるよ！」
「へ？」

変な声をあげてしまったたち・みーが背後を振り返ると、思いつきり視線を逸らしたモモンガがいた。その体から黒いオーラのようなものがにじみ出ている。

「……すみません、タツさん。あなたとそれが真剣に対峙する光景に我慢できそうになくて」

「ああ……なるほど」

相手は巨大とはいえ愛くるしい姿のハムスター。それに対し、たち・みーという超級の戦士が正面から対峙しているという光景は、確かに客観的にみた場合はちよつと情けない光景かもしれない。特にモモンガはたち・みーを特別視していることもあって、余計に我慢ならなかったのだろう。そのため、絶望のオーラを放って手っ取り早く降伏させたというわけだ。

たち・みーは森の賢王の傍まで歩み寄り、その無防備な腹部を見下ろす。

「さて……どうしたものかな」

「色々と活用法は考えられますね。ユグドラシルにはいかなかったモンスターですし、アンデッド化させた場合、どんなアンデッドになるかは非常に気になるところです」

隣に並んだモモンガが、森の賢王にとってとはとてつもなく不吉なことを口にする。森の賢王は自分の尻尾を抱きかかえ、ガタガタと震えるのみだ。

「殺しちゃうんですか？」

そこにアウラもやってきて、殺すのなら皮を剥がさせて欲しいと言い出し、森の賢王はもはや強大な手でシェイクされているかのような震えっぷりだ。

たち・みーはさすがに哀れに思い、二人を抑える。

「こいつは生かして連れていきましよう。姿が少々可愛らしいとはいえ、森の賢王と呼ばれるほど強大な魔獣であるのは事実。ならば、それを御して従えているという事実は格好の噂になります」

「……そう、ですね。たちさんがそうおっしゃるのであれば……元々そういう案もありましたしね。問題はこれが森の賢王だと信じてもらえるかどうかですか」

「まあ、そこは臨機応変で。では、森の賢王。私の真の名はたち・みー。こちらはモモンガという。私たちに仕えるのであれば、お前を生かして連れていこうと思うが?」

「あ、ありがとうございますよ! 命を助けてくれたこの恩、絶対の忠義でお返しするでござる!」

飛び起きて忠誠を誓いつつ、体を擦り付けてくる森の賢王を、たち・みーは複雑な気持ちで受け止めていた。

森から出て、先に逃げていた漆黒の剣やンファイレアと合流する。

五人はたち・みーとモモンガが連れてきた森の賢王に驚き、警戒していたが、その森の賢王自身がたち・みーとモモンガに忠誠を誓う様子を見せたことで、安心したように警戒を解く。

「これが森の賢王か……なんというか……まあ……」

ルクルットが歯切れの悪い様子で口を開く。無理もない、とたち・みーとモモンガは内心自嘲していた。森の賢王というには、あまりにもかけ離れた外見だったからだ。

しかし、彼らの反応は、二人の予想を斜め上にぶつちぎる意外なものだった。

「なんて立派な魔獣なんだ!」

ニニヤが驚愕に満ちた声を上げ、ダインがそれに重々しく頷いて同意する。

「こうして傍に立っているだけで、強大な力を感じるのである! 森の賢王という名は伊達ではないであるな!」

(え……? 強大な、力?)

「いや、こいつはすげえや。言葉がでねえ。そりゃ、モモちゃんを連れ回すだけの力はあるわなあ」

悔しそうなルクルット。

「これほどの魔獣に私達だけで相対したら、皆殺しにされていました

ね。さすがはタツさん、モモさん。お見事です」

最後にペテルが感服したとばかりにまとめる。

（まあ、最後の判断に関しては何となくは間違っている。こいつがペテルたちを全滅させることができるレベルであることは間違いないが……）
たち・みーとモモンガは顔を見合わせた。そして同時にほぼ同じことを思う。

（この世界、ちよつと変だ）

このモンスターが森の賢王であることの説得方法を色々と考えていた二人にとって、この事実は意外すぎて予想もしていないことだった。

二人が自分たちの認識がおかしいのか悩んでいると、ンフィーレアが不安そうに声をあげる。

「あの……森の賢王がいなくなったことで、カルネ村にモンスターが襲うようになりませんか？」

「どうなんだ？ 森の賢王」

「村というのは、あれでござるな？ 現在、森の勢力はそのバランスを大きく崩しているのをござる。もはやそれがしがあの地を治めていても、あの村が安全とは言えないでござろうな。それがしも自分の縄張りを通すだけの者すべては止められないし、縄張りに住みつこうとでもしない限りは放っておくものでござる」

「そ、そんな……」

シヨックを受けている様子のンフィーレア。カルネ村が、というよりはそこに住むエンリが危険だと考えているのであろう。

それに対し、たち・みーが何かを言っつてやろうとすると、モモンガから待ったが入った。

『待ってください、たちさん。森の賢王が期待外れだった分、ここで利益を生みましょう。足がかり的な意味で価値が高いカルネ村を守るのはいずれにしても決まっています。なら、そこにンフィーレアからの依頼も上乘せして、恩を売りましょう。彼への貸しはいくつあっても困らないはずですよ』

『……確かに、そうですね』

たっち・みーとしてはそんな打算など関係なく助けてやりたい気持ちはないわけではなかったが、ンファイアに恩を売るという行為は、たっち・みー的にも大事なことだ。もしかしたら制約が厳しくて自分たちには使えない『異世界を渡るためのマジックアイテム』を、ンファイアに使ってもらう時が来るかもしれない。可能性の段階ではあるが、モモンガがわざと貸しを作ろうとしているのは、それを見越してのことでもあるはずなのだ。

だから、たっち・みーは口を閉ざす。ちらちらと葛藤が覗く様子で言おうか言うまいか悩んでいるンファイアの様子に、やきもきしながら、彼の方から「村を救ってほしい」というのを待つ。

(いざ必要となったときに貸しを返してもらうだけだから……彼にとっても決して損な取引ではないはず。早く口に出してくれ)

たっち・みーの想いが通じたのか、ンファイアが意を決したように口を開いた。

「タツさん。モモさん」

「わか……ごほん。なんだ？」

思わず「わかった」と言いそうになったのをごまかし、たっち・みーは問いかける。

ンファイアはまっすぐにたっち・みーとモモンガを向いて、言葉を放つ。

「僕を、お二人のチームに入れてください！」

カルネ村を守ってほしい、というお願いがされるものと考えていたたっち・みーとモモンガは完全に思考が停止する。その間にも、ンファイアはチーム入りを望む理由を告げていた。

曰く、カルネ村を守りたい。

しかし、そのためには力が足りない。

そのために、たっち・みーとモモンガのチームに入って強くなりた

い。
ンファイアは終始真剣で、少し頼りない感じの少年だった彼の眼は、やるべきことを見つけた男のものになっていた。

一人の男の純粋な想い——それが、とても心地よい。

この少年はきつと「村を守ってほしい」と強い自分たちに願うと思
い込んでいて、打算でそれを受け入れるつもりだった二人の大人は、
自分たちの滑稽さも含めて湧き上がる感情を抑えられなかった。

「つ……ははははははー！」

たち・みーとモモンガは楽しげに笑った。それは決して、ン
フィーレアを馬鹿にした笑いではない。楽しくて心地よくて仕方な
い、といった様子の笑い声。

ひとしきり笑った二人は、顔を見合わせると、たち・みーはヘル
ムを取り、モモンガはフードを外した。そして、二人してンフィーレ
アに深々と頭を下げる。

「……笑ったりして申し訳なかった。君の決意を笑ったわけではな
い」

「ええ。とてもいい決意を聞かせてもらいました」

「その上で残念だが、君を私たちのチームに入れることはできない。
二つほど条件があつてね。君の場合は片方しかクリアしていないん
だ」

「とても残念ですけど、ね。でも、君の気持ちは十分にわかりました。
私たちのチームに参加したいといった君のことは覚えておきます」

「それと、この村を守るということだが、少しばかり力を貸すとしよ
う。その時は君の協力も——」

「なんでもやらせていただきますー！」

ンフィーレアのいい返事に、たち・みーとモモンガは満足して数
度頷く。

モモンガが話を変えるように、一步前に出た。

「さて、ひとまずその話は後回しです。その前にちよつと魅力的な話
があるんですよ。タツさんが森の賢王を服従させたことによつて、で
すね」

それは森の賢王の縄張り内に再び入つて、貴重な薬草や木の実など
を回収することだった。いまの状態だと、森の中に脅威は何もない。
それは自由に森の中を闊歩し、普段は取れないような薬草を取れると
いうことである。

「なるほど！ それならすぐく貴重な薬草や、ポーション作成に必要な触媒を大量に手に入られますね！ 追加報酬もお約束できますよ！」

そのンファイレアの言葉に喜ばない冒険者はいない。漆黒の剣たちも乗り気だった。

たち・みーとモモンガは資金的には困っていないものの、臨時収入という言葉は誰だって嬉しいものだ。

全員乗り気になって再度採集に行く計画を立てていた時、ふとニヤがいいことを思いついた、とばかりに提案する。

「そうだ！ せっかく森の賢王という強大かつ素晴らしい魔獣を屈服させたのですから、凱旋してはいかがですか？ タツさん」

「凱旋？」

たち・みーはニヤの提案の意味が掴めず、軽く首を傾げるのだった。

エ・ランテルへの凱旋

その日、エ・ランテルはどよめきに支配されていた。

それらは驚きと称賛、そしてかすかな恐怖に彩られたもので、道行く者のほとんどがその光景について噂をしていた。

どよめきはそれが移動するたびに湧き、それにつられて集まってきた人々がさらに大きなどよめきを生み出す。

その流れの中心となつているたち・みーは、さすがに少々気恥ずかしい思いで、その人々の視線や注目を受け止めていた。注目を浴びることになるのは元々承知のことではあったが、まさかここまで注目を浴びることになるとは思っていなかった。その原因となつている存在に視線を落とす。

現在、たち・みーは森の賢王の背に騎乗していた。

森の賢王に騎乗、というと格好もつくが、実際は巨大ジャンガリアンハムスターの背の上だ。アウラやマーレのような少年少女なら夢のあるファンシーな光景に見えるだろうが、全身鎧を身に纏った屈強な戦士であるたち・みーが乗るとそれはもはやギャグの領域である。

せめて、前衛職の身体能力をフルに活用して、猫背にならないように胸を張っていた。

馬に騎乗するイメージで無理やり姿勢を正しているから、バランスは最悪だ。しかし、そうでもしないと大股開きな上、尻を突き出して猫背になってしまう。跳び箱を飛ぶような姿勢はさすがに恥ずかしかったため、超級の身体能力を用いて、強引にその姿勢を維持していた。

(まさか身体能力をフルに使う初めての機会が、戦闘ではなくこれとはな……)

見目的には、たち・みーたちの認識におけるギリギリの水準を保てたが、精神的なダメージは地味に効いていた。

ただ、それを態度に出すわけにはいかない。あくまでも「なんのことはない平気なことです」という態度を保つ。それは功を奏している

ようで、道行く市民たちはたっち・みーたちにひどく純粋な憧れに満ちた眼差しを向けていた。

それはいうならば、英雄の凱旋。

ニニヤが提案し、他の四人も賛同したため、たっち・みーは森の賢王に騎乗して街に入るといふ案を採用することになった。名声を高めるというのはたっち・みーたちの目的に合致するため、採用することになったが、確かに効果はあるようだ。

ただ、その提案を採用するまでの騒動は、ちよつとしたものだった。その原因となった存在を、たっち・みーは肩越しに振り返って確認する。

「……モモさん、あなたは降りてもいいんですよ？」

「ツ……ダメです。タツさんだけにこんな苦痛を味あわせるわけには……っ」

そういうモモンガの声は羞恥に震えている。さつきから何度か冷静になってはそうなっている辺り、よほどの羞恥を感じているのだろう。

たっち・みーはそこまで無理をしなくてもと思うが、確かにモモンガがいることによって、罰ゲームのようなこの光景の苦痛が和らいでいるところもあり、正直助かっていて、無理に降ろすことはできなかった。いわゆる赤信号皆で渡れば怖くない状態である。

現在、森の賢王に騎乗しているのはたっち・みーだけではなく、モモンガもだった。

モモンガはたっち・みーのすぐ背後に、横向きに腰掛け、たっち・みーの体に掴まるようにして騎乗している。さすがにナーベラルの姿で大股開きはないだろうというところで採用された乗り方だが、案外様になっていた。ナーベラルの外見だからこそではあるが。

美女の外見であるがゆえに、その存在は大きい。いうなればメリー・ゴーランドに恋人同士で乗るような話である。いい歳をしたおっさんが一人でメリー・ゴーランドに乗るのと、家族や恋人と乗るのとでは周囲から見える印象も、乗っている本人たちの心境も天と地ほどに違う。

そもそも、森の賢王に騎乗するという話が出た時、ハムスターにまたがるたち・みーの姿を見たくないと言ったモモンガは強硬に反対した。最終的には周囲に与える影響や噂になる可能性を冷静に考慮して採用されたが、モモンガはどうしてもたち・みー単独で森の賢王に騎乗することは受け入れられなかったらしい。

結果として、せめて羞恥を分かち合う目的で、二人で乗ることになったのだ。

(モモンガさんには申し訳ないが、正直助かったな……それに、周りに対する効果としてもなかなか良いようだ)

現在モモンガが周囲に見せている外見はナーベラルのものであり、その美しさはルクルットが一目ぼれしたように極めてレベルの高いものだ。

そんな美女と共に強大な魔獣に騎乗している戦士。その噂はエ・ラントル中を駆け巡ることだろう。

この調子で名声を高めていけば、目的の情報を得ることに繋がるはずだ。そのためなら多少の羞恥には耐えられる。

たち・みーはそう考えてよりよく見えるように背筋を伸ばし、自信満々の態度で見上げてくる子供たちに向かって手を振ることさえしてみせるのだった。

多少有名になればいい。

たち・みーはそう思っていたが、この凱旋は予想外の結果をもたらすことになった。

それは、あまりにもたち・みーとモモンガの姿が様になりすぎていたために、たち・みーは亡国の王として、モモンガはその王妃、あるいは愛人のような存在であると噂されるようになったのだ。

二人にとって森の賢王はただの大きなハムスターだが、周りにとっては伝説の魔獣であるということもその噂に歯止めがかからない一因となった。

のちに自分達に対する噂を耳にした二人は『開いた口が塞がらない』という言葉を、身をもって体験することになるのだが……それはしばらく先の話である。

「さて、それではタツさんとモモさんはこれから組合で森の賢王の登録ですね。私たちはンファイアアさんを手伝って荷降ろしをします」

ンファイアアの馬車には山のように薬草や触媒が積まれている。ペテルたち漆黒の剣の面々はこれからンファイアアの店に言っ、その荷卸しを手伝うことになっていた。

「よろしくお願いします。皆さん」

恐縮しながらも、多額の追記報酬を約束してもおつりの来るレベルの量の薬草類を前に、ンファイアアはご機嫌だった。

ペテルは森の賢王の上にいる二人を見上げる。

「オーガを倒した報酬については明日ももらえることになりますから、ンファイアアさんの依頼を受けたときと同じくらいの時間帯に組合に来ていただけますか？」

「ああ、わかった。また明日会おう」

たっち・みーはそういって漆黒の剣と別れて、森の賢王の登録をしに冒険者組合へと向かう。

その道中、騒ぎを聞きつけてきたのか、よりたくさんの市民が集まってきた。

（これは、中々……大変な騒ぎになってしまったな。しかしこれはこれで好都合だ）

名声を高める一助にもなるだろうし、万が一、プレイヤーやそれら類する何かが紛れ込んでいた場合、その特別な反応を見ることができるかもしれない。

たっち・みーはそう思いつつ、その場に集まっている者たちをざっと見回した。いまのところは特に怪しげな気配は感じ取れない。近くの建物の上などにはエイトエツジアアシンの気配もある。なにげなくその彼らの気配を辿っていたたっち・みーは、少し疑問に思った。（ん……？ 数が多いな。連れてきたアアシンのほとんど全員いるんじゃないか？）

その疑問についての答えは、背後のモモンガから飛んできた。

『たっちさん。エイトエツジアアシンたちが集まっている人々を一人

ひとりチェックしています。何か妙な反応をしている人物いれば、彼らが動いて反応を確かめます。さすがに数が多いので、いま街に来ている全員を動員しているようです。少し前に街を出たブリタとかいう女冒険者を監視しているアサシンは別ですが』

その報告にたつち・みーは納得して頷く。

現時点で要監視対象となっているのはブリタくらいのものだ。この雑踏に紛れて危険な存在が近づいているということはありえるため、彼らが自分たちの警備を重視するのは当然だろう。

『……ちなみに、エイトエツジアサシンたちには私たちの姿はどう見えているとか、聞きました?』

何気なく聞いたたつち・みーの言葉に、モモンガは少し沈黙した後、ぽつりと答えた。

『強大かつ勇壮な魔獣を従え、その背に跨る様はまさにナザリックの支配者たるに相応しい御姿かと、だそうですね……』

たつち・みーはその認識に愕然とする。

『エイトエツジアサシンたちまで……私達の美的感覚がおかしいのでしょうか……?』

『い、いえ、お世辞という可能性もありますし……』

二人して陰鬱な雰囲気を身に纏っていると、森の賢王が不思議そうに問いかけてきた。

「先ほどから無言でござるが、どうかしたのでござるか? 殿? 姫?」

その問いかけ方に、空気が別の意味で凍った。

「……ハムスケ。私を姫と呼ぶのはやめろ」

じわり、とモモンガの体から殺気が昇る。

「す、すまぬでござるよ! モモ殿! このハムスケ、決して悪気があったわけではないでござる!」

「……はあ。まあ、この姿じゃそう捉えても無理はないがな……少しは違和感を持つとか、何か賢王らしいところを見せてくれよ……」

モモンガはそのため息を吐く。

たつち・みーはなんとすべきか答えが見えなかったため、黙って

いた。

ちなみにハムスケというのは、モモンガが森の賢王につけた名前だ。ハムスターだからハムスケ、とはなんとも安直なネーミングといえるが、セバスにセバス・チャンという名前を付けたたち・みーが言えるセリフではない。

この二人、何気にネーミングセンスは似通っていた。

なお、のちに森の賢王——ハムスケはメスであることが判明し、モモンガは別の意味で頭を抱えることになるのだが、それもまた先の話である。

薬草を山と積んだ馬車が、ンフィーレアの住む家の裏手に停まる。

「よし、じゃあさつきと運び込んでいきますか！」

ルクルットが張り切って腕を回す。妙に張り切っているルクルットの様子に、ニニヤは不思議そうな顔をする。

「ルクルット、どうしたんですか？　なんだか妙に張り切っているように見えますけど……」

「いや、さつスキのタツさんの姿見ただろ？　モモちゃん侍らせて、めちゃくちゃ格好良かったじゃねえか。悔しいが、いまの俺にはあんなことはできねえ。それなら、色々鍛えて、あれを目指したいと思つてな！」

そしてあわよくばモモちゃん並の美人を、と意気込むルクルット。

あまりに不純な動機かつ無謀な目標であったが、彼は至極真剣でもあったため、ニニヤは苦笑を浮かべるしかない。

「そ、そうですか……」

「実に無謀であるが、目指すのは自由である」

「ひでえな、ダイン。お前にはそういうのないのかよ？」

ダインは深く笑みを浮かべるだけで何も答えない。

ペテルが話の花を咲かせる三人に、叱咤の声を飛ばす。

「こら。遊んでないで手を動かしてくれよ」

リーダーの声に従い、ンフィーレアの指示通りに薬草を保管庫に仕

舞い込んでいく。

「ンフィーレア。こいつはどこだ？」

「あ、それはこっちの柵の上をお願いします。……ルクルットさんはもうモモさんは狙っていないんですか？」

柵の上に薬草の入った壺を置きながら、ルクルットがンフィーレアを見る。

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「いえ、さつき『モモさん並の美人を』とおっしゃっていたので。モモさん本人じゃないんだなあ、と……すみません。気になっただけなんですけど」

「あー。まあ、あそこまでラブラブっぷりを見せてつけられちゃあなあ……さすがの俺の心も折れるぜ。顔を真っ赤にしてしがみついちやつてさ……」

巨大ハムスターの背に乗るといふ羞恥が主だったのだが、もちろんそんなことは彼らには通じない。

ルクルットはしかし、明るい笑顔を浮かべていた。

「まあ、この三日間楽しかったし、幸せだったしな。俺は次の出会いを求めていくぜ」

「……すごいなあ。ここ数日、タツさんやモモさんの強さやすごさに圧倒されてきましたけど、ルクルットさんのその生き方も十分すごいと思います」

「そうか？ 褒められると照れちゃうな」

恥ずかしそうに頭を掻くルクルットに、ペテルが軽く肘を入れる。

「いてっ！」

「ンフィーレアさん、あまりこいつを調子に乗せないでください。すぐ増長するんですから」

「なんだよペテルー。いいじゃねえかたまには」

仲のいいもの同士特有のじゃれ合いを見せるペテルとルクルット。そんな二人をニニヤは困り顔で、ダインは落ち着いた笑顔で見守っていた。

「タツ氏とモモ女史。あの二人と共に旅をしたことは、我々の中でか

けがないものになったのであるな。得難い経験だったのである」

「ええ。本当に。私としてはタツさんが姉さんの捜索に協力してくれるというところが一番心強いことですね」

「……ニニヤ。それに甘えては——」

「もちろんです、ダイン。私は私で姉さんと再び会うために頑張ります。けど、やっぱりタツさんのことは心強いですよ」

朗らかに笑うニニヤ。ダインはそれはそうだと思ったのか、それ以上何かいうことはなかった。いつもダインはそうやって一歩下がったところから皆のことを見ていて、時に道を踏み外しそうになったときにはその重く低い声で正してくれる。

作業をする漆黒の剣のメンバーを見ながら、改めてニニヤは自分が恵まれていると感じていた。

リーダーのペテルが皆を導き、ルクルットが盛り上げ、ニニヤが知識を補足し、ダインが皆を支える。

漆黒の剣とは、そういうチームだった。

ニニヤはこの世に神様というものがあるとは思っていない。いるのだとしたら、かつて貧しいながらも幸せに暮らしていた姉との暮らしを壊しはしなかっただろうから。

けれど、魔法を扱う才能があり、それを補うような生まれながらの異能も授かっついていて、このメンバーと出会えた。そして、タツとモモという凄腕の冒険者とも知り合えることができた。

姉を攫われたことを除けば、ニニヤは十分恵まれた運命を歩んできている。

そのことを誰に感謝すればいいのかわからなかったが、ニニヤは自分の恵まれた環境に感謝していた。

すべての薬草があるべき場所にしまいこまれ、すべての作業が終了する。

「お疲れ様です。おかげさまで助かりました。よければ果実水でも飲んで、休んでいってください」

作業で汗を滲ませたルクルットが、額に滲んだ汗を拭う。それはルクルットだけではなく、作業をしていた全員が多かれ少なかれ同じ状

態だった。

「ごちそうになります」

ペテルが礼儀正しく言って、母屋に向かうンファイレアに続いた。そして、ンファイレアが開けようとした扉が、母屋側から開かれた。現れたのは、その場にいた誰も見たことがない人間の女性だった。艶めかしい体を覆う最低限の鎧と、身に纏うローブ。

可愛らしい顔立ちではあったが、その瞳に爛々と宿る狂気の光に、漆黒の剣の警戒心が最大限に引き上げられる。思わず武器に手をかけた者もいた。

そんな漆黒の剣の様子に一切構わず、女は嗤う。ンファイレアを見据えて。

「はあい。お帰りなさい。待ってたよお？　ンファイレア・バレアレ君。ちよつと君に協力して欲しいことがあるんだあ」

最後の『漆黒の剣』

その現れた女は、不気味な笑みを浮かべながら、ここに来た自分の目的を話し始める。

情報秘匿という意味で、あまりにも無防備な女の様子に、ペテルは警戒を強めながら、覚悟を決めた。そんな風に自分の目的を容易く口にすることは、確実に自分たちを殺す自信があるからだ。

状況を打破するには、自分たちが盾となつてンファイアを逃がすしかない。このままンファイアが連れ去られてしまえば、この街にとって最悪の事態になりうる。

そしてニヤ。彼女も逃がすべきだ。自分たちとは違い、ニヤにはしなくてはならないことがあるのだから。

命を賭してでも二人を逃がす。

そんなペテル、ルクルツト、ダイン。三人の決意だったが、背後から病的に白く細い体を持つ男が姿を見せたことで、それがより困難になったことを知る。

(挟撃されたか！ なら……！)

ペテルは決断する。ダインと視線を交わし、ダインも動く。

「ニヤ！ 行きなさい！」

そう叫んで、盾を構える。

あえて明確に言わず、ぼかして叫んだというのに、目の前の女の目が怪訝そうに細められる。何かがあることを悟られてしまった。

「……っ、ペテル、でもっ」

「へえ……なにかあるんだね？」

女が構えるステイレットの先端がニヤを狙い定める。

「ガジツちゃんが準備してくれてるから、遊ぶとしたらそいつだと思っただけ……まずはそいつから仕留めましょうか、ねっ！」

女の体が一瞬沈み込み、そして暴風の如く跳ぶ。

ステイレットの先端がニヤの額に迫る。

ニヤは超魔法適性という生まれながらの異質を持っていて、それ

によって第三位階の魔法をひとつだけ習得していた。

覚えられる第二位階の魔法を一通り修め、第三位階を覚えようと思つた時、ニニヤはまずどの魔法を覚えるべきか迷つた。いくら魔法適性があるとはいえ、ひとつの魔法を覚えるにはそれ相応の時間と労力を有する。ニニヤは冒険者として活動しているため、何の魔法を覚えていくかいないかは生存率にも大きく関わってくる。

最初、ニニヤは〈電撃ライトニング〉などの強力な攻撃魔法を覚えようと思つていた。姉を攫つた憎き仇。それを撃ち殺すために。憎しみのままに、敵を殺すための魔法を覚えようとした。

だが、そんなニニヤを優しく諭してくれたのは、当時はまだ出会つたばかりのダインだった。

いつも落ち着いていて、一步引いたような立場にいたダインのことを、当時のニニヤはあまり信頼してはいなかった。その頃はニニヤも長くそのチームで活動する気がなかったからお互い様ではあったが。

ダインは自分に合う攻撃魔法を探すニニヤに対し、いつもの深い落ち着きのある声で言った。

「ニニヤ。お前のやりたいことは、敵を殺すことであるか？」

その言葉に込められた意図に気づけないほど、ニニヤは馬鹿ではない。目的を達成するために、冒険者としての名声や、純粋な戦闘力が必要なものだ。しかし、それは目的を達成するためであつて、それ自体が目的となつてしまつては、道を見誤る。

実際、ニニヤはその時、憎き貴族を殺すことばかり考えていて、姉を探して助け出すという本来の目的を見失つていた。

ダインの言葉で改めて目的を見つけ出すことができたニニヤは、習得する魔法を決めたのだった。

ニニヤが唯一使える第三階位魔法。

それを用いれば、格上の敵に挟撃され、絶体絶命の境地になるこの場から脱することも出来るだろう。だがニニヤは迷つた。それはその魔法を使うことで助かるのが自分だけだからだ。仲間を助けられない。

その魔法を習得することを選んだ時、ニニヤはそれでもいいと思っていた。自分には果たすべき目的がある。そのためには仲間を見捨てても生き残る必要がある。積極的にやりたいことではなくても、やるべきときにはやらなければならない。

だからたとえそんな状況に置かれたとしたら躊躇いなく使うと決めていた。

しかし、ニニヤにとって漆黒の剣の面々は、例え自分の目的のためでも、もはや簡単に切り捨てられる存在ではなくなっていた。ここでニニヤがその魔法を使えば、残った彼らは確実に殺される。自分が残っても大した違いは生じえないと思っけていても、割り切れるかといえばそうではない。

そのニニヤの葛藤は襲撃者の女がニニヤのことを警戒し、まずニニヤから狙うことにするには十分な時間を与えてしまった。

魔法の詠唱も許さない速度で、明確な死を与えるステイレットが迫る。

ニニヤはかけがいのない仲間を得た結果、致命的な隙を生じさせてしまった。

ステイレットが人間の体を貫く音が響く。

だが——その隙を補うのも、また仲間という存在である。

鮮血が床を濡らす。ステイレットを突き出した女が、不愉快気に顔を顰めた。

ニニヤが目を見開く。ンフィーレアが叫んだ。

「ルクルットさん！」

間一髪。襲撃者の女とニニヤの間に、ルクルットが割り込んでいた。装備が軽装である野伏だったからこそ、間に合った。

だが、体を張って割り込んだ結果、ルクルットの体を女のステイレットが貫いている。

血を吐くルクルット。その手はしっかりと女の腕を掴んでいた。女の身体能力は桁が外れているため、ルクルットの手を振り払うことは可能だ。しかし、ルクルットが渾身の力を込めて腕を掴まえているため、ほんの数秒、振り払われることを堪える。

文字通りに血を吐きながら、ルクルットが叫ぶ。

「行けや！ ニニヤー！」

その声に弾かれたように、ニニヤが杖を構えた。魔力を集中させる。

「カジツちゃん！」

女の叫びに呼応して、挟撃を仕掛けてきた男が魔法を唱える。

「アシッド・シヤベリン酸の投げ槍！」

緑色の槍状のものが、男からニニヤに向かって射出される。それはぶつかった相手に酸の飛沫によってダメージを与えるもので、体によって溶かされる激痛を与える残酷な魔法だった。

そんなものを受けては、魔法の詠唱などおぼつかないに違いない。それゆえに選んで放たれた魔法だった。

ニニヤにそれが炸裂しようとした時、その前に大きな体が立ちふさがった。

ダインド。

両腕で顔を庇い、その体を盾にしてニニヤを守る。〈酸の投げ槍〉が直撃した腕や腹部から肉が爛れ、骨が溶ける嫌な音が響いた。それでもダインはニニヤの盾となって立ち続けた。悲鳴も苦痛の叫びもない。すべてを噛み殺して、ダインはそこに立っていた。

彼の名を叫びそうになるのを堪え、ニニヤは口を別の目的のために開く。

「――」

女が目にも留まらぬ速さでもう一本のステイレットを抜き放つ。そしてそれを正確に投擲した。驚異的な身体能力で放たれたそれは、人の頭蓋くらいなら簡単に貫き、殺す破壊力を持っている。

それを、今度はペテルが止める。盾を構えていたにも関わらず、ステイレットは盾を貫通し、ペテルの腕を使用不能にさせたが、それでも、本来当たるはずだったニニヤには当たらなかった。

ニニヤが魂を削るような声で、魔法を唱えた。

「ディメンショナル・ムーブ次元の移動！」

その場からニニヤの姿が掻き消える。

襲撃者の女と男が驚愕に目を見開く。

「転移魔法だと……！ 使えたのか！」

苛立たしげに男が吐き捨てる。それに対し、その場に残った漆黒の剣の面々は笑った。

「ええ。うちのニニヤはすごいでしょう？」

男はギリギリと歯ぎしりをする。

「おのれ小癩な真似を……！ クレマンティーン！ 遊んでいる暇はなくなった！ さっさと引き上げるぞ！」

どさり、と何かが倒れる音が響く。

ルクルットが床に倒れていた。その前に立つ女——クレマンティーンは血のこびりついたステイレットを振るう。

「あーあ、つまんないの……まあ、いいや。それじゃあ軽く殺してあげる」

圧倒的な戦闘力の差。

それでも、ペテルとダインは最後まで諦めなかった。

ニニヤは無事転移に成功したことを理解する。

そこは自分たちが取った宿の一室だった。いつでもここに戻ってこれるようにマークしておいたのだ。〈次元の移動〉という魔法は第三位階にある魔法であり、数ある転移魔法の中ではかなり制限も多い魔法だ。基本は短距離の転移しかできず、長距離移動をするためには一度その場所を訪れたあと、時間をかけて座標をマークしておく必要がある。

さらにこの魔法の制限として致命的だったのは、自分しか転移できないということだった。さらに上位の転移魔法ならば他者を移動させることも出来るという噂は聞くが、ニニヤにはそれを使うことはできない。

ニニヤは唇を噛みしめる。その魔法を使えたなら、あの場から全員、あるいはせめてンファイアだけでも共に逃がすことも出来たかもしれないと、自身の非力を悔いて。

しかし、いまはそれを嘆いている暇はない。

(どうする？ 衛兵に事情を説明して、助けに……いや、衛兵じゃどうしようもならない)

あの襲撃者たちがどういう事情を持って、どういう立場にあるのかはわからないものの、明らかにその力量は常人の息を超えている。衛兵などでは死体が増えるだけだと確信できた。そもそも、事情を説明して説得する間も惜しい。

そう考えた二ニヤの脳裏に、輝く純白の鎧が横切った。

(っ、そうだ！ あの人なら……！)

二ニヤは部屋を飛び出す。杖を放り捨て、体裁などに構わず、とにかく走る。時折道をゆく人とぶつかって転倒しそうになりながらも、ぶつかった相手に罵声を浴びせられながらも、怪訝そうな奇異の視線を向けられながらも、とにかく走った。

いままでの人生で一番全力を振り絞って、二ニヤは走った。

組合でのハムスケの登録は存外簡単に終わった。

ハムスケの姿を記録するために写生をするか、魔法を使うか選ぶように言われ、魔法を選んだのも手早く済んだ理由だった。それをしなければかなりの時間を取られていたはずだ。

(なんだかんだでガゼフから貰った資金が役に立ってるな)

たちち・みーはガゼフをあそこで助けておいたのは間違いなかったとしみじみ頷く。

次の手紙でお礼を言っておこうと考えていた。正当に得た対価なのだから、お礼を言う必要はないという考えもあるが、たちち・みーはそれはそれとして、役に立ったのなら感謝の気持ちを表すのは大事だと思っている。

組合から出たたちち・みーは、組合の建物の前で待っていたモモンガとハムスケの傍に、老婆が立っているのを見た。

(あれは……？ もしかして)

出てきたたちち・みーに気づいたモモンガが、たちち・みーに声を

かける。

「タツさん、終わりましたか?」

「ええ。無事に。……モモさん、そちらは?」

老婆を示しているタツに対し、モモンガが応える前に老婆自身が答えた。

「わしの名前はレイジー・バレアレじゃ。今回、孫が世話になったようじゃな。お礼を言わせてもらおうよ」

「ああ、そうでした……んっ、そうだったのか」

老婆という存在に対し、癖で敬語を使いそうになったたち・みーは、咳払いをして誤魔化す。

「これから報酬をもらいに店の方へ邪魔させてもらうところだった」
「それはそれは……わしもちようど店に戻るところだったんじゃ。ご一緒してもよいかの?」

レイジーは少し含むところのある目でそういう。何を求めているかは明白だったため、特に警戒することなく、受け入れる。

「ああ、構わない。では行くか」

そう言っただち・みーは再びハムスケの背に乗ろうとして——そこに叫び声が届いた。

「タツさん! モモさん!」

たち・みーとモモンガが声のした方を見ると、人垣をかき分けて、必死な形相のニニヤが走り寄ってきた。

大粒の汗を垂らし、呼吸も大きく乱しているニニヤの様子に、たち・みーの表情が引き締まる。

「——どうした?」

「はあ……はあ……タツ、さん……!」

ニニヤがその手を伸ばし、たち・みーに縋る。

そして苦しそうな声で、彼に向かって懇願した。

「助けてください……っ」

その言葉に対し、たち・みーの返答は当然ひとつしかない。

詳しい事情は知らない。何が起こったのかすらわかっていない。

だが、それでもたち・みーの返答は決まっていた。

「わかつた。どこにいけばいい？」

モモンガとニニヤ

たっち・みーはほとんど蹴破るようにして、店の扉を開いた。

徐々に暗くなっていくのに合わせて、店の中はほとんどが暗闇に沈んでいる。そんな店内から、たっち・みーは濃密な血の臭いを感じた。それだけではなく、奇妙な異臭もする。

苛立ちを隠そうともせず、たっち・みーの拳が握りしめられた。

〈殺意看破〉の特殊技術を發揮するが、店の中から反応はない。待ち伏せはなさそうだった。

たっち・みーが店内に足を踏み入れると、それに呼応するように、店の奥で何かが動いた。人間大のそれを見たたっち・みーはかすかに目を細める。

いまのたっち・みーの目にはオーラが見えるが、その『何か』から感じるオーラに、よく見慣れたオーラに近いものを感じたからだ。

ゆらり、とふらつきながらそれが姿を晒す。

「……ルクルット」

胸に二つ穴が開いていて、片方の穴は確実に心臓を貫く位置にあった。口からは血を吐いた跡がある。土気色になった顔には生前の剽軽な様子はどこにもない。生なる者への恨み辛みだけを携えて、ルクルット・ゾンビがたっち・みーへと迫る。両手を突き出し、その体を掴んで喉元にくらいついてやろうと迫ってくる。

たっち・みーは躊躇わなかった。

静かに剣を抜き放ち、その勢いのまま、ルクルットの首を刎ねる。空中をくるくると舞ったルクルットの頭部を素早く片手で受け止め、床に倒れた体の上に、跪いて優しく置く。

そこに、壁にもたれかかる姿勢で倒れていたペテルの死体が起き上がって襲い掛かろうとしたが、それより前に突き出されたたっち・みーの剣の切っ先が、その首に吸い込まれた。一瞬で貫き、一瞬で引かれたため、ペテルの首は繋がったように見えたまま、死体は動かなくなる。

「……ペテル」

小さく呟いたたち・みーは立ちあがり、店内を見渡した。

そして、店の奥に倒れている最後の一人を発見する。それはもはや判別も不可能なほどに焼け爛れていた。酸による攻撃を受けたのだろう。

だが、その特徴的な森司祭の装備品は忘れようもない。

「……ダイン」

たち・みーはその死体に近づいて、動死体になっていないか確かめる。ダインの死体は酸による損傷が激しかったからか、起き上がることができなかったが、しかし、ゾンビになっていることが確認できた。動こうとして、かすかに震えている。たち・みーは剣を用いて、その動きを制止させた。

剣を片手に、ひとつ、長く、深い、息を吐く。

漆黒の剣は、ニニヤを残して全滅していた。

たち・みーは三人の死体を前に、その拳を握りしめた。

ほどなくして、店に足音が駆け込んでくる。

「……みんな！」

ニニヤだ。その背後にはモモンガと森の賢王、リイジー・バレアレもいる。

先頭で駆けこんできたニニヤは、店の中に立ち尽くすたち・みーを見た。

「タツさん、みんな、は……」

たち・みーは答えなかった。しかし、その背から感じる雰囲気と、店内に満ちる濃密な血の臭いから、ニニヤはすべてを察したようだった。

ニニヤの体から力が抜け、その場に両膝をつく。大きく見開かれた両眼から、大粒の涙がこぼれた。

「みんな……な……」

掠れた声で呟く。ニニヤはその顔をくしゃくしゃに歪め、両手で顔を覆って泣き始めた。

リイジーがその脇を通って、店の中に入る。

「ンファイレアは……わしの孫は……!?!」

「……敵の狙いはンファイレアさんのようでした。なら、連れ去られた可能性が高いです」

モモンガがニニヤの隣に移動しながら、レイジーの問いに答える。

「レイジー。こっちにきてくれ」

そう言ってたつち・ミーがレイジーを呼ぶ。レイジーは焦燥に駆られた顔をしつつも、言われるままにたつち・ミーの傍に行く。なにやらダインの死体の下に残されていた文字について話していた。

モモンガは自分もそちらに行くべきかと思いつつ、ニニヤの傍から動けなかった。現在のモモンガはアンデッドであり、その精神は人間を同種とは見ていない。漆黒の剣が全滅したことにも、本来であるならば多少不快な程度で大した感情の揺れは起きえないはずだった。

しかし、この数日間の記憶が思い起こされる。

ルクルットはいつも賑やかだった。ペテルは礼儀正しく、リーダーとしてチームを導いていた。落ち着いた物腰のダインはいつも仲間を見守っていた。そして魔法詠唱者のニニヤは、そんな彼らと一緒に、本当に楽しそうに笑っていた。

戦いの中で、漆黒の剣は絶妙な連携を生み出していた。自分たちのギルドを思い出すほどに。

メンバー全員が同じ目標に向かって歩んでいた。自分たちのギルドがかつてそうだったように。

いまは自分たちがそうではないことを思い知らされて、無性に悔しかった。たつち・ミーがいなかったら、苛立ちのまま、無暗に衝突していたかもしれない。

それは、それだけ漆黒の剣のことを、モモンガが認めていたからだ。

そんな彼らが死んでしまった。たった一人を残して。モモンガは自分の中で波立った精神が安定するのを感じる。

(蘇生は……無理か)

死体の様子を見る限り、彼らは一度ゾンビにさせられている。その場合、通常の蘇生手段では蘇らせることができない。へ星に願いを〜など、非常に貴重な方法を用いるのなら可能だろうが、それはナザ

リックの切り札として置いておかなければならない類のものだ。それを置いて彼らを蘇らせることはできない。

モモンガはニニヤの傍に膝を突いた。

本来であるならば、自分も調査に協力するべきだ。敵はインファイレアを攫つてアンデッドの軍勢を召喚するつもりだという。その触媒として利用されるインファイレアが無事に済むとはとても思えない。すぐにでも探しださなければならない。

泣いている人間など、放っておけばいいのだ。

だが、モモンガはニニヤの傍に膝を突いた。

最後に残された漆黒の剣。

チームの最後のひとり。

それを放つておくことが、モモンガにはどうしてもできなかった。

「ニニヤさん……」

モモンガはその手をニニヤの背中に添える。アンデッドの自分の手に人肌の暖かさがなくことを悔やむ日が来るとは思わなかった。

ここに来るまでの道中、ニニヤから聞いた話では、相手は遙か格上の存在だった。そこからニニヤだけでも逃げられたということ自体、奇跡に近い。切り札をきちんと用意していたニニヤも褒められるべきだし、それを発動させるまで時間を稼いだペテルたちは称賛されるべき働きをした。

しかし、それが何の慰めになるのだというのだろうか。ひとり取り残されたニニヤに何を言えば正しいのか。対人関係の能力が乏しいモモンガにはわからなかった。

「もも、さん……」

涙に濡らした瞳で、ニニヤがモモンガを見る。モモンガはその目にかつての自分のような悲しみを見てしまい、動揺が精神安定を誘発するほどに高まった。

冷静になった頭で、どうするべきかを考える。

(……)こういう時、たっちゃんならなんていうんだろうか)

たっち・みーならどうするか。それを考えたモモンガは、自然と体が動いていた。万が一を想定し、用意しておいた触覚さえも誤魔化する

マジックアイテムを使用する。回数制限や時間制限があつて簡単に使つていいアイテムではないが、それでも使うべきだと判断した。きつとたつち・みーもそれを咎めはしないはずだ。

ニニヤの体を抱き寄せ、安心させるように背中を叩く。
少しニニヤが驚くのが伝わつてきた。

「……漆黒の剣の皆さんは、とても素晴らしい冒険者でした。私たちはそれをよく覚えています」

なるべく優しい声と聞こえるように、モモンガは囁く。

「ももさあん……」

ボロボロと泣くニニヤに、男としてはまだまだ幼い様子を感じつつ、モモンガは襲撃者に対する不快感を改めて強めていた。

(……これは、我儘だ)

自分たちだつて場合によつては同じように人を踏みにじつて進む。カルネ村でニグンら陽光聖典たちを叩き潰したのがいい例だ。

あれとて、ひよつとしたらニグンたちの方が将来的に見れば正しい行いをしていた可能性だつてある。ガゼフは比較的価値のある方の人間だと思ふが、それでもエ・ランテルに来て王国貴族の噂を聞くにつれ、彼が王国を守るということ自体に疑問を持つてしまうことがある。さつさと法国にでも併呑されてしまった方が、人類という種族のためにはいい気さえしてしまうのだ。

だから、自分たちの正義や感覚に照らし合わせて動くということ、他の誰かの正義を踏みにじるということでもある。それを自分たちもやる以上、人がそれをやることに對して文句を言つたり、不愉快に思つたりすることは我儘でしかない。

だが。

(私は……私たちは、とても我儘なんだよ)

頻繁に正義を口にし、ヒーローそのものの言動をしているたつち・みーだつて、本当はそれが自分の我儘であることをわかつているはずだ。

それでも迷わないのがたつち・みーという存在で、モモンガもそれに倣うことにした。

ふと、そこでモモンガは思う。

人間に対し、基本的には小動物程度の感情しか湧かない自分さえ、精神安定が発揮されるほどに不愉快な感情を抱いたのだ。

ならば、たち・みーはどれほどの感情を抱いているのだろうか？

そして、アンデッドの自分と違い、一定以上の感情を抑制されない彼が、溜め込んでいる感情はどれほど高まっているのだろうか？

モモンガはニヤを慰めつつ、リイジーと話しているたち・みーを見る。

たち・みーは背中を向けていて、全身鎧のそれからは何かを窺い知ることはできない。だが、付き合いの長いモモンガはその背中から炎のような揺らめきを感じた。

カジット・デイル・バダンテール

カジット・デイル・バダンテールは、自分の計画が最終段階に来ていることを実感し、ほくそ笑んでいた。

目の前には広い地下空間に用意された魔法陣の上で、呆然と立ち尽くす少年がいる。

その額に輝くマジックアイテム〈観者の額冠〉は彼から自我を奪い、その身を高位のマジックアイテムを吐き出させるものに変容させていた。これからさらに準備を整え、〈死者の軍勢〉を発動させれば、いよいよ死の祭典が始められる。

それはカジットにとって自身の悲願の成就——それに近づくことを告げるものだ。

(三十年、か)

彼の目的は、かつて失われた母親を蘇らせることにあつた。そのためだけにカジットは幾年も研鑽を詰み、復活させることに全力を注いできた。

三十年。すでに彼の母親が死んでからそれほどの時間が経過していたが、それでも彼の中からその執念が消えることはなく、ひたすらに復活させるだけのものを求め続けてきた。

通常の復活の手段では生命力に乏しい母親を蘇らせることが不可能だということはずでにわかっている。それを覆すため、カジットは新しい蘇生魔法を開発しようとしていた。

今回、エ・ランテルで行うつもり計画は、それを開発するための時間を確保するため、自分自身がアンデッドになるためのもの。道の手でいえば半ばも半ばに過ぎない。

ゆえにカジットにとって、こんな計画はさつさとこなされるべきことだった。

一つの街の人間を丸ごとアンデッドに変え、そこで生まれた負のエネルギーを使って自分をアンデッドへと昇華させる。

そのための準備だけで五年もの時間を浪費してしまった。

クレマンティーヌという狂人ながらも強力な助力がなければもつ

と時間がかかっていたはずだ。

(ふん……まあ、感謝してやらんこともないが、あの殺人衝動さえなければな)

実際に殺されかけたこともあるカジットは、クレマンティーンという狂った女のことを考えるのをやめた。

そんなことに時間を使ってはいられない。クレマンティーンが情報を漏らしてしまった冒険者が、今頃は衛兵や他の冒険者にこのことを話しているかもしれない。

銀のプレート程度の冒険者に転移して逃げられるなど、予想していなかったとはいえ、失策は失策だ。

苛立ちを息に込めて吐き出す。

「さて……それでは始めるとするか」

カジットは懐からあるマジックアイテムを取り出した。

死の宝珠と呼ばれるそれを用れば、生み出された数千のアンデッドを誘導することが出来る程度の手を得ることが出来るだろう。

この死の宝珠があったからこそ、カジットは死の螺旋を行おうという気になったのだ。

「さあ、死の宝珠よ！ 始めるとしよう」

そう呟き、カジットは死の宝珠の力を引き出そうとする。

いつもなら、かざすと同時に死の宝珠が光り輝いたはずだった。しかし、死の宝珠は全く反応しない。

「なに……？ どういうことだ？」

こんなことはいままでなかった。

もう一度発動させようとしたカジット。その頭の中で、聞いたことのない声が響く。

『

カジットはその声がなんなのか、考えることができなかった。

ただ、その声に言われるまま、体が動く。

(ん、なっ、なん、なんだ、これは！)

辛うじて意識の一部が驚愕することしかできない。

カジットの体はふらふらと前方に向かって進み、叡者の額冠を装着

した少年の目の前までたどり着く。

少年の手が、動く。自意識を封じられているはずの彼の手が、カジットが差し出した死の宝珠を受け取る。

そしてカジットの手から、死の宝珠が離れた。

その瞬間、カジットは急に体の自由を取り戻し、そして、同時に自由な意思も取り戻した。

死の宝珠を手に入れた時からずっと彼の頭の中で蠢いていたものから、解放されたのだ。

自分の体と意志を取り戻したカジットは、呆然とその場で膝を突いた。

「そうだ……僕は……いや……僕は……なぜ、こんなことを……」

信仰系魔法を追及していた頃、判明している第五位階の蘇生魔法では母親の復活が敵わないとした時、確かにカジットは絶望した。新しい蘇生魔法が必要だと考えてのも事実だ。

しかし、それで自分をアンデッドにしてまで、時間を稼ごうとしたのはなぜだったか。そもそも、魔法にはさらなる上位が存在すると言われることもある。生命力をそれほど減じない復活魔法もあるかもしれない。そちらの追及に生を燃やすこともできたはずだ。

だが、すべてはあるものを手に入れたことよって変わってしまった。

死の宝珠。それをほんの些細なきっかけで手に入れたカジットは、それまで突き詰めていた信仰系魔法の道を捨て、魔力系魔法によって自身をアンデッドにする道を選んだ。

それは死の宝珠の強大な力に魅入られて、可能性をそこに見たからだ。その道を選ぶことを決めたのは、自分自身の意思のつもりだった。

しかし、違ったのだ。

死の宝珠が、カジットという男の意志を捻じ曲げ、より多くの死を撒き散らすための道具としていたにすぎない。カジットは母親を蘇らせるという目的を利用され、操られていたにすぎなかった。

(そうだ……あの『声』……頭に直接響く……『声』は……！)

死の宝珠はずっと前から囁いてきていた。カジットが自分にとって都合のいい道を選ぶように、慎重に、じっくりと、毒を回すように、カジットが自ら落ちていくように、囁き続けていた。

カジットはそのことを、死の宝珠を手放したことで、理解した。理解して憤怒に囚われ、その原因となった死の宝珠を睨みつけようとして。

その目玉を抉られた。

「っ、ぎゃあああああっつ?!?!?!」

一瞬何が起きたのかカジットにはわからなかった。もしその場に別の誰かが見ていたならば、虫も殺さないような穏やかな笑みを浮かべた少年が、カジットの目に向かって指を突出し、目玉をえぐり取るという光景を目撃しただろう。

「カジット・デイル・バダンテール。おぬしはもう用済みだ」

冷やかな少年の声が、カジットの暗闇に閉ざされた視界に響く。

その声に抑揚はなく、何かによって『言わされている』ものだった。「儂を扱うのにおぬしは力不足だった。所詮は妄執に取りつかれた、ただの人間だからな。しかし、この小僧は素晴らしい。この小僧に使われる限り、儂はその秘められていた力がすべて使える」

カジットの悲鳴を聞きつけ、部下の男たちが部屋に入ってくる。

「カジット様?!…一体何が…?!… ひいつー!」

その彼らの足元から、無数の手が突き出され、その体を掴み潰していく。

部屋の中に悲鳴が充満する中、ンファイーレアという少年を操る死の宝珠は、カジットに向けて指を突き付ける。

「おぬしは利用しがいのあるバカだった。ゆえに、せめても慈悲として、苦しみのない死をくれてやろう」

その言葉と共に、地の底から巨大な何かが突きあがってきた。カジットはそれの正体を知っていた。

「あ、あれの支配権は僕が——」

「元から儂のだ。戯け」

カジットは地面から突き出された巨大な爪に自分の体が貫かれる

のを感じた。

大切な何かが体から零れ落ちていくのを感じながら、カジットの視界だけではく、すべてが暗闇に落ちた。

クレマンティーヌが騒ぎを聞きつけて降りて来たとき、そこに生きている者の姿は一つしかなかった。

彼女は地面にカジットの死体が転がっているのを見て、眉を潜める。

「カジッちゃん……？ どうなってるの、これ」

さすがに普段の態度は身を潜め、最大限に警戒している様子で、クレマンティーヌが部屋に足を踏み入れる。

そこに、部屋の中心に立っていた少年が声をかけた。

「ずいぶんと、来るのが遅かったじゃないか、クレマンティーヌ。また誰かを殺していたのか？ ならいいんだが」

話しかけられたこと自体もそうだが、その内容にクレマンティーヌは怪訝な顔をする。

「きみ……いや、その子じゃないか。なんなの？ あんた」

「儂は死の宝珠だ。そのゴミが自慢げに見せていなかったか？」

「……ああ、なるほどね。知性インテリジェンス・アイテムある道具ってわけ？」

「ご明察だ。……面白くないな。おぬしならもつとはしやぐか面白いのかだと思っていたんだが」

「うるさいっての。……それで？ 死の宝珠ってことは納得してもいいけどさ。ちゃんと計画はするの？ してくれないと私は困るんだけど」

「当然だ。元よりあれは儂の計画だからな。この世に死をばらまくことが目的なのだよ。儂は」

「へー。そりやすごいねー。それで？ 攻撃してこないってことは、私に何かしてほしいの？」

「協力する相手が違うだけで、おぬしはいつも通りに動いてくれればいいさ」

「ん。わかった。……とここでさ。叡者の額冠って、両目を潰して特

定の格好をしないと効果を発揮出来ないタイプのアイテムだったと思っただけど？」

ンファイレアの体は、攫われた時の状態のままだった。目も、それを用いて外界を認識しているわけではないらしく、クレマンティヌの方は向けられていなかったが、無傷で存在している。

そのことを問うたクレマンティヌに対し、ンファイレアの声を使って死の宝珠が応える。

「それがこの体の……正確にはこの体の持つ生まれながらの異能の素晴らしいところだ。『目を潰す』『特定の衣服を身に着ける』という前提条件を丸ごと無視して、叡者の額冠の力を引き出している」

そう言っただけで死の宝珠は叡者の額冠を突いた。

「それは儂自身もそうだ。本来であるならば、カジットにやっていたように、その意思に則った形で多少選択や道筋を誘導する形でしか人間を操れなかった儂が、これほどまでに明確に、操り人形にするように人間を操ることができている。長年共にしたカジットでさえ、こいつに死の宝珠を渡すようにするのが精一杯だったというのにな。本当に破格の異能だ」

「へえ……そりやすごいね。そんな生まれながらの異能持ちで、よくいままで平気だったね？」

死の宝珠はそのクレマンティヌの言葉を、鼻で笑った。

「所詮は一市民でしかないからな。触れられるマジックアイテムにも限界があるだろう。儂や叡者の額冠レベルのマジックアイテムに触れなければ、この生まれながらの異能の真の恐ろしさは理解できないだろうさ」

「なるほどねえ。ま、私はなんだったいいや。とりあえず、計画を始めるなら早く始めた方がいいんじゃない？ ここにも冒険者が来ちゃうかも。偽装工作はしたけどさ」

「ふん。まかせておけ。お前はアンデッドどもが勝てない強力な冒険者を適当に狩ってくれればいい。……その前にこの小僧の貧相な姿ではいまいちしまらん」

死の宝珠はそう言っただけで、叡者の額冠を用いて魔法を使用する。

「〈上位道具創造〉」

ばさり、と音を立て、漆黒のローブがアンフィレアの体を包む。

「ふむ。まあ、これで我慢するか」

「……そんなにほいほい魔法使って大丈夫なの？」

「心配するな。負のエネルギーは十分にあるし……なにより、カジツトの体と違ってこの体ではスムーズな魔法の行使は難しい。備えられることは先に備えておいた方がいいのだ」

死の宝珠に操られたアンフィレアの体が、ローブの裾をはためかせようとして体を魔方阵に向き直させる。

「さて、それでは死の祭典……死の螺旋を始めるとしよう」

死の宝珠を——自分自身を高く掲げさせ、呪文を唱える。

「〈死者の軍勢〉」

周囲から無数の死者が這い出してきた。

それらは現れると同時に、列を作って跪き、死の宝珠への絶対の忠誠を見せる。クレマンティーンが目を見開いた。

「……ちよつとちよつと。動きを誘導するのが精一杯じゃなかったの？」

「ゴミと一緒にするな。儂の本来の力を発揮すればこの程度容易い。……まあ、この体が元より魔法詠唱者であることも、大きくないわけではないが。さすがにまったくの一般市民だったならばここまでできなかつたらうさ」

「……きみ、ところどころ素直すぎるよね」

「う、うるさい。聞かれたから答えてやったのだろうが！」

死の宝珠はそう吐き捨て、改めて召喚した死者の軍勢に向かって声を上げる。

「この街に住む全ての者に死を与えよ！そして仲間を増やし、より強いアンデッドを生み出し、この世界を死に満たすのだ！」

現在召喚されているアンデッドたちは、いずれも声帯を持たない者達だ。

ゆえに、そこに声はない。だが、アンデッドたちが一斉に拳を振り上げる様は、確かな死の熱狂が感じられた。

そして、エ・ランテルに死者が溢れだす。

死者の軍勢

ダインの死体に隠されていた文字が指し示すのは、下水道だった。単純に考えるのであれば、そこにインフィーレアを攫ったものが待っているのだろう。

しかし当然、たっち・みーもモモンガもそれを信用するつもりはなかった。万が一のことを考えてエイトエツジアサシンの何匹かをそちらに派遣したが、まず間違いなくそっちは陽動だろう。

ニヤのことをリイジーに任せ、二人はエ・ランテルの地図を借りて店の一室を借りていた。

モモンガはたっち・みーと話し合う。

「とにかく、まずはインフィーレアの救出です。居場所を調べることはできますか？」

静かなたっち・みーの様子に、むしろ萎縮しつつ、モモンガが答える。

「相手が確実に持っているであろうものがあればいいんですが……」

それなら、とたっち・みーはいう。

「漆黒の剣が持っていたプレートがなくなっていました。おそらくは犯人が持つて行ったのだと思います」

「そう、ですか。わかりました。じゃあそれを探してみましよう……ところで、たっちさん」

探知魔法をかける前に必要なものを用意しながら、モモンガがたっち・みーに恐る恐る尋ねる。

「たっちさんは怒ってないんですか？」

「なぜそんなことを聞くんです？」

逆に訊き返され、モモンガが言葉に詰まる。

「それは……たっちさんなら、彼らが殺されたことにすごく怒るんじゃないかと」

「もちろん、不愉快には思っていますよ。ただ……習得している特殊技術の関係で、戦う意思を明確に持つと精神が冷静になってしまうです」

なるほど、とモモンガは頷く。それならばたち・みーが静かなのも納得できる。しかし、同時にどれほど特殊技術が連発されているのか想像するのが少し怖くなった。

(……俺は何度か抑制されてからは、不愉快な感情がくすぶっている程度だというのに……本当に、たちさんは……)

それ以上は触れない方がいいとモモンガは判断し、探査を開始する。

防御魔法をいくつも展開し、それから初めて〈物体発見〉の魔法を使用した。

そして、広げた地図の一点を指し示す。

「ここですね。ここは確か……」

地図に書かれている文字が読めないため、二人は記憶をたどった。

「墓地だったはずですよ。やはり地下水道はフェイクだったようですね」

「エイトエツジアサシンに墓地を襲撃させますか？」

「いえ、その必要はないでしょう。我々が行けばいいだけです。その前に……」

「現地の状況ですね。〈千里眼〉と〈水晶の画面〉を同時に発動させます」

モモンガが魔法を発動させ、空中に浮かびあがった画面の光景を見る。それをたち・みーも横から覗き込み、啞然とした。

「これは……どういう……？」

「わ、わかりません。しかし、まさか彼が真の黒幕……ということはないはずですよ」

その画面にはインフィーレアが映っていた。不思議な珠を手に持ち、黒いローブを着ている。さらにその周りには無数のアンデッドの姿があり、それに対して指示を出しているように見える。

この光景だけをみればまるでインフィーレアが首謀者のようだ。とはいえ、たち・みーもモモンガもインフィーレアがそういう人間でないことをよく理解している。

「操られている……という可能性が一番高いでしょうか？」

「そのようですね。……ん？　モモさん、画面を見てください」

そう言つてたっち・みーが指し示したのは、ンフィーレアの背後、斜め後ろに手持無沙汰で立っている女だった。

「恐らくこいつが漆黒の剣を殺した女でしょう。ニニヤから聞いた特徴と一致します」

じわり、とすぐ近くにいたたっち・みーから恐ろしいオーラが発せられたのを、モモンガは感覚で理解した。

「……彼女はタツさんがやりますか？」

「戦士のようですし、私が相手をしましょう。モモンガさんはンフィーレアと、彼を操っていると思われるカジツチャンなる魔法詠唱者をお願いします」

「了解です」

たっち・みーという最強の存在を相手にすることになるその女に同情しながら、モモンガは尋ねる。

「さて、それではどうしますか？　転移を用いて一気にあの場所を襲撃してもいいですが……」

その言葉に、たっち・みーが何かを返す前に、外から大きな叫び声が聞こえてきた。

「大変だ！　墓地からアンデッドが溢れ出そうとしてる！　戦えない奴はなるべく遠くに逃げろ！　手が空いている冒険者は手を貸してくれ！」

その言葉を聞いた瞬間、たっち・みーは動き出していた。

「モモさん！　ハムスケと一緒にあとから来てください！」

モモンガが反応するよりも早く、店の外に飛び出したたっち・みーは、パニックになりつつある町の光景を見た。

「地面を走るのは危険か……ならー！」

たっち・みーは、駆け出した。地面を、ではない。

壁を駆け上がり、建物の屋上から屋上に跳ぶようにして最短距離を駆けたのだ。超級の身体能力があつてこそその荒業である。

それを運よく目撃した者達は、後に「純銀の騎士が空を飛んで助けにきた」などと噂し、たっち・みーの名声を高めるのに一役買ったの

だが、それは少し後の話である。

それは、唐突に始まった。

エ・ランテルに存在する巨大な墓地。その中から、無数のアンデッドが溢れ出したのだ。

アンデッドの発生を監視するため、衛兵は常に何人かが立っていた。アンデッドが数体程度なら、十分対処できる程度の戦力は整っていた。

だが、その時現れたアンデッドは数千とも、万とも見える数だった。「門を閉めろ！ やつらに壁を昇らせるな！」

墓地の入口には丈夫な門が使われており、墓地をぐるりと囲む壁も分厚く丈夫なものだ。よほどのことがない限りそれを突破されることは起きないと思われていたが、その時起きたことはそのよほどのことだった。

後からあとから押し寄せるアンデッドが踏み台になり、高い壁を乗り越えようとする。衛兵たちは槍を用いてそれを崩し、なんとか昇られないように堪えていたが、その内、一人の衛兵にその死の手が迫った。

「うわっ！」

その衛兵の首に、蠢く長いものが絡みついていた。それは人間なら誰しもが持つ臓器のひとつ——腸だ。てらてらとピンク色の輝きを放っているが、もちろんそれが綺麗に見えるわけもない。当然普通の腸は蠢いて動くわけもないが、それはアンデッドの体の一部だった。内臓の卵と呼ばれるアンデッド。体の中に無数の臓器を抱え込み、その臓器を用いた攻撃を行う。

腸に絡みつかれた衛兵が、その腸によって引つ張られ、壁の上から落下した。

「た、助けてくれえええええ!!」

絶叫。アンデッドに群がられ、食いつかれていく。

もはや誰にもどうにもならない。他の衛兵にできることはその二

の舞にならないよう、後退することだけ。

そこに、白銀の閃光が降り立った。

アンデツドの群れの中に躊躇なく飛び込んだその閃光は、勢いそのまま、衛兵に群がっていたアンデツドを片端から吹き飛ばす。それが剣が振るわれた軌跡だと気付けた者は、その場にいた衛兵の中にはいなかった。

ただ、光がアンデツドを打ち払ったようにしか見えなかった。

そして、アンデツドたちが吹き飛んで開けた場所に、一人の純銀の戦士が立っていた。アンデツドからの返り血も浴びていないのか、その純白の全身鎧は穢れ一つなく、夜の暗闇を打ち払うような輝きを有している。

何が起きたのかわからない衛兵たちの前で、その戦士は落下した衛兵の傍に跪いた。

アンデツドに襲われ、血まみれになりながらも、その衛兵はまだ生きていた。何が起きたのかわからない様子ではあったが、意識ははっきりしているようだ。

「もう大丈夫だ」

戦士がそう言つて盾を仕舞い、衛兵を肩に担ぎあげる。それは誰がどう見ても隙だらけで、一人一人分の重荷を背負った格好の餌でしかなかった。アンデツドたちが一斉に襲い掛かる。

それらすべてを、戦士は片手で打ち払った。近づこうとしたアンデツドは、戦士によって振るわれる一撃に、真つ二つになりながら、斬りつけたときの衝撃で吹き飛ぶ。

あまりの光景にアンデツドたちが動きを止めると、純銀の戦士は軽く膝を曲げ、大きく飛びあがった。

人一人を抱えたまま、高い壁を乗り越えた戦士は、そこに助け出した衛兵を寝かせる。

「治療を頼む」

傍に立っていた別の衛兵にそう言つて任せた戦士は、改めて盾を構え、剣を振るつた。こびりついた血を払うようなそぶりだったが、刃には曇り一つない。

「数を減らす。もう少ししたら援軍も来るだろう。それまでなんとか耐えてくれ」

衛兵が何かをいう暇もない。戦士は再び飛び上がり、壁の近くまでやってきていた『集合する死体の巨人』に向かっていた。

武技を使っているようには見えない。ただ、剣を振り下ろしただけでしかない。

なのに、巨体を誇る『集合する死体の巨人』は脳天からつま先まで、真つ二つにされて崩れ落ちた。

戦士が動いたたびにアンデッドが斬り飛ばされ、消滅する。絶望的なまでに押し寄せていたアンデッドの群れは、その数をわずか数瞬で半分以下に減らされていた。

啞然として立ち尽くし敷かない衛兵たちの前で、戦士は前へと進んでいく。アンデッドたちはそれを止めようとするが、そのはためくマントに触れることすらできない。

衛兵たちが見守る中、純銀の戦士は墓地の奥へと進んでいった。まるで群れを成すアンデッドなど、蟻の大軍でしかないというかのようになり、さらに奥へ奥へと。

次第に、夜の暗闇に紛れて見えなくなってしまったが、それでも衛兵たちの目にはその鮮烈なまでの白い姿が焼きついていくかのようだった。

全員が呆然としている中、衛兵のひとりが呟く。

「おれたちは……伝説を目にしたんだ。純銀の戦士……いや、純銀の英雄だ」

死の宝珠

霊廟の地下に用意されたその場所で、死の宝珠はアンデッドが次から次へと倒されていることを感知していた。

「……冒険者が来たようだ。下位アンデッドが次々打ち払われている」

操り人形と化しているンファイレアの口を用いて、死の宝珠はそう呟く。それはその場にいるもう一人に聞かせるためだ。

それを聞いたクレマンティーヌは、その口角を大きく持ち上げる。「やっときたんだあ。待ちくたびれちゃったよ」

「まったく……アンデッドの大軍に吞まれて大人しく死んでいれればいいものを。儂が与える死に人間如きが抗おうなど、片腹痛いわ」

死の宝珠はそう嗤ったが、クレマンティーヌは首を傾げた。「きみ、宝珠でお腹なんてないじゃん？」

クレマンティーヌの素朴なツツコミに、死の宝珠が声を荒げる。「比喩だ戯け！」

「じょーだんだってば。そんなに怒っちゃいやーやーだーよー？」
ケラケラと笑うクレマンティーヌに、死の宝珠は不満げにしながら

も話を切り替える。「とにかく……もうまもなくその下らぬ輩がここにたどり着く。魔方阵を壊されるのも具合が悪い。霊廟の前で迎え撃つぞ」

「魔法を発動させてるきみがここから動いちやって大丈夫なの？ と

いうかきみも行く必要があるの？ 私に任せてくれれば、適当に処理しとくよ？」

「ふん。ここから動いたところで、アンデッドの支配が多少緩む程度だ。すでに十分街に近づいたし、あとは放っておいても勝手に街に向かうだろうさ」

それに、と死の宝珠は漆黒のマントをはためかせながら告げる。「儂の与える死に抗う愚か者どもの顔を拝んでやりたいいな」

また一体、アンデッドを斬り裂く。

たち・みーはひとまず周囲のアンデッドを一掃できたことを知り、一息ついた。

「……勝手に集まって来るからやりやすかったな」

アンデッドがどうやってても街の人間を襲うように命令されていた場合は対応を変えなければならぬところだったが、幸いアンデッドどもは生命を感知してたち・みーに寄ってきていた。それを片端から斬り伏せながらたち・みーはここまで進んできた。

(アンデッドの性質に引つ張られているところを見ると、完全に支配下においているというわけでもないのかもな。中途半端な死者の軍団といったところか)

アンデッドの数は大きく減じており、いまだ油断ならない状況ながらも、その脅威は十分衛兵や冒険者で対応できるであろうものになっている。

相手の本拠地と思われる霊廟に向かうたち・みーの元に、空からモモンガとハムスケが追いついてきた。〈飛行〉の魔法を使っていると思われるモモンガは、マントをふわりと広げながら地面に降り立つ。

「たちちさん。お待たせしました」

「殿！ それがしも馳せ参りましたぞ！」

ふふん、と言わんばかりの得意げな顔をするハムスケ。たちち・みーは少しだけ微笑んだ。

「モモさん。すみません。先んじてしまって。ハムスケが飛んでいるのは魔法ですか？」

「〈飛行〉が使えるようになるマジックアイテムを貸し与えているんですよ」

そういうモモンガに合わせるように、ハムスケは頬袋から小さな翼を模したネックレスのようなものを取り出した。

「姫から賜ったアイテムでござるよ！ 大事にするでござる！」

「……おい、姫と呼ぶなど言っただろ？」

モモンガの体から黒いオーラがにじみ出る。ハムスケの全身の毛

が逆立った。

「す、すまぬでござるよー！ モモ殿ー！」

一人と一匹のコントのようなやり取りに、たち・みーの纏う雰囲気
気が若干柔らかくなる。

剣を改めて握りながら、たち・みーは霊廟の方向に向かって歩き
始めた。

「さて、いきましようかモモさん。近くにアンデッドは？」

「私の特殊技術に引っかけられる反応はありません。ほとんど掃討されて
いるようですね」

「……もしかして、この地面に散らばっている死体やら骨やら、すべて
殿が倒したアンデッドなのでござるか!？」

ハムスケが驚愕して叫ぶ。たち・みーはその反応に対し、かすか
に首を傾げる。

「そうだが……?」

「なんと！ これほどの数のアンデッドを……！ しかも傷一つ負っ
ておらぬとは……！ 殿はどれほどの強さを持っているのでござる
か……?」

ビクビクという言葉が相応しいほどにハムスケは恐る恐る聞く。
それに対し、なぜか得意気になったのはモモンガだ。

「こんな程度のアンデッドが万……いや、億襲い掛かってきたところ
で、たちさんがかすり傷ひとつ負うわけないでしょう、ハムスケ」
「……いや、さすがに億は盛りすぎですよ。確かに傷は負わないかも
しれませんが……面倒なのでやりたくはないですね」

あくまで傷など負わないことが前提の二人のやりとりに、ハムスケ
はますます驚愕する。

「さすがは殿でござる！ このハムスケ、さらなる忠義を尽くすでご
ざるよー！」

「ああ、ありがとう」

たち・みーは霊廟が見えてくると、いったん足を止めた。

「ハムスケ。お前は別行動だ。これから私とモモンガさんは霊廟に向
かう。お前は周辺の打ち漏らしたアンデッドを駆逐しろ。それから、

もし冒険者が霊廟に近づこうとしたら、危険だからそれ以上先に進まないように警告するんだ。無視するようなら、多少強引にでも足止めしろ。それでもだめなら……モモンガさん」

モモンガの方をたっち・みーが見ると、モモンガはすでに動いていた。

「中位アンデッド作成・切り裂きジャック、中位アンデッド作成・屍収集家」

二体の中位アンデッドを作成する。

「こいつらをハムスケの警戒網より内側に置きます」

何も言わなくても自身の考えを理解してくれたモモンガに、たっち・みーは微笑む。

「ありがとうございます。……その冒険者はこいつらが相手をする。これが何体もいるからお前は私たちに言われて、他の冒険者に警告を与えるために残っていた体だ。わかったな？」

「承知したでござるよー！」

「モモンガさん、アンデッドたちには……」

「大丈夫です。仮に冒険者と戦闘になっても、殺さない程度に抑えるように指示を出してます」

一を聞いて十を知るといふ言葉があるが、この場においてモモンガの対応はたっち・みーにとつてそういうものだった。

「……ならば、後顧の憂いなしですね」

「行きますか？」

「ええ、行きましようモモンガさん」

ハムスケと別れ、モモンガとたっち・みーはさらに先へと進む。

そこには、霊廟があった。

エ・ランテルの墓地は戦地に近い分、巨大なものであるが、霊廟もまた大きく立派なものが拵えられていた。

その霊廟の入り口に、二人の人間が立っている。

片方はンファイレーア・バレアレ。しかしその顔に表情はなく、精神支配を受けているのが明白な様子だった。その身に漆黒のマントを

纏い、額には宝石で彩られたマジックアイテムらしきものが光っている。その手には不気味な光を放つ不恰好な珠が握られていた。

もう片方は邪悪な笑みを浮かべた女。マントに大部分が隠されているが、妙に艶めかしく露出度の高い鎧に身を包んでいる。

たっち・みーとモモンガは並んでその二人の前に立った。

「あれれー？ 二人だけ？ もっとたくさんいるはずとか言っただけじゃなかった？」

女が不思議そうに、煽るように隣に立つンファイレアに向かって言う。

「……あれだけのアンデッドがあの速度で減らされていたのだ。冒険者の集団が来ると思うのが自然だろう」

女の言葉に対し、ンファイレアの声で、何者かが応える。たっち・みーとモモンガは視線を交わした。

『あの様子……やはり精神支配を受けているのは間違いないようですね。モモンガさん』

『ええ。とすると……彼を操っているカジツチャンは霊廟の中でしょうか？』

『だと思えます。向こうは私たちを二人と思っているようです……とりあえず、決めた通りに相手をしましょう』

『了解です』

モモンガの了解を得て、たっち・みーが前に進み出る。

「良い夜だな。無粋な儀式をするのは勿体ないと思わないのか？」

「ふん。良い夜だからこそ、死を導く儀式をするのにふさわしいのだろうか。死の感傷も理解できぬ愚か者が」

ンファイレアがそう返してくる。たっち・みーは肩をすくめた。その「やれやれ」という態度に、若干の不快感を覚えたのか、少しだけ声のトーンを下げながらンファイレアが尋ねる。

「おぬしたちは一体何者だ？ 儂が生み出したアンデッドの軍勢をどうやって突破した？」

「私たちは冒険者だ。その少年の護衛任務を受けていた。あの程度の軍勢、私達だけで突破するのはたやすい」

「偽りだな。おぬしたちだけではあのアンデッドの集団は突破できない。他の冒険者はどこにいる？」

「……なあ、仮にそうだったとしても、伏せさせている者の居場所を素直にいうわけないだろ？」

聞いてどうする、という気持ちを言外に込めていうと、ンフィーレアを操っている者は言葉に詰まったようだった。その隣に立っている女が手で口を押えてくすくすと笑う。

「わ、笑うなクレマンティーヌ！ ええい。それで煙に巻いたつもりか冒険者風情が！」

「ただの事実なんだが……まあいい。信じる信じないは好きにしろ。いずれにせよ、お前たちの相手をするのは私たちだけで十分だということだ」

不遜とも取れるたっち・みーの言葉に、笑っていた女——クレマンティーヌの表情が不快そうに歪められる。それをンフィーレアが手を挙げて抑えた。

「まあ待て。おぬしたちの名を聞いておいてやろう」

「聞いても仕方ないと思うぞ。タツとモモだ」

「……儂は聞いたことがないな。クレマンティーヌ？」

「私もしんなーい。一応情報収集はしたけど、相手になりそうな中にモモとタツって名前はなかったよ？ それより、どうしてこんなに早くここがわかつちやったの？ 地下水道ってメッセージを残してあげたのにー。仲間が最後の力を振り絞って残したメッセージだと思わなかったのー？」

たっち・みーは少しだけ沈黙した。

そして、口を開く。

「そうだな。あいつらが……お前の居場所を教えてくださいんだ」

「……？」

何を言っているのかわからない、という顔をするクレマンティーヌ。

たっち・みーはそれ以上説明しなかった。

「モモさん。それではそちらは任せます」

「ええ。タツさん。任せてください」

二人はそういうと、左右に分かれて歩き始める。

「クレマンティーン。一対一で勝負をしよう。こちらに來い。モモさんの魔法に巻き込まれてお前が死んではいけないからな」

「……あゝあ？」

クレマンティーンが顔を顰めたが、大人しくその後ろをついでいく。

モモンガはンファイレアを呼んだ。

「ンファイレア。いや、それを操っている者。あなたの相手は私がしてあげます」

「馬鹿め。儂がおぬしに付き合う理由がどこにある」

「靈廟から離れられない事情でも？ ならば仕方ありませんね。自分の縄張りから出ることも出来ない臆病者ということですから」

「……挑発のつもりか！ 面白い、死を与えるために生み出された儂が、おぬしら程度を恐れることなどありえないということをその身に刻み込んでくれるわ！」

ンファイレアの体はそういうとモモンガのあとをついてきた。そのあまりに容易く挑発に乗る相手に、モモンガは呆れていた。

「……簡単に挑発に乗りすぎでしょう。まあ、都合はいいですが」

モモンガの目は、靈廟の中に滑り込むエイトエッジアサシンの姿を捉えていた。たちち・みーとモモンガが敵を引きつけている間に、中にいるンファイレアを操っている者を始末する算段だった。ンファイレアは助け出さなければならぬのだから、当然の方策だ。

しかし、あつさりと靈廟を離れたことにモモンガは若干の違和感を覚える。

（エイトエッジアサシンのことを知覚できていないとしても……少々無防備すぎじゃないか？ 面白いえば、死を与えるために生み出された……とか言ってたな）

ある程度靈廟から離れたところで、モモンガは立ち止まる。

「さて……この辺でいいでしょう。ところで聞きたいことがあるのですが」

「なんだ塵芥が。命乞いならもはや聞かんぞ」

「あなたの名前は？　ンファイレアを操っているあなたの名前です」

その問いに対し、ンファイレアの体を使っているそれは笑った。

「ふん。まあ、これから死を与えられる相手のことも知らぬまま死ぬというのも哀れなことだ。よかろう。特別に教えてやる。儂の名は死の宝珠という」

自らを誇るように、ンファイレアの体は手に握ったものを掲げる。

「この世のすべてのものに死を与えるために儂は生み出された。ゆえに、おぬしの死も絶対だ！　見よ！　我が至高の力を！」

死の宝珠が輝きを増す。それに呼応するように、地の底から骸骨で組みあがったドラゴンが出現する。

特殊技術で存在を知っていたモモンガは特に驚かなかった。

スケリトル・ドラゴン
「骨の 竜か」

「魔法に対する絶対耐性を持つこやつだけでも、魔法詠唱者であるおぬしには絶望だろうが儂の真の力はこの程度ではない！」

天高く自身を掲げさせ、ンファイレアの口を使つて高々と声をあげる。

「——中位アンデッド作成・死の騎士！」デス・ナイト

その言葉と共に、ンファイレアの隣に広がる暗闇が、形を成している。

現れたのは、巨大な剣士だった。鎧と剣、盾を持ち、ボロボロのマントをはためかせる。濃密な死を臭いを漂わせたそれは、この世界でいう英雄級の相手と互角に戦える性能を持つ化け物だ。

「この召喚には時間制限があるが……貴様が絶望するには十分な時間だろう！　さあ、死にひれ伏せ！　これが儂の、死を与える絶対的な力だ！」

骨の竜と死の騎士が咆哮をあげる。それは生きとし生けるものすべてを震え上がらせる咆哮だった。

それに対し、モモンガはただ静かに応じる。

「絶対的な力、死を与える力……か。それで漆黒の剣も殺したのか？」
「ん……？　何の話だ？　……ああ、クレマンティーヌとカジットが

これを手に入れるついでに殺したあの冒険者どものことか。あれも不幸なことよな。儂に死を与えられる前に死んでしまったのだから。もう少し生き残っておれば、儂直々に殺してやったものを。……ああ、そういえば生き残りがひとりいたか。そやつは幸福だな。味方を見捨てて逃げたおかげで、儂の与える至高の死を享受できるのだから」

悦に浸っている様子の死の宝珠の言葉に、モモンガはかすかに俯く。

さぞかし怒りに震えているのだろう、と死の宝珠が思つてモモンガの様子を観察していると。

モモンガの喉から、奇妙な笑い声が漏れた。

「ふ、ふふふ……これは、傑作だ。ああ、本当に傑作だな」

「……？　何を言つておるのだ？」

急に笑い出したモモンガの意図が理解できず、死の宝珠は戸惑う。

じわり、とモモンガの纏う空気に変化が生じた。

「絶対的な力？　死の宝珠？　至高の死？」

ぎろり、とモモンガの目が死の宝珠を睨む。死の宝珠はなぜかその目の光が落ちくぼんだ骸骨の眼窩から発されているように知覚した。気圧されて、数歩後退する。

「なん……だ……いまのは？　おぬし、いつたい……」

「光栄に思うがいい。死の宝珠よ。貴様のやっていることは、ただの下らぬ兇戯にすぎないと知れ」

がらりと雰囲気を変え、モモンガが宣告する。

「貴様に、本当の死というものがどういうものか——教えてやる」

死の超越者

死の宝珠は自身が感じた恐怖を誤魔化すように、骨の竜と死の騎士に命じる。

「骨の竜、奴を殺せ！ 死の騎士は儂を守れ！」

骨の竜が咆哮を上げながら、モモンガに迫る。一気に寸前まで迫り、勢いよく前足を振りおろす。

凄まじい轟音が響き、衝撃で巻き起こった風によって砂塵が舞い上がる。死の宝珠はモモンガがぺしやんこになったであろうことを確信した。

（避けるそぶりも、何か魔法を発動させたそぶりもなかった！ ふん、所詮はブラフだったか）

くだらない時間を使った、とばかりに死の宝珠は踵を返そうとして。

骨の竜が戸惑う感覚が死の宝珠に伝わってきて、足を止めた。

「ん？ どうした骨の竜？ 念の為もう何度か叩き潰して……」

「——なあ。こんなものか？」

背筋が凍るといふ感覚を、ただの宝珠であるはずの死の宝珠ははつきりと感じた。

舞い上がった砂塵が落ち着いて視界が開けてくる。死の宝珠はそこに信じられない光景を見た。

「なんだと……？ ば、馬鹿な!？」

砂塵の晴れた先、そこでは振り下ろされた骨の竜の前足を片手で受け止めているモモンガの姿があった。しかもその手は骨の竜の前足を掴んでおり、それだけで骨の竜は動けなくなっている。死の宝珠が持つ知識からすればありえないことだ。

「魔法詠唱者の膂力でそんなことが可能なわけがない！ トリックだ！ 死の騎士！ 奴を殺せ！」

死の宝珠の前で盾を構えていた死の騎士が、この世のすべてを恨んでいるような咆哮をあげ、高速でモモンガに迫る。そしてその手にしていたフランベルジュを突き出した。

その一撃は見事にモモンガの正中線を貫いた。

「ふ、ふははは！　これなら——」

「なんとかなると思ったのか？」

死の騎士の腕を、剣に貫かれているはずのモモンガの手が抑えていた。死の騎士が渾身の力をもって引きはがそうとしても、それは離れない。それどころか、モモンガはその腕を強引に引き、フランベルジュの柄から引きはがすと、死の騎士の巨体をぶん投げて骨の竜の頭部に激突させた。

悲鳴をあげながら崩れ落ちる骨の竜と死の騎士。何事もなかったようにフランベルジュを体から抜いたモモンガは、その剣を死の騎士の方に向けて放り捨てた。

あまりに圧倒的。魔法すら使わないで骨の竜と死の騎士を一蹴してみせたモモンガに、死の宝珠は気圧されて数歩後退する。

「あり……ありえん！　〈負の光線〉！」

倒れた骨の竜と死の騎士に死の宝珠が負のエネルギーを注ぎ込む。傷を負っていた二体は急速に回復したが、まるでモモンガを恐れているかのように距離を取った。

モモンガは実に自然体で一步前に進む。それだけで死の宝珠も、骨の竜も死の騎士も圧倒されてしまう。

「どうした？　私はまだ魔法を使ってすらいないんだが……もう終わりが？」

「くっ……！　なんなんだ貴様は!?　人間、なのか……!?!」

「さて、な。別に人間であると言った覚えはないが……ん？」

不意にモモンガがこめかみに指をやった。この時、モモンガの視線は死の宝珠たちから外れていたが、その隙に攻め込むことはできなかった。

「なんだ？　……霊廟には死体と魔方陣しかない？　なるほど。となるとファイレアを操っているのはやはりあの宝珠で決まりか。ああ、その魔方陣はこっちが片付くまでそのままにしておけ。アンデッドがすべて消滅してしまうと、逆に面倒になりかねないからな」

言うだけのことを言うと、モモンガはこめかみから手を離す。そし

て意外だ、と言いだけな顔で死の宝珠に向けて言う。

「せっかく時間をくれてやったのに、何もしていないのか？」

「……おのれっ！」

死の宝珠が可能な限りの支援魔法を骨の竜と死の騎士にかけていく。それをモモンガはただ見つめていた。

「これならどうだっ！ いけ！」

骨の竜と死の騎士が突撃する。

「へ上位転移」

モモンガの姿が掻き消える。死の宝珠が啞然とした。

「ど、どこだっ！」

周囲の気配を探ろうとして、極々直近に強大な力を感じた。

ンファイレアの背後に転移したモモンガが、死の宝珠をンファイレアの手からもぎ取る。瞬間、ンファイレアの体は動かなくなった。だが、モモンガの手に収まった死の宝珠は、これこそが好機という気配を見せた。

『僕の渾身の支配力を食らえい！』

死の宝珠が光り輝き、その身に溜め込んだすべての負のエネルギーを使い果たす勢いでモモンガを支配しようとする。

だが、当然「人間を操る」死の宝珠の力は、どれほど注ぎ込んでも、アンデッドのモモンガには利かない。

『……な、なにイツ!? き、貴様、人間でないのか!』

「だから人間だと言った覚えはない。答え合わせと行こうか？」

モモンガはその幻術を解くと同時に、ローブを剥ぎ取り、装備を一新する。

そこにいたのは、死の超越者。

死の宝珠は至近距離から感じる濃厚な死の気配に愕然とする。

『ば、ばかな……き、さま……い、いや、あなたさまは……』

「自分が誰に喧嘩を売っていたか、理解したか？」

モモンガはここで初めて魔法を唱える。

「へ道具上位鑑定」

ユグドラシルではかけたアイテムの製作者や効果がわかる魔法だ。

そしてそれはこの世界ではより詳しい情報がわかるものとして発揮された。しかし、モモンガは怪訝そうな様子になる。

「……お前、死の騎士を召喚していたが……それはお前の能力なのか？」

モモンガの問いに対し、死の宝珠はそのままでは打って変わった様子で慌てて応える。

『死の騎士の召喚は、私の真の能力のひとつです！ 通常は何百年も共にし、魂まで侵食し尽くした使用者にしか使えないものなのですが、その少年はその生まれながらの異能にてその条件を無視して使えたのです！』

「ほう……なるほど。〈道具上位鑑定〉で判明しない使い道が存在するとはな……これは今後の活動方針に大きく関わってくるし、ンフィーレアの価値はさらに向上したとみるべきか。アイテムに触れさえすればすべての使用法を理解できるのか？ それとも使って始めてすべての効果を理解できるのか。理解はせず、単に使えるだけなのか……色々と実験しなければならぬな」

ぶつぶつと呟くモモンガに、恐る恐る死の宝珠が話しかける。

『は、発言をお許しいただけないでしょうか……偉大なる”死の王”よ』

「うん？ なんだ？」

『これまでのご無礼をお許しください。まさか、あなた様がこれほどまでの絶対なる死の王だとは思いませんでした。もし最初からあなた様のことを理解していたならば、私はあなた様にすべてを捧げていたことでしょうか！ ですから、なにとぞ慈悲を！ 絶対なる忠誠を誓います！』

その態度を百八十度転換させ、死の宝珠は叫ぶ。

『私はこれまで、死を撒き散らすことこそが自分の存在意義だと思っております……しかしあなた様の気配を感じ、悟ったのです。あなた様に仕えるために私は存在していたのだと！』

「……ふむ。なるほど」

モモンガは少し考える。そして口を開いた。

「お前、異世界に転移する方法ないし、それに準ずる知識はあるか？
あるいは、秘められた能力にそういったものは？」

唐突な問いだったが、死の宝珠は即座に応える。

『も、申し訳ありません。異世界に移動する方法というものは存じ上げません……役に立てぬ身をお許しください……』

恐縮したようにいう死の宝珠に対し、モモンガは鷹揚に頷く。

「構わないさ。一応聞いただけだ。死の宝珠というマジックアイテムがそういった能力を持っていないのは当然だろう」

モモンガはそう言つて、エイトエツジアサシンを呼ぶ。

近くに潜んでいたのか、即座にそれは現れた。

「ンファイレアを連れて離れていろ」

「御意」

素早い動きでエイトエツジアサシンとンファイレアがその場から消える。

モモンガは死の宝珠を掲げた。

「さて、死の宝珠よ。お前が私たちに楯突いた大罪は、不幸な遭遇だったということ許してやろう。実に不運だった。そしてお前から得られた情報は大きい。そのことに感謝し、慈悲をくれてやる」

『おお……ご寛大な処置、感謝いたします絶対なる死の王よ！』

死の宝珠の声に希望が宿る。モモンガはいつそ穏やかに聞こえる声で、宣告した。

「だから、お前のいう『絶対なる死』というものをその身で存分に味わって死ね——特殊技術、発動」

モモンガの背後に十二の時を示す時計が浮かび上がる。

それは、断罪までの時を測るための、時計。

不気味な特殊技術を展開した状態で、モモンガは広域即死魔法を放つ。

「へ嘆きの妖精の絶叫」

周囲に女の絶叫が響き渡る。聞く者を即死させる叫び声だが、現在近くに即死効果を受けるようなものは存在しない。骨の竜も死の騎士も、マジックアイテムで命を持たない死の宝珠も当然、そこに変わ

らず在り続けていた。

力チリ。

だが、時計の針が進む。

先の女の絶叫よりも明確に、その針が進む音から、死の宝珠は恐怖を感じていた。

『し、死の王よ!』

「悪いな、死の宝珠。私はとても我が儘でな」

『どうかご慈悲を! 私の持つすべての力を差し出します!』

「いらんよ。面白いアイテムであることは確かだが、私たちの最終目的に関わらないのであれば、この程度の力しか持たぬガラクタを大事に保管しておく理由はない」

力チリ。

再び針が天を指す。同時に、モモンガは死の宝珠を手のひらから落とす。

特殊技術”あらゆる生あるものの目指すところは死である”

瞬間、世界は白い光に包まれた。骨の竜と死の騎士が一瞬で消滅する。

同じようにその光に呑み込まれた死の宝珠は、ただのマジックアイテムでしかない自身にすらもその力によって「死」が与えられようとしていることを悟った。

それこそ、まさに至高の死。

絶対的な死の支配者。

自分の行いがただの児戯であったことを理解し、究極の死の支配者に対して楯突いた自身の行いを死の宝珠は深く悔いた。

(おお……まさか……こんなことが……あなたさまこそ、絶対なる死の——)

死の宝珠の意識はそこで途絶えた。

死を司り、あらゆるものに対して死を与えることこそ自身の存在理由と思っていた宝珠は——その命亡き身に与えられた「死の力」を享受し、砂となって消え去った。

欠片すらも残さず死の宝珠が消えた後に残っているのは、モモンガ

だけだ。魔法の範囲内にあつた大地が砂漠になっていることを見た
モモンガはさすがに驚く。

「……ゴーレムにも有効だから使ったが……まさかここまで効果が変
わっているとはな。ここで使っておいてよかったと思うとするか。
組合には敵の切り札が暴発した、ということにしておくでしょう」

本来、ここで使うような特殊技術ではなかった。これはモモンガの
切り札と言える特殊技術だからだ。

それでも、モモンガはそれを使うことを選んだ。死の宝珠、などと
明らかに名前負けしている道具に、絶対の死を与えて、その矜持を
粉々に打ち砕くために。

それはそれだけ、モモンガが今回の件を不愉快に思っていた証拠
だ。

「あのアイテムを失うのは勿体ない、と言う気持ちはないわけじゃな
かったんだがな……それをいうなら、あいつらとの繋がりも十分勿体
無かった。それに手を出したのだから、仕方ない」

漆黒の剣の面々が楽しげに談笑していた光景を脳裏に浮かべ、らし
くない感傷だとモモンガは頭を振ってその光景を脳裏から消す。

そして、霊廟を挟んで反対方向を見やった。

「さて……あちらはもう決着したのかな？ たっちさんが手こずるは
ずもないが……」

暗闇の先からは静寂しか漂ってこない。

戦闘が続いているのか終わっているのか、それすらもわからない。

ワールドチャンピオン
世界の頂点が戦っているにしては、あまりにも静かだった。

クレマンティーヌ

たち・みーはその背後にクレマンティーヌを連れ、しばらく歩いた。

モモンガと操られているンファイアが向かった霊廟を挟んだ反対側から、何者かの咆哮が聞こえてきた。それを合図としたのか、クレマンティーヌに背を向けたまま、たち・みーは足を止める。

背を向けたままのたち・みーに不思議そうな顔を向けるクレマンティーヌだったが、口角を釣り上げて煽りにかかる。

「そーいやーさあ、私が店で殺した雑魚はお仲間だったの？ だから怒っっちゃった？」

必要以上に嘲るように、彼女は続ける。

「惜しかったなあ、あの魔法詠唱者を逃がしちゃったのは。ほんとあの子で遊ぶつもりだったんだけどねー。せつかくカジツちゃん可悲鳴が漏れないようにしてくれたんだから、一発では殺さず、まずは手足を砕いて抵抗できなくしてさあ。じっくりとその体を端から――」

「黙れ」

一言。それだけでクレマンティーヌから笑顔が消える。

たち・みーが踵を返してクレマンティーヌに向き直る。剣と盾を構えたたち・みーの全身から怒りの波動がにじみ出ている。クレマンティーヌは自分の頬を汗が伝うのを感じた。

クレマンティーヌは自身の状態をおかしいと感じる。本来、彼女は殺した相手の仲間が激昂して襲い掛かってくるのであれば、むしろそれをねじ伏せることを楽しめる性質をしている。だから明らかに激怒しているたち・みーの状態はクレマンティーヌにとって望むところの状態であり、嬉々として叩き伏せることを考えるはずだ。

だが、クレマンティーヌは感じていた。

まるで強大なる竜王の尻尾を不用意に踏んでしまったかのような、取り返しのつかないところに足を踏み出してしまったような感覚を。ちようどいい台だと思って踊りを披露した場所が、竜王の逆鱗の上

だったかのような、そんな過ちを犯してしまった感覚を覚えていた。「悪人にも理由があり、事情があり、経緯があることは知っている。そういう人間を、罪に走らざるを得なかった人間を、何人も見てきた。正しい教育を受けられなかったこと、親の愛情をうけられなかったこと……理由は様々でもそこに同情の余地はあり、そういう人間はできることなら悔い改めて欲しいという想いはある」

たっち・みーは静かに言葉を紡ぐ。

「だが——快樂殺人に関してとは別だ。同情の余地はない。たとえそこに至るまでの環境や経緯が劣悪でも、そこまで堕ちた人間に同情する気は一切ない。ゆえに私はお前を許さない」

なにより。

「よくも私の——私たちの新たな友人たちを殺したな。その罪、その命で贖え」

剣の切っ先を向けられながら宣言され、クレマンティーヌが凶悪なほどにつりあがった笑みを浮かべる。

「あ”あ”？ 言いたい放題いいやがって……てめーがどんな糞つたれな理想を掲げてるのか知らねえが、誰がてめーに同情して欲しいなんていったよ？ 許して欲しいなんて私が言ったか？ むかつくにもほどがあるぞてめえ！」

憤怒を背に、恐れを拭う。

「このクレマンティーヌ様がてめーみたいならくに名も知られてない戦士に負けるかよ！ てめーはここで無残に無様に死んでいくんだよ！ 命乞いしてもおせえぞ！」

「安心しろ。それはこちらのセリフだ」

たっち・みーは当たり前前のことを示すように告げる。

「お前が私に勝てるはずがない。だから、せめて全力でかかってこい。完膚なきまでにねじ伏せてやる。それを持つて、お前に対する私の復讐としよう」

そのたっち・みーの言葉を聞いた時、クレマンティーヌのつりあがった笑みはその顔が裂けてしまいそうなほどのものになっていた。「言いやがったな……！」

着ていたマントを剥ぎ取り、軽装の鎧を露わにする。さらにステイレットを抜き放ち、その先端をぴたりとたっち・みーの頭部に合わせる。

「決めた。てめーは一瞬で殺してやる」

ステイレットを手に、その体を低く沈み込ませる。短距離走を走る際のクラウチングスタートを思い起こさせる体勢だ。

そして、爆発的な速度で跳び出した。瞬き一つの時間で距離を詰める。

クレマンティーヌは一気にたっち・みーの突き付けた剣の間合いの内側に入った。

たっち・みーは動かない。

クレマンティーヌはそれを「自分の超速度に反応できていない」と判断した。力量に似合わぬ言葉を吐く程度の敵だったのだと、クレマンティーヌは笑みを浮かべる。あとはヘルムの隙間に向けてステイレットを突きだせばそれで終わる。

勝利を確信したクレマンティーヌが嗜虐性に満ちた笑みを浮かべた。

「死——ね?」

全身全霊。全速の攻撃が空を切る。

クレマンティーヌはあまりに予想外の事態に啞然とした。確実に仕留められるはずのタイミングだった。なのに、たっち・みーの姿は目の前から掻き消えた。地面を削りながら急ブレーキをかけてとまったクレマンティーヌは慌てて周囲を見渡す。たっち・みーは一瞬前までクレマンティーヌがいた場所に立っていた。剣も盾も降ろし、自然体で立っている。

二人の位置が一瞬で入れ替わっている。クレマンティーヌは苛立ちのままに舌打ちをする。

「……幻術か! てめえ、純戦士じゃねえのか。……なるほどねえ、そりゃあ余裕を見せるわけだねえ。小賢しい細工しやがってっ!」

射殺さんばかりの視線を向けられたたっち・みーは応える。

「そうか。お前にはいまのが幻術を用いて回避したように見えたの

か」

静かな呟きに、再び跳びかかろうとしていたクレマンティーヌの動きが止まる。

「私はただ、単に避けただけだったんだが……お前には見えなかったのか？」

ゾクリ、とクレマンティーヌの背筋を冷たいものが滑り落ちる。ただの幻術だ、ただのハツタリだとクレマンティーヌの理性は叫んでいた。重そうな全身鎧を身に着けた状態で、自分の目にも留まらないほどの速度で動く。もしもそんなことができたら確かに恐ろしいが、そんなことができるはずもない。

だが、クレマンティーヌの本能は最大限の警告を発している。

たっち・みーは再び剣を構えた。

「時間の無駄だ。次は本当の本気で来い」

その言葉に後押しされたわけではなかったが、クレマンティーヌは武技を発動させる。この相手はそれを温存して戦うのが危険すぎるという判断だった。〈疾風走破〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉、四つの武技を同時展開し、能力を飛躍的に引き上げる。万が一たっち・みーが攻撃をしてきたときに備え、〈不落要塞〉などの別の武技を使う余裕もある。

今度こそ、盤石。それを確信したクレマンティーヌが、突進を仕掛ける。先ほどが瞬きひとつの時間なら、今度の突進で距離を詰めるのは瞬きをする暇もないほどの時間。

神速と言つていい勢いでステイレットが突き出される。

その先端を、たっち・みーの左手が捉えていた。

盾を手放し、掌でステイレットの先端を受け止めている。クレマンティーヌの一撃は並の装甲なら貫通させるほどの破壊力があるはずなのに、たっち・みーが身に着けているガントレットは凹みすらもない。衝撃は通っているはずだが、それをたっち・みーが痛がる様子もない。

クレマンティーヌは即座に、ステイレットに込められた魔法を発動させた。〈火球〉が炸裂し、炎がたっち・みーの全身を焼く。

「まだ終わりじゃないんだよっ!」

さらに、空いていた片手で別の剣を抜き放ち、それもたち・みーに向けて突き出す。そちらに込められているのは〈雷撃〉だ。

この至近距離で二発も魔法を食らって、無傷で居られるわけがない。

クレマンティーヌは爆炎と雷撃の中でたち・みーが苦しんでいる様子を想像し、ほくそ笑んだ。

そのすべてを打ち払い、振るわれた平手がクレマンティーヌの頬を打つ。

「へぶっ!」

あまりの衝撃に何本もの歯が砕け、空中に撒き散らしながらクレマンティーヌが吹き飛ぶ。地面を転がり、たまたまその進行方向にあった墓石に背中を打ち据えて、墓石を砕け散りさせながらも、ようやく止まった。

「あがつ、がつ、っ!」

何が起きたのかわからない、と態度で示すクレマンティーヌが必死に体を起こす。

クレマンティーヌ会心の一撃を両手の掌で無効化したたち・みーは上空に放り投げていた剣と盾を再び手に取った。ちょうど同じ位置に落ちてくるようにしていたのだ。

まだまとわりついていた炎と雷の余韻を、軽く剣を振るうことで打ち払う。その素振りだけで衝撃波が発生した。

当然、たち・みーには微塵もダメージが入っていない。すすけた様子すらなく、純銀の鎧に曇りはない。

「どうした、クレマンティーヌ。本気で来いと言っただろう」

「あぐ、ぐ……っ!」

クレマンティーヌはふらつきながらも立ちあがる。ただの平手の一撃で、大打撃を受けていた。

彼女は〈超回避〉を発動させていたというのに、避けられなかった。攻撃を仕掛けてくればいつでも〈不落要塞〉で受ける準備も出来ていたのに、発動させられなかった。

それはクレマンティーヌの反応速度を、完全にたっち・みーが上回っていた証拠だ。

速度と技量に絶対の自信を持ち、事実幾多もの強敵をその速度を持って打ち倒してきたクレマンティーヌには信じがたいことだった。ただ動いて回避しただけ、というハツタリのはずのたっち・みーの言葉が、彼女の心を抉る。

「う、く、わああああああっ!!!」

クレマンティーヌは渾身の力を込めて跳んだ。両手に持ったステイレットを用いて連続して突く。それらはすべて急所を狙った一撃必殺の威力を持っていた。

例えばガゼフ・ストロノーフでもすべてを完璧に捌ききることは難しかっただろう。

そのクレマンティーヌの連撃を、たっち・みーはすべて紙一重で避けた。捌いたのではなく、ただ避けた。首を逸らし、腕を振り、足を動かし、ステイレットの先端はまるで初めから当たらなかつたかのように虚空ばかりを貫く。

化け物のような体力を有するクレマンティーヌだったが、当然そんな無茶な動きをすればいつかは体力が尽きる。疲労が極限に達した彼女は、ステイレットを振り回すことも出来なくなり、だらりと両腕を下げ、肩で呼吸をしていた。

そのあまりに余裕のない様子に、たっち・みーはかすかに首を傾げる。

そして、得心がいったように呟いた。

「……ああ、すまない。先ほどの攻撃が本気だったんだな」

絶対的な強者からの、残酷な言葉が贈られる。

「馬鹿にするつもりはなかつたんだが……まさか、あの程度のわけがないとお前を過大評価していたようだ」

クレマンティーヌの顔から表情が抜け落ちる。

よろよろと後退し、小石に蹴躓いて尻餅を打つ。見上げたそこに、純銀の輝きがあった。

「まあ、元よりお前の全力を打ち破って、戦士としての矜持を打ち砕く

つもりだったんだから、これで目的達成としよう。……安心しろ。お前と違って私に弱者をいたぶる趣味はないんだ」

「たっち・みーが剣を高く掲げる。白い刀身は月光を反射して、剣自体が輝いているようだ。」

「それが自分へと振り下ろされるのを、クレマンティーヌは見つめていることしかできなかった。」

「かつては漆黒聖典に所属し、英雄の領域に踏み込んだ強さを持っていた、快樂的殺人鬼クレマンティーヌ。」

「その凶行の幕引きは実に静かなものだった。」

事件の終結

たっち・みーが血の付着した剣を振って血を払うのと、遠くで強い光が迸るのはほぼ同時だった。

それがモモンガが向かった方向だと知ると、たっち・みーはかすかに眉を潜める。モモンガが何かをやったのだとは悟ったが、何をやったかまではこの距離ではわからない。

「まさか超位魔法を撃ったわけではないと思うが……あの規模の魔法が必要な事態だったのか？」

様子を窺に行こうかとたっち・みーが剣を鞘に納め、霊廟方向に向かおうとしたところ、周囲に警告をするように言っていたハムスケが、なぜかモモンガのいるはずの方向から走ってきた。

「と、との〜！ 大変でござるよー！」

「どうしたハムスケ？」

ハムスケが対処できないレベルの冒険者がやってきたのかと思ひ、警戒を強める。ハムスケは大急ぎでたっち・みーの元まで来ると、その背中に隠れるようにたっち・みーの背後に回り込む。

「全然冒険者が来ないし、すごい爆発みたいなのが起きたから見に行ってみたら、向こうになんかすごい骨の化け物がいたでござるよー！」

たっち・みーは一瞬ハムスケが怯えるほどのアンデッドが召喚されたのかと思つたが、『すごい骨』という言葉から、それがモモンガ本人であろうことに気づいた。右手の指で頬を掻く。

「あー、うん。まあ、たぶん問題ないだろう」

「だ、大丈夫でござるか……？ つて、こつちに来たでござるよー！」
たっち・みーがその言葉に反応して霊廟方面を見ると、たっち・みーの予想通りの人物がそちらから歩いてきていた。

大きな体を丸めて、たっち・みーの背後で震えるハムスケ。丸々とした体勢がボールかクッションのように見えて、たっち・みーは思わず和む。

(いや……ハムスケは本気で怯えているのに和むのは可哀想か)

ハムスケを安心させるため、優しく体を撫でてやりながら教える。

「大丈夫だ、ハムスケ。あれはモモンガさんだ」

「どうされました？」

歩いてきた、ハムスケ曰く凄惨な骨の化け物——モモンガは不思議そうに首を傾げた。

「いえ、ハムスケがあなたの姿に怯えただけです」

「ああ、そういえばハムスケには私の姿を見せていませんでしたね」

「ひ、姫……なのでござるか？」

ハムスケが恐る恐る、という様子でたち・みーの背中から覗き込むようにしてモモンガを見る。無論、体が大きいので一切隠れていないのだが。

モモンガはまたも姫呼ばわりされたことにむっとしたようだが、自分の真の姿を誇るように胸を張った。

「その呼び方をやめろと申していた理由がこれでわかっただろう？」

こつちが私の真の姿だ。あの姿は擬態なのだよ」

それを明らかにすることで、モモンガはもう「姫」呼ばわりされないと考えていた。

だが。

「な、なるほど……にわかには信じられない話でござるが……殿と姫なら不思議ではないでござるな！」

得心が言ったという様子で頷くハムスケに、モモンガが黒いオーラを滲ませる。

「やめろというのに……この畜生めが」

「ひいひいひい！ 申し訳ないでござるよ！」

全身の毛を逆立たせて、ハムスケがますます小さくなってたち・みーの背中に隠れる。隠れてないが。

「まあまあ、モモンガさん。落ち着いて」

たち・みーは宥めに掛かる。

それでも少し苛立ちを滲ませていたが、モモンガはひとまず怒りを治めた。

「全く……賢王なら少しは学習してくれよ」

モモンガはぶつぶつ言いながら幻術を展開し、装備を変更してナーベラルの姿に戻った。

この姿を最初に目にしたのでから、ハムスケが認識を中々改められないのもわかる気がする。たっち・みーだった。そもそもハムスケとはこれからも冒険者として行動するときは一緒にいるのだから、下手に「殿」呼びになるよりは、いまのままの方が周囲に対する擬態としてはいい気もしていたが、ひとまずそれは言わずに置いた。

「モモンガさん、そちらは無事片付きましたか？」

聞くまでもないことだとは思ったが、たっち・みーはモモンガに聞く。モモンガは頷いた。

「ええ。ンファイアを操っていた死の宝珠というアイテムも破壊しました。彼の身柄は無事確保して、いまはエイトエツジアサシンと共に霊廟内にいるはずですよ」

「わかりました。こちらは無事片付きましたので、霊廟内に向かいましょうか」

「そちらも特に問題なく？」

「ええ。あの通りです」

そこには血だまりの中に倒れている女、クレマンティーヌの姿があった。その様子を見て、モモンガは幻影の眉を潜めた。

「たっちさん、トドメは刺してないんですか？」

かすかにだがまだ息があることをモモンガは気づいていた。たっち・みーは生かしている理由を説明する。

「情報源として必要ですからね。首謀者として事の経緯の説明をしてもらわないと、最悪ンファイアが疑われてしまうかもしれません。……まあ、特殊技術を使ったとはいえ、あれだけ深く斬っても死なないのは驚きましたよ」

相手のHPを1まで削る特殊技術〈峰打ち〉。それによってクレマンティーヌは生かされていた。しかしHPが1というのは、ゲームでならそれでも行動可能だが、現実でいうならば瀕死の重傷だ。もはや動ける状態ではない。

モモンガはたつち・みーの説明に納得した素振りを見せる。

「なるほど……監視はするとして、あとの処遇は確かにこの世界の人間たちに任せられた方がいいかもしれませんね」

「拘束した後、ある程度回復させてから引き渡しましょう。拘束魔法などお願いできますか？ モモンガさん」

「それは問題ないですが、記憶操作は必要ですか？」

「いえ、特に知られて困るような情報は見せてないので大丈夫です」

「そんなやり取りを交わし、クレマンティーヌに処置を施してから、二人は霊廟へと向かう。」

霊廟内では、跪くエイトエッジアサシンたちと、茫洋とした様子で立っているンファイレーアが待っていた。

ンファイレーアの意志を奪っているのが、その額に輝いているアイテムだと、モモンガが魔法で解明する。

「叡者の額冠……無理に外すと発狂する……か。ユグドラシルにはないアイテムですし、どうせならこのままナザリックに持ち帰りたいという気持ちがないわけではないですが……」

「安全に取り外すことはできないんですか？」

「うーん。難しいですね。破壊するくらいしか方法がなさそうです。……しまったな。これなら死の宝珠を残しておいて、ンファイレーア自身にアイテムを……待てよ？」

モモンガは「ンファイレーアがアイテムの条件を無視してアイテムを行使できる」ことを元に、ンファイレーア自身にアイテムを外させる手段を試みることを提案した。

「うまくいけばンファイレーアは無事に済みますし、試す価値はあると思います。それで発狂してしまった場合は仕方ありません。少々勿体ないですが、へ星に願いを」で回復させましょう」

「……わかりました。確かにレアアイテムの確保は大事ですしね」
「上手くいけばいいのですが……」

モモンガはそう言いつつ、ンファイレーアを魔法で操り、叡者の額冠を自ら外させた。

瞬間、ンファイレーアの体が崩れ落ち、叡者の額冠が地面に落ちる。備えていたたち・みーがンファイレーアの体を優しく受け止めた。

「これで精神が無事なら何の問題もないんですが……」

たち・みーは状態異常を回復させるポーションをンファイレーアに与える。ほどなくして、ンファイレーアがゆつくりと目を空けた。自分が置かれている状況を把握しようとしているのか、目が意思を持った動きを見せる。

「あ、あれ……？　僕……」

ンファイレーアが正気を保っていることを知り、たち・みーの口から思わず安堵の吐息が零れる。

「もう大丈夫だ。安心して眠っているといい」

そのたち・みーの言葉に合わせ、モモンガがこっそり眠りの魔法を唱える。当然それに抵抗できるわけもなく、ンファイレーアの意識は再び眠りについた。

ンファイレーアを地面に寝かせ、たち・みーは立ちあがった。

「無事に済んでよかった。……モモンガさん。叡者の額冠は？」

「大丈夫です。壊れていません。……しかし、本当に破格だなンファイレーア的能力は」

「操られた状態でも発動するというのが厄介ですね。今後ンファイレーアは最高レベルの監視対象として扱うべきでしょう。敵の手に彼の身柄が渡ることを考えたら恐ろしいですよ」

たち・みーはそう言って眠るンファイレーアを眺めた。今回は幸い自分たちが対処可能なレベルだったが、これがもし手の付けられないレベルのアイテムを扱ったときのことを考えると、楽観視はできない。

「いつそカルネ村に移住してもらった方がいいかもしれませんね。あそこなら私たちのシモベを配置できますし、近づいてくる不審者にも対処が容易です」

「それなら、リイジーに移住を提案してみましようか。ポーションを提供して、その研究をしてみらうという体で……」

「ああ、それなら確かに穏便に事が進むかもしれませんね」

細かなことを打ち合わせつつ、たち・みーとモモンガは戦後処理を続けていく。

その途中、モモンガは自分が倒したアンデッドの証拠品がないことに気づいた。

「あ……しまった。砂にしちゃった……仕方ない。自分で召喚して、それを倒したことにするか……」

単に特殊技術だけを用いた召喚だと時間経過で消えてしまうため、その際の死体は霊廟内に残されていた死体のうち、クレマンティーンとカジットの部下と思われる者の死体を用いることになった。

その際、アンデッドを生み出す死の宝珠がなぜそれらの死体を活用しなかったのか二人は疑問に思ったが、その理由は後に行われたクレマンティーンに対する取り調べで判明する。

彼らの死体は、負のエネルギーを十分に集めてから、より強いアンデッドを召喚するための触媒とするために残されていたのだ。たち・みーやモモンガの対処が早かったため、死体をアンデッド召喚に用いる前に事件が解決してしまったというわけだ。

そういった事情は知らない二人だったが、使えるものは使わせてもらうことにした。

モモンガはどの程度の戦力を倒したことにするか、真剣に考える。

「全部10人……か。2人ほどは残すとして……何を召喚しようかな。骨の竜は1体確定として……いや、たちさんがいるんだから……3体くらい……」

「モモンガさん、あんまり極端な数出しちゃだめですよ?」

聞こえてきた呟きに少し不穏なものを感じたたち・みーはそう釘を刺す。

モモンガは任せてくれと頷いた。

「実際に扱われていた死の騎士1体、骨の竜1体は出します。あとは中位アンデッドの中でも弱いのにしておきますね」

いくつか挙げられたアンデッドの名前に、たち・みーはそれならいいかと納得した。しかし、この時二人は死の騎士レベルが伝説のアンデッド扱いされる水準だということも知らなかった。

そのため、彼らの基準では非常に弱いはずのアンデッドが、この世界では単体でもミスリルクラスの冒険者がチームでかかってやつと倒せる水準のものなっていることを自覚していなかった。

無知とは怖いものである。

これでいいと召喚したアンデッドをたち・みーが倒し、残骸を程よい感覚で霊廟の周りに配置する。

「さて、これでよしと」

「では……たちさん、行きましようか」

「ええ。行きましよう」

そして、二人は霊廟を後にした。

この騒動の後、二人は尊敬と感謝と、そして畏怖の感情を持ってこう呼ばれることとなる。

“純銀の騎士” タツ、 “漆黒の美姫” モモ。

ふたりの冒険者の名前はエ・ランテルに留まらず、王国中に——そして、周辺国家に響き渡ることになる。

驚天動地 (第二部 完結章)

たっち・みーとモモンガは組合への一通りの報告や処理を終え、新しく取った宿の部屋に入った。まだ細かな調査は残っているが、時刻が真夜中になったため、一端解散となったのだ。

時刻はすっかり真夜中となり、部屋の中は暗闇に閉ざされている。暗闇を問題なく見通せるモモンガが先に部屋の中に入り、灯りをつけた。

たっち・みーは部屋の扉を閉め、念のため気配を探って部屋の中を窺っている者がいないかどうかを確かめる。モモンガは魔法的な仕掛けなどがないかどうか、部屋をざっと調べた。

お互いに部屋の安全を確認すると、ようやく一息つく。

「ようやく一息つけましたね。たっちさん。お疲れ様でした」

「モモンガさんこそお疲れ様です。……いや、しかしまさかあれほどの数の人たちに迎えられるとは思ってもみませんでしたよ」

たっち・みーとモモンガが霊廟を後にし、墓地から出ようとした時、他の衛兵や冒険者たちの活躍によって、アンデッドはそのほぼ全てが打ち滅ぼされていた。それでも防壁の上に立って警戒していた衛兵や冒険者たちは、たっち・みーとモモンガが歩いてくるのを見て、大歓声をあげて彼らを出迎えたのだった。

受け入れられるための一步を踏み出せた気がして満足していたのだが、その観衆が街の中まで続いていたのには、さすがに啞然とした。どうやらアンデッドが墓地から押し寄せてくるという情報は町中に知れ渡ってしまったらしく、相当な大騒ぎになってしまっていた。幸い、たっち・みーたちがあふれ出ようとするアンデッドを冒険者や衛兵で抑えられる規模に抑えたこともあって、逃げ出す人間たちが押し合いへし合いになってパニックになることこそなかったが、相当不安に感じていたようだ。

最初に助けた衛兵たちから広がったのか、あるいは移動中に彼らを目撃した者の噂が噂を呼んだのか、たっち・みーとモモンガがアンデッドの群れと戦って元凶を打ち取ったということは、すぐに伝わっ

た。

結果がその凱旋に対する大歓声となったのだ。

モモンガは満足そうにうなずいている。

「これで名声を高めることは十分できたと思います。一足飛びにオリハルコンクラスになりたいものですね」

「そうですね。早く色々調べたいですし」

まだ詳しい調査が必要だということ二人が身に付けているプレートは銅のままだ。街そのものがアンデッドに呑み込まれることを防いだのだから、十分最高ランクの働きはしただろうとモモンガは考えていた。最高ランクになれば得られる情報や特権も桁違いのものになる。そうなれば色々やりやすくなるだろうというわけだ。

もつとも、この時調査団は、墓地に入って伝説級のアンデッドの残骸をいくつも発見し、大地が死んで砂漠になっていて光景を目にして、次々卒倒しているのだが、それを彼らは意識していなかった。

二人の話はバレアレ家のことに移る。

「なんだかんだで、レイジーたちもカルネ村への移住を受け入れてくれて安心しましたよ」

これで十分に守ることができると。そうたち・みーは考えていた。モモンガもそれに同意して頷く。

「今回のようなことがありましたからね。あの二人にとっても渡りに舟だったのでは？ ……しかし研究材料として使っていていいとポーションを見せたときのレイジーの興奮しようにには驚きました」

「彼女にしてみれば伝説のポジションですし、興奮もわかりますけどね」

レイジーとンファイレアには、カルネ村に移住してポジション精製の研究に着手してもらうことで話がまとまっていた。ンファイレアを護衛するためという意味もレイジーには大事だったようで、一も二もなくレイジーはカルネ村への移住を受け入れた。たち・みーとモモンガという規格外の存在の守護が得られるのだから、孫を第一に考えるレイジーが断るはずもなかったが。

ふと、モモンガが複雑な表情を浮かべた。少し迷うような素振りを

見せた後、口を開く。

「……ニニヤは大丈夫でしょうか？」

仲間全員が殺されてしまい、一人残されたニニヤ。今回の事件で一番被害を受けた冒険者かもしれない。

クレマンティーヌから取り戻した漆黒の剣のプレートは、たちち・みーからニニヤに返却されていた。その際、三つのプレートを握りしめて泣いていたニニヤの姿が、たちち・みーの脳裏にもまだはつきりと残っている。

モモンガもまた、ニニヤのことは気になっていたようだ。

基本的にこの世界の人間に対して興味関心が薄かったはずのモモンガが、きちんとニニヤのことを気にかけていることを知り、たちち・みーはいい傾向だと感じていた。

とはいえ、それに関しては触れず、ニニヤに関してたちち・みーが感じていることそのままを話す。

「……大丈夫ですよ。彼女だつて冒険者としてここまで立派にやってきた人なんです。だから、大丈夫。いずれはちゃんと立ち直すことでしよう。さすがにすぐには無理かもしれませんが」

「そうですね………ん？ たっちさんいまなんとおっしゃいました？」

モモンガが不思議そうにたちち・みーに聞き返す。たちち・みーは首を傾げた。

「最終的に立ち直るとしても、しばらくは無理ではないかと……」

「いや、その前です。……えっと、私の聞き間違いでなければ、彼女つて言いませんでした？」

そのモモンガの問いに、たちち・みーは納得する。

「ああ。そうですね。すみません。ニニヤつて女の子ですよ」

「ええ!?! ちよ、え？ た、確かに言われてみれば女の子っぽいところも……つてなんでたちちさんがそれを知ってるんですか!?!」

「最初はなんとなく違和感を覚えたただけだったんですけどね。彼らと一緒に旅をしている間、よくよく漆黒の剣の様子を見ていたら、明らかにニニヤに対して『それっぽい』配慮がされてたんですよ。暗黙の

了解だったのか、それとも漆黒の剣の中では共通した秘密だったのかまではわかりませんが……」

たち・みーの解説に、モモンガはあっけにとられる。

「……全然気づきませんでした」

「彼らの振る舞いはかなり自然でしたからね。注意してみていないと気づかなくても仕方ないと思いますよ。私も確信できたのは事件が起きて二ニヤが泣くのを見たときですしね」

さすがの観察力です、とモモンガが褒めるのを、たち・みーは気恥ずかしそうに「偶然ですよ」と応じる。

「さて……とりあえず明日はまた調査に協力することになるでしょうから、今日は早めにやす……ん？」

たち・みーは言いかけた言葉を切った。モモンガが手をあげてそれを遮ったからだ。モモンガはこめかみに手を当てる。

「すみません、〈伝言〉が来ました。……どうした？」

モモンガはたち・みーに断ってから、支配者の威厳に満ちた声を出す。

定時連絡の時間はすでに過ぎていたが、そういえば今日はまだ連絡していなかったことを思い出す。ちょうど戦いの最中だったのだから仕方ないが。

たち・みーは長くなることを予想し、少し気を抜いたのだが、突如モモンガの気配が一変したのを見て、緊張を取り戻す。

モモンガはそれまでたち・みーが見たことがないほど目を見開き、驚愕という言葉をこれ以上ないほど表している。

（なんだ？ 一体何が起きた？ モモンガさんがこれほど驚くこと……？）

いくつも予想を立ててみるが、いずれもしつくり来ない。

モモンガはまだ〈伝言〉が繋がっている様子なのに、たち・みーに向かって呆然と言う。

放たれた言葉は、たち・みーが——いや、誰もが想像もしていなかった内容だった。

「たっちさん、シャルティアが……シャルティアが、死んだ、と」

その言葉の意味をたっち・みーの頭が理解するまでにかかなりの時間を有した。

ようやくその言葉の意味を理解したたっち・みーはその身を驚愕に震わせた。